

茨城県教育財団文化財調査報告第222集

辰海道遺跡 1

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

（第1分冊）

平成16年3月

日本道路公団
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第222集

たつ かい どう
辰海道遺跡 1

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

（第1分冊）

平成16年3月

日本道路公団
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。

北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、岩瀬町長方地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である辰海道遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成13年3月から平成14年3月まで発掘調査を実施いたしました。

本書は、辰海道遺跡の調査成果を取録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解も深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

1 本書は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年度及び13年度に発掘調査を実施した、茨城県西茨城郡岩瀬町大字長方に所在する辰海道遺跡^{たづかへんじ}の発掘調査報告書である。

2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調査 平成13年3月1日～3月31日、平成13年4月1日～平成14年3月31日

整理 平成14年4月1日～平成15年3月31日

3 当遺跡の発掘調査は、埋蔵文化財部長兼調査第一課長阿久津久のもと、以下の者が担当した。

平成12年度

調査第2班長 仙波 亨 平成13年3月1日～3月31日

主任調査員 平石 尚和 平成13年3月1日～3月31日

調査員 駒澤 悦郎 平成13年3月1日～3月31日

平成13年度

調査第1班長 海老澤 稔 平成13年4月1日～平成14年3月31日

首席調査員 村上 和彦 平成13年4月1日～平成14年3月31日

首席調査員 荒井 保雄 平成13年4月1日～4月30日、11月1日～平成14年1月31日

主任調査員 仲村 浩一郎 平成13年4月1日～平成14年3月31日

主任調査員 後藤 一成 平成13年4月1日～平成14年3月31日

主任調査員 鴨志田 祐一 平成13年4月1日～9月30日

主任調査員 芳賀 友博 平成13年4月1日～10月31日

調査員 小林 健太郎 平成13年4月1日～平成14年3月31日

主任調査員 川上 直登 平成13年11月1日～平成14年3月31日

主任調査員 宮田 和男 平成14年1月1日～3月31日

主任調査員 青木 仁昌 平成14年3月1日～3月31日

主任調査員 綿引 英樹 平成14年3月1日～3月31日

4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長瓦吹堅のもと、主任調査員仲村浩一郎、後藤一成、宮田和男、芳賀友博が平成14年4月1日～平成15年3月31日まで執筆・編集、主任調査員鴨志田祐一が平成14年4月1日～9月30日まで執筆を担当した。執筆分担は、以下のとおりである。

仲村 例言・凡例・抄録、第2章第2節、第3章第3節1(1)、2(1)(4)、5(6)、第4節まとめ1、2、4

後藤 第2章第1節、第3章第3節2(2)、3(1)(4)、5(3)、第4節まとめ3(3)

宮田 第3章第3節2(3)、3(1)(3)(5)、4、第4節まとめ3(1)

芳賀 第1章第1・2節、第3章第3節2(1)(5)、3(2)(6)、5(1)(2)、第4節まとめ3(4)

鴨志田 第3章第1・2節、第3節3(1)、5(4)(5)、第4節まとめ3(2)

- 5 居館の調査については、群馬県新里村教育委員会文化財保護係長加部二生氏に御指導をいただいた。
- 6 本書の作成にあたり、墨書・刻書土器の文字の判読については国立歴史民俗博物館副館長兼教授の平川南氏に、鍛冶関連出土遺物の分析については岩手県立博物館主任専門学芸調査員の赤沼英男氏に、東海系古式須恵器については浜松市博物館事務吏員の鈴木敏則氏、豊橋市美術館埋蔵文化財収蔵庫事務吏員の賛元洋氏に、栃木県須恵器窯産の須恵器についてはとちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター主任の内山敏行氏に御指導いただいた。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、 $X = +39,920m$ 、 $Y = +22,120m$ の交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

その他、調査年次等による名称は第1図に示した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。




3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 方形堅穴遺構-S H 掘立柱建物跡-S B 土坑-S K 井戸跡-S E
 濠・溝跡-S D 橋跡-S A 道路状遺構-S F 不明遺構-S X 柱穴-P
 ビット群-P g

土層 擾乱-K

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

炉・粘土・甕材・貼床・赤彩・施軸  焼土・黒色処理・墨  柱痕・抜き取り痕・油煙・煤 
 土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△ 瓦★ 木製品☆ 硬化面---

6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、遺構は60分の1、80分の1、炉・甕の土層断面については30分の1、40分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「筭書」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

7 「主軸方向」は、炉または甕の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E、N-10°-W)。

8 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、質量についてはcm、重量についてはgで示した。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

9 遺構一覧表における計測値は、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

抄 録

ふりがな	たつかいどういせきいち							
書名	辰海道遺跡1							
副書名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第222集							
著者名	仲村浩一郎 後藤一成 宮田和男 芳賀友博 鴨志田祐一							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
辰海道遺跡	茨城県西茨城郡 岩瀬町大字長方 字北辰海道 155番地ほか	08324 - 082	36度 21分 30秒 (36° 21'45")	140度 05分 05秒 (140° 04'35")	42 ~ 44 m	20010301 ~ 20020331	19,523.07㎡	北関東自動車道(協和～友部)建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
辰海道遺跡	集落跡	旧石器			尖頭器 削器 掻器 剥片		弥生時代後期から平安時代にかけて、集落が継続的に営まれてきた集落跡。調査区域の中央部からは、古墳時代前期後半から後期初頭の張り出しを有する漆(堀)が、長さ南北70m以上、東西50m以上確認されている。漆の内側にも当時の竪穴住居跡	
		縄文			縄文土器片 石鏃			
	弥生	竪穴住居跡	10軒	弥生土器片 土製品(紡錘車)		石器・石製品(石鏃・磨石)		
		古墳	竪穴住居跡	213軒	土師器 須恵器			
		方形竪穴遺構	6軒	土製品(土鏝・土玉・紡錘車)				
		獨立柱建物跡	1棟	石器・石製品(紡錘車・勾玉・管玉・砥石・石製模造品)				
奈良・平安	土坑	33基	金属製品(鉄鏃・耳環)					
	井戸跡	13基						
	濠跡	1条						
	溝跡	2条						
溝跡	1列							
奈良・平安	竪穴住居跡	224軒	土師器 須恵器 瓦					
	方形竪穴遺構	6軒	土製品(土鏝・土玉・紡錘車・置					
	獨立柱建物跡	25棟	鏝・輪羽口)					

		土坑 172基 井戸跡 31基 溝跡 7条 欄跡 4列 ピット群 13か所	石器・石製品 (紡錘車・砥石) 金属製品 (刀子・鉄鏃・鉄鎌・金 針・紡錘車・矩形金具) 木製品	が13軒確認され、当地方の豪族居館跡と思われる。奈良・平安時代の遺構数は全体の6割以上を占め、塹穴住居跡からは「西宅」や「新室」と墨書された土師器坯が出土しており、また、調査区域の南部では掘立柱建物群が確認されているなど、新治郡衙機能の一端を担う集落跡と考えられる。
葛城	中・近世	方形塹穴遺構 2軒 掘立柱建物跡 2棟 地下式墳 1基 墓塚 50基 土坑 75基 井戸跡 4基 道路跡 2条 溝跡 7条 ピット群 16か所	土師質土器 (小皿・内耳鍋) 陶器 磁器 古銭	
その他	不明	塹穴住居跡 10軒 方形塹穴状遺構 3軒 掘立柱建物跡 1棟 土坑 741基 井戸跡 10基 道路跡 2条 溝跡 16条 ピット群 3か所 欄跡 5列 不明 5基		

目 次

— 第1分冊 —

序

例 言

凡 例

抄 録

目 次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 弥生時代の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
2 古墳時代の遺構と遺物	30
(1) 竪穴住居跡	30
(2) 方形竪穴遺構	470
(3) 掘立柱建物跡	476

— 第2分冊 —

(4) 居館と遺物	479
(5) 土坑	534
(6) 井戸跡	540
(7) 溝跡	541
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	543
(1) 竪穴住居跡	543

(2) 鍛冶工房跡	967
(3) 方形竪穴遺構	973
(4) 掘立柱建物跡	978
(5) 土坑	1025
(6) 井戸跡	1036
(7) 溝跡	1052
4 中・近世の遺構と遺物	1066
(1) 地下式塚	1066
(2) 方形竪穴遺構	1067
(3) 土坑	1069
(4) 井戸跡	1070
(5) 溝跡	1074
(6) 道路跡	1086
5 その他の遺構と遺物	1088
(1) 竪穴住居跡	1088
(2) 方形竪穴遺構	1099
(3) 掘立柱建物跡	1101
(4) 溝跡	1102
(5) 土坑	1108
(6) 井戸跡	1207
(7) 溝跡	1219
(8) 道路跡	1220
(9) ビット群	1224
(10) 不明遺構	1253
(11) 遺構外出土遺物	1258

遺構一覧表

第4節 まとめ	1326
---------------	------

付 章

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。平成10年11月4日、日本道路公団から茨城県教育委員会あてに、岩瀬町長方の北関東自動車道沿線地域の建設事業地域内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。平成11年3月15日、これを受けて茨城県教育委員会は、茨城県岩瀬町長方地区において現地踏査を行い、平成12年9月11日、日本道路公団あてに、北関東自動車道沿線地域の建設事業地域内に辰海道遺跡が所在する旨を回答した。さらに平成13年1月26日、回答を受けた日本道路公団から茨城県教育委員会あてに、事業地域内における辰海道遺跡の取り扱いについて協議があった。その結果、茨城県教育委員会は、計画変更が困難であることから、日本道路公団に対して辰海道遺跡を記録保存するよう回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。財団法人茨城県教育財団は、平成13年3月1日から調査を開始した。当初の調査予定面積は58,129㎡であったが、遺構が多数確認されたことから、茨城県教育委員会、日本道路公団と三者協議の上、面積を19,523.07㎡に縮小して調査した。

第2節 調査経過

平成12年度の調査は、19,523.07㎡の表土除去と遺構確認を実施。

平成13年度の調査は、平成13年4月1日から平成14年3月31日までの1年間にわたって実施した。以下、調査経過について、表に示す。

	12年度 3月	13年度 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備	■	■											
表土除去		■	■					■					
遺構確認		■	■					■					
遺構調査			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

なお、6月26日に日本道路公団、茨城県教育庁文化課と三者協議を行い、遺構が多数確認されたために調査の終了が困難との見通しから、調査面積を19,523.07㎡に縮小することが決定された。

調査に当たっては、遺構が重なり合っているため、新旧関係の見極めに時間をかけて調査を進めた。

さらに、遺跡の中心部からは、張り出しを有する長さ南北70m以上、東西50m以上の古墳時代前期後半から後期の濠が確認された。その濠は方形に巡るものと想定されたことから、濠内外の集落とのかかわりを考えながら調査を進めた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

辰海道遺跡は、茨城県西茨城郡岩瀬町大字長方字北辰海道155番地ほかに所在する。

岩瀬町は、茨城県の中西部に位置している。北は富谷山、雨巻山及び高峰山があり、栃木県真岡市・益子町・茂木町に接している。町の東は羽黒山を境として笠間市に、西は平野が開け協和町に、南は加波山、雨引山を境として八郷町・大和村にそれぞれ接しており、三方を丘陵性の山地で取り囲まれた盆地をなしている。町の北東部に位置する^{くわがら}嶽柄峠の山間、鏡ヶ池に源を発する桜川の清流が町の中央部を東西に貫流している。平地は、桜川、大川、筑輪川などの流域と山間部に入り込んだ谷状の低地などである。

当町を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鷲の子山塊、鶏足山塊、筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層とこれを貫く花崗岩類からできている。台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地である。この上層は赤土と呼ばれ、麻沼軽石を含む火山灰が堆積したものである。また、水田に利用されている桜川流域一帯などは、河川の浸食・堆積作用による沖積地である³⁾。

当遺跡は、岩瀬町西部の長方地区にあり、桜川の支流である泉川右岸の標高43～45mの低位な段丘上に立地し、調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の桜川及びその支流域の台地上には縄文時代から中世にかけての遺跡が多く分布し、また、低地を臨む丘陵上には古墳が数多く存在している。

縄文時代には、桜川流域の沖積地から入り込む支谷に面した台地上の緑道部に、集落が形成されるようになる。遺跡は東部に多く、^{ちよろへん}長辺寺遺跡(2)、^{あまの}防人遺跡(3)、^{いぬ}狢徑遺跡(4)、^{いぬ}犬田神社前遺跡(5)などが所在する。また、当遺跡から南約1.8kmの大和村の桜川右岸には高森遺跡(25)、高森西遺跡(26)が位置する。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じ台地上に多く分布する。『岩瀬町史 通史編』及び『茨城県史料考古資料編 弥生時代』によると、これまでに栃木県との県境に近い大泉地区から細頸壺形土器と筒形土器が出土しており、下館市に所在する^{あひだ}女方遺跡出土の土器に類似している。また、南飯田遺跡^{いばら}と^{いばら}番匠免遺跡出土の土器は那珂川・久慈川流域に分布する弥生時代中期から終末期前半の土器と類似し、この時期に集落が営まれていたと想定されている²⁰⁾。

古墳時代になると、遺跡数は増加の傾向を見せるようになる。昭和43年度以降の分布調査によると古墳群18か所、古墳約110基が確認されている。また、町の南に隣接する大和村では、桜川流域に沿って7か所の古墳群と4基の古墳が確認されている。それらの古墳や古墳群は、桜川流域の沖積地を臨む丘陵上に位置している。これまでに調査された古墳は、^{あひだ}狐塚古墳(6)、^{あひだ}間中古墳群(7)、^{あひだ}背柳古墳群(8)、^{いばら}花園古墳(第3号墳)(9)、^{いばら}西沢古墳(10)、^{いばら}稲古墳群(11)、^{いばら}松田古墳群(12)である。その中で狐塚古墳は当遺跡から東約3.3kmの長辺寺山西裾に所在し、昭和42年に工場建設のために緊急調査が実施された。古墳の軸線は正南よりわずかに東にふれ、規模は全長約40m、高さ約4m(後方部墳丘)の前方後方墳である⁹⁾。また、標高約130mの長辺寺山山頂には、^{あひだ}長辺寺山古墳(13)が所在する。この古墳は未調査であるため墳丘の規模等については明確

ではないが、全長約120m、前方部を南東に向けて築造された前方後円墳であり、旧新治国東部地方における最大規模の古墳である。これら二つの古墳は岩瀬盆地のほぼ中央の独立丘陵上に築造されており、古墳時代前期の首長墓と考えられ、当遺跡とは桜川と二つの支流が流れる沖積低地を挟んで約3kmで対峙している。当遺跡からは古墳時代の方形区画を呈すると考えられる濠や9mを超える大形住居跡などが確認されており、狐塚古墳や長辺寺山古墳をはじめ、飯沼古墳群(14)などとの関連がうかがえ、岩瀬盆地が古墳時代の枢要の地であったことが推測される。

古墳時代の集落とされる遺跡は、金谷遺跡(15)、当向遺跡(16)、山王遺跡(17)、犬田神社前遺跡(5)、磯部遺跡(18)等が存在する。この中で磯部遺跡は、町立東中学校建設に伴って昭和45年に発掘調査が実施され、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落跡であると報告されている⁹⁾。当遺跡は当初古墳時代の集落跡と見られていたが、今回の発掘調査で古墳時代から平安時代まで続く比較的大きな集落であることが確認されている。古墳時代に拠点的な集落形成がすすめられ、やがて律令体制下へと組み入れられていったと考えられる。

奈良・平安時代になると、律令体制下では長方地区は新治郡に編入されることとなる。新治郡衙は、当遺跡から南西約4kmに位置する協和町古郡地区付近の新治郡衙跡(19)に位置する。また、その北側に隣接する上野原地区には新治廃寺跡(20)が位置する。『和名類聚抄』によれば、長方地区は新治郡坂門(戸)郷に比定されている¹⁰⁾。奈良・平安時代の遺跡は、当遺跡から西南西約3.6kmに上野原遺跡(21)、西約1.5kmに金谷遺跡、北東約1.4kmに山王遺跡が位置している。また、生産遺跡としては、南西約3.3kmに上野原瓦窯跡(22)、北約2.5kmに梟の内古窯跡群(23)、北東約2kmに飯沼古窯跡群(24)等が位置する。当遺跡周辺は、新治郡衙機能を支える郡営工房として形成されていた可能性もある。

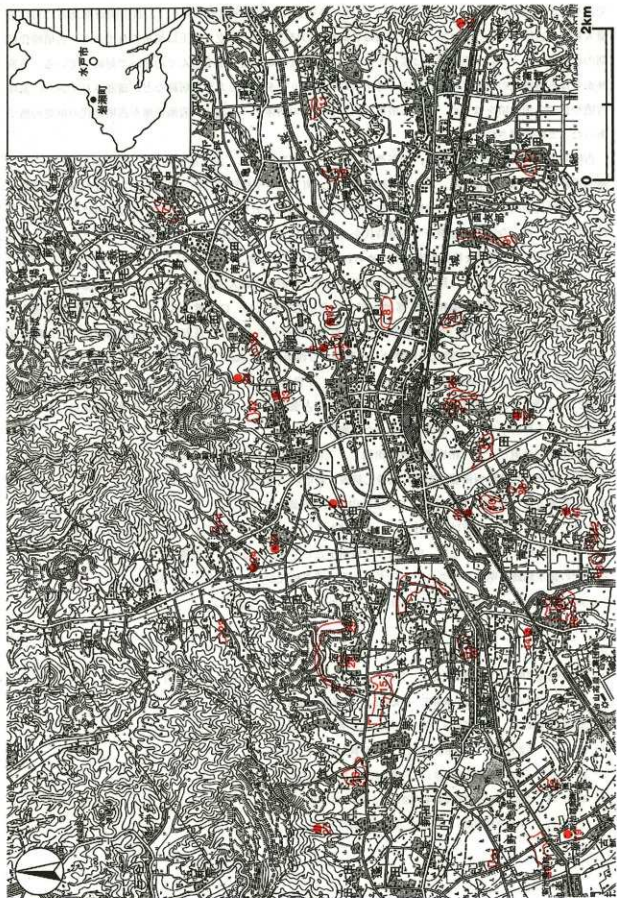
律令体制の衰退とともに在地領主層が出現し、天慶2(939)年の平将門の乱後、その討伐に功勞のあった平貞盛の子孫が筑波山西原麓を拠点に真壁、筑波、新治の三部を勢力下に置くようになる。そのような状況の中で岩瀬地方は「中郡」と呼ばれ、大中臣姓中郡氏が台頭してくる。

中世になると、岩瀬地方は中郡荘(庄)と呼ばれるようになる¹¹⁾。これは、当地が京都の蓮華王院の荘園領であったためである。そして、中郡氏は在地領主として確固たる地位を保持していたのである。しかし、中郡氏の領主館跡は明らかにされておらず、今後の調査研究が待たれるところである。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註)

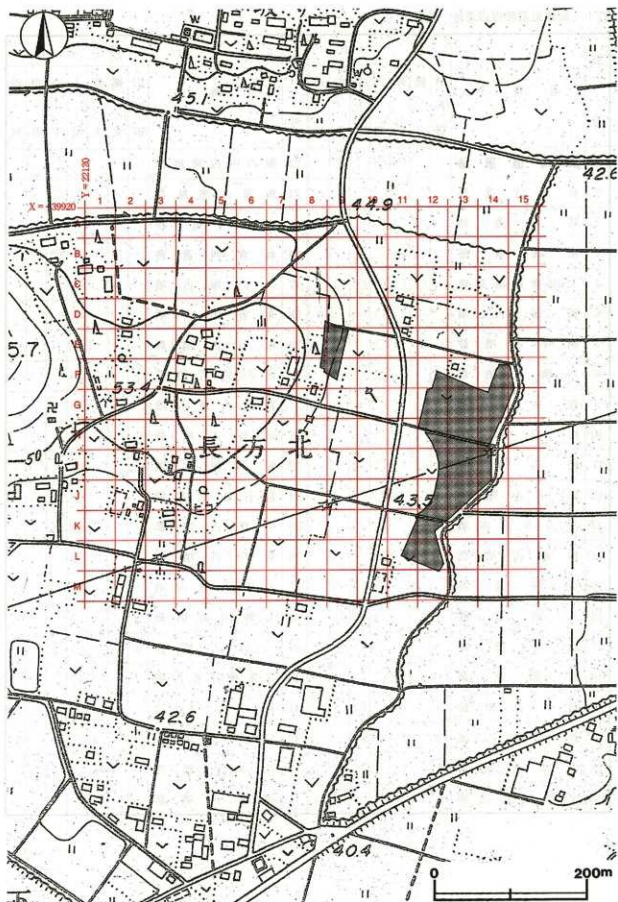
- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会 『日本の地質3 関東地方』 共立出版 1986年10月
- 2) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』 岩瀬町教育委員会 1987年3月
- 3) 茨城県史編集委員会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- 4) 西宮一男 『常陸狐塚古墳調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1969年4月
- 5) 野村幸希 『磯部遺跡調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1972年3月
- 6) 池邊 彌 『和名類聚抄郡郷里名考証』 吉川弘文館 1981年2月
- 7) 中山信名 『新編常陸国誌』 書房 複製版 1978年12月



第1圖 辰海道遺跡周辺遺跡位置圖

表1 辰海道遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世
1	辰海道遺跡			○	○	○	○	23	堀の内古窯跡群					○		
2	長辺寺遺跡		○	○				24	飯淵古窯跡群					○		
3	防人遺跡		○	○	○	○		25	高森遺跡	○						
4	猪窪遺跡		○	○				26	高森西遺跡	○			○	○		
5	犬田神社前遺跡		○	○	○	○	○	27	二門塚古墳				○			
6	狐塚古墳				○			28	布着山古墳				○			
7	間中古墳群				○			29	坂戸古墳群				○			
8	青柳古墳群				○			30	星の宮古墳群				○			
9	花園古墳				○			31	森山台地古墳				○			
10	西沢古墳				○			32	富谷古墳群				○			
11	稲古墳群				○			33	郷の塚古墳				○			
12	松田古墳群				○			34	富谷弥陀古墳				○			
13	長辺寺山古墳				○			35	中里古墳群				○			
14	飯淵古墳群				○			36	猪窪古墳群				○			
15	金谷遺跡				○	○	○	37	犬田山神古墳				○			
16	当向遺跡				○	○	○	38	大神田古墳群				○			
17	山王遺跡				○	○		39	二宮古墳群				○			
18	磯部遺跡	○		○				40	青木神社裏古墳				○			
19	新治郡衙跡					○		41	青木たてやま古墳				○			
20	新治魔寺跡					○		42	白山古墳群				○			
21	上野原遺跡			○				43	青木古墳群				○			
22	上野原瓦窯跡					○		44	高森古墳群				○			



第2图 辰海道遗址地区设定图

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

調査区は、便宜上1～6区に分けた(第2図)。平成13年度の調査区は1～4区、平成14年度以降の調査区は3区(一部)、5区、6区であり、今回報告するのは、平成13年度に調査した1～4区の19,523.07㎡分についてである。調査の結果、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明し、調査区域の中央部からは古墳時代前～中期の漆(長さ南北70m以上、東西50m以上)が確認されている。

遺構は、竪穴住居跡457軒(弥生時代10、古墳時代213、奈良・平安時代224、不明10)、掘立柱建物跡23棟(奈良・平安時代22、中世1)、地下式墳跡1基、井戸跡46基、渠跡1条、溝跡34条、道路跡2条、横列跡13条、ピット群41か所、土坑113基、包含層2か所などである。

遺物は、遺物コンテナ(60×40×20cm)に800箱出土している。出土した主な遺物は、土器類(縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土師質土器、陶器、磁器)や石器・石製品(有舌尖頭器、石鏃、磨製石斧、敲石、砥石、石製模造品、紡錘車、管玉、勾玉、双孔円板)、土製品(土玉、球状土錘、管状土錘、支脚、置籠、輪羽口、紡錘車)、金属製品(刀子、鉄鏃、鉄鏃、金鉈、耳環、古銭)、木製品(井戸枠・木杭)などである。

第2節 基本層序の検討

調査3区の南西部(J12d8)にテストピットを設定して、基本土層の観察を行った(第3図)。この分層については、I層を表土、II層をローム層への漸位層、III層をソフトローム層、IV層をハードローム層、V層を第一黒色帯(BBI)、VI層を始良丹沢テフラ(AT)を含む層、VII層を第二黒色帯(BBI)、VIII層を鹿沼バミス(KP)層との漸位層、IX層を鹿沼バミス層、X層を常総粘土層ととらえた。

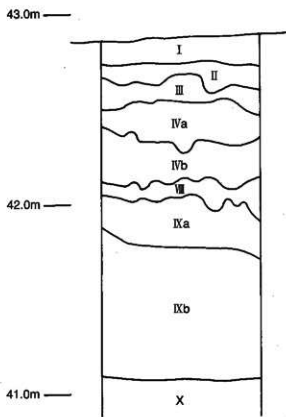
第I層は、ロームブロックを少量含む12～16cmの黒褐色の表土層であり、粘性・締まりとも弱い。

第II層は、赤色粒子を微量含む6～18cmの暗褐色の漸位層であり、粘性・締まりとも普通である。

第III層は、褐色のソフトローム層である。粘性は強く、締まりは普通であり、層厚は4～16cmである。

第IVa層は、褐色の漸位層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は16～28cmである。

第IVb層は、褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は14～28cmである。中層に少量のガラス質の粒子が認められ、始良丹沢テフラ



第3図 基本土層図

を含む層にも相当する。

第V層にあたる第一黒色帯及び第Ⅵ層にあたる第二黒色帯は確認できなかった。

第Ⅵ層は明褐色のハードローム層であり、粘性は普通で、締まりは強く、層厚は8～24cmである。

第Ⅶa層は、明褐色の鹿沼パミス純層であり、粘性は弱く、締まりは強く、層厚は20～28cmである。

第Ⅶb層は、明褐色の鹿沼パミス純層であり、粘性は弱く、締まりは強く、層厚は、64～74cmである。

第Ⅷ層は、にぶい褐色の粘土層である。粘性は強く、締まりは普通で、厚さは30cm以上あり、下層が未掘のため本来の厚さは不明である。

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、弥生時代の竪穴住居跡10軒を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第61号住居跡 (第4図)

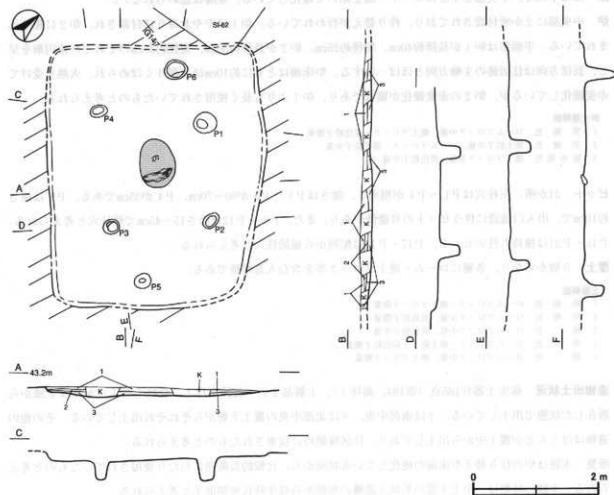
位置 調査区北部東寄りのG14j7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北壁際の一部を第62号住居に掘り込まれている。

規模と形状 後世の耕作により削平されているが、東西軸約3.5m、南北軸約4.0mの長方形と推測される。主軸方向はN-49°-Wで、壁の立ち上がりが北壁と西壁の一部で確認された。壁高は8cm前後と低く、立ち上がりは判然としなない。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

炉 ほぼ中央部に付設されており、平面形は長径約40cm、短径約30cmの楕円形を呈し、長径方向は住居跡の主軸方向と一致する。炉床面は床面とほぼ同じ高さであり、火熱を受けて赤変硬化している。また、炉の南端には、一面だけが赤変した炉石が設置されている。



第4図 第61号住居跡実測図

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは約30cmである。P5・P6は深さ約40cmで、南・北壁際の中央部に位置しており、棟持ち柱のピットと考えられるが明確ではない。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 砂岩の炉石が炉床から1点出土している。

所見 本跡は壁の大部分が削平された状態で検出されたが、ピットの規則的な配置などから規模を推定することができた。しかし、本跡の時期は、出土遺物が炉石1点だけであるために時期の特定はできないが、弥生時代後期と考えられる。

第84号住居跡（第5・6図）

位置 調査区北部東寄りのH14b2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北東コーナー部壁際の一部を第375号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸約5.0m、東西軸約4.0mの隅丸長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は約30cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部を中心にコーナー部を除いて硬化している。壁溝は認められない。

炉 中央部に2か所付設されており、作り替えが行われている。炉1はやや北寄りに付設され、炉2に掘り込まれている。平面形は炉1が長径約40cm、短径約25cm、炉2が長径約50cm、短径約35cmのそれぞれ楕円形を呈し、長径方向は住居跡の主軸方向とほぼ一致する。炉床面はともに約10cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化しているが、炉2の赤変硬化が顕著であり、炉1よりも長く使用されていたものと考えられる。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量

ピット 21か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さはP1～P3が60～70cm、P4が35cmである。P5は深さ約10cmで、出入口施設に伴うピットの可能性があるが、また、P6～P12は深さ15～45cmで壁柱穴と考えられる。P15・P21は棟持ち柱のピット、P17・P18は配列から補助柱穴と考えられる。

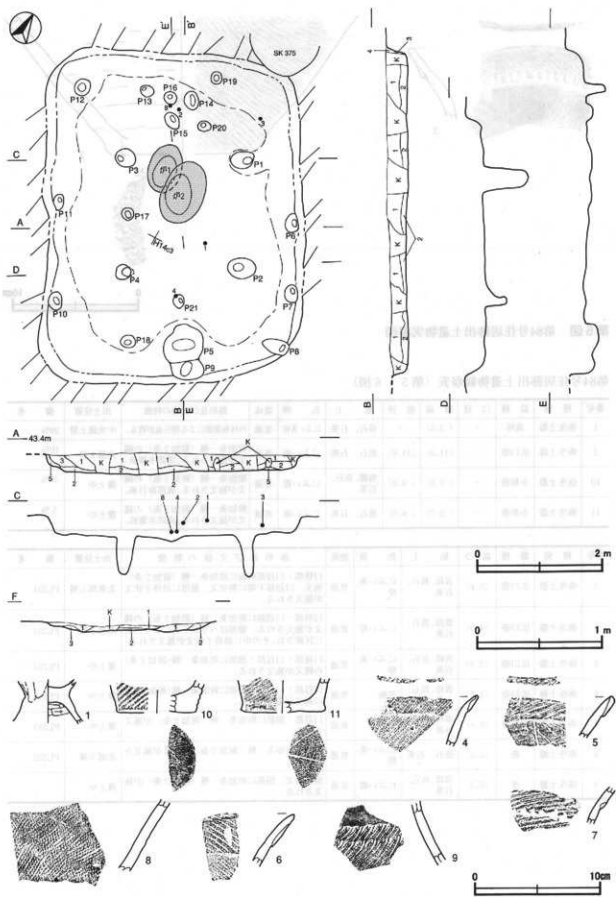
覆土 5層からなり、各層にローム・焼土ブロック等を含む人為堆積である。

土層解説

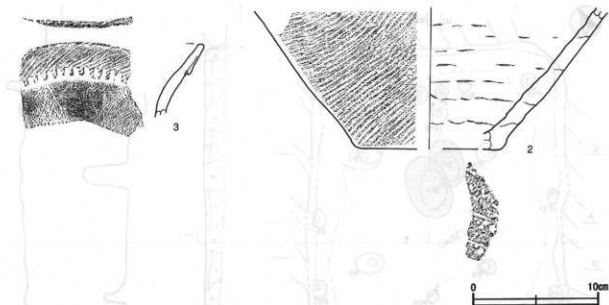
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 弥生土器片185点（壺184、高坏1）、土製品2点（紡錘車片1、管状土錘1）がほぼ全域から散在した状態で出土している。4は南部中央、8は北部中央の覆土下層からそれぞれ出土している。その他の遺物はほとんどが覆土中から出土しており、住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は炉の作り替えや床面の硬化している状況から、比較的長期間にわたり使用されていたものと考えられる。本跡の時期は、出土土器の形状と遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第5图 第84号住居跡・出土遺物実測図



第6図 第84号住居跡出土遺物実測図

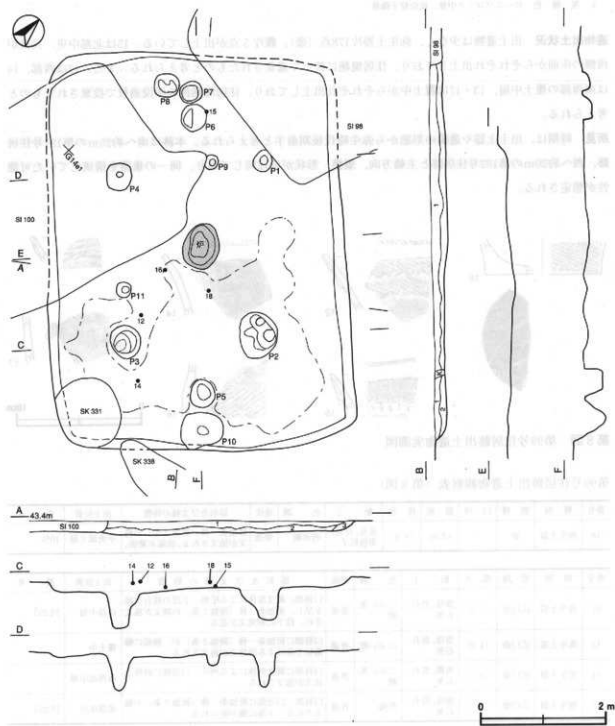
第84号住居跡出土遺物観察表 (第5・6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	高坏	-	(3.5)	-	長石、石英	にぶい黄橙	普通	内外面全面による押圧痕が残る。	中央部上層	20%
2	弥生土器	広口壺	-	(11.3)	[11.6]	長石、石英	にぶい褐	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。底部木葉痕。	北部上層	10%
10	弥生土器	小形壺	-	(2.6)	[6.0]	角礫、長石、石英	にぶい橙	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。底部砂目痕。	覆土中	5%
11	弥生土器	小形壺	-	(2.7)	[6.0]	長石、石英	にぶい褐	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。底部木葉痕。	覆土中	5%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
3	弥生土器	広口壺	(5.8)	雲母、長石、石英	にぶい黄橙	普通	口唇部・口辺部外面に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。口辺部下端に刺突文、頸部に斜格子状文が施文される。	北東部上層	PL253
4	弥生土器	広口壺	(4.0)	雲母、長石、石英	にぶい橙	普通	口唇部・口辺部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。頸部はヘラ状工具により三角に区画され、その中に斜格子状文が施文される。	南部下層	PL253
5	弥生土器	広口壺	(3.3)	角礫、長石、石英	にぶい黄橙	普通	口唇部・口辺部・頸部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	覆土中	PL253
6	弥生土器	広口壺	(4.2)	雲母、長石、石英	黒褐	普通	口唇部・口辺部・頸部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	覆土中	PL253
7	弥生土器	広口壺	(2.6)	雲母、長石、石英	明赤褐	普通	口辺部・頸部に附加条一種(附加2条)が施文される。	覆土中	PL253
8	弥生土器	壺	(5.5)	長石、石英	にぶい黄橙	普通	外面に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	北部下層	PL252
9	弥生土器	壺	(5.3)	雲母、長石、石英	にぶい橙	普通	頸部無文、胴部に附加条一種(附加2条)が施文される。	覆土中	

第99号住居跡 (第7・8図)

位置 調査区北部東寄りのG14d1区に位置し、平坦部に立地している。
 重複関係 第98・100号住居、第331・338号土坑に掘り込まれている。
 規模と形状 南北軸約6.5m、東西軸約5.0mの長方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は10cmと低く、立ち上がりは判然としない。
 床 ほぼ平坦で、南部が硬化している。壁溝は認められない。



第7図 第99号住居跡実測図

炉 はほぼ中央部に付設されており、平面形は長径約35cm、短径約30cmの楕円形を呈し、長径方向は住居跡の主軸方向とはほぼ一致する。炉床面は約5cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。対空窓 竪穴ピット 11か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～60cmである。P5・P7は30cm前後で棟持ち柱のピットと考えられる。

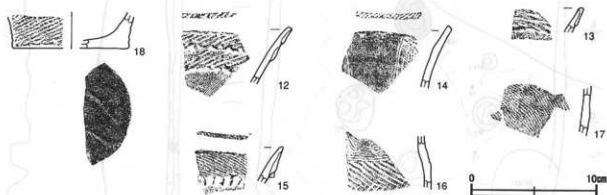
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、弥生土器片178点（壺）、礫片5点が出土している。15は北部中央、16は炉西側の床面からそれぞれ出土しており、住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。また、12は西部、14は南西部の覆土中層、13・17は覆土中からそれぞれ出土しており、住居廃絶後の埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器や遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。本跡は南へ約25mの第121号住居跡、西へ約20mの第192号住居跡と主軸方向、規模、形状がほぼ同じであり、同一の集落を構成していた可能性が想定される。



第8図 第99号住居跡出土遺物実測図

第99号住居跡出土遺物観察表（第8図）

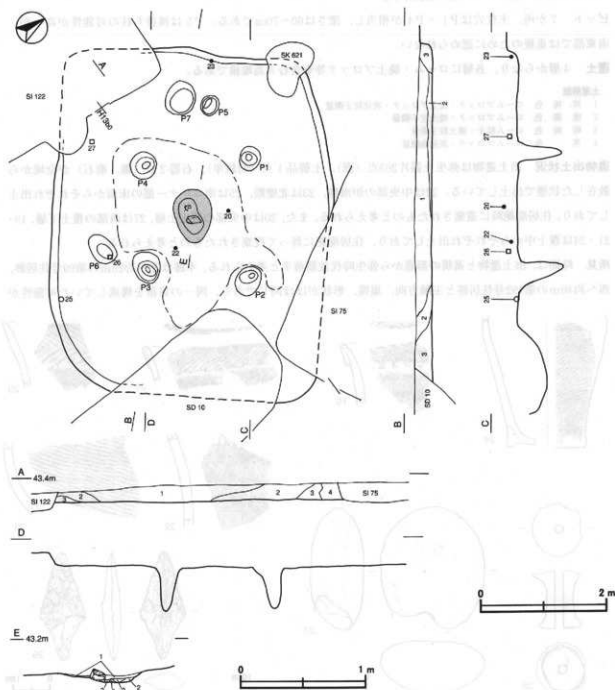
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
18	弥生土器	壺	-	(2.9)	[9.2]	長石、石英、赤色較子	明赤褐	普通	附加条一種（附加2条）の縄文が施文される。底部木煎痕。	中央部土層	10%
12	弥生土器	広口壺	(5.8)			雲母、長石、石英	にぶい黄緑	普通	口唇部に縄文原体による圧痕。2段の複合口縁を呈し、附加条一種（附加2条）の縄文が施文され、段下に刺突文が通る。	西部中層	PL253
13	弥生土器	広口壺	(4.0)			雲母、長石、石英	にぶい橙	普通	口唇部に附加条一種（附加2条）が、頸部に柳葉状工具による波状文が施文される。	覆土中	
14	弥生土器	広口壺	(3.3)			角礫、長石、石英	にぶい黄緑	普通	口唇部に縄文原体による押圧。口辺部に斜格子状文が施文される。	南西部中層	
15	弥生土器	広口壺	(4.2)			雲母、長石、石英	黒褐	普通	口唇部・口辺部に附加条一種（附加2条）が施文される。下縁に瘤が貼られる。	北部床面	PL253

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
16	弥生土器	広口壺	(2.6)	雲母, 長石, 石英	明赤褐色	普通	頸部に撚曲状工具による波状文・横走文, 胴部に附加糸一種(附加2条)が施文される。	中央部下層	
17	弥生土器	壺	(5.5)	長石, 石英	にぶい黄褐色	普通	胴部外面に単筋縄文が施文される。	覆土中	

第121号住居跡(第9・10図)

位置 調査区北部東寄りのH13a0区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第75・122号住居, 第621号土坑, 第10号溝に掘り込まれている。



第9図 第121号住居跡実測図

規模と形状 南北軸は重複により推定で約5.5m、東西軸は約4.4mで、N-51°-Wを主軸とする隅丸長方形と推定される。壁高は約10cmと低い。

床 ほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝は認められない。

炉 ほぼ中央部に付設されており、平面形は長径約40cm、短径約30cmの楕円形を呈し、長径方向は住居跡の主軸方向とほぼ一致する。炉床面は5cmほど掘りくぼめられ、中央部には火熱を受けて赤変している礫片が出土しており、炉石と考えられる。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量

ピット 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは60～70cmである。P5は棟持ち柱の可能性が高いが、南東部では重複のために認められない。

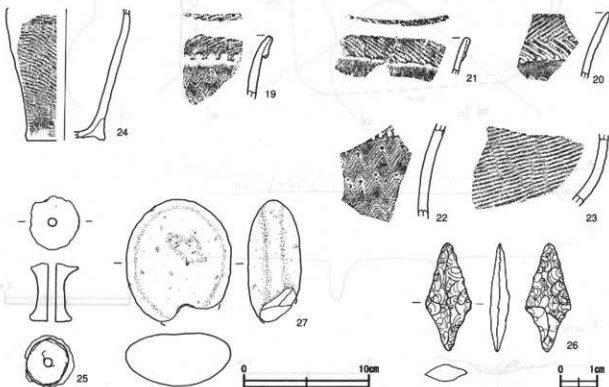
覆土 4層からなり、各層にローム・焼土ブロック等を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 出土遺物は弥生土器片203点(壺)、土製品1点(紡錘車)、石器2点(鏃、磨石)が全域から散在した状態で出土している。22は中央部の炉南側、23は北壁際、25は南コーナー部の床面からそれぞれ出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、20は中央部の覆土上層、27は西部の覆土下層、19・21・24は覆土中からそれぞれ出土しており、住居廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。本跡は北へ約25mの第99号住居跡、西へ約40mの第192号住居跡と主軸方向、規模、形状がほぼ同じであり、同一の集落を構成していた可能性が



第10図 第121号住居跡出土遺物実測図

想定される。

第121号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
24	弥生土器	小形壺	-	(10.5)	[6.0]	雲母, 石英, 針状鉱物	にぶい褐	普通	附加糸一種 (附加2条) の縄文が施文される。底部木葉痕。	覆土中	5%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
19	弥生土器	広口壺	(5.0)	角礫, 雲母, 石英	にぶい黄緑	普通	口唇部・口辺部に附加糸一種 (附加2条) の縄文が施文され, 段下に縄による刺突文が流る。頸部に4本の磨面状工具による波状文。	覆土中	PL253
20	弥生土器	広口壺	(5.1)	雲母, 石英	黒褐	普通	口辺部に附加糸一種 (附加2条) の羽状縄文が施文される。	中央部上層	PL253
21	弥生土器	広口壺	(2.9)	雲母, 石英	灰黄褐	普通	口唇部に縄文原体による押圧。口辺部に斜格子状文が施文される。	覆土中	PL253
22	弥生土器	広口壺	(4.2)	雲母, 長石, 石英	にぶい黄緑	普通	頸部に8本の磨面状工具による波状文が施文される。	中央部床面	
23	弥生土器	壺	(5.8)	角礫, 雲母, 石英	にぶい赤褐	普通	附加糸一種 (附加2条) の縄文が施文される。	北部床面	PL252

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
26	有葉石鏃	2.9	1.1	0.4	0.9	チャート	有茎, 両面にわたって調整が施されている。	南西部上層	
27	磨石	(9.6)	8.3	4.2	(424.0)	砂岩	一部欠損, 磨石と兼用	西部下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
25	糸巻き形土製品	(4.1)	4.7	4.1	44.9	長石, 石英	糸巻き形, 一方の外縁は面取りされている。	南西部床面	PL260

第139号住居跡 (第11・12図)

位置 調査区北部東寄りのH13d5区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 北西側を第125・142号住居, 南側を189号住居にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 東西軸約5.8m, 南北軸約4mで, N-87°-Wを主軸とする隅丸長方形と推定される。壁高は約30cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で, 中央部が硬化している。壁溝は認められない。

炉 ほは中央部に付設されており, 平面形は長径約60cm, 短径約30cmの楕円形を呈し, 長径方向は住居跡の主軸方向とほぼ一致する。炉床面は約5cmほど掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・焼土ブロック中量, ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

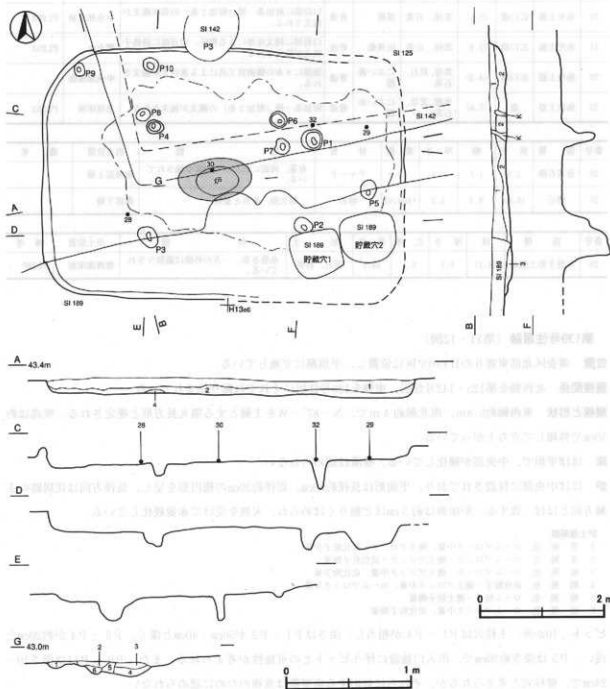
ピット 10か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さはP1・P2が50cm・40cmと深く, P3・P4が約20cmと浅い。P5は深さ約30cmで, 出入口施設に伴うピットとの可能性が考えられる。また, P9~P11は深さ10~24cmで, 壁柱穴と考えられるが, それらに対応する南壁際は重複のために認められない。

覆土 4層からなり, レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、弥生土器片57点(破), 礫片7点が出土しただけであり, 土器片はほとんどが細片である。29・32は東部の床面, 30は炉床面, 28は中央部やや南寄りの床面からそれぞれ出土している。所見 時期は, 出土土器や遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。また, 本跡は他の弥生時代後期の住居跡に比べて主軸が西に大きく傾いており, 本跡の南約60mに位置する第469号住居跡と主軸方向, 規模, 形状がほぼ同じである。



第11図 第139号住居跡実測図



第12図 第139号住居跡出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
32	弥生土器	小形壺	-	(1.7)	6.6	雲母、長石、石英	にぶい褐色	普通	附加条一種 (附加2条) の縄文が施文され、底部木炭痕。	東部床面	5%
番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴		出土位置	備考	
28	弥生土器	広口壺	(4.1)	雲母、長石、石英	褐色	普通	口唇部に原体による押圧。口辺部に附加条一種 (附加2条) の羽状縄文が施文され、2列の刺突文で2段の接合口縁が区画される。		南西部床面	PL253	
29	弥生土器	広口壺	(4.4)	雲母、石英	にぶい褐色	普通	頸部に8本の櫛歯状工具による波状文と横走文が施文される。		東部床面		
30	弥生土器	壺	(5.8)	雲母、石英	褐色	普通	頸部に櫛歯状工具による連弧文、胴部に附加条一種 (附加2条) の縄文が施文される。		炉覆土上層	PL252	
31	弥生土器	壺	(4.6)	雲母、石英	にぶい褐色	普通	附加条一種 (附加2条) の羽状縄文が施文される。		覆土中		

第163号住居跡 (第13図)

位置 調査区北部中央のG13g4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 中央部を第270号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 後世の耕作などによって削平されており、壁は検出できなかったが、やや硬化した床面が部分的に確認されただけである。規模と形状については掘り方調査をもとに、南北軸約5.0m、東西軸約3.5mと推定され、N-23°-Wを主軸とする長方形と思われる。

床 ほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝は認められない。

炉 北部で焼土塊を確認したが、炉の痕跡は認められなかった。

ピット 13か所。主柱穴としてはP3・P4が考えられるが、他は耕作による攪乱のため不明である。

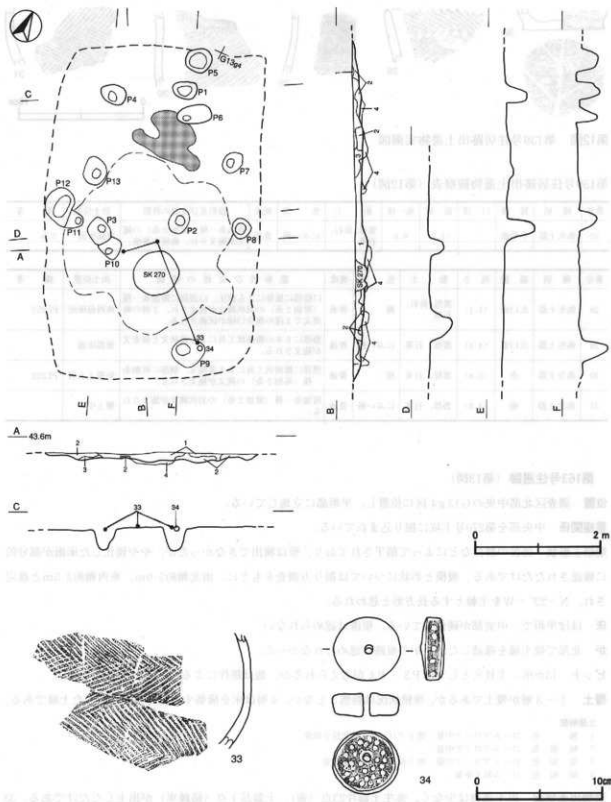
覆土 1~3層が覆土であるが、堆積状況は判然としない。4層は床を構築するために埋め戻した土層である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、弥生土器片23点 (壺)、土製品1点 (紡錘車) が出土しただけである。33は中央部の床面とP9覆土上層から出土した破片が接合したものである。また、34はP9の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。



第13図 第163号住居跡・出土物実測図

第163号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
33	弥生土器	壺	(9.1)	雲母、石英、赤色粒子	にぶい黄澄	普通	附加糸一種(附加2条)の彩状織文が施文される。	中央部床面	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
34	紡輪車	5.2	1.9	0.7	49.0	灰石、石英	上面と側面に竹管による刺突文が施文される。	P9覆土層	PL260

第192号住居跡 (第14・15図)

位置 調査区北部のB13b6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北西部を第191号住居、南西部を第179号住居にそれぞれ掘り込まれ、第172・173・212・214・219・232・233・236・238・468・469号土坑にも掘り込まれている。

規模と形状 南北軸約7.0m、東西軸約5.5mで、N-40°-Wを主軸とする長方形と推定される。壁高は約15cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦で、南部が硬化している。壁溝は認められない。

炉 ほほ中央部に付設されており、平面形は長径約50cm、短径約40cmの楕円形を呈し、長径方向は住居跡の主軸方向とはほぼ一致する。炉床面は約10cmほど掘りくぼめられ、火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
- 2 赤褐色 焼土ブロック多量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さはP1が約23cm、P2が約52cm、P3が37cm、P4が30cmで、深さは不揃いであるが、柱間寸法は南北約3.0m、東西約2.5mと規則的に配されている。

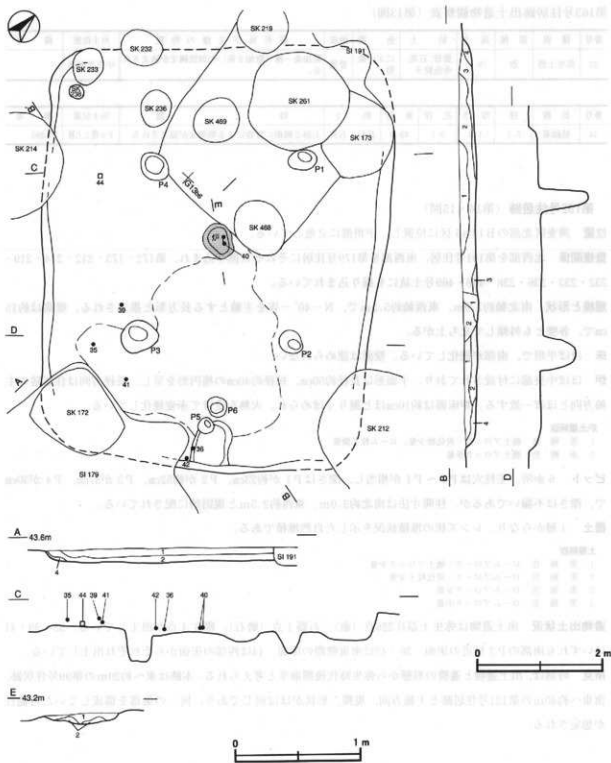
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土遺物は弥生土器片226点(壺)、石器1点(磨石)、礫片4点が出土している。35・39・41はいずれも南部のP3付近の床面、36・42は南東壁際の床面、44は西部の床面からそれぞれ出土している。

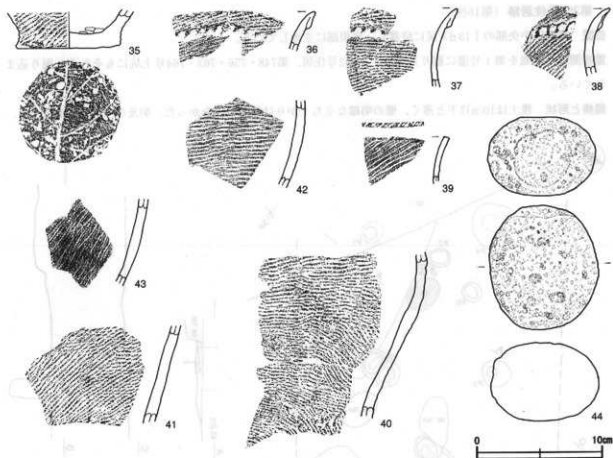
所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。本跡は東へ約20mの第99号住居跡、南東へ約40mの第121号住居跡と主軸方向、規模、形状がほぼ同じであり、同一の集落を構成していた可能性が想定される。



第14図 第192号住居跡実測図

第192号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
35	弥生土器	壺	-	(3.0)	8.4	長石、石英	灰黄褐	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。底部木素痕。	南西部下層	5%



第15図 第192号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
36	弥生土器	広口壺	(4.1)	雲母、長石、石英	褐	普通	口唇部に原体による押圧。口辺部に附加条一種(附加2条)の羽状縄文が施文される。	南部下層	PL253
37	弥生土器	広口壺	(4.4)	雲母、石英	にぶい褐	普通	口唇部に原体による押圧。口辺部に附加条一種(附加2条)の羽状縄文が施文される。	覆土中	
38	弥生土器	壺	(5.8)	雲母、石英	橙	普通	口唇部に原体による押圧。口辺部に附加条一種(附加2条)の羽状縄文が施文される。	覆土中	
39	弥生土器	壺	(4.6)	雲母、石英	にぶい褐	普通	口唇部、口辺部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	南西部中層	
40	弥生土器	壺	(15.0)	雲母、石英、赤色粒子	にぶい赤褐	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	弥覆土下層	
41	弥生土器	壺	(7.8)	雲母、石英、赤色粒子	橙	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。内面に灰白色の付着物。	南西部下層	
42	弥生土器	壺	(7.0)	雲母、長石、石英	にぶい橙	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	南部下層	PL252
43	弥生土器	壺	(6.8)	雲母、石英	にぶい褐	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	覆土中	PL252

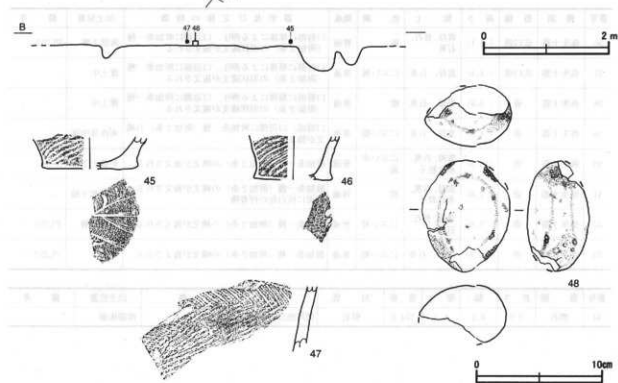
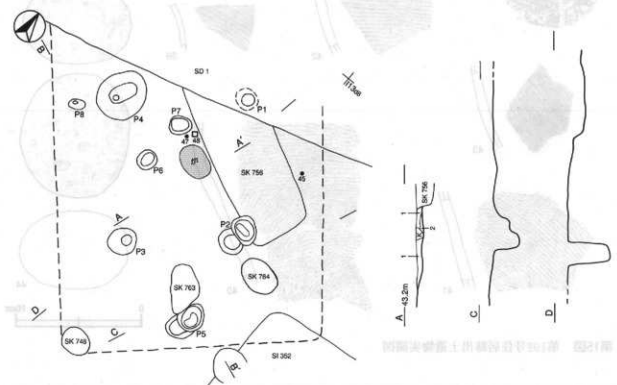
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
44	磨石	9.9	8.5	6.3	374.0	軽石	使用面は平らになっている。	西部床面	

第356号住居跡 (第16図)

位置 調査区中央部のI13d7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北側を第1号濠に掘り込まれ、第352号住居、第748・756・763・764号土坑にもそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 覆土は10cm以下と薄く、壁の明確な立ち上がりは確認できなかった。炉及び支柱穴の配置から、



第16図 第356号住居跡・出土遺物実測図

東西軸約4.0m, 南北軸約6.0mで, N-40°-Wを主軸とする長方形と思われる。

床 はほぼ平坦で, 硬化面や壁溝は認められない。

炉 は中央部に付設されており, 平面形は長径約60cm, 短径約40cmの楕円形を呈している。炉床面は約5cmほど掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 8か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さはP1が約40cm, P2~P4が50~67cmである。P5は深さ約30cmで, 出入口施設に伴うピットとも考えられる。

覆土 2層からなるが覆土は薄く, 堆積状況は判然としない。2層は焼土ブロックの含有状況及び赤変硬化していることから炉床と考えられる。

土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック・焼土粒子少量
2 黒 褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく, 弥生土器片9点(壺), 石器1点(礫石)が出土しただけである。45は東部の床面, 47・48は中央部の炉北側の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

第356号住居跡出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
45	弥生土器	小形壺	-	(2.5)	[7.6]	雲母, 石英	明赤褐	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文され, 底部木葉痕。	東部下層	5%
46	弥生土器	小形壺	-	(3.5)	[6.3]	雲母, 石英	橙	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文され, 底部木葉痕。	覆土中	5%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
47	弥生土器	壺	(5.0)	雲母, 長石	にぶい橙	普通	附加条一種(附加2条)の羽状縄文が施文される。	中央部床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
48	礫石	(9.6)	8.3	4.2	(424.0)	凝灰岩	擦痕もあり, 磨石としても兼用。	中央部床面	

第461号住居跡(第17図)

位置 調査区南部のL11b7区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第462号住居, 第972号土坑に掘り込まれている。

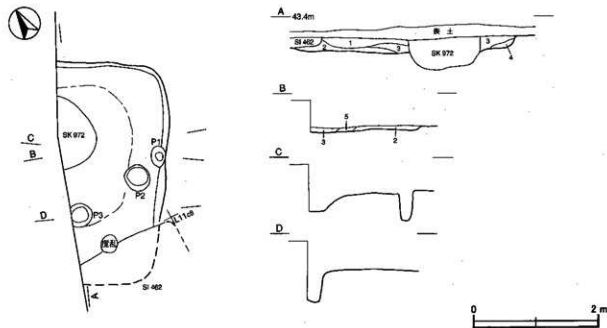
規模と形状 大半が調査区域外に延びているため, 詳細は不明であるが, 南北軸は約3.3m, 東西軸は1.3mだけが確認できた。壁高は13cmで, ほぼ直立して立ち上がり, 主軸方向はN-20°-Eである。

床 遺存している部分はほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められているが, 壁溝が確認されていない。

炉及び竈 検出されていない。

ピット 3か所。P1は深さ48cmであるが, 主柱穴であるか明確でない。P3は深さ52cmで, 位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2の性格は不明である。

覆土 5層からなり, ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。



第17図 第461号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 8 点 (破), 弥生土器片 10 点 (広口壺) が, 全域の覆土中層から下層にかけて出土している。土師器破片は細片で, 破断面が磨耗しているものも多く, 住居廃絶後に混入したものと思われる。

所見 床面から遺物は検出されなかったが, 広口壺の形状から, 時期は弥生時代後期と推測される。

第469号住居跡 (第18・19図)

位置 調査区中央部の I 13j7 区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 南西側を第390号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸約5.0m, 北壁は耕作によって擾乱をうけているが南北軸は4.0mほどで, N-76°-Wを主軸とする長方形と推定される。壁高は約20cmで, 各壁はほぼ直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 中央部が硬化している。壁溝は認められない。

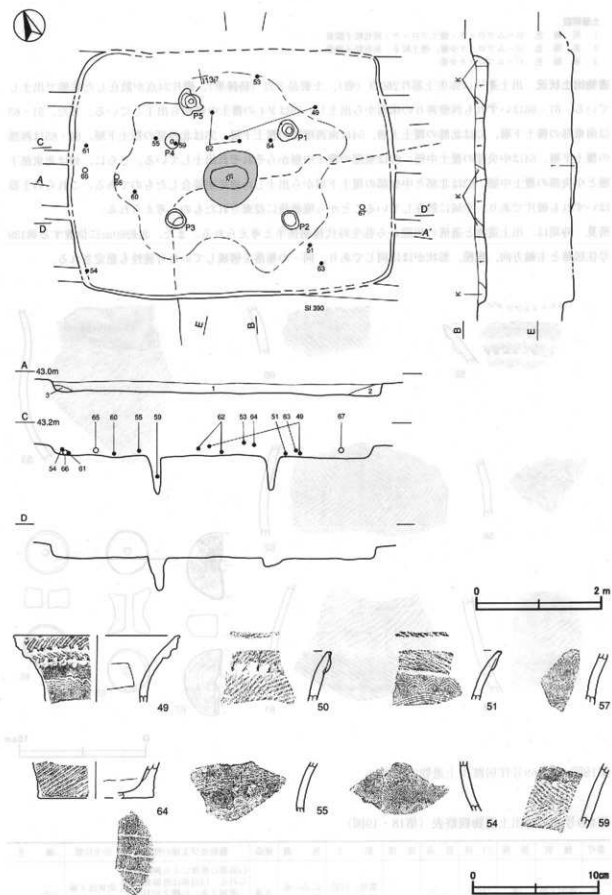
炉 中央部に付設されており, 平面形は長径約60cm, 短径約30cmの楕円形を呈し, 長径方向は住居跡の主軸方向とほぼ一致する。炉床面は約10cmほど掘りくぼめられ, 火熱を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

ピット 5 か所。主柱穴は P1 ~ P4 が相当し, 深さは P1・P3・P4 が 50~60cm, P2 が 15cm である。P2 だけが浅いが, 配置から主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。中央部は1層のみのため堆積状況を判断するのは困難であるが, ローム・焼土ブロック等の含有状況からみて人為堆積と思われる。



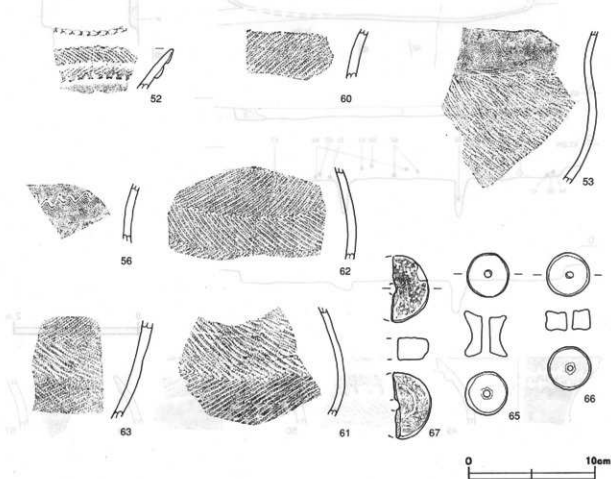
第18图 第469号住居跡・出土遺物実測図(1)

土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は弥生土器片269点(壺)、土製品3点(紡錘車)、礫片24点が散在した状態で出土している。61・66はいずれも西壁寄りの床面から出土し、59はP4の覆土中層から出土している。また、51・63は南東部の覆土下層、53は北部の覆土上層、54は南西壁際の覆土下層、55は北西部の覆土下層、60・65は西部の覆土下層、64は中央部の覆土中層、67は東部の覆土中層からそれぞれ出土している。さらに、49は北東部下層と中央部の覆土中層、62は北部と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。これらの土器はいずれも破片であり、全域に散在していることから廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。また、北約60mに位置する第139号住居跡と主軸方向、規模、形状がほぼ同じであり、同一の集落を構成していた可能性も想定される。



第19図 第469号住居跡出土遺物実測図(2)

第469号住居跡出土遺物観察表(第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
49	弥生土器	壺	[13.2]	(5.3)	-	雲母、白色 粒子	にぶい赤 褐色	普通	口唇部に原体による押圧が見られる。口辺部は附加糸一種(附加2条)の縄文が弱状に施文され、原体による二段の刺突が加えられる。	北東部下層 中央部中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
64	弥生土器	壺	-	(3.0)	8.4	長石、石英	灰黄褐色	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。底部本葉痕。	中央部中層	5%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
50	弥生土器	広口壺	(3.9)	雲母、石英	にぶい黄褐色	普通	口唇部・口辺部・頸部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文され、複合口縁の段下には原体による刺突文が施される。	覆土中	PL253
51	弥生土器	広口壺	(3.9)	雲母、石英、赤色粒子	灰黄褐色	普通	口唇部・口辺部に附加条一種(附加2条)の縄文が、頸部に3本の櫛歯状工具による波状文と山形文が施文される。	南東部下層	PL253
52	弥生土器	壺	(3.2)	雲母、石英	にぶい褐色	普通	口唇部に原体押圧。口辺部は附加条一種(附加2条)の縄文が羽状に施文される。口辺部下層には原体による二段の刺突が加えられる。	覆土中	PL253
53	弥生土器	壺	(12.2)	雲母、長石、石英	にぶい赤褐色	普通	頸部に7本の櫛歯状工具による波状文と横走文が、胴部に附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	北部上層	
54	弥生土器	壺	(4.0)	長石、石英	灰黄褐色	普通	7本の櫛歯状工具による波状文が施文される。	南西部下層	
55	弥生土器	壺	(4.1)	雲母、長石、石英	にぶい黄褐色	普通	6本の櫛歯状工具による振幅の弱い波状文が施文される。	北西部下層	
56	弥生土器	壺	(4.7)	雲母、長石、石英	にぶい黄褐色	普通	5本の櫛歯状工具による波状文が施文される。	覆土中	
57	弥生土器	壺	(4.2)	長石、石英	明赤褐色	普通	7本の櫛歯状工具による波状文と横走文が施文される。	覆土中	
59	弥生土器	壺	(5.1)	雲母、石英	にぶい赤褐色	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が羽状に施文される。	P4覆土中層	
60	弥生土器	壺	(3.9)	雲母、石英	赤褐色	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が施文される。	西部下層	
61	弥生土器	壺	(8.5)	長石、石英	にぶい橙褐色	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が羽状に施文される。	西部下層	
62	弥生土器	壺	(7.2)	雲母、長石、石英	にぶい赤褐色	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が羽状に施文される。	北部下層 中央部下層	
63	弥生土器	壺	(7.7)	雲母、長石、石英	にぶい褐色	普通	附加条一種(附加2条)の縄文が羽状に施文される。	南東部下層	PL252

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
65	紡錘車	3.4	3.6	0.6	32.6	雲母、長石、石英	赤巻き形、上下面とも皿状にくぼんでいる。	西部下層	PL260
66	紡錘車	3.4	1.6	0.6	23.8	長石、石英	側面の中央部がわずかにくぼんでいる。	西部床面	PL261
67	紡錘車	5.3	1.8	-	(27.1)	長石、石英	全面に棒状工具による刺突文が施文される。	東部中層	

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡213軒を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1A号住居跡 (第20図)

位置 調査区北部北東寄りのF14d8区に位置し、平坦部に立地している。当初、1軒の住居跡として調査を開始したが、建て替えが行われていることが確認されたため、第1A・1B号住居跡として調査を実施した。

重複関係 第2号住居跡を掘り込み、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、南北軸3.3m、東西軸2.6mだけが確認できた。壁とピットの位置から、N-7°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。壁高は14~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P1の北側から中央部にかけて硬化面が認められた。壁溝は東部のみ確認された。

竈・炉 調査区域外に付設されていると考えられ、確認できなかった。

ピット 1か所。深さは48cmで、位置と形状から支柱穴と考えられる。

覆土 確認された覆土はすべて第1B号住居跡に帰属するものである。

遺物出土状況 出土していない。

所見 本跡は東部の壁溝が第1B号住居跡の主軸とほぼ同一で、拡張前の住居と考えられる。全体的な住居跡の形態や出土土器などを把握することはできなかった。時期は、第1B号住居跡とはほぼ同時期の5世紀後半と考えられる。

第1B号住居跡 (第20・21図)

位置 調査区北部北東寄りのF14d8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1A号住居跡を南へ拡張して本跡が構築されている。また、第2号住居跡を掘り込み、第6・7号住居、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、南北軸4.5m、東西軸3.5mだけ確認できた。壁溝とピットの位置から、N-7°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。壁の立ち上がりはほとんど確認できなかった。

床 ほぼ平坦で、東部より住居中央部にかけて硬化面が広がる。壁溝は東部のみ確認された。

竈・炉 調査区域外に位置していると考えられ、確認できなかった。

ピット 1か所。深さ35cmで、位置から柱穴と考えられる。

貯蔵穴 長径87cm、短径67cmの楕円形で、南東コーナー部に付設され、深さは55cmである。底面は平坦で、壁は直立している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

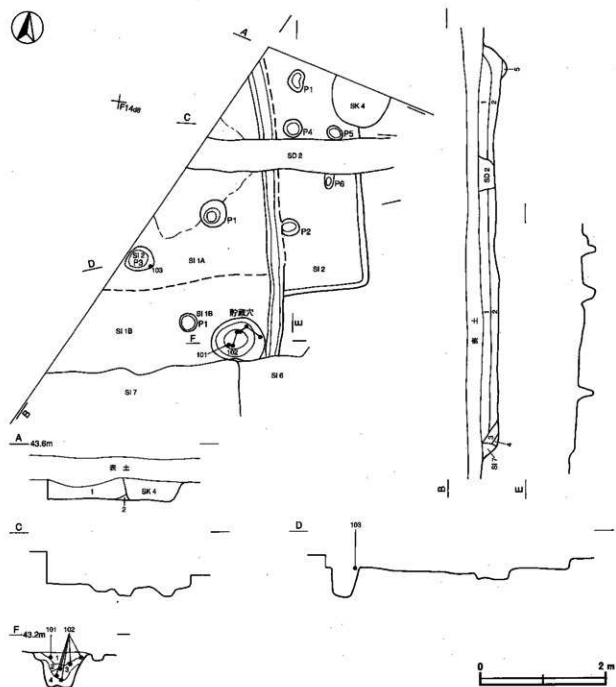
覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

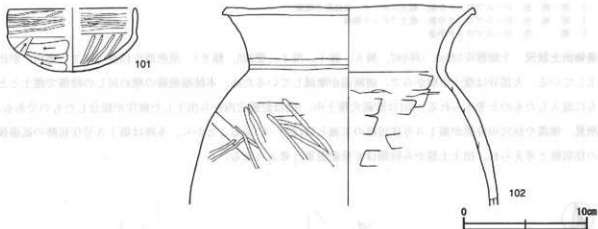
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片524点(坏187, 碗5, 鉢1, 埴4, 甕325, 瓶2), 須恵器片13点(坏3, 甕10)が出土している。大部分は覆土中層からで、破断面が摩滅しているため、本跡廃絶後の埋め戻しの段階で裡土とともに混入したものと考えられる。101は貯蔵穴覆土中, 102は貯蔵穴内から出土した破片が接合したものである。所見 壁溝や柱穴の位置が第1A号住居跡の主軸とほぼ同一になることから、本跡は第1A号住居跡の拡張後の住居跡と考えられ、出土土器から時期は6世紀前葉と考えられる。



第20図 第1A・1B・2号住居跡実測図



第21図 第1B号住居跡出土遺物実測図

第1B号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
101	土師器	坏	[10.2]	5.3	-	雲母・砂粒	赤褐色	普通	体部外面ヘラ磨り, 内面ヘラ磨き, 口縁部ヘラ磨き	貯蔵穴上層	50%
102	土師器	甕	20.2	(15.9)	-	雲母・灰石・赤色粒子・小礫	赤褐色	普通	体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	貯蔵穴上層	40%

第2号住居跡 (第20・22図)

位置 調査区北部北東寄りのF14d8区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第1A・1B号住居, 第2号溝, 第4号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸約4m, 東西軸約1.3mが確認されただけである。東・南壁とピットの位置から, N-7°-Wを主軸方向とする方形または長方形と推定される。壁高は14~16cmで, 直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。硬化面や壁溝は確認できない。

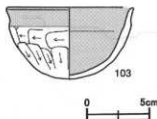
炉 確認できなかった。

ピット 6か所。P1・P2の深さは16cm・28cm, P3が48cmで, 位置から支柱穴と考えられる。P3は第1A号住居跡の床下から検出された。P4は深さ23cm, P5・P6は深さ10cm程度で, いずれも性格は不明である。

覆土 2層のみ確認されたが, 大部分が第1A・1B号住居跡に掘り込まれているため, 堆積状況は判然としえない。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量



遺物出土状況 土師器片288点 (坏79, 甕208, 甌1) が出土している。土師器片はいずれも細片で, 床面から確認されたものは少ない。破断面が摩滅していることから, 本跡廃絶時の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。103はP3の覆土内から出土している。

所見 本跡は遺存している部分が少なく, 全体的な形状を把握することができなかった。P3から出土した坏の形状から, 時期は5世紀中葉と考えられる。

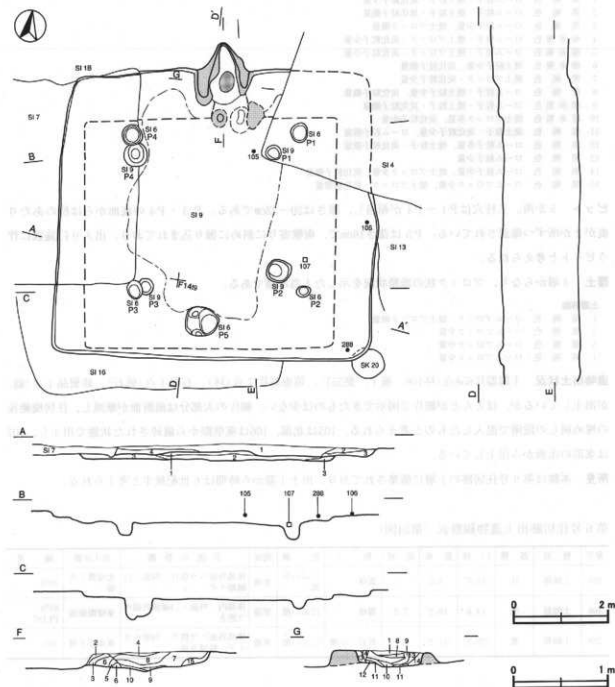
第22図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
105	土師器	坏	9.8	5.6	-	雲母・長石	にぶい艶	普通	体部外面へラ削り, 内面ナデ	P3 覆土中	75% 赤彩

第6号住居跡(第23・24図)

位置 調査区北部北東寄りのF14e9区に位置し, 平坦部に立地している。



第23図 第6・9号住居跡実測図

重複関係 第1B・13・16号住居跡を掘り込み、第4・7号住居、第20号土坑に掘り込まれている。また、床下から第9号住居跡の床が確認されている。

規模と形状 長軸7.3m、短軸6.7mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は10cm前後であり、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は認められない。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで98cm、袖部幅92cmで、壁外へ44cmほど掘り込んで構築されている。火床部は床面よりわずかに低く、赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子中量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量
- 11 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 12 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 13 黒褐色 ローム粒子少量
- 14 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 15 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは20～32cmである。P3・P4の底面からは柱のあたり痕が2か所ずつ確認されている。P5は深さ16cmで、南壁寄りに斜めに掘り込まれており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

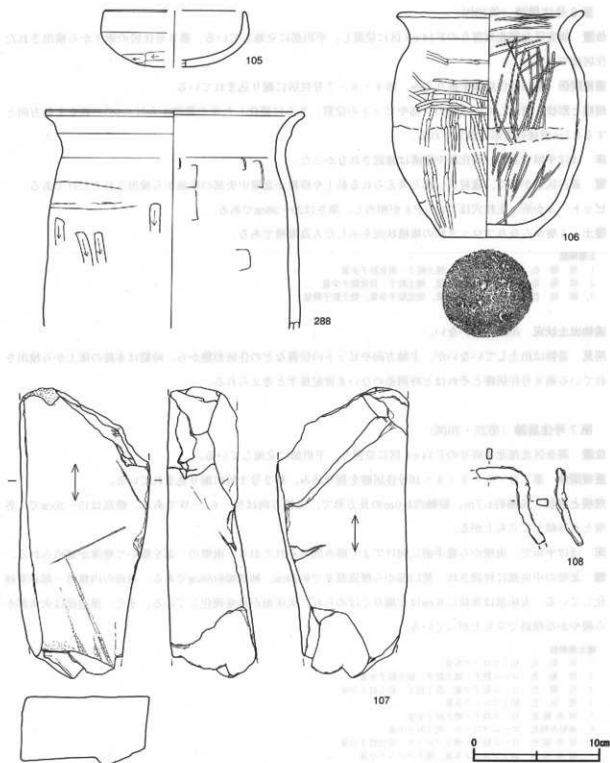
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片658点(坏106, 碗1, 甕551), 須恵器片7点(坏), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(鏝)が出土しているが、ほとんどが細片で図示できたものは少ない。細片の大部分は破断面が摩滅し、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。105は北部、106は東壁際から破砕された状態で出土し、107は東部の床面から出土している。

所見 本跡は第9号住居跡の上層に構築されており、出土土器から時期は6世紀後半と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
105	土師器	坏	[11.0]	4.5	-	雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面へツ削り、内面・口縁部ナナ	北部覆土中層	20%
106	土師器	甕	14.8	18.2	7.2	雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面・口縁部内面へツ削き	東壁際床面	85% PL197
288	土師器	甕	[20.2]	(17.2)	-	長石・小礫	にぶい褐	普通	体部外面へツ削り、内面へツ削り、輪縁み痕	東南部下層	30%



第24図 第6号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
107	砥石	(23.0)	(10.4)	(6.7)	(2270)	砂岩	砥面2面。一部研磨痕有り。	東部床面	PL.267
108	鏝	(6.1)	(5.7)	0.8	(20)	鉄	断面方形	北東部覆土中	

第9号住居跡（第23図）

位置 調査区北部北東寄りのF14e8区に位置し、平坦部に立地している。第6号住居の床下から検出された住居跡である。

重複関係 第16号住居跡を掘り込み、第4・6・7号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している竈の一部やピットの位置、さらに硬化した床の範囲からN-10°-Wを主軸方向とする4.5m前後の方形と推定される。

床 ほは平坦である。硬化面や壁溝は確認されなかった。

竈 遺存状態が悪く、竈材の一部と考えられる粘土や砂粒が北壁中央部の床面から検出されただけである。

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは29～36cmである。

覆土 3層からなりブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物は出土していないが、主軸方向やピットの位置などの住居形態から、時期は本跡の床上から検出されている第6号住居跡とそれほど時期差のない6世紀後半と考えられる。

第7号住居跡（第25・26図）

位置 調査区北部北東寄りのF14e8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1B・6・9・8・16号住居跡を掘り込み、第2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約4.7m、短軸約4.0mの長方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は15～20cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほは平坦で、南壁から竈手前に向けてよく踏み固められており、南壁の一部を除いて壁溝が認められる。

竈 北壁の中央部に付設され、焚口部から煙道部まで約74cm、袖幅約88cmである。袖部の内側は一部赤変硬化している。火床部は皿状に6cmほど掘りくぼめられ、火床面が赤変硬化している。また、煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 灰褐色 粘土ブロック多量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量
- 4 褐灰色 粘土ブロック多量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子中量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子中量
- 8 暗赤褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 10 極暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 11 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少許

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは42～58cmである。

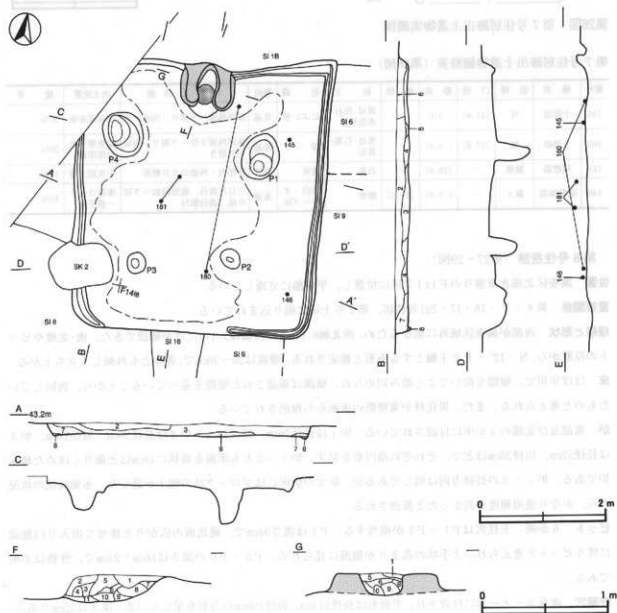
覆土 8層からなり、ロームブロックや焼土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

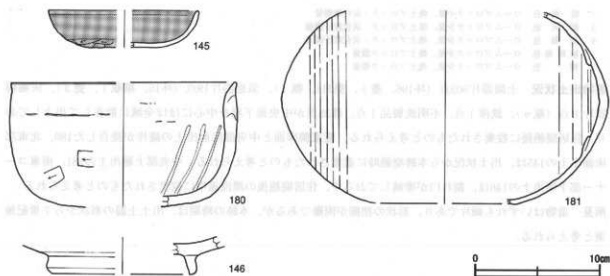
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少許
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子少量

- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
- 5 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 8 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片509点(坏196, 蓋1, 甕311, 瓶1), 須恵器片19点(坏15, 横瓶1, 甕3), 灰釉陶器片1点(瓶カ), 鉄滓1点, 不明鉄製品1点, 礫35点が中央部下層を中心にほぼ全域に散在して出土しており, 住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。竈東側床面と中央部床面出土の破片が接合した180, 北東部床面出土の145は, 出土状況から本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。中央部上層出土の181, 南東コーナー部下層出土の146は, 割れ口が摩滅しておらず, 住居廃絶後の埋没途中に投棄されたものと考えられる。所見 遺物はいずれも細片であり, 形状の把握が困難であるが, 本跡の時期は, 出土土器の形状から7世紀後半と考えられる。



第25図 第7号住居跡実測図



第26図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
145	土師器	環	[11.8]	3.0	-	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り, 内面ナデ	北東部床面	30%
180	土師器	鉢	[17.8]	(9.9)	-	雲母・石英・長石	橙	普通	体部外面下位へラ削り, 内面へラ磨き	東側部・中央部床面	20%
181	須恵器	横板	-	(18.6)	-	石英	黄灰	良好	体部内・外面ロクロ整形	中央部上層	15%
146	灰輪陶器	瓶か	-	(3.0)	[11.0]	緻密	灰白・オリープ灰	普通	三日月高台, 底部回転へラ切り後, 高台貼付	南東コーナー一部下層	10%

第8号住居跡 (第27~29図)

位置 調査区北部北東寄りのF14f7区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第6・7・16・17・291号住居, 第2号土坑に掘り込まれている。

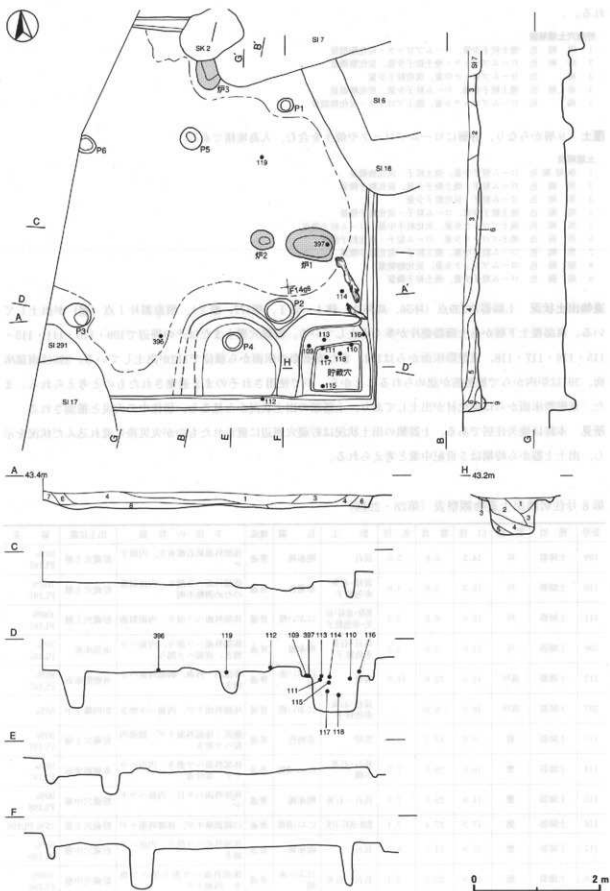
規模と形状 西部が調査区域外に延びるため, 南北軸6.2m, 東西軸は5.1mだけが確認できた。南・北壁やピットの位置から, N-12°-Eを主軸とする方形と推定される。壁高は20~30cmで, 各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦で, 壁際を除いてよく踏み固められ, 壁溝は確認された壁際を巡っていることから, 周回していたものと考えられる。また, 炭化材が東壁際の床面から検出されている。

炉 東部及び北部の3か所に付設されている。炉1は長径76cm, 短径48cm, 炉2は長径36cm, 短径28cm, 炉3は長径52cm, 短径36cmほどで, それぞれ楕円形を呈す。炉1~3とも床面を皿状に10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉1・2の長径方向は同じであるが, 炉3の炉床にはブロック状の焼土が混じり, 赤変硬化の状況から, かなり使用頻度が高かったと推測される。

ピット 6か所。主柱穴はP1~P3が相当する。P4は深さ34cmで, 硬化面の広がりと共に併せて出入り口施設に伴うピットと考えられ, 土手状の高まりが周囲に見られる。P5・P6の深さは16cm・24cmで, 性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され, 平面形は長径114cm, 短径108cmの方形を呈している。深さは32cmであり, 底面は平坦で, 壁は直立して立ち上がる。上面は焼土で覆われた状態で確認され, 第4層には焼失した際に堆積したと考えられる焼土粒子が多量に含まれている。また, 周囲は出入り口部と同様に硬化面の高まりが見ら



第27图 第8号住居跡实测图

れる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 4 赤褐色 焼土粒子多量, ローム粒子少量, 炭化物微量
- 5 褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量

覆土 9層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む, 人為堆積である。

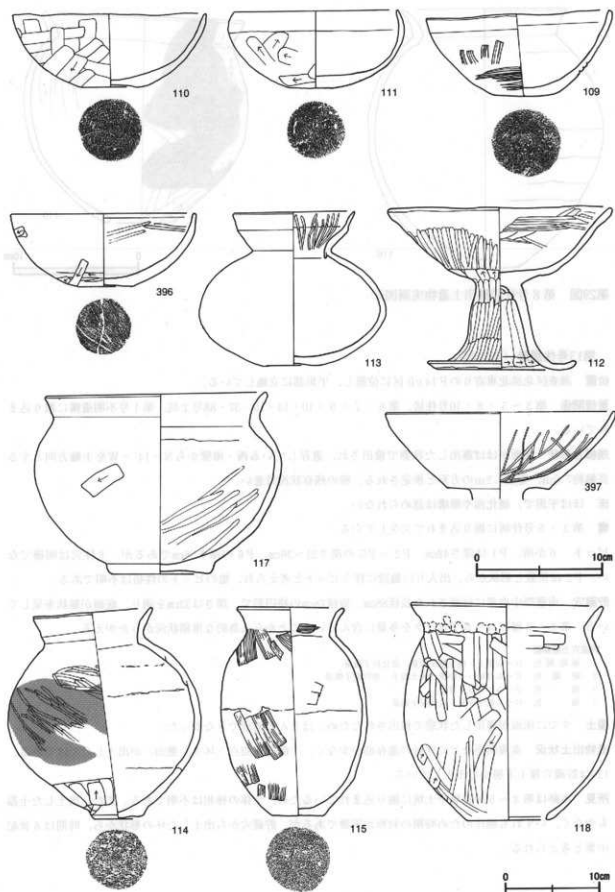
土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 焼土ブロック多量, 炭化粒子中量, ローム粒子微量
- 6 黒褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

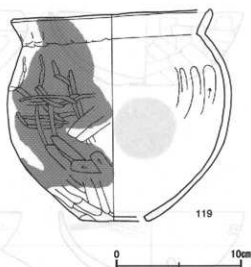
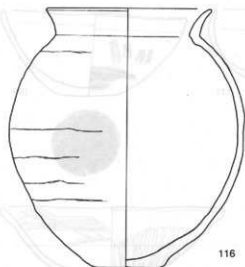
遺物出土状況 土師器片239点(坏56, 高坏2, 鉢1, 壺1, 甕177, 甌2), 須恵器片1点(甕)が出土している。東部覆土下層から土師器破片が多く出土している。貯蔵穴覆土またはその周辺で109・110・111・113・115・116・117・118, 東壁際床面からは114, また南壁際の床面から横位で112が出土している。396は南部床面, 397は炉内からで被熱痕が認められることから, 炉で使用されそのまま遺棄されたものと考えられる。また, 東壁際床面からは炭化材が出土しており, 土器類の出土状況から見ると, 居住中の火災と推測される。所見 本跡は焼失住居である。土器類の出土状況は貯蔵穴周辺に置かれたものが火災後に流れ込んだ状況を示し, 出土土器から時期は5世紀中葉と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表(第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
109	土師器	坏	14.3	6.9	5.0	長石	明赤褐色	普通	体部外面砥石板有り, 内面ナデ	貯蔵穴上層	96% PL197
110	土師器	坏	15.3	5.8	4.6	雲母・石英・赤色粒子	赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り, 内面割落のため調整不明	貯蔵穴上層	100% PL197
111	土師器	坏	12.9	6.2	3.2	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面割落	貯蔵穴上層	100% PL197
396	土師器	坏	14.8	5.8	4.3	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き, 底部ヘラ削り	南部床面	70% PL197
112	土師器	高坏	17.5	12.9	11.8	雲母	にぶい赤褐色	普通	坏部内・外面, 脚部外面ヘラ磨き	南壁際床面	80% PL187
397	土師器	高坏	18.3	(6.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面ナデ, 内面ヘラ磨き	炉内覆土中	50%
113	土師器	甕	9.6	12.3	4.0	雲母	赤褐色	普通	頸部・体部外面ナデ, 頸部内面ヘラ磨き	貯蔵穴上層	90% PL197
114	土師器	甕	16.5	29.5	7.5	長石・石英・小礫	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ, 煤付磨	東壁際床面	98% PL197
115	土師器	甕	14.6	29.1	7.2	長石・石英	明赤褐色	普通	体部外面ハケ目, 内面ヘラナデ	貯蔵穴中層	90% PL198
116	土師器	甕	17.2	27.4	7.4	雲母・長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部模ナデ, 体部外面ナデ	貯蔵穴上層	75% PL198
117	土師器	甕	17.8	14.0	8.2	長石	暗赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	貯蔵穴中層	98% PL199
118	土師器	甌	19.9	23.1	8.4	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き, 内面ナデ	貯蔵穴中層	100% PL198
119	土師器	甌	21.0	22.6	7.3	砂粒	明赤褐色	普通	口縁部指頭状, 体部外面上位ヘラ磨き, 下位ナデ	北東部床面	90% PL198



第28図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

第13号住居跡 (第30図)

位置 調査区北部北東寄りのF14e0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第3～5・6・10号住居、第6・7・9・10・14・19・37・88号土坑、第1号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で検出され、遺存している西・南壁からN-14°-Wを主軸方向とする長軸約7.0m、短軸6.2mの方形と推定される。壁の残存状況は悪い。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

竈 第3～5号住居に掘り込まれて欠失している。

ピット 6か所。P1は深さ42cm、P2～P5の深さ21～36cm、P6の深さ56cmであるが、主柱穴は明確でない。P2は位置と形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられ、他のピットの性格は不明である。

貯蔵穴 南壁際中央部に付設された長径88cm、短径78cmの楕円形で、深さは32cmを測り、底面が皿状を呈している。第2・3層にロームブロックを多量に含んでいることから人為的な堆積状況がうかがえる。

貯蔵穴土層解説

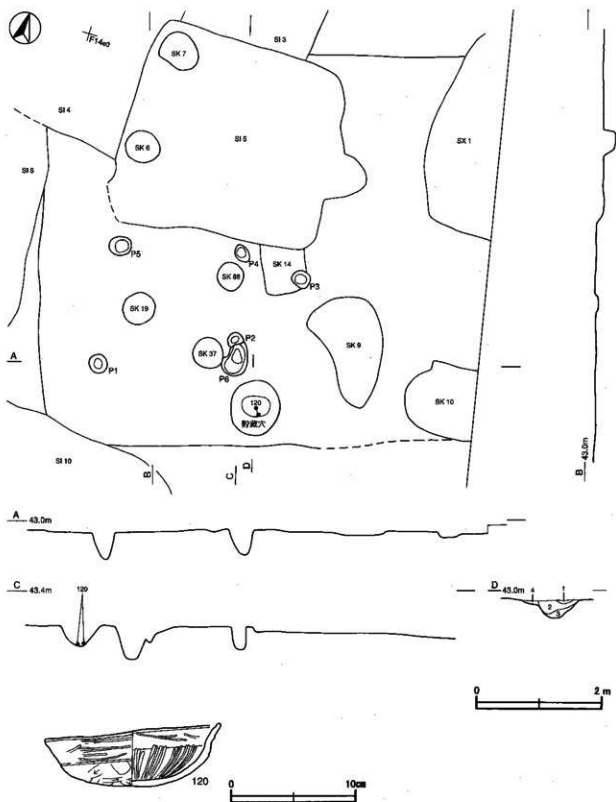
- 1 黒褐色 ローム粒子・土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

覆土 すでに床面が露出した状態で検出されたため、ほとんど確認できなかった。

遺物出土状況 重複関係などで住居の遺存部が少なく、土師器片32点(坏3、甕29)が出土しただけである。

120は貯蔵穴覆土下層から出土している。

所見 本跡は第3～5号住居や土坑に掘り込まれているため、全体の様相は不明である。また、出土した土器も少なく、いずれも細片のため時期の判断が困難であるが、貯蔵穴から出土した坏の形状から、時期は6世紀中葉と考えられる。



第30図 第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
120	土埴器	坏	13.7	5.1	-	砂粒・小礫	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き、口縁部外面ヘラ磨き	貯蔵穴下層	90%

第15号住居跡 (第31～33図)

位置 調査区北部北東寄りのF14h9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第12号土坑を掘り込み、第10号住居、第1号竪立柱建物、第1号方形壁穴遺構、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.0m、短軸6.5mの長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。壁高は44～48cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は東壁を除いて周囲している。

炉 炉1は東壁際中央部やや南部に位置し、長径40cm、短径32cmの楕円形で、床面を皿状に4cmほど掘りくぼめた地床炉である。覆土はブロック状の焼土が多量に混じり、床面が硬く赤変しており、使用頻度の高かったことがうかがわれる。炉2は長径30cm、短径22cmの楕円形である。遺存状況が悪く、覆土は検出されなかった。

炉1土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量

ピット 19か所。主柱穴はP1～P4で、深さは50cm前後である。P5～P7の深さは30cm前後で主柱穴の中間に位置しており、補助的な柱穴と考えられる。P8～P19は深さ30～40cmでいずれも性格は不明である。

貯蔵穴1 南東コーナー部に付設され、平面形は長径90cm、短径78cmの長方形を呈している。深さは38cmを掘り、底面は平坦で、壁は直立している。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴2 貯蔵穴1の西側に付設され、平面形は長径71cm、短径68cmの楕円形を呈している。深さは42cmで、底面が皿状を呈している。

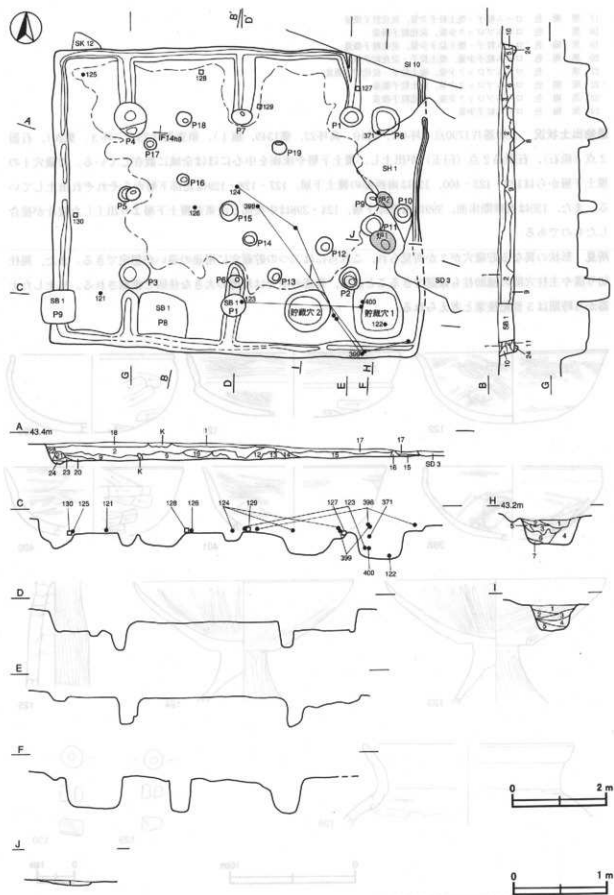
貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

覆土 24層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック中量
- 11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 12 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 13 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 14 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 15 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 16 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量

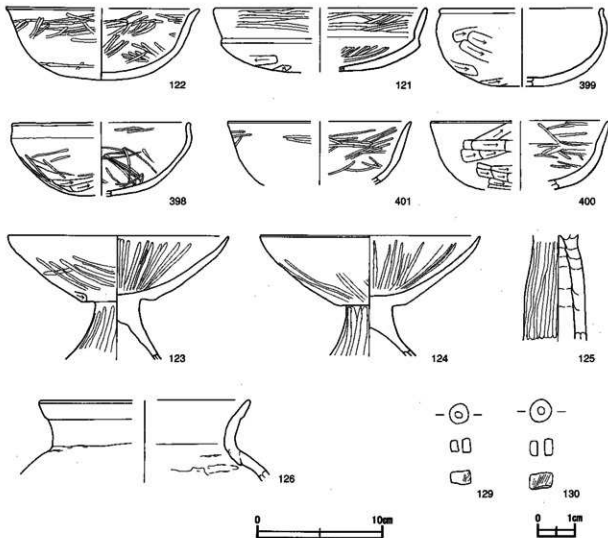


第31图 第15号住居跡实测图

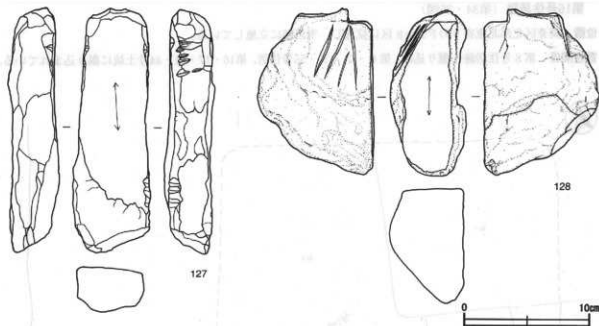
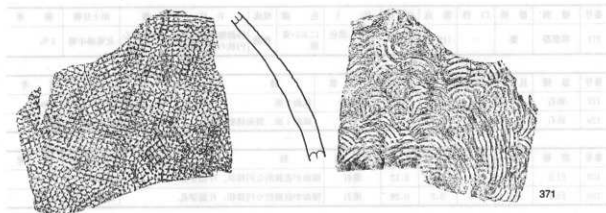
- 17 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 18 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 19 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 20 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 21 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 22 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 23 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 24 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片1790点(坏407, 鉢10, 高坏23, 甕1349, 瓶1), 須恵器片23点(坏3, 甕20), 石器2点(砥石), 石製品2点(白玉)が出土し, 覆土下層や床面を中心にほぼ全域に散在している。貯蔵穴1の覆土下層からは122・123・400, 121は南西部の覆土下層, 127・128・129は北部下層からそれぞれ出土している。また, 130は西壁際床面, 399は南壁際下層, 124・398は中央部と南東部覆土下層より出土した破片が接合したものである。

所見 形状の異なる貯蔵穴が2か所見られ, これらには二つの貯蔵穴に用途の違いが想定できる。また, 間仕切り溝や支柱穴間の補助柱も確認できることから, 集落の中では規模の大きな住居と推測される。出土した土器から時期は5世紀後半と考えられる。



第32図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)



第33図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	種別	器種	口径	口径高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師器	坏	[16.8]	(5.1)	-	雲母・長石・砂粒	赤		普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き、口縁部へラ磨き	南西部下層	25%
122	土師器	坏	[15.2]	5.7	-	石英・砂粒	明赤褐		普通	体部内・外面へラ磨き	貯蔵穴1下層	40%
398	土師器	坏	[14.3]	5.8	-	長石・石英	赤褐		普通	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラ磨き	南壁際下層	30%
399	土師器	碗	[12.8]	6.2	-	長石・石英	明赤褐		普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	南壁際下層	30%
400	土師器	坏	[14.2]	(5.5)	-	長石・石英	明赤褐		普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	貯蔵穴1中層	25%
401	土師器	坏	[14.6]	(5.0)	-	雲母	橙		普通	体部内・外面へラ磨き	南東部壘土中	25%
123	土師器	高坏	17.5	(9.8)	-	雲母・長石・石英・砂粒	明赤褐		普通	坏部内・外面へラ磨き、脚部外面へラ磨き	貯蔵穴1中層	70%
124	土師器	高坏	17.4	(9.5)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐		普通	坏部内・外面へラ磨き、脚部外面へラ磨き	南部下層	50%
125	土師器	高坏	-	(8.4)	-	雲母・長石・砂粒	明赤褐		普通	脚部外面へラ磨き、内面ナデ	北西部床面	20%
126	土師器	壺	[16.6]	(6.5)	-	石英・砂粒	橙		普通	体部内・外面ナデ、口縁部横ナデ	中央部床面	10%

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
371	須恵器	罍	-	(12.0)	-	長石・黒色 粒子	にぶい黄 盤	普通 外面格子状の印き、内面同心 円状の当て具痕	北東部中層	5%

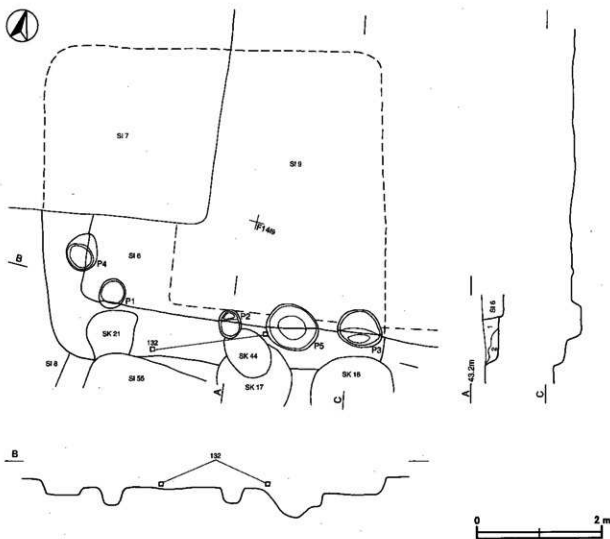
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
127	紙石	19.4	6.2	3.9	670	砂岩	紙面1面	北部下層	PL266
128	紙石	13.2	9.2	6.0	790	砂岩	紙面1面、側面研磨痕有り	北壁際下層	PL267

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
129	白玉	0.5	0.4	0.2	0.12	滑石	側面が直線的な円筒状、片面穿孔	北部床面	PL265
130	白玉	0.6	0.5	0.2	0.20	滑石	側面が直線的な円筒状、片面穿孔	北西部床面	PL265

第16号住居跡 (第34・35図)

位置 調査区北部北東寄りのF14e8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第8号住居跡を掘り込み、第6・7・9・55号住居、第16・17・21・44号土坑に掘り込まれている。



第34図 第16号住居跡実測図

規模と形状 重複のため遺存部が少なく、平面形状は明確ではないが、南・西部の壁からN-15°-Wを主軸方向とする長軸約5.0mの方形と推定される。西壁の高さは8~12cmで、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

竈 第6・9号住居跡に掘り込まれたために、遺存していない。

ピット 5か所。P1は深さは26cmで主柱穴の一部と考えられるが、他は重複などのため確認できなかった。

P2は深さ24cmで、南壁際の中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3~P5の性格は不明である。

覆土 2層のみ確認された。遺存部が少なく、堆積状況は判然としなない。

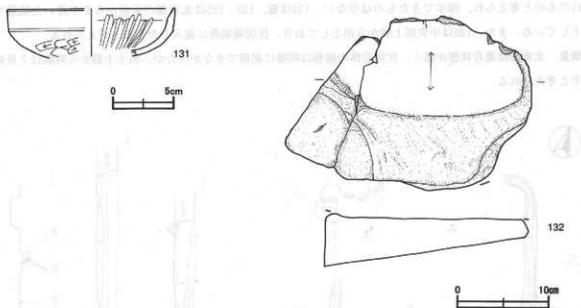
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片67点(坏37, 甕30)、石器1点(砥石)が出土している。重複関係から出土土器は少なく、また、細片のため図示できたものも少ない。132は南壁際の下層からで、被熱痕が見られることから、竈の補強材として転用され遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は重複関係により、住居全体の形状を把握することができなかったが、6世紀後半と比定される第6号住居に掘り込まれていることや土師器片の形状から、時期は6世紀前葉と考えられる。



第35図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	器種	口径	口径	底径	断面	土色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
131	土師器	坏	[13.6]	(3.9)	-	砂粒	にぶい	地	普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	東部覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
132	砥石	(26.8)	(18.9)	(5.5)	(2800)	砂岩	砥面1面	南壁際下層	

第20号住居跡 (第36・37図)

位置 調査区北部北東寄りのG14 a7 区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第22号住居跡を掘り込み、第21号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁から、N-17°-Eを主軸方向とする長軸約4.0m、短軸3.2mの長方形と推定される。壁高は17~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと考えられる。

竈 遺存状態が悪く、竈の構築材と思われる粘土や砂粒が確認されただけである。

ピット 1か所。深さが28cmで、貯蔵穴の可能性があるが断定できない。

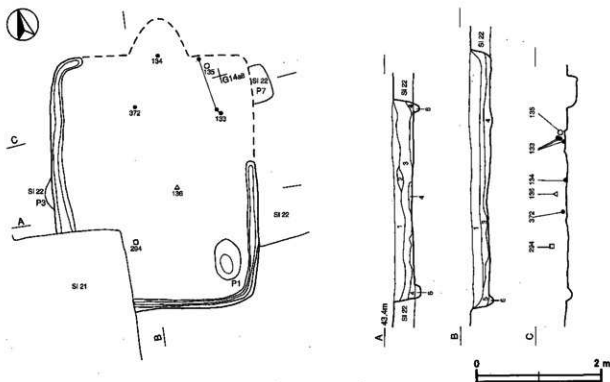
覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

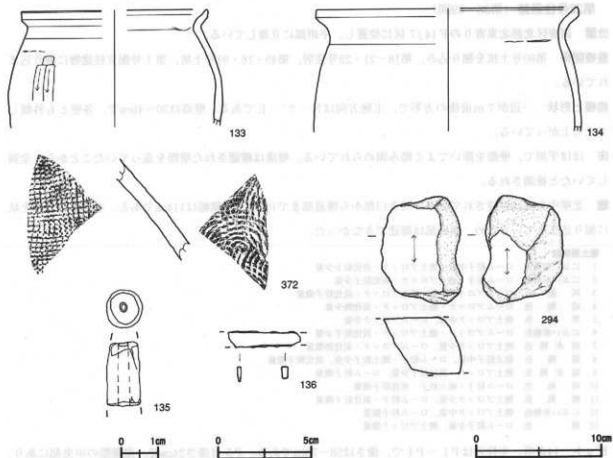
- 1 暗褐色 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片847点(坏295, 鉢1, 高坏2, 甕549), 須恵器片13点(坏6, 甕7), 土製品1点(管状土鍾), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(刀子)が出土している。これらの大半は細片で住居廃絶後に投棄されたものと考えられ、図示できたものは少ない。134は竈, 133・135は北東部の床面からやや浮いた状態で出土している。また, 136は中央部上層から出土しており、住居廃絶後に混入したものと考えられる。

所見 北東部は遺存状態が悪く、住居全体の様相は明確に把握できなかったが、出土土器から時期は7世紀前半と考えられる。



第36図 第20号住居跡実測図



第37図 第20号住居跡遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
133	土師器	甕	[14.8]	(9.4)	-	長石・砂粒	にぶい橙	普通	体部外面へう崩り, 内面・口縁部横ナデ	北東部下層	10%
134	土師器	甕	[20.6]	(9.9)	-	長石・砂粒・小煤	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ	北部床面	10%
372	須恵器	甕	-	(8.1)	-	長石・黒色粒状	黄灰	普通	体部外面格子状の叩き, 内面同心円状の當て貫痕	北部床面	5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
135	管状土埴	(1.7)	1.0	0.3	(1.66)	土	ナデ, 灰黄褐色	北東部下層	PL259

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
294	磁石	(8.5)	(6.4)	4.6	(342)	砂岩	紙面2面, 両側欠損	南部上層	PL259

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
136	刀子	(3.8)	0.8	0.3	(2.68)	鉄	刃部片, 切先・茎尻部欠損	中央部上層	PL259

第22号住居跡 (第38・39図)

位置 調査区北部北東寄りのF14j7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第90号土坑を掘り込み、第18～21・23号住居、第49・76・91号土坑、第1号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が7m前後の方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は30～46cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていたことから、全周していたと推測される。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで106cm、袖部幅は114cmである。北部を第49号土坑に掘り込まれているため、煙道部は確認できなかった。

竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 灰褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 6 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
- 8 暗褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 12 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
- 13 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量

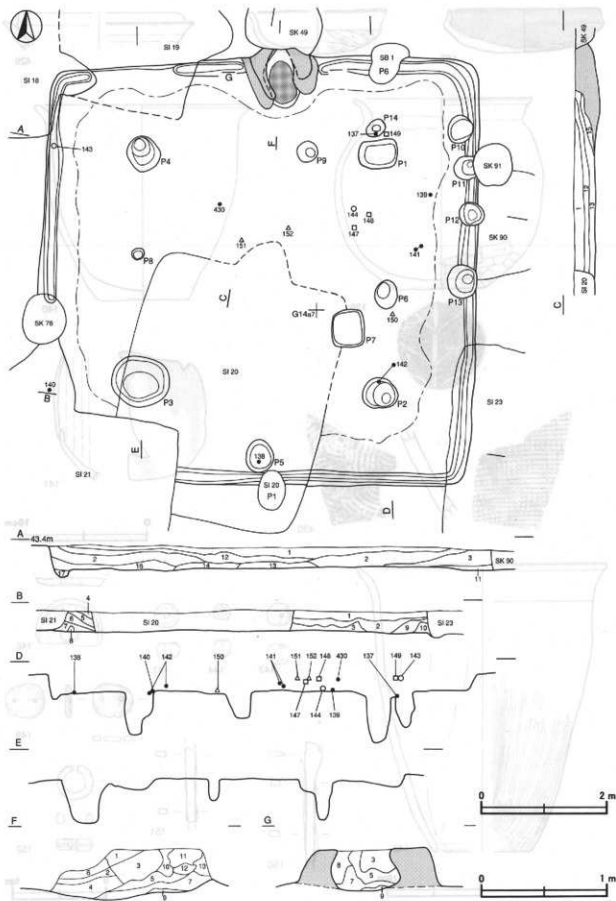
ピット 14か所。主柱穴はP1～P4で、深さは58～70cmである。P5は深さ24cmで、南壁際の中央部にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P8は深さ32cm・36cmで、いずれも主柱穴の中間に位置しており、補助柱穴と考えられる。P10～P13は深さ15～28cmで、壁柱穴とも考えられるが、他の壁部分には検出されていない。P14は深さ50cmで、支柱穴と考えられる。P7は深さ16cmで、性格は不明である。

覆土 17層からなり、ロームブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

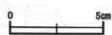
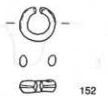
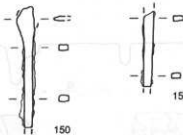
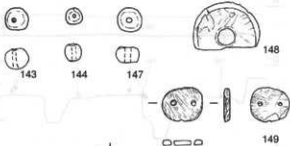
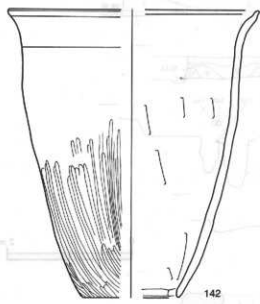
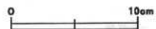
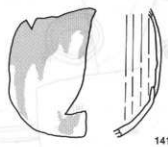
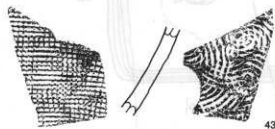
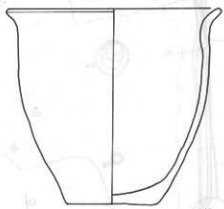
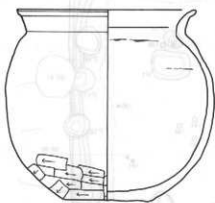
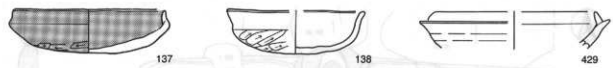
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 7 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 8 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 9 黒色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土・砂粒少量
- 12 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 13 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 14 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 15 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 16 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 17 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片2981点(環1080, 鉢1, 高坏7, 甕1952, 甗11), 須恵器片30点(坏18, 甕11, フラスコ形瓶1), 土製品2点(土玉), 石製品3点(白玉, 紡錘車, 双孔円板), 鉄製品3点(鐵2, 耳環)が東部の床面と覆土・下層を中心に出土している。床面からは139・142, 152・430は中央部上層から出土している。また, 141は東部下層から出土している。外面には自然釉が見られる。429は南東部の下層からで、口縁部の形状などからTK-43型と思われる。



第38图 第22号住居跡実測図



第39图 第22号住居跡出土物実測图

所見 本跡は南部が第20号住居に掘り込まれ、住居全体の形状は把握できなかったが、規模は7m前後であると推定され、集落の中では大型の住居である。出土土器から、時期は7世紀前葉と考えられる。

第22号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
137	土師器	坏	12.0	3.5	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	P14覆土中	60%
138	土師器	坏	[10.8]	3.5	-	砂粒	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	P5覆土中	40%
429	須恵器	坏	[12.8]	(2.9)	-	長石・砂粒	灰	普通	ロクロ整形	南東部下層	10%
141	須恵器	フラスコ形瓶	-	(10.2)	-	長石・砂粒	黄灰	普通	ロクロ整形、肩部自然輪	東部下層	5%
139	土師器	甕	13.9	15.3	7.0	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下位へラ削り、内面ナデ、底部木炭痕	東部床面	100% PL200
140	土師器	甕	16.8	15.7	7.0	雲母・長石・石英・角礫	明赤褐	普通	体部内・外面ナデ	南西部床面	95% PL199
430	須恵器	甕	-	(7.8)	-	長石	灰	普通	外面格子状の叩き、内面同心円状の当て具痕	中央部上層	5%
142	土師器	瓶	[26.2]	30.1	[10.2]	雲母・長石・石英・小礫	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ磨き、内面へラナデ	P2覆土中	60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
143	土玉	1.3	1.2	1.3	1.76	土	ナデ、片面穿孔	西壁部上層	PL258
144	土玉	0.9	0.9	0.9	0.74	土	ナデ、片面穿孔	東部床面	PL258

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
147	白玉	1.3	1.3	0.8	2.32	滑石	側面が直線的な円筒状、片面穿孔	東部中層	PL265

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
148	紡錘車	3.6	(0.5)	1.1	(4.4)	粘板岩	上部欠損、下面に草縄痕有り	東部上層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
149	双孔円板	2.1	0.3	0.3	2.0	滑石	両面平坦、側位の研磨痕有り	北東部上層	PL264

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
150	鉄	(6.3)	(1.0)	0.3	(4.58)	鉄	腰部・基部欠損	東部下層	
151	鉄	4.0	0.6	0.3	(2.24)	鉄	刃部の破片、刃先部欠損	中央部上層	PL258

番号	器種	径	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
152	耳環	1.7	0.7	0.4	5.8	銅	鍍金、表面は緑錆のため緑青色	中央部上層	PL283

第24号住居跡 (第40・41図)

位置 調査区北部北東寄りのF15j1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第5号ピット群のP4に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.8m、短軸約3.7mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は6~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 中央部に硬化面は認められるが、周囲は軟弱である。壁溝は南壁際の一部にだけ確認できた。

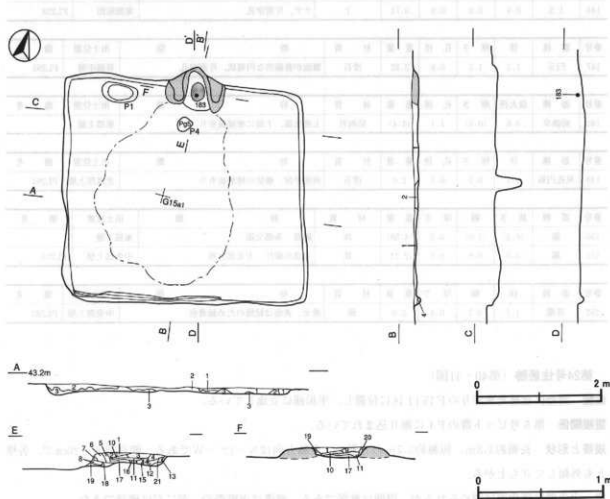
竈 北壁の中央部に付設されており、焚口部から煙道部まで約70cm、袖部幅は約92cmで、壁外への掘り込みは

約28cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中、第3層が相当する。袖部は、北壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、火熱を受けてわずかに赤変している。また、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 10 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 11 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 13 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 14 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 15 暗赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・砂粒微量
- 16 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 17 赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子微量
- 18 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量
- 19 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 20 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 21 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

ピット 1か所。深さは25cmで、北壁際西寄りに位置し、性格は不明である。



第40図 第24号住居跡実測図

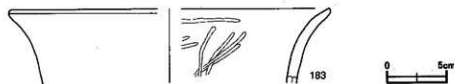
環土 4層からなる。ロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を呈することから、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片113点（坏3，甕105，瓶5），須恵器片2点（坏）が、甕とその周辺部中層を中心に散在した状態で出土している。いずれも細片であり、住居廃絶に伴う埋め戻しの際に混入したものと投棄されたものが多いと考えられる。183は竈火床部から出土しており、本跡に伴うものである。

所見 遺物はいずれも細片のため、時期の特定は困難であるが、出土した土器がすべて古墳時代後期のものであることから、本跡の時期は古墳時代後期の可能性が考えられる。



第41図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	類別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
183	土師器	瓶	[26.6]	(6.2)	-	紫緑・長石	灰褐色	普通	体部内面へ磨き	竈火床部	5%

第27号住居跡（第42・43図）

位置 調査区北部北東寄りのG14c9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第30号住居跡、第48号土坑を掘り込み、第26・28・29号住居に掘り込まれている。

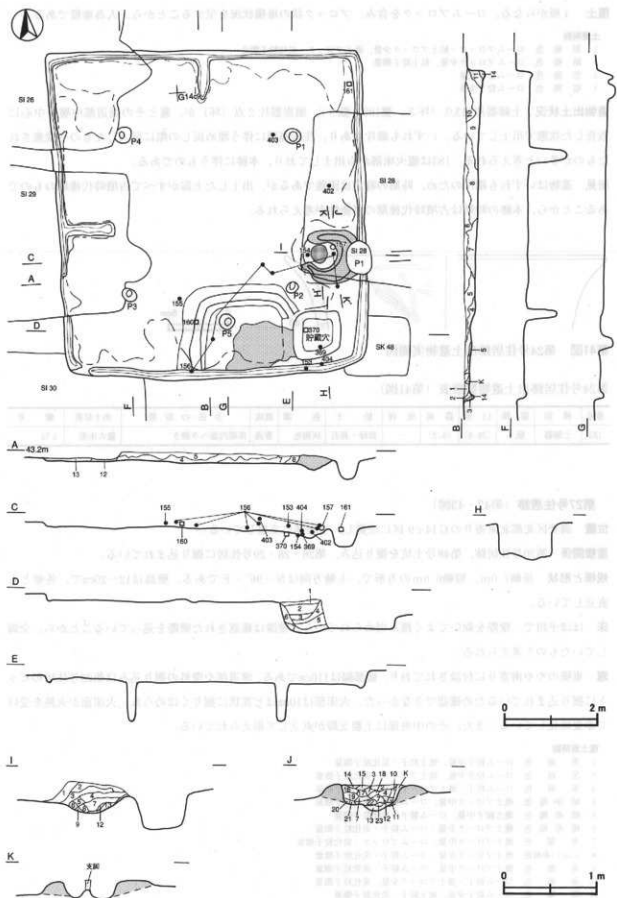
規模と形状 長軸7.0m、短軸6.6mの方形で、主軸方向はN-96°-Eである。壁高は12~20cmで、各壁とも直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと考えられる。

竈 東壁のやや南寄りに付設されており、袖部幅は110cmである。煙道部や壁外の掘り込みは第28号住居のピットに掘り込まれているため確認できなかった。火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また、その中央部に土製支脚が直立して据えられている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック少量・ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 8 濃い赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 10 赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 13 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第42図 第27号住居跡実測図

- 14 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
 15 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
 16 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
 17 赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック多量、炭化粒子微量
 18 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量
 19 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
 20 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
 21 極暗赤褐色 焼土ブロック中量
 22 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量
 23 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは65～80cmである。P5は深さ30cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられ、弧状の高まりが周囲に見られる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、平面形は一辺が80cmの方形で、深さは50cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 6 黒褐色 ローム粒子少量
 7 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 14層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

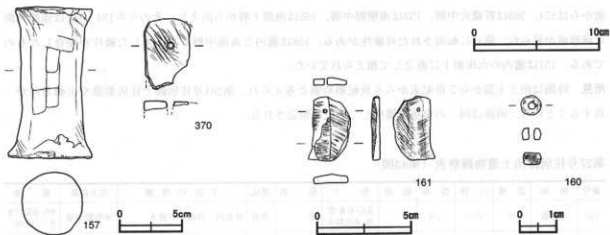
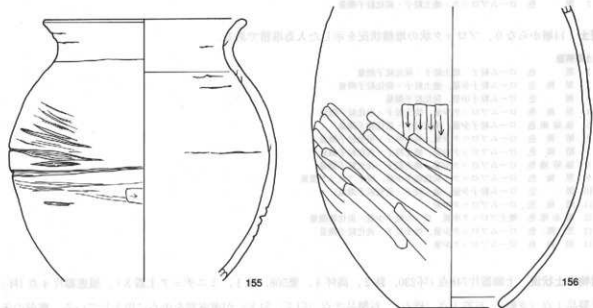
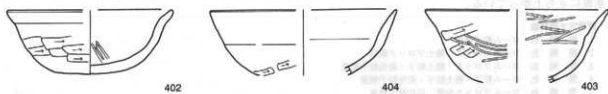
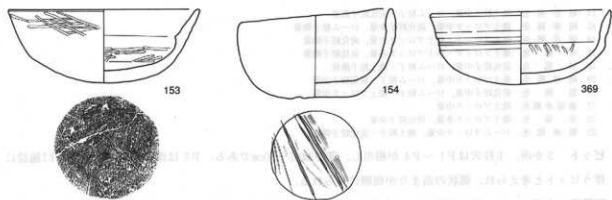
- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 5 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
 8 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
 10 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 11 暗褐色 ロームブロック中量
 12 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
 13 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 14 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片748点(坏230, 鉢2, 高坏4, 甕508, 甕1, ミニチュア土器3), 須恵器片4点(坏)土製品1点(支脚), 石器1点(砥石), 石製品2点(白玉, 勾玉)が南東部を中心に出土している。竈前の床面からは154, 369は貯蔵穴中層, 153は南壁際中層, 155は南部下層から出土し, そのうち154・155は体部外面に研磨痕が見られ, 砥石に転用された可能性がある。156は竈内と南部中層より出土した破片が接合したものである。157は竈内の火床面上に直立して据えられていた。

所見 時期は出土土器から5世紀末から6世紀初め頃と考えられ, 第281号住居跡と住居形態や主軸方向が一致することから, 両跡は同一の集落を構成していたと想定される。

第27号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
153	土師器	坏	15.0	5.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤	普通	体部内・外面ヘラ磨き	南壁際中層	90% 底部ヘラ磨き [X] PL199
369	土師器	坏	14.3	5.9	-	長石・石英	帯	普通	体部外面ナテ, 内面ヘラ磨き, 口縁部木口杖工具によるナテ	貯蔵穴中層	90% PL199



第43図 第27号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
402	土師器	坏	[13.0]	5.1	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	東部下層	20%
403	土師器	坏	[14.4]	(5.8)	-	長石	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き	北東部上層	25%
404	土師器	坏	[15.0]	(5.2)	-	雲母	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面刮磨の為調整不明	南壁際床面	20%
154	土師器	椀	11.9	6.9	7.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナデ、底部V字状の研磨痕有り	竈前床面	100% PL199
155	土師器	甕	15.9	(20.9)	-	長石・石英・小礫	にぶい橙	普通	体部内・外面ナデ、体部中に研磨痕有り	南部下層	70% PL200
156	土師器	瓶	-	(24.0)	8.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ナデ	竈内下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
157	支脚	12.1	6.7	5.0	481	長石・石英	円柱状、ナデ、滑順度、被熱痕有り	竈内火床面	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
160	白玉	0.5	0.3	0.2	0.14	滑石	側面が直線的な円筒状、片面穿孔	南部中層	PL265
161	勾玉	2.2	0.45	0.15	5.2	滑石	表面縦・斜位の研磨、片面穿孔	東壁際床面	PL264

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
370	砥石	(5.6)	(3.6)	(0.7)	(16.2)	凝灰岩	紙面1面、その他は破断面、側面に研磨痕有り	貯蔵穴中層	

第30号住居跡(第44・45図)

位置 調査区北部北東寄りのG14d8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第27・31号住居、第93～95・97号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺が約5.4mの方形で、主軸はN-1°-Eである。壁高は8～16cmで、各壁ともほぼ直角に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと考えられる。

炉 北部寄りに位置し、径約40cmの円形で、床面を10cmほど掘りくぼめ、火床部は皿状を呈している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは60～72cmである。P5は深さ62cmであるが、性格は不明である。

貯蔵穴 第97号土坑に掘り込まれているため全体の様相は明確に把握できないが、南東コーナー部に付設され、平面形は径約60cmの円形と推定される。深さは55cmで、遺存している底面は平坦で壁は直角に立ち上がる。

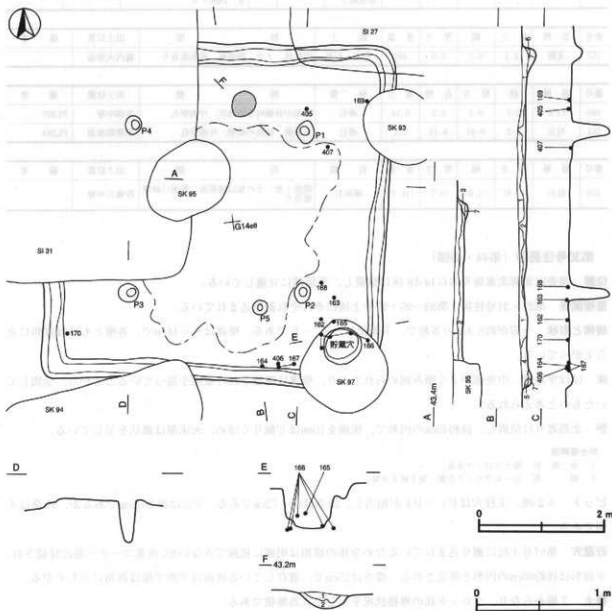
覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

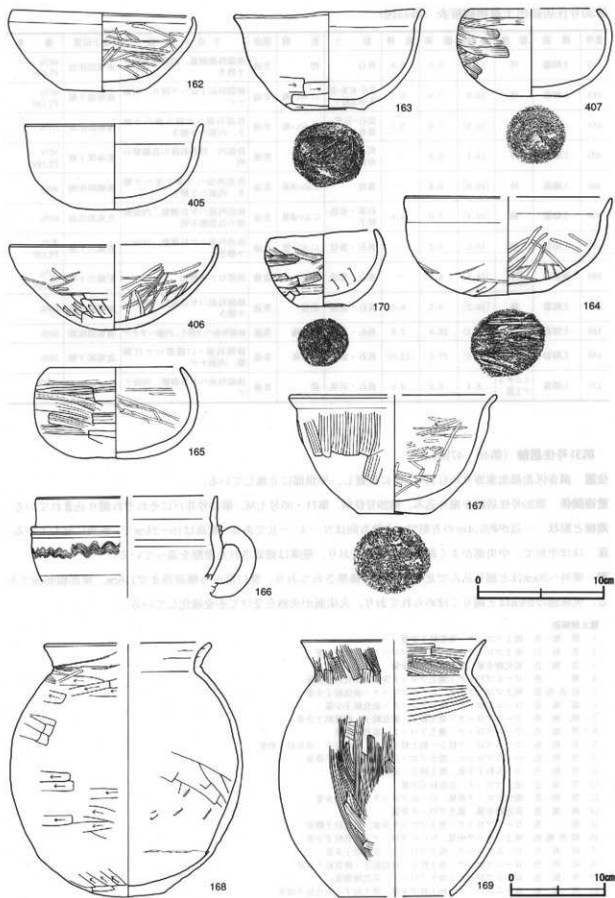
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片471点(坏74, 碗9, 甕387, ミニチュア土器1), 須恵器片14点(坏3, 甕8, 無蓋高坏カ3)が出土している。供膳具類が貯蔵穴周辺からまとまって出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。163は南東部下層からほぼ完形で出土している。165・166は貯蔵穴下層, 162・164・167・168は貯蔵穴周辺の床面, 169・405は北東部下層から出土し, 169は破砕された状態で出土している。164は体部外面に研磨痕が確認できることから, 砥石に転用された可能性がある。170は西壁際床面から完形の状態で出土し, 406・407は南壁際と北東部のそれぞれ床面から出土している。

所見 時期は出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第44図 第30号住居跡実測図



第45图 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の管壁	出土位置	備考
162	土師器	坏	14.5	6.2	5.8	長石	橙	普通	体部外面割落, 内面多方向ヘラ磨き	南東部床面	80% PL199
163	土師器	坏	14.9	7.9	5.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下位ヘラ削り, 内面ナデ	南東部下層	95% PL199
164	土師器	坏	[16.5]	7.8	5.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き, 内面ヘラ磨き	南壁際床面	70%
405	土師器	坏	14.1	6.8	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内・外面割落の為調整不明	北東部下層	90% PL199
406	土師器	坏	[16.8]	6.8	-	雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き, 内面ヘラ磨き	南壁際床面	40%
407	土師器	輪	[10.1]	7.0	4.6	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面ハケ目調整, 内面割落の為調整不明	北東部床面	60%
165	土師器	輪	10.5	7.2	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調整, 内面ヘラ磨き	貯蔵穴下層	95% PL199
166	須恵器	無蓋高坏カ	[14.4]	(8.1)	-	長石・雲母	褐灰	普通	体部クロコ彫形	貯蔵穴下層	30% PL200
167	土師器	鉢	[16.2]	9.5	6.0	長石・雲母	赤褐	普通	体部外面ハケ目調整, 内面ヘラ磨き	南壁際床面	60%
168	土師器	甕	[17.2]	26.9	7.6	長石・石英	灰黄褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	南東部床面	50%
169	土師器	甕	[19.5]	27.1	[12.0]	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面・口縁部ハケ目調整, 内面ナデ	北東部下層	35%
170	土師器	ミニチュア土器	8.4	6.0	4.0	長石・石英	橙	普通	体部外面ハケ目調整, 内面ナデ	西壁際床面	100% PL199

第31号住居跡 (第46・47図)

位置 調査区北部北東寄りのG14d7区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第30号住居跡を掘り込み, 第29号住居, 第71・95号土坑, 第13号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺が約5.4mの方形で, 主軸方向はN-4°-Eである。壁高は19~24cmで, 直角に立ち上がる。

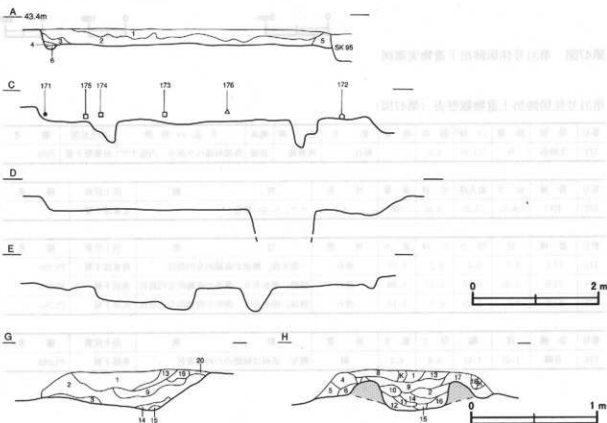
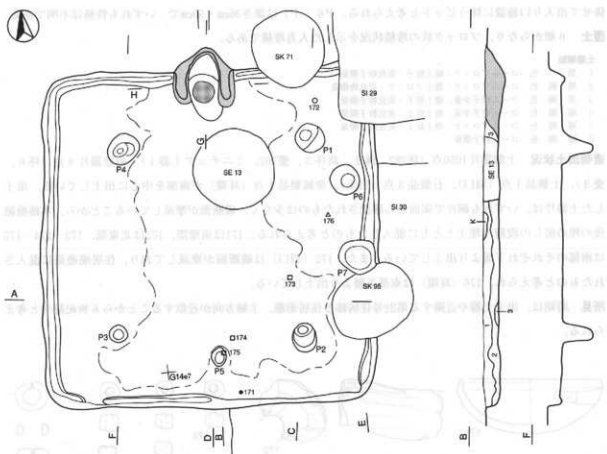
床 ほほ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 壁外へ20cmほど掘り込んで北壁中央部に構築されており, 焚口部から煙道部まで116cm, 袖部幅95cmである。火床部は20cmほど掘りくぼめられており, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 炭化物中量, 焼土ブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 9 黒褐色 ロームブロック粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 11 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量
- 13 黒褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック・炭化物少量
- 14 黒褐色 炭化物中量, 焼土ブロック少量
- 15 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 16 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 17 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 18 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
- 19 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 20 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは44~53cmである。P5は深さ10cmで硬化面の広がり



第46图 第31号住居迹实测图

併せて出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ36cm・50cmで、いずれも性格は不明である。

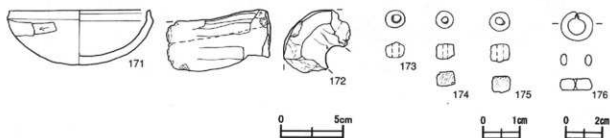
覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片1050点(坏282, 鉢2, 高坏3, 甕762, ミニチュア土器1), 須恵器片9点(坏6, 甕3), 土製品1点(羽口), 石製品3点(白玉), 金属製品1点(耳環)が南部を中心に出土している。出土した土器片は、いずれも細片で床面から確認されたものは少なく、破断面が摩滅していることから、本跡廃絶後の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。171は南壁際, 172は北東部, 173・174・175は南部のそれぞれ下層より出土している。また, 172(羽口)は破断面が摩滅しており, 住居廃絶後に混入されたものと考えられ, 176(耳環)は東部下層より出土している。

所見 時期は, 出土土器や近隣する第22号住居跡と住居形態, 主軸方向が近似することから6世紀後半と考えられる。



第47図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
171	土師器	坏	[11.0]	4.3	-	長石	灰黄褐	普通	体部外面へう割り, 内面ナデ	南壁階下層	70%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
172	羽口	(8.3)	[7.2]	[3.4]	(108)	土	ナデ, にぶい橙色	北東部下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
173	白玉	0.5	0.4	0.2	0.07	滑石	一部欠損, 側面が直線的な円筒状	南東部下層	PL265
174	白玉	0.45	0.35	0.15	0.09	滑石	側面に擦痕有り, 側面が直線的な円筒状	南部下層	PL265
175	白玉	0.5	0.45	0.2	0.16	滑石	側面に擦痕有り, 側面が直線的な円筒状	南部下層	PL265

番号	器種	径	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
176	耳環	1.67	1.51	0.6	4.3	銅	鍍金, 表面は緑錆のための緑青色	東部下層	PL283

第32号住居跡 (第48・49図)

位置 調査区北部北東寄りのG14c3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第36・40・41・97号住居、第301～304・312号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 本跡の大部分が第36・40・41号住居に掘り込まれているため、東西軸約4.0m、南北軸約6.0mが確認されただけであり、北壁とピットの位置からN-10°-Eを主軸とする方形と推定される。壁の立ち上がりは不明である。

床 はほぼ平坦である。硬化面や壁溝は確認されなかった。

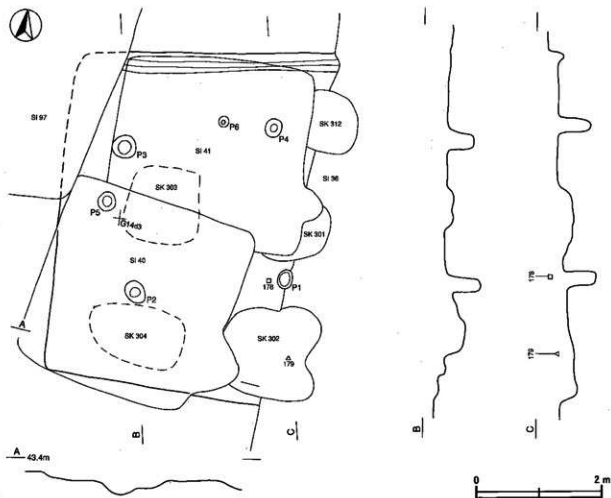
竈 第36号住居に掘り込まれているため遺存していない。

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは42～55cmである。P5は深さ40cmで、西壁の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ20cmで、性格は不明である。

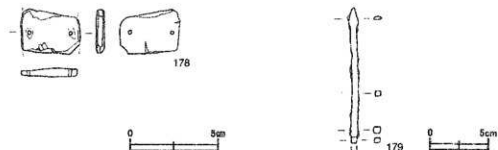
覆土 遺存状態が悪く、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片160点(坏49, 鉢1, 甕110), 須恵器片11点(坏6, 蓋1, 甕4), 石製品1点(双孔円板)が出土している。これらの大部分は細片であり、図示できたものは少ない。178は中央部中層, 179は南東部中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は第40・41号住居跡や土坑に掘り込まれているため住居全体の様相は不明である。出土した土器はいずれも細片のため、時期の判断が困難であるが、出土土器と重複関係から6世紀前半と考えられる。



第48図 第32号住居跡実測図



第49図 第32号住居跡出土遺物実測図

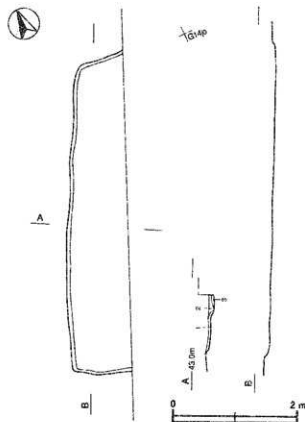
第32号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
178	双孔円板	3.3	0.5	0.2	(6.9)	滑石	片面穿孔、両面斜位の積層板	中央部中層	PL264

番号	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	材質	特徴	出土位置	備考
179	簞	(11.2)	0.6	0.0	11.6	鉄	鋸前式長距離カ	南東部中層	

第35号住居跡 (第50図)

位置 調査区北部北東寄りのG14J9区に位置し、平坦部に立地している。



第50図 第35号住居跡実測図

規模と形状 西壁と遺存している北・南壁の一部からN-26°-Eを主軸とする方形と推定され、南北軸約5.0m、東西軸は約1.0mだけが確認できた。壁高は6~8cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 はほぼ平坦である。硬化面や澄溝は確認されなかった。

竈・炉 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 調査区域外に位置すると考えられる。

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片4点(坏)、須恵器片1点(坏)が出上したただけである。

所見 時期は土器が細片のための断定できないが、住居の規模から想定すると古墳時代以降と考えられる。

第36号住居跡 (第51・52図)

位置 調査区北北東寄りのG14c4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第32号住居跡を掘り込み、第37・39号住居、第4号掘立柱建物、第78・301・302・308・312・340号土坑、第4・5号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸9.2m、短軸8.8mの方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は14~21cmであり、各壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 北壁の中央部に位置していると考えられるが、第4・5号井戸に掘り込まれているため、遺存状態が悪く、火床面と袖部の一部が検出されただけである。

ピット 11か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは65~75cmである。P5・P6の深さは47cm・53cmで、南壁の中央部に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7~P11は深さ10~20cmで、性格は不明である。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片1214点(坏339, 高坏8, 壺2, 甕863, 甕2), 須恵器片49点(坏37, 甕10, 壺2), 土製品1点(球状土鏝), 石製品1点(砥石)が出土しているが、ほとんどが細片で図示できたものは少ない。細片の大部分は破断面が摩滅し、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。184は南部中層, 185は東部中層, 270・292は中央部中層・下層から出土しており, 292は埋土とともに混入したものとと思われる。また, 石製模造品の原料と思われる滑石の原石も多く出土している。

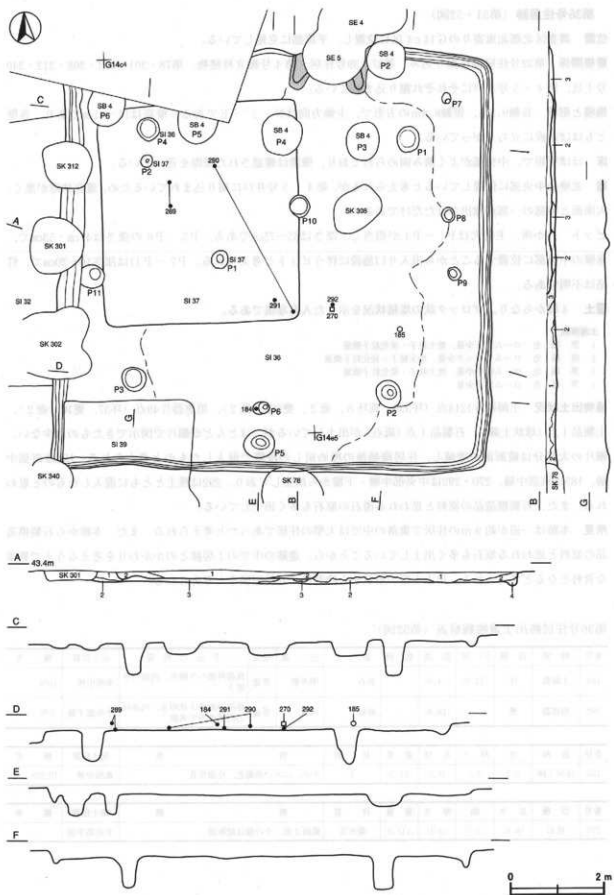
所見 本跡は一辺が約9mの住居で集落の中では大型の住居であったと考えられる。また, 本跡から石製模造品の原料と思われる原石も多く出土していることから, 遺跡の中での工房跡とのかかわりを考えるうえで貴重な資料となると考えられる。出土土器の形状から時期は, 6世紀後半と考えられる。

第36号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

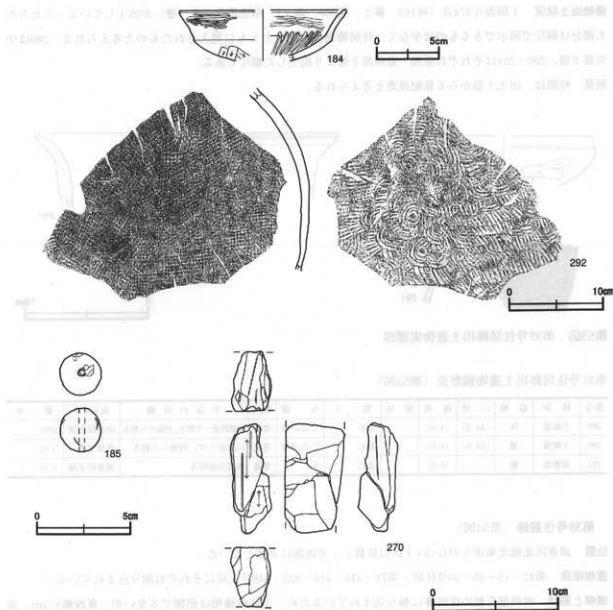
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
184	土師器	坏	[13.2]	(4.0)	-	長石	明赤褐	普通 体部外面へラ削り、内面へラ磨き	南部中層	15%
292	須恵器	甕	-	(18.8)	-	砂粒	灰黄	普通 体部外面格子状叩き、内面同心円状の当て具痕	中央部下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	備考	出土位置	備考
185	球状土鏝	2.3	2.2	0.3	(11.3)	土	ナデ、にぶい赤褐色、片面穿孔		東部中層	PL258

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考	出土位置	備考
270	砥石	(8.6)	(4.7)	(3.2)	(142.3)	凝灰岩	紙面2面、その他は破断面		中央部中層	



第51图 第36·37号住居跡実測図



第52図 第36号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡 (第51・53図)

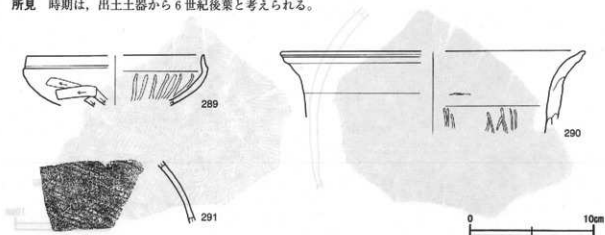
位置 調査区北部北東寄りのG14c4区に位置し、平坦部に立地している。
重複関係 第36号住居跡を掘り込み、第4号掘立柱建物に掘り込まれている。
規模と形状 遺物の出土状況からN-10°-Eを主軸とする南北軸3.3m、東西軸3.0mの長方形と推定される。壁高は8~12cmで、立ち上がり状況は判然としない。
床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は検出されなかった。
ピット 2か所。P1・P2は深さ11cm・12cmで、性格は不明である。主柱穴は検出されなかった。
覆土 2層のみ確認された。遺存部が少なく堆積状況は判然としない。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片474点(坏162, 鉢2, 甕309, 瓶1), 須恵器片2点(甕)が出土している。これらの大部分は細片で図示できるものは少なく, 住居廃絶後に埋土とともに混入されたものと考えられる。289は中央部下層, 290・291はそれぞれ東部・東南部下層より出土した細片である。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第53図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
289	土師器	坏	[14.2]	(4.0)	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り, 内面へラ磨き	中央部下層	15%
290	土師器	甕	[24.6]	(6.6)	-	長石	にぶい赤黒	普通	口縁部ナデ, 内面へラ磨き	東部下層	5%
291	須恵器	甕	-	(5.0)	-	長石	灰	普通	体部外面叩き	南東部下層	5%

第38号住居跡 (第54図)

位置 調査区北部北東寄りのG14e4区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第42・45・46・50号住居, 第78・318・319・322・348号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南西部を他の住居跡に掘り込まれているため, 全体の様相は把握できないが, 東西軸4.5m, 南北軸は4.8mだけが確認され, N-11°-Wを主軸とする方形と推定される。壁高は4~10cmと低く, 立ち上がり状況は判然としない。

床 ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。壁溝は検出されなかった。

炉 中央部に付設されており, 径約40cmほどの円形を呈し, 床面を8cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。

第1層を除いて各層にブロック状の焼土が混じり, 炉床全体に赤変硬化した状態が認められることから, 使用頻度がかなり高かったものと推測できる。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック微量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは62~74cmである。P5の深さは27cmで, 南壁中央に位置し, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7の深さは66cm・32cmで, 性格は不明である。

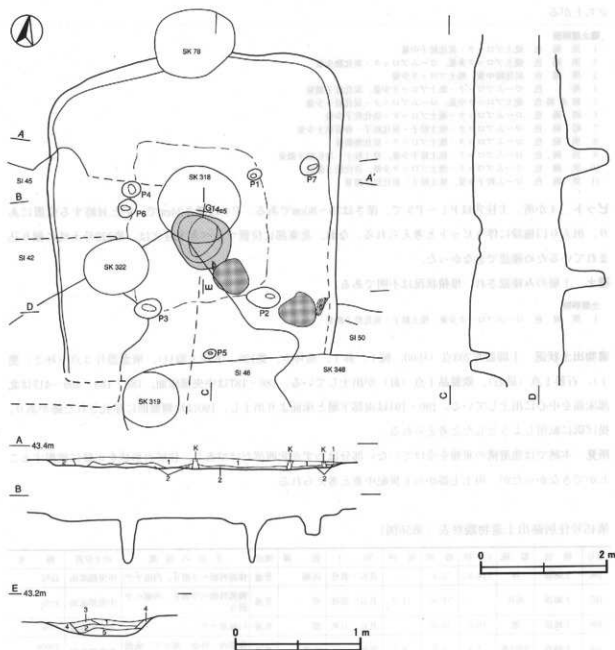
覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。 (95) (20) (21) 植生調査結果

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 重複関係によって住居の遺存部は少なく、土師器片24点(坏13, 甕11)が出土しただけである。出土した土器はいずれも細片で図示できたものはない。また、焼土塊が南東部の床面より出土している。
 跡見 本跡は南部が第42号住居などに掘り込まれているため住居の形状は不明である。また、出土した土器が少なく、南東部床面から焼土塊が出土していることから、住居廃絶に伴った焼失住居と考えられる。出土土器や重複関係から、時期は古墳時代前期から中期と考えられる。



第54図 第38号住居跡実測図

第45号住居跡 (第55・56図)

位置 調査区北部北東寄りのG14f4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第38・47号住居跡を掘り込み、第42・44・46・49・531号住居、第317～319・322・348号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複関係により住居全体の様相は把握できないが、竈やピットの位置からN-2°-Eを主軸とする一辺4.7m前後の方形と推定される。西壁の高さは7cmと低く、立ち上がりは判然としなない。

床 ほほ平坦である。竈の手前から中央にかけて踏み固められている。壁溝は検出されなかった。

竈 北壁中央部に位置し、焚き口部から煙道部まで106cm、袖部幅は102cm、壁外への掘り込みは34cmほどで、火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、赤変硬化している。また、煙道部は火床面から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 9 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。主柱穴はP1～P3で、深さは75～80cmである。P4は深さ24cmで、炉と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。なお、北東部に位置するべき主柱穴は、第322号土坑に掘り込まれているため確認できなかった。

覆土 1層のみ確認され、堆積状況は不明である。

土層解説

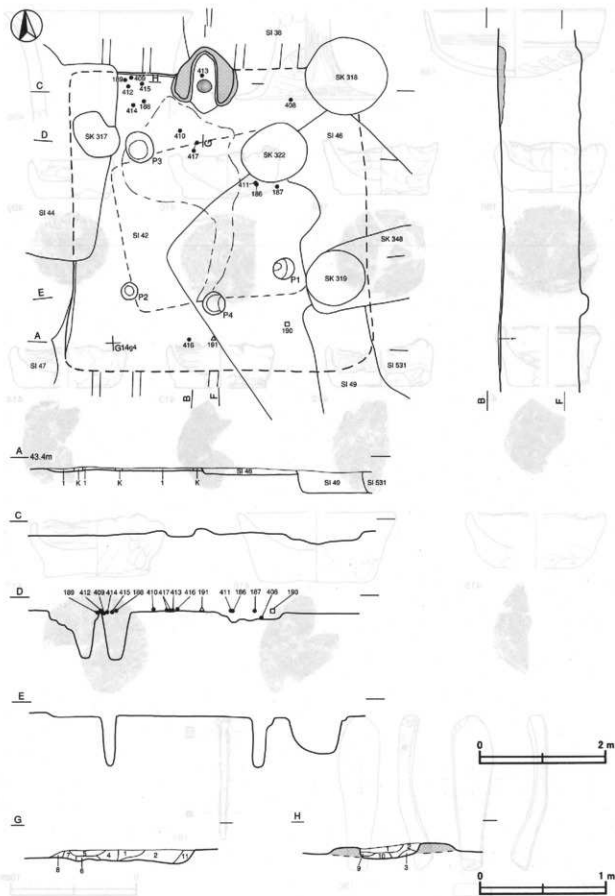
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片203点(坏60, 碗1, 鉢1, 高坏5, 甕125, 手捏土器11), 須恵器片3点(坏2, 甕1), 石器1点(砥石), 鉄製品1点(釘)が出土している。186・187は中央部床面, 188・189・409～417は北部床面を中心に出土している。190・191は南部下層と床面より出土し, 190は片側面に穿孔された跡があり, 提げ紙に転用しようとしたと考えられる。

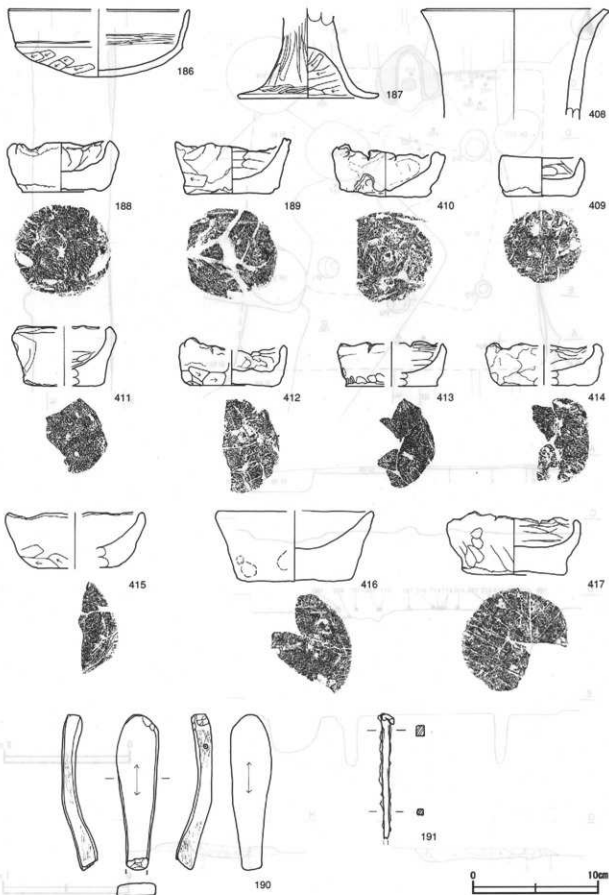
所見 本跡では他遺構の重複を受けていない部分はわずか北西部だけであり, 住居の形状を正確に把握することができなかったが, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
186	土師器	坏	[14.2]	5.4	-	長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	中央部床面	45%
187	土師器	高坏	-	(7.0)	11.2	長石・雲母	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ヘラ削り	中央部床面	40%
408	土師器	甕	15.0	(8.8)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部ナデ	北東部床面	20%
188	土師器	手捏土器	7.8	4.0	6.2	雲母	灰黄	普通	体部内・外面一部ナデ, 底部ヘラナデ	北西部床面	100% PL200
189	土師器	手捏土器	9.4	4.6	7.0	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面一部ヘラ削り, 内面ヘラナデ	北西部床面	98% PL200



第55图 第45号住居跡実測图



第56图 第45号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	黄	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
409	土師器	手捏土器	6.3	3.4	5.9	灰石・雲母	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ	北壁際床面	95%
410	土師器	手捏土器	9.0	4.2	7.3	灰石・雲母・鉄屑	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ	北部床面	95% PL200
411	土師器	手捏土器	[8.3]	4.8	[6.5]	灰石・赤色粒子	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ	中央部床面	25%
412	土師器	手捏土器	[8.5]	3.7	7.3	赤色粒子	灰黄褐色	普通	普通	体外外面ヘラ削り、内面ナデ	北壁際床面	45%
413	土師器	手捏土器	[8.2]	3.6	[7.3]	灰石・鉄屑	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ	室内下層	25%
414	土師器	手捏土器	[8.2]	3.4	[7.2]	赤色粒子	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ	北部床面	40%
415	土師器	手捏土器	[10.8]	(4.4)	[7.0]	雲母・赤色粒子	灰黄褐色	普通	普通	体外外面ヘラ削り、内面ナデ	北壁際床面	40%
416	土師器	手捏土器	[12.4]	5.6	9.0	灰石・鉄屑	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ、外面指痕痕	南部床面	30%
417	土師器	手捏土器	[10.3]	5.1	8.4	灰石・雲母	灰黄褐色	普通	普通	体内・外面ナデ、底部木炭痕	北部床面	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
190	砥石	(12.3)	2.9	1.0	(87.2)	凝灰岩	砥面2面、片側端部欠損、片面穿孔途中	南部下層	PL266

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
191	釘	(10.0)	0.6	0.8	(19.9)	鉄	脚部先端欠損、頭部屈曲	南部床面	PL282

第47号住居跡 (第57～59図)

位置 調査区北部北東寄りのG14f3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第43・45・68・76・115号住居、第343・618号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 遺存部が少ないため、平面形状は明確ではないが、南壁とピットの位置、および硬化面の広がりなどからN-104°-Eを主軸とする一辺約7.0mの方形と推定される。南壁の高さは12～20cmで、ほぼ直角に立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は検出されなかった。

竈 東壁中央部に付設されており、笑口部から煙道部まで114cm、袖部幅は108cmである。壁外への掘り込みは認められない。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量
- 5 明褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 8 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 9 灰赤褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～70cmである。P5は深さ27cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東部に付設され、平面形は長径114cm、短径100cmの楕円形を呈している。深さは60cmで、底面が平坦であり、壁は直角に立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 6 褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量



第58図 第47号住居跡実測図(2)

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

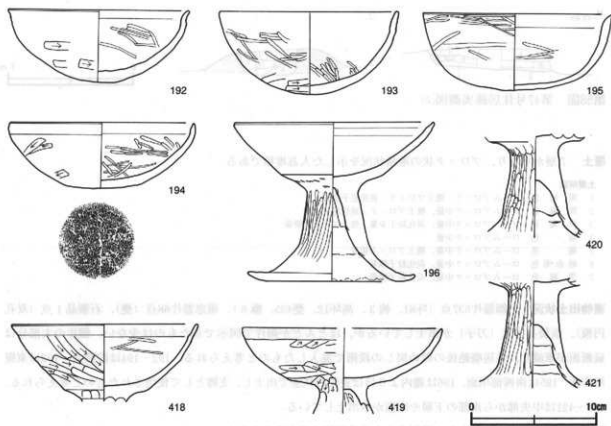
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片537点(坏81, 碗3, 高坏12, 甕435, 瓶6), 須恵器片68点(甕), 石製品1点(双孔円板), 鉄製品1点(刀子)が出土しているが、ほとんどが細片で図示できたものは少ない。細片の大部分は破断面が摩滅し、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。192・194は貯蔵穴, 193は東壁際床面, 195は南西部床面, 196は室内よりはほぼ逆位の状態出土し、支脚として使用されたものと考えられる。418~421は中央部から南部の下層や床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初め頃と考えられる。

第47号住居跡出土遺物観察表(第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
192	土師器	坏	14.4	5.7	3.0	石英・赤色 粒子	赤褐	普通	体部外面へう割り, 内面へう 磨き	貯蔵穴下層	98% PL200
193	土師器	坏	14.2	6.6	-	石英	にぶい赤 褐	普通	体部外面下位へう割り上位へう 磨き, 内面へう磨き	東壁際床面	90% PL200
194	土師器	坏	14.6	5.4	5.9	長石	明赤褐	普通	体部外面へう割り, 内面へう 磨き	貯蔵穴下層	90% PL200
195	土師器	坏	15.2	6.1	-	長石	赤褐	普通	体部外面へう磨き, 内面割落, 外面彫付着	南西部床面	70%
196	土師器	高坏	15.8	12.8	13.3	長石	赤褐	普通	坏部内・外面ナデ, 脚部外面 へう磨き, 内面ナデ	室内下層	100% PL200
418	土師器	高坏	14.7	(6.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	坏部外面へう割り, 内面へう 磨き	南東部下層	40%
419	土師器	高坏	[15.4]	(6.7)	-	砂粒	明赤褐	普通	坏部外面へう割り, 内面割落 の為調査不明	南壁際床面	30%
420	土師器	高坏	-	(8.3)	-	長石・石英・ 炭母	明赤褐	普通	脚部外面へう磨き, 内面へう ナデ	中央部下層	10%
421	土師器	高坏	-	(8.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	脚部外面へう磨き, 内面へう ナデ	中央部床面	10%



第59図 第47号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡 (第60・61図)

位置 調査区北部北東寄りのG14g5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第38・50号住居跡を掘り込み、第46・62・531号住居、第319・348・616号土坑、第17号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁やピットの位置から、N-4°-Eを主軸とする長軸約8.0m、短軸約7.5mの方形と推定される。確認された壁高は30~39cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 第531号住居、第348号土坑に掘り込まれており、右袖部のみ遺存している。

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4で、深さは77~85cmである。P5・P6は深さ60cm・14cmで、南部中央部にあり出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7は深さ27cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 北東部に付設され、平面形は長径70cm、短径64cmの長方形を呈している。深さが21cmで、底面は平坦であり、壁は直立している。

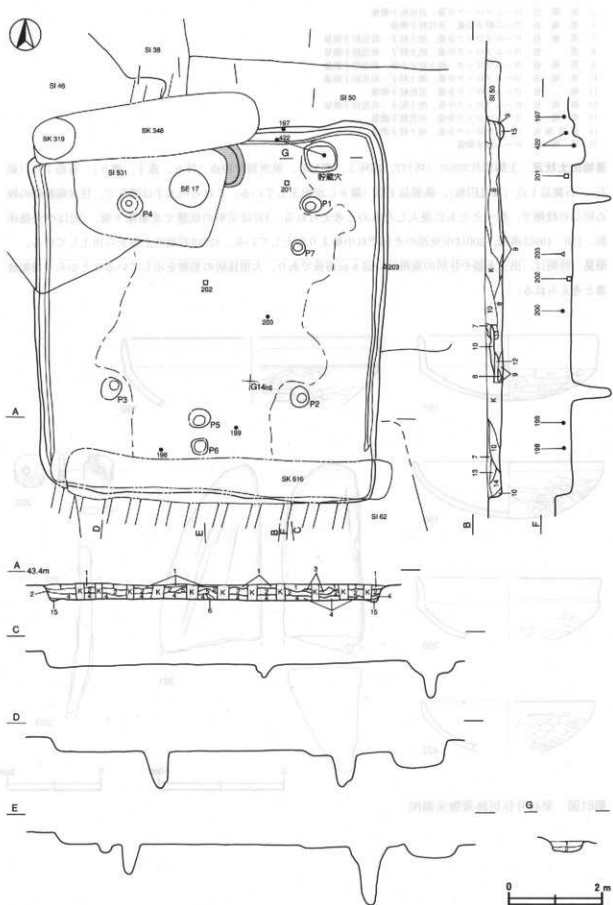
貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

覆土 15層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

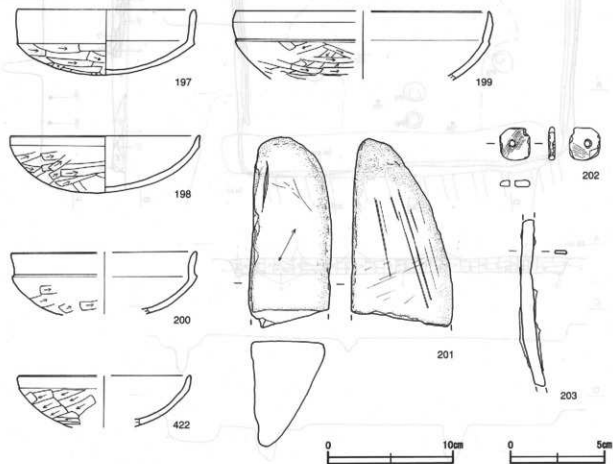
- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量



第60图 第49号住居跡実測图

- 5 黒 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 6 黒 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 黒 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 黒 褐色 ロームブロック中量・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 10 黒 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量
- 12 暗 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 13 黒 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 14 麻 暗 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 15 黒 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片705点(坏177, 高坏5, 甕523), 須恵器片19点(坏9, 蓋1, 甕9), 石器1点(砥石), 石製品1点(双孔円板), 鉄製品1点(鎌カ)が出土している。これらの大半は細片で, 住居廃絶時の埋め戻しの段階で, 埋土とともに混入したものと考えられる。197は完形の状態で北壁際下層, 202は中央部床面, 198・199は南部, 200は中央部のそれぞれ中層より出土している。422は貯蔵穴上層から出土している。所見 時期は, 出土土器や住居の規模は一辺8m前後であり, 大型住居の形態を示していることから6世紀後葉と考えられる。



第61図 第49号住居跡遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
197	土師器	坏	14.2	5.1	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	北壁際下層	100% PL200
198	土師器	坏	15.1	4.5	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	南部中層	70%
199	土師器	坏	[20.2]	(5.4)	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	南部中層	20%
200	土師器	坏	[14.6]	(4.9)	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	中央部中層	20%
422	土師器	坏	[13.8]	(4.1)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	貯蔵穴上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
201	砥石	(15.0)	(6.4)	(8.2)	(918)	砂岩	砥石一面、その他は破断面	北部下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
202	双孔円板	(1.8)	0.3	0.3	(1.52)	滑石	両面斜位の積層、片側穿孔	中央部床面	PL264

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
203	鏡	(8.8)	0.6	0.2	(11.5)	鉄	刃部片、切先・基部欠損	東壁際中層	

第50号住居跡 (第62・63図)

位置 調査区北部北東寄りのG14f6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第38号住居跡、第310号土坑を掘り込み、第46・49・51・531号住居、第348号土坑、第17号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 第49号住居に掘り込まれているが、遺存している北・東壁とピットの位置から、N-90°-Eを主軸とする一辺約6.0mの方形と推定される。壁高は18~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。北壁から南側に向かって、1.84mの間隔で3本が認められる。規模は北壁中央部から南部に伸びる溝が長さ96cm、深さ4cmが最大長であり、両側の溝は長さ80cm、深さ8cmで、西側が長さ56cm、深さ10cmと中央部に付設されている溝よりも短い、深い掘り込みを持つ特徴がある間仕切り溝と考えられる。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていたことから、全周していたと考えられる。

竈 東壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで150cm、袖部幅は112cmである。壁外への掘り込みは認められない。土層断面中第11層が粘土粒子を多量に含んでおり、天井部の崩落土と考えられる。火床面は、底面から5cmほど風状に掘りくぼめられており、赤変硬化している。

甕土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 7 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 10 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 11 暗褐色 粘土粒子多量、砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 12 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、P1・P4の深さはそれぞれ85cm・80cmである。P2は深さは53cmで、それぞれ第49号住居跡の床下や第348号土坑の底面から検出されている。

貯蔵穴 南東部に付設され、平面形は長径約100cm、短径約55cmの長方形を呈している。深さは50cmを測り、底面は平坦で、壁は直立している。

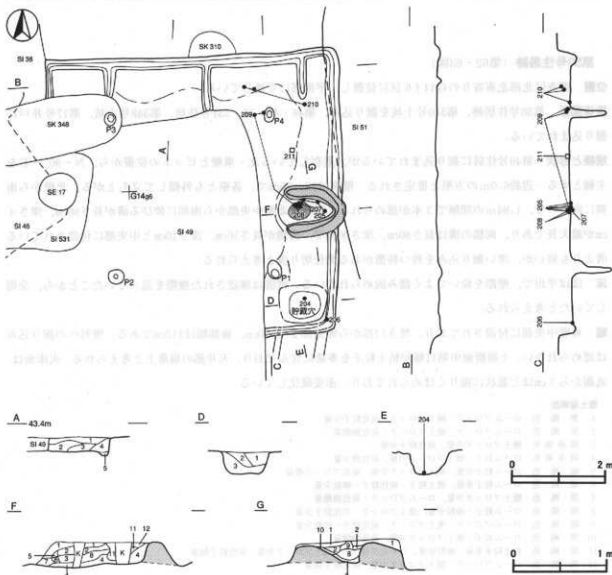
貯蔵穴土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック・炭化物少量

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

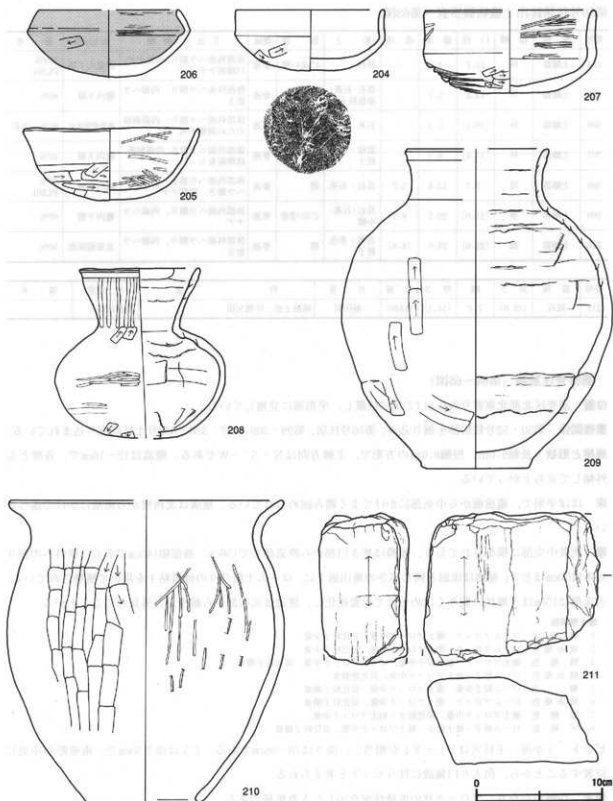
土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒 褐色 ローム粒子少量



第62図 第50号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片554点(坏131, 碗1, 鉢1, 高坏2, 甕416, 瓶2, 手捏土器1), 石器1点(砥石)が出土している。205・207・208は竈内下層, 204は完形で貯藏穴下層, 206・210は南東壁際・北東部床面からそれぞれ出土している。207・208は支脚として使用されていたものが, そのまま遺棄されたものと考えられる。



第63図 第50号住居跡出土遺物実測図

また、207は外面に研磨痕が見られることから、砥石としても転用された可能性がある。

所見 時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初め頃と考えられ、第27・281号住居跡とは住居形態や主軸方向が一致することから、同一の集落を構成していたことが想定される。

第50号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
204	土師器	坏	11.7	4.8	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ、口縁部ナデ	貯蔵穴下層	100% PL201
205	土師器	坏	13.8	5.7	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	竈内下層	80%
206	土師器	坏	[10.1]	5.4	-	石英	明赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面削落のための調整不明	京東壁部床面	60% 赤彩
207	土師器	坏	[13.4]	6.5	-	雲母・赤色粒子	赤	普通	体部外面へラ削り、内面削落、研磨痕有り	竈内下層	40%
208	土師器	埴	9.3	13.6	5.7	長石・石英	橙	普通	体部外面へラ磨き、頸部外面へラ磨き、内面ナデ	竈内下層	80% PL201
209	土師器	壺	[11.0]	25.5	8.5	長石・石英・小礫	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラナデ	竈内下層	60%
210	土師器	瓶	[21.6]	24.0	[8.8]	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	北東部床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
211	砥石	(12.0)	7.2	(14.1)	(1840)	凝灰岩	砥面2面、片側欠損	東部床面	

第51号住居跡 (第64～66図)

位置 調査区北部北東寄りのG14f7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第50・52号住居跡を掘り込み、第56号住居、第99・309・327・328・330号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸9.0m、短軸8.0mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は12～16cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は北西壁から南壁にかけて巡っている。

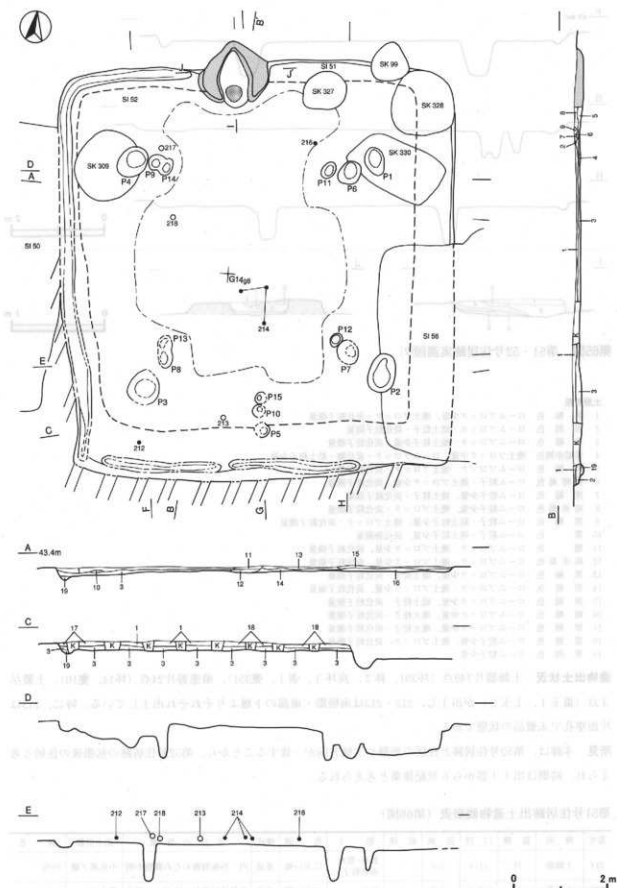
竈 北壁中央部に構築されており、規模は焚き口部から煙道部まで136cm、袖部幅140cmである。壁外への掘り込みは50cmほどで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に、ローム土混じりの砂質粘土を用いて構築されている。火床部は15cmほど皿状に掘りくぼめられて赤変硬化し、煙道は火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

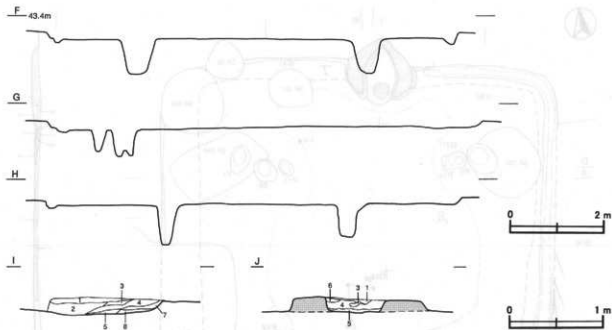
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化物微量
- 5 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土ブロック少量
- 8 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは78～96cmである。P5は深さ50cmで、南壁際の中央に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 19層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第64图 第51·52号住居跡実測图(1)



第65図 第51・52号住居跡実測図(2)

土層解説

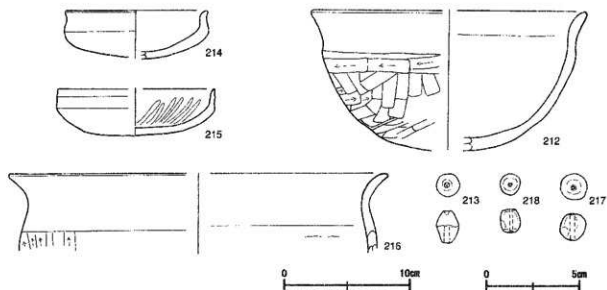
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 10 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量
- 11 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 12 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 13 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 14 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 15 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 16 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 17 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 18 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 19 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片749点(坏391, 鉢3, 高坏3, 壺1, 甕351), 須恵器片24点(坏14, 甕10), 土製品3点(紫玉1, 土玉2)が出土し, 212・213は南壁際・南部の下層よりそれぞれ出土している。特に, 213は片面穿孔で未製品の状態である。

所見 本跡は, 第52号住居跡と住居の形態や主軸方向が一致することから, 第52号住居跡の拡張後の住居と考えられ, 時期は出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第51号住居跡出土遺物観察表 (第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
214	土師器	坏	11.4	3.8	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	内・外面割落のための調整不明	中央部下層	70%
215	土師器	坏	[12.4]	3.7	-	長石	にぶい橙	普通	体部外面荒れ, 内面へラ磨き	覆土中	60%
212	土師器	輪	[21.5]	11.1	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ磨り, 内面荒れ, 口縁部ナデ	南壁部下層	25%



第66図 第51号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
216	土師器	甕	[30.2]	(6.3)	—	長石・雲母	にぶい役	普通	外部外面へラ削り後ナデ、口縁部ナデ	北東部下層	5%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特	器	出土位置	備考
213	陶土カ	1.8	1.2	0.3	2.04	土	ナデ、片側未穿孔		南西部下層	PL258
217	土瓦	1.4	1.4	0.3	2.22	土	ナデ、橙色、片側穿孔		北西部下層	PL258
218	土瓦	1.3	1.1	0.2	1.44	土	ナデ、橙色、片側穿孔		北西部下層	PL258

第52号住居跡（第64・65図）

位置 調査区北部北東寄りのG14f7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第51・56号住居、第309・327・328・330号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 遺存しているピットの位置から、N-5°-Wを主軸とする長軸約7.3m、短軸約7.0mの方形と推定される。本跡は拡張され、その後さらに第51号住居跡へ拡張されたと考えられる。壁の立ち上がりは不明である。

床 ほほ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

ピット 10か所。主柱穴はP6～P9が相当し、深さは78～96cmである。P10は深さ60cmで、南壁の中央に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P11～P14は深さ70～85cmで、位置と形状から本跡の拡張前に使用されたピットと考えられる。P15は深さ60cmで、位置と形状から本跡の拡張前に使用された出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 確認された覆土はすべて第51号住居跡に帰属するものである。

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺存しているピットの位置が第51号住居跡の主軸とほほ同一であることから、拡張した後、さらに第51号住居跡への拡張と考えられる。しかし、全体的な住居跡の形態や、出土土器などを把握することはできなかった。時期は第51号住居跡とほほ同時期の6世紀中葉と考えられる。

第54号住居跡 (第67・68図)

位置 調査区北部北東寄りのF15i2区に位置し、平坦地に立地している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は約3.7mであり、東側部分が調査区域外のため、東西軸は2.5mだけが確認され、N-5°-Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は18~22cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁際は確認された壁際を巡っており、全周しているものと推定される。西壁際から南壁際にかけて、住居焼失に伴う焼土塊が広がっている。

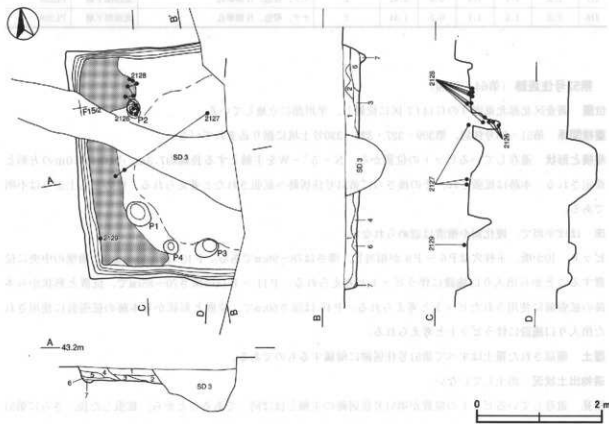
竈 確認されていない。

ピット 4か所。P1・P2が主柱穴に相当し、深さ38cm・48cmである。また、東側に想定される主柱穴は調査区域外のため確認できなかった。P3は出入り口施設に伴うピットと考えられ、深さは14cmである。P4は深さが12cmであり、性格は不明である。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。土層断面図中、第4・5層が焼土塊の土層に相当し、褐色土の上に堆積している。

土層解説

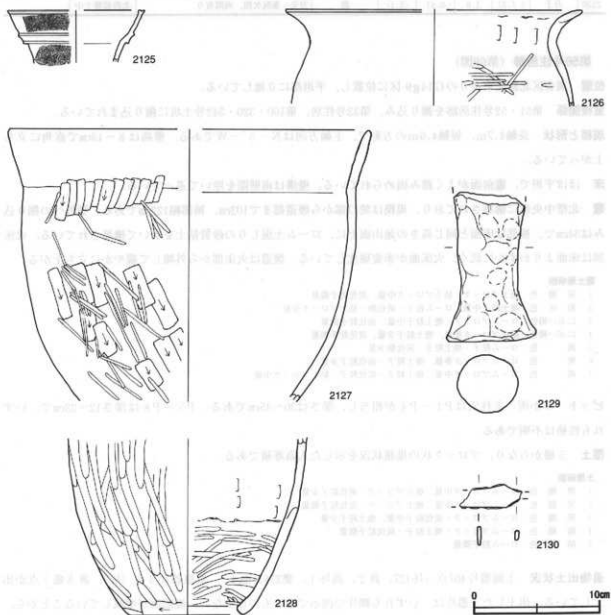
- 1 黒褐色 ローム粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子多量、ロームブロック・炭化物微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 7 褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ロームブロック微量



第67図 第54号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片928点(坏358, 寛498, 飯72), 須恵器片7点(寛4, 廳3), 土製品1点(支脚), 鉄製品1点(刀子), 礫37点が西壁付近の焼土塊の中を中心に出土している。焼土塊は遺物とともに、西壁部に集中しており, 住居廃絶後, それほど時間が経てない時期に焼失したものと考えられる。2125は, 南西部の覆土中から出土しており, 本跡廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。2127は, 北部と西部のいずれも下層から出土した破片が接合したもので, 投棄されたものと考えられる。また, 2126はP2の下層から出土しているため, 柱を抜き取った後の埋め戻しの際に混入したものと考えられる。2128~2130は, 焼土塊の中から出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は東側部分が調査区外に延び, また西部から東部にかけて部分が第3号溝に掘り込まれ, 全体の形状を把握することはできなかった。焼土塊は, 薄く堆積した褐色土の上に堆積しているため, 住居廃絶後あまり時間を経ずして焼失したものと推測できる。本跡の時期は, 出土遺物の形状から6世紀前葉と考えられる。



第68図 第54号住居跡出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2125	須恵器	甕	[10.9]	(4.2)	-	長石	灰	良好	口縁部内・外面ロクロナデ	南部覆土中	5% 内面自然釉
2126	土師器	甕	[23.6]	(7.5)	-	雲母・石英・長石	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き、口縁部・外面ナデ、輪襷痕	P2内下層	10%
2127	土師器	甕	[28.6]	(21.8)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ磨り後ヘラ磨き、口縁部横ナデ、内面ナデ	北部下層、西部下層	30%
2128	土師器	甕	-	(14.0)	[9.9]	雲母・石英・長石	橙	普通	体部外面・内面下位ヘラ磨き、内面上位ナデ	北部床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2129	支脚	(11.8)	7.2	6.9	(400.0)	土	被熱痕有り、指頭痕	西壁下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2130	刀子	(7.2)	1.8	0.41	(5.1)	鉄	刃先・基戻欠損、両面有り	北西部覆土中	

第56号住居跡 (第69図)

位置 調査区北部北東寄りのG14g9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第51・52号住居跡を掘り込み、第33号住居、第100・320・342号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.7m、短軸4.6mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は8~13cmで直角に立ち上がっている。

床 ほは平坦で、竈前面がよく踏み固められている。壁溝は南壁際を除いて巡っている。

竈 北壁中央部に構築されており、規模は焚口部から煙道部まで102cm、袖部幅122cmである。壁外への掘り込みは34cmで、袖部は床面と同じ高さの地山面上に、ローム土混じりの砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面よりわずかに低く、火床面が赤変硬化している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 2 褐灰色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量
- 3 にぶい褐色 ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 4 にぶい褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 6 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量

ピット 8か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは30~45cmである。P5~P8は深さ12~23cmで、いずれも性格は不明である。

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

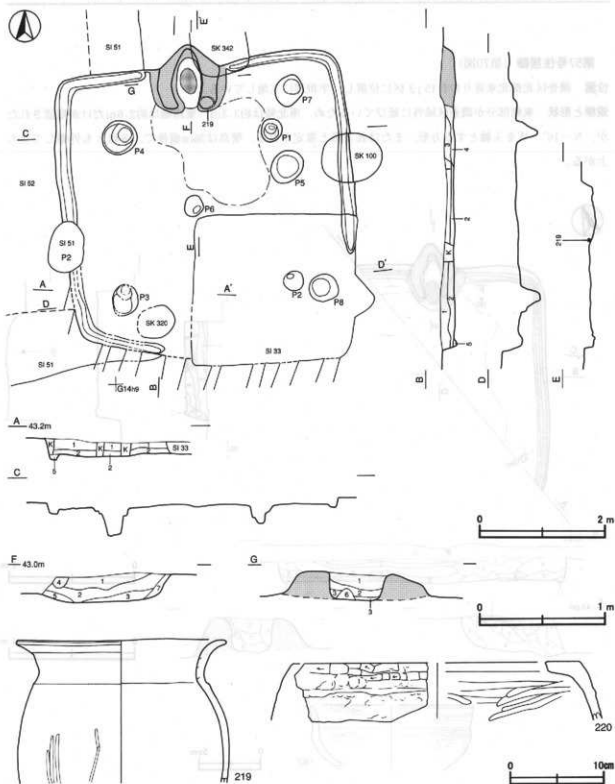
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片407点(坏127, 鉢2, 高坏1, 甕276, 甕1), 須恵器片4点(坏), 置き竈1点が出土している。出土した土師器片は、いずれも細片で図示できたものは少ない。破断面が摩滅していることから、本跡廃絶時の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。219は、竈の右袖内から破砕された状態で出土し、竈の補強材として使用されていたと考えられる。220は覆土中層から出土したもので、住居内

で使用された痕跡はなく、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 本跡から出土した土師器甕は、竈袖部構築材として使用され、第119号住居跡からも同様に出土しているが、両跡は同時期に集落を形成していた可能性があり、時期は7世紀前半と考えられる。



第69図 第56号住居跡・出土遺物実測図

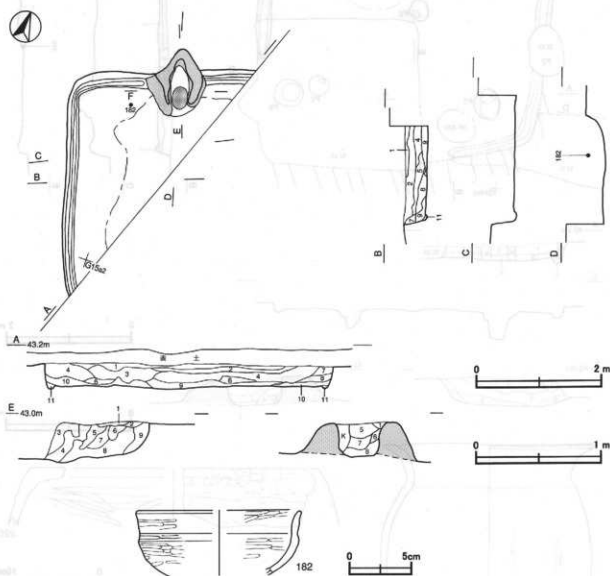
第56号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
219	土師器	甕	22.2	(15.2)	-	長石・石英・角礫	橙	普通	体部外面へラ磨き、内面ナデ、口縁部ナデ	竈石袖内	30%
220	土師器	置き甕 [30.4]	(6.4)	-	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	覆土中	5%

第57号住居跡 (第70図)

位置 調査区北北東寄りのF15j2区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 東側部分が調査区域外に延びているため、南北軸は約3.3m、東西軸は約2.6mだけが確認されたが、N-16°-Wを主軸とする方形、または長方形と推定される。壁高は36cm前後で、各壁とも外傾して立ち上がる。



第70図 第57号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、全周しているものと思われる。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで約108cm、袖部幅約88cmである。壁外への掘り込みは36cmほどで、火床部は床面を皿状に5cmほど掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。土層断面中、第7層が粘土の含有状況から天井部の崩落土と考えられる。また、煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

甕土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物・砂粒微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子多量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 褐色 粘土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化物微量
- 9 灰褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 認められなかった。

覆土 11層からなり、ロームブロックを含み、ブロック状の非積層状を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片161点(坏35, 甕126)、礫6点が竈周辺の下層を中心に出土しているが、ほとんどが小破片である。破断面が摩滅して、接合できる遺物がないことから、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。左袖側床面覆土中層の182は、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 本跡は東側が調査区域外に延びているため、全体の形状を把握することはできなかった。また、出土土器はいずれも破片のため形状の把握が困難であるが、出土土器から時期は6世紀後葉と考えられる。

第57号住居跡出土遺物観察表(第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
182	土師器	坏	[12.8]	(5.2)	-	赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラ磨き	西袖側覆土中層	5%

第58号住居跡(第71図)

位置 調査区北部北東寄りのF15h2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第28号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため全体の様相は把握できないが、南北軸約3m、東西軸は約0.5mだけ確認された。壁高は38~42cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は調査区域外に延びると考えられ確認できなかった。

ピット 検出されなかった。

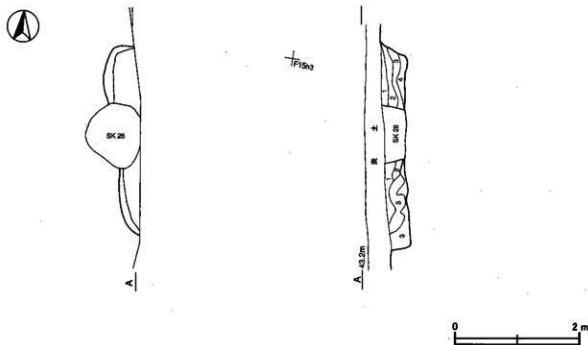
覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片62点(坏16, 高坏1, 甕45), 須恵器片2点(坏1, 甕1)が出土しただけである。出土土器はいずれも細片で、床面から確認されたものは少ない。破断面が摩滅していることから、住居廃絶時の埋め戻しの段階で埋土とともに混入されたものと考えられる。

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため全体の形状を把握することはできなかったが、出土土器から時期は古墳時代後期と考えられる。



第71図 第58号住居跡実測図

第59号住居跡 (第72図)

位置 調査区北部北東寄りのG14e0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第75・84・85号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で検出されたため、遺存している壁やピットの位置からN-6°-Eを主軸とする一辺約4.0mの方形と推定される。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 削平されて遺存していない。

覆土 確認されなかった。

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～62cmである。

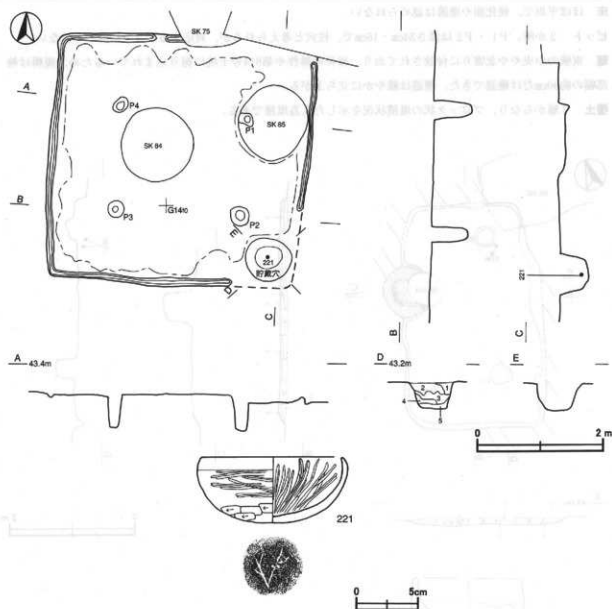
貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、平面形は径約70cmの円形を呈している。深さは40cmで、底面が平坦であり、壁は直立している。

貯蔵穴土層解説

- | | | |
|---|------|------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量 |
| 4 | 灰褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 |
| 5 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片 2点(坏)、須恵器片 1点(甕)が出土しただけである。221は、貯蔵穴から完形の状態です出土している。

所見 時期は、貯蔵穴から出土している坏の形状から、5世紀後葉と考えられる。



第72図 第59号住居跡・出土遺物実測図

第59号住居跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
221	土師器	坏	11.4	5.2	-	赤母	にぶい褐	普通	休部外面へラ削り後へラ磨き、内面へラ磨き、寛永木葉度	貯蔵穴中層	100% PL201

第60号住居跡 (第73図)

位置 調査区北部東寄りのG14h8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第352・614号土坑に掘り込まれている。

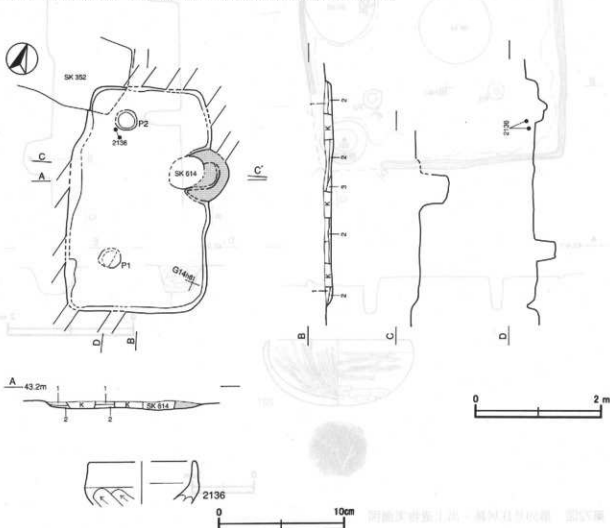
規模と形状 長軸3.6m、短軸2.2mの長方形で、主軸方向はN-70°-Eである。壁高は18cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

ピット 2か所。P1・P2は深さ34cm・16cmで、柱穴と考えられるが、対応するピットは認められない。

竈 東壁の中央やや北寄りに付設されており、後世の耕作や第614号土坑に掘り込まれているため、規模は袖部幅の約90cmだけ確認できた。煙道は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第73図 第60号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片61点(坏11, 甕49, ミニチュア土器1), 須恵器片3点(坏)が出土している。これらの大部分は細片で図示できたものは少ない。2136は北西部中層から出土している。

所見 本跡は長方形の住居形態から、何らかの工房的な施設として想定されるが、それを裏付ける施設や遺物は検出されていない。時期は出土土器から7世紀後葉と考えられる。

第60号住居跡出土遺物観察表(第73図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2136	土師器	ミニチュア土器	8.3	(3.5)	-	灰石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部ナデ	北西部中層	40%

第62号住居跡(第74・75図)

位置 調査区北部北東寄りのG1416区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第61号住居跡を掘り込み、第49号住居、第616号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁やピットの位置から、N-17°-Wを主軸とする長軸約7.0m、短軸6.5mの方形と推定される。壁高は10cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 ほほ平坦である。中央部がよく踏み固められている。壁溝は検出されなかった。

電 第49号住居跡・第616号土坑に掘り込まれたことが想定され、遺存していない。

ピット 8か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは68~84cmである。P5~P8は深さ52~78cmで、性格は不明である。

貯蔵穴1 南西コーナー部に付設され、平面形は長径105cm、短径75cmの楕円形を呈している。深さは47cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
 4 暗褐色 ローム粒子中量
 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
 6 極暗褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量

貯蔵穴2 南壁際のやや西寄りに付設され、平面形は長径78cm、短径68cmの長方形を呈している。深さは52cmを測り、底面は平坦で、壁は直立して立ち上がる。

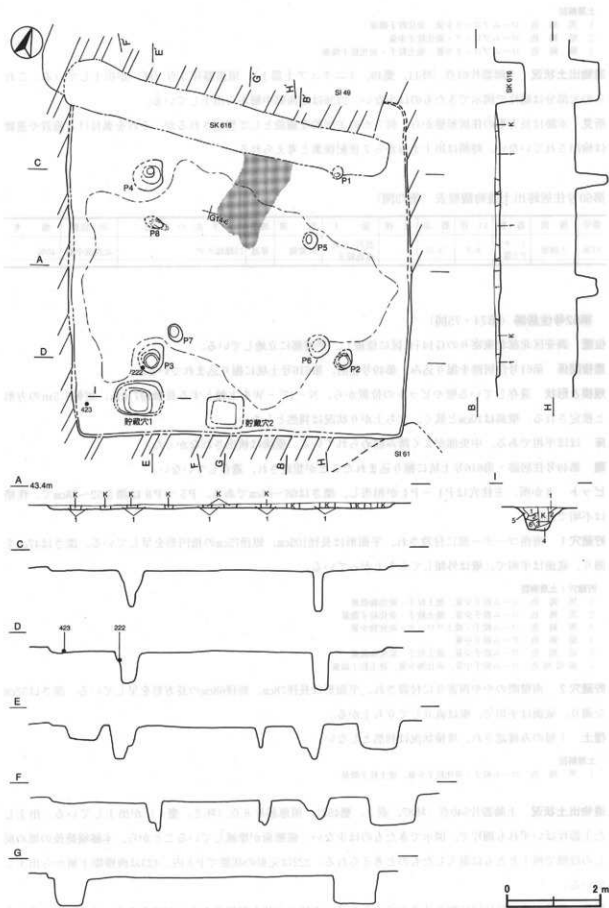
覆土 1層のみ確認され、堆積状況は判然としない。

土層解説

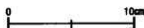
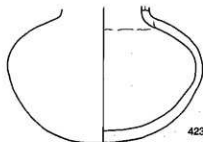
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片540点(坏87, 壺1, 甕452), 須恵器片6点(坏2, 甕4)が出土している。出土した土器片はいずれも細片で、図示できたものは少ない。破断面が摩滅していることから、本跡廃絶後の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。222は完形の状態でP3内、423は西壁際下層から出土している。

所見 北部が第49号住居に掘り込まれているため、本跡の全体を把握することができなかったが、P3内から出土した6世紀後半の坏から、時間的には同時期かあるいは多少先行するものと考えられる。



第74图 第62号住居跡実測图



第75図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
222	土師器	坏	11.6	5.1	-	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面へう削り、内面へう磨き、口縁部へう磨き	P3 覆土中	100% PL201
423	土師器	壺	-	(10.7)	-	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外面器面欠れ、内面ナゲ	西壁際下層	70%

第64号住居跡 (第76・77図)

位置 調査区北部北東寄りのG14h3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第347号土坑を掘り込み、第66号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南部を第66号住居に掘り込まれているが、遺存している壁やピットの位置から、N-0°を主軸とする一辺約4.0mの方形と推定される。壁高は16~24cmであり、各壁ともほぼ直角に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈 北壁の中央部を壁外に10cmほど掘り込んで構築されており、焚口部から煙道部まで140cm、袖部幅100cmである。火床部は20cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。第2・4層は粘土ブロックを含むことから、天井部の崩落土と考えられる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 褐色 ローム粒子多量、粘土粒子中量、焼土粒子少量
- 12 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 13 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~55cmである。P5の深さは17cmで、竈と対峙する位置にあり、南壁に寄りすぎているため、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 14層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

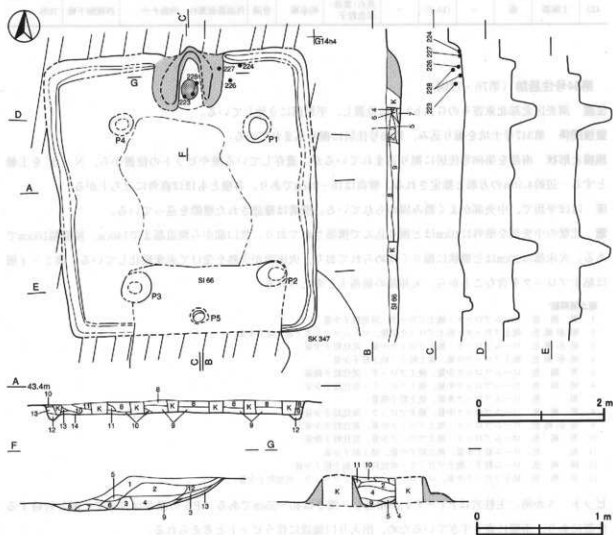
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

- 5 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 10 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 11 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 12 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 13 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 14 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

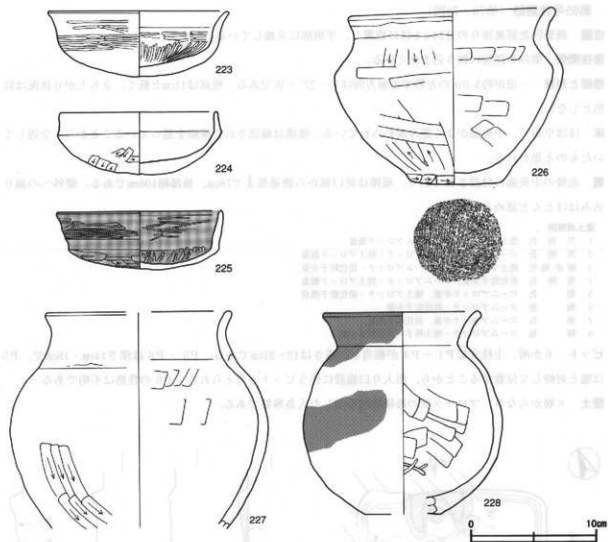


遺物出土状況 土師器片435点(坏60, 変375), 須恵器片14点(坏5, 変9)が出土している。北東部では坏・変がほぼ完形の状態而出土し, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。223・228は竈内から出土し, 228の外面に被熱痕が認められることから, 支脚に転用されたものがそのまま遺棄されたものと考えられる。224・227は北壁際床面, 226は北壁際下層よりほぼ完形の状態それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第76図 第64号住居跡実測図



第77図 第64号住居跡出土遺物実測図

第64号住居跡出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
223	土師器	坏	14.2	5.2	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部ヘラ磨き、体部内面ヘラ磨き	竈内中層	95% PL201
224	土師器	坏	12.4	5.0	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下位ヘラ削り、内面ナデ	北壁際床面	75%
225	土師器	坏	12.8	4.7	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き、口縁部ヘラ磨き	P 2 覆土中	50%
226	土師器	甕	16.4	14.2	7.2	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラナデ	北部下層	100% PL201
227	土師器	甕	[14.6]	(17.4)	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北壁際床面	20%
228	土師器	甕	12.0	16.1	[6.0]	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	竈内下層	35% 外面塚付着

第65号住居跡 (第78・79図)

位置 調査区北部東寄りのH14a4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第78号住居に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が約3.0mの方形で主軸方向はN-27°-Wである。壁高は11cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 ほは平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと思われる。

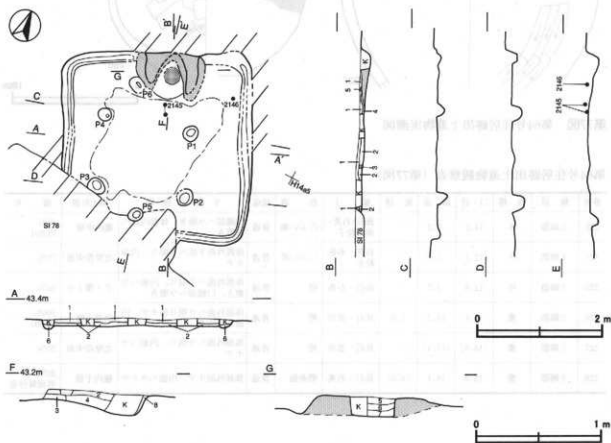
竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで78cm、袖部幅108cmである。壁外への掘り込みはほとんど認められない。

電土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 8 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは12～21cmである。P5・P6は深さ14cm・18cmで、P5は竈と対峙して位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6の性格は不明である。

覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



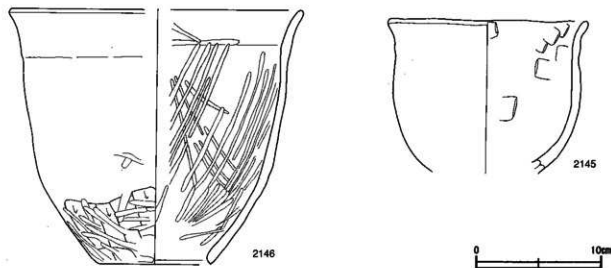
第78図 第65号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片142点(坏54, 甕87, 甌1), 須恵器片8点(坏7, 甕1)が出土している。これらの大部分は細片で図示できたものは少ない。2145・2146はそれぞれ北部と北東部の床面から出土しており, 2145は住居廃絶時に遺棄されたものと思われる。

所見 時期は, 6世紀後半に比定される第78号住居に掘り込まれていることと出土土器の形状から, 6世紀中葉と考えられる。



第79図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表(第79図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2145	土師器	甕	15.8	(12.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ, 内面ヘラナデ	北部床面	30%
2146	土師器	甌	[23.0]	20.4	8.8	長石赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ	北東部床面	40%

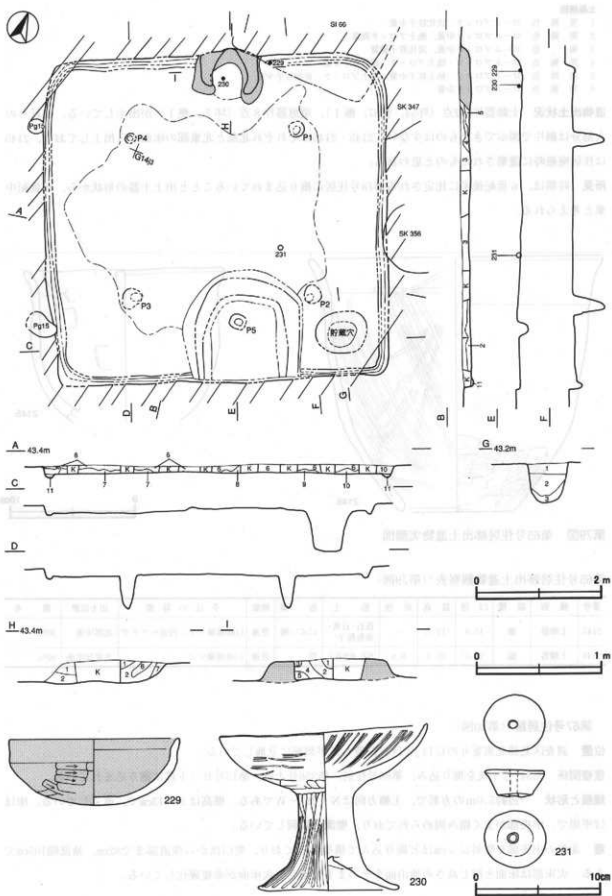
第67号住居跡(第80図)

位置 調査区北部北東寄りのG14j3区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第347号土坑を掘り込み, 第66号住居, 第356号土坑, 第15号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 一辺約5.0mの方形で, 主軸方向はN-24°-Wである。壁高は9~13cmで, 直立している。床ほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められており, 壁溝が周囲している。

竈 北壁の中央部を壁外に5cmほど掘り込んで構築されており, 焚口部から煙道部まで82cm, 袖部幅105cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 火床面が赤変硬化している。



第80图 第67号住居跡・出土遺物実測図

壙土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50cm前後である。P5は深さ20cmで、南壁側の中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられ、その周囲には土手状の高まりが見られる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、平面形は長径82cm、短径70cmの楕円形を呈している。深さは65cmを測り、底面は皿状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 11層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 黒褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片318点(坏96, 高坏1, 埴1, 甕220), 須恵器片9点(坏6, 甕3), 土製品1点(紡錘車)が出土している。これらの大部分は細片で図示できたものは少ないが、229は北壁際下層, 230は竈内より逆位で出土しており、被熱痕も認められることから、支脚に転用されたものと思われる。231は中央部床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第67号住居跡出土遺物観察表(第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
229	土師器	坏	13.4	5.3	-	灰石・石英	赤褐	普通	体部外面へラ削り, 内面ナデ	北壁際下層	90% 赤彩 PL201
230	土師器	高坏	16.3	13.8	11.3	砂粒	橙	普通	坏部内・外面へラ磨き, 脚部外面へラ磨き	竈内下層	70% 支脚 転用 PL201

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
231	紡錘車	4.9	2.2	0.7	41.5	土	無紋, ナデ, 黒色	中央部床面	

第68号住居跡 (第81図)

位置 調査区北部北東寄りのG14f2区に位置し、平坦部に立地している。

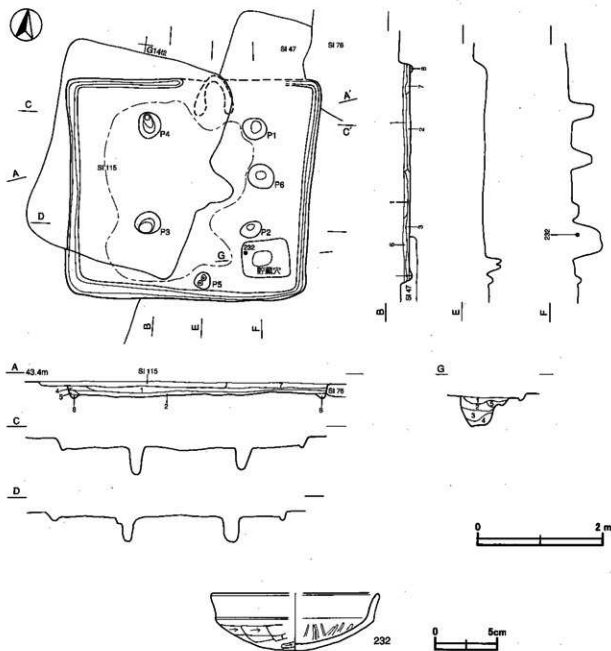
重複関係 第47・76号住居跡を掘り込み、第115号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している南・西壁やピットの位置から、 $N-8^{\circ}-E$ を主軸とする一辺約4.0mの方形と推定される。壁高は8~16cmで外傾して立ち上がる。

床 ほは平坦で、中央部がよく踏み固められており、壁溝は北東部を除いて巡っている。

竈 第115号住居に掘り込まれており、火床面の一部が検出されただけである。

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは36~44cmである。P5の深さは25cmで、南壁中央に位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6の深さは34cmで、補助柱穴と考えられる。



第81図 第68号住居跡・出土遺物実測図

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、平面形は長径75cm、短径60cmの長方形を呈している。深さは45cmで、底面が平坦であり、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
- 7 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片208点（坏30，鉢1，甕176，瓶1）が出土している。出土土器はいずれも細片で、図示できたものは少ない。232は貯蔵穴上層より出土している。

所見 本跡は西側部分が重複を受けているため、本来の形状を把握することはできなかったが、貯蔵穴から出土した坏の形状から、時期は6世紀後半と考えられる。

第68号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
232	土師器	坏	[13.2]	4.6	-	長石・石英	にひ黄橙	普通	口縁部横ナデ	貯蔵穴上層	60%

第69号住居跡（第82図）

位置 調査区北部北東寄りのG14h2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第71号住居跡を掘り込み、第63・73・77号住居、第345号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複関係により全体の形状は明確に把握できないが、東・南壁やピットの位置から、N-1'-Wを主軸とする一辺5.0m前後の方角と推定される。壁高は13~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っている。

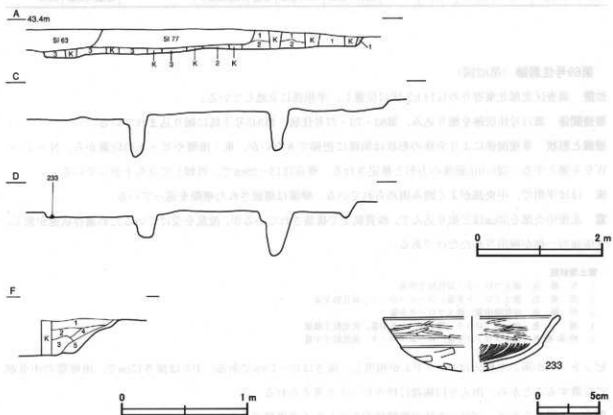
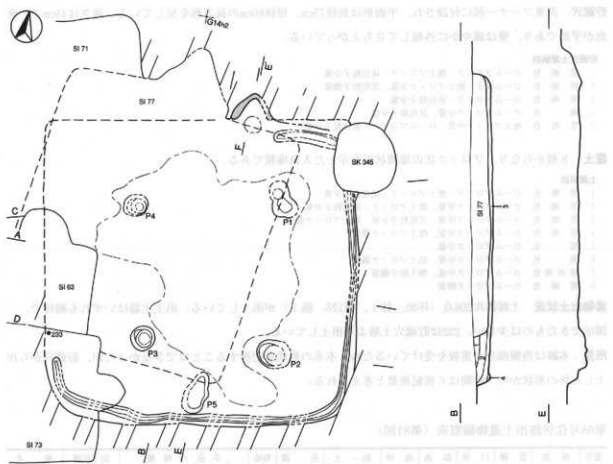
竈 北壁中央部を30cmほど掘り込んで、砂質粘土で構築されているが、攪乱を受けているため遺存状況が悪く、火床面の一部が検出されただけである。

覆土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~73cmである。P5は深さ17cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第82图 第69号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片556点(坏291, 器台1, 甕263, 瓶1), 須恵器片14点(坏10, 甕4)が出土している。出土した土師器片は、いずれも細片で図示できたものは少ない。破断面が摩滅していることから、本跡廃絶時の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。233は西部下層より出土している。

所見 本跡で他遺構と重複を受けていない部分はわずか東南部だけであり、本来の形状を明確に把握することができなかったが、出土土器の形状から時期は6世紀中葉と考えられる。

第69号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土色	調焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
233	土師器	坏	[14.0]	(4.9)	-	石英・赤色 粒子	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ 磨き、口縁部横位のヘラ磨き	西部下層	20%

第71号住居跡 (第83・84図)

位置 調査区北部北東寄りのG14h1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第63・69・70・72・73・74・77号住居にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 遺存している竈・南西壁・ピットから、N-15°-Wを主軸とする一辺約5.0mの方形と推定される。確認された壁高は20~33cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。壁溝は北西壁から南壁にかけて通っている。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで114cm、袖部幅102cmである。壁外への掘り込みは10cm、火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに外傾して立ち上がり、中央部に支脚に転用された土師器坏が逆位で据えられている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック少量、炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土粒子少量、炭化物微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 7 暗赤褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

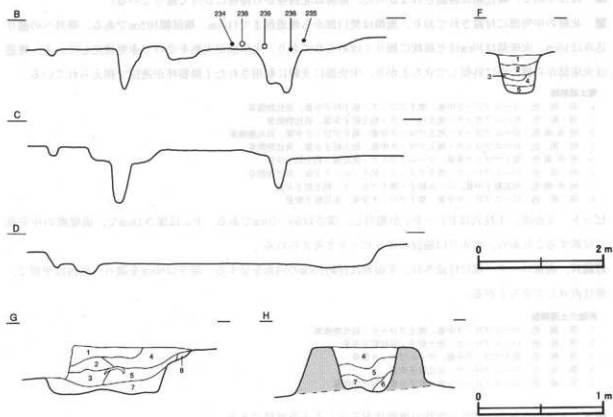
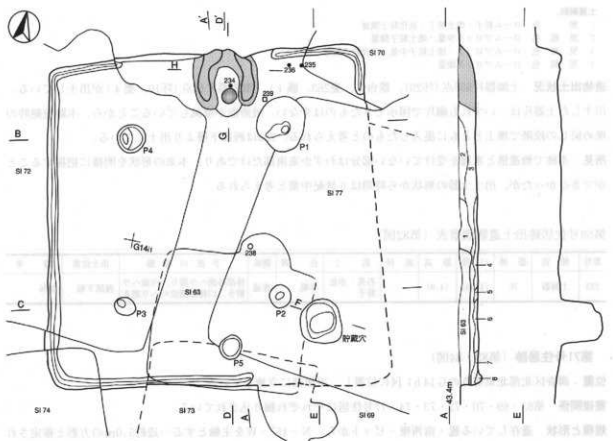
ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは50~70cmである。P5は深さ18cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、平面形は径約70cmの円形を呈する。深さは60cmを測り、底面は平坦で、壁は直立して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量

覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



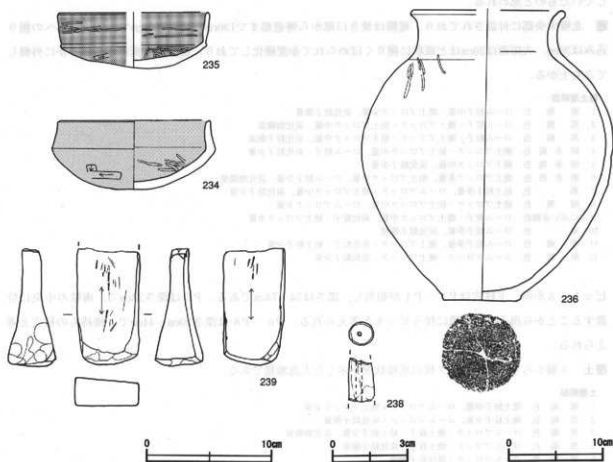
第83图 第71号住居跡実測図

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
4	暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
6	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
7	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片814点(環214, 鉢1, 高坏4, 甕590, 甗5), 須恵器片29点(環21, 甕8), 土製品1点(管状土鉢), 石器1点(砥石)が出土している。234は甕内下層から完形の状態で出土し、支脚に転用されたまま遺棄されたものと思われる。235・236は北壁際中層・床面, 238は中央部下層, 239は北部床面より出土している。

所見 本跡は第72・77号住居に掘り込まれているため住居全体の様相は不明であるが, 出土土器から, 時期は6世紀前葉と考えられる。



第84図 第71号住居跡出土遺物実測図

第71号住居跡出土遺物観察表(第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
234	土師器	環	11.7	5.5	-	長石・石英・赤色粒子	赤	普通	体部外面へラ削り, 内面横位のへラ磨き	甕内下層	100% 赤彩 PL201
235	土師器	環	[11.8]	4.5	-	粘土・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り, 内面へラ磨き, 口縁部横位のへラ磨き	北壁際中層	40%
236	土師器	甕	[15.8]	31.0	8.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面上位へラ磨き, 口縁部横ナテ	北壁際床面	75% PL202

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
238	管状土甌	1.0	0.25	(1.7)	(1.66)	土	ナガ、灰黄色、両端欠損		中央部下層	PL250

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
239	砥石	(9.2)	5.0	3.8	(179.4)	凝灰岩	砥面2面、上部欠損		北部東面	PL266

第74号住居跡 (第85・86図)

位置 調査区北部北東寄りのG13j0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第71・75号住居跡を掘り込み、第22号溝に掘り込まれている。

規模と形状 一辺約5.0mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は14~18cmで、直立している。

床 はほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと思われる。

竈 北壁中央部に付設されており、規模は焚き口部から煙道部まで130cm、袖部幅94cmである。壁外への掘り込みは30cm、火床面は20cmほど皿状に掘りくぼめられて赤変硬化しており、煙道は火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

甌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物微量
- 7 褐色 粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 8 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック少量
- 9 におい赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土ブロック少量
- 10 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 12 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 8か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは54~74cmである。P5は深さ38cmで、南壁の中央に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P8は深さ20cm・44cmで、棟持ちの柱穴と考えられる。

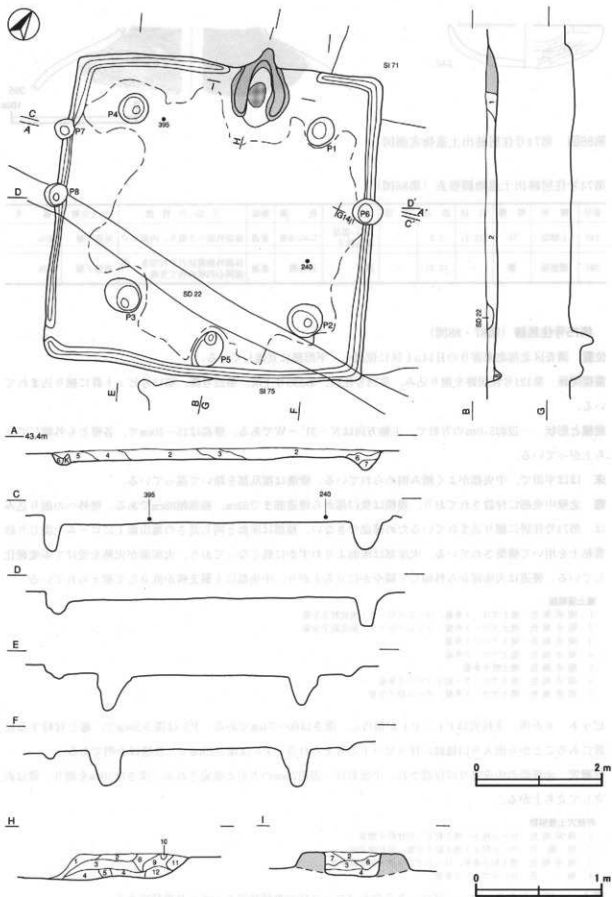
覆土 8層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

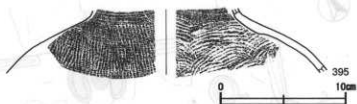
- 1 暗褐色 焼土粒子中量、ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 黒色 ロームブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片432点(坏97, 甕335)、須恵器片10点(甕)が出土しているが、ほとんどが細片で図示できたものは少ない。これらの大部分は破断面が摩滅し、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。240は東部下層、395は西部下層より出土している。

所見 東部下層より出土した坏や土師器片の形状から、時期は7世紀前葉と考えられる。



第85图 第74号住居跡実測图



第86図 第74号住居跡出土遺物実測図

第74号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
240	土師器	坏	[12.2]	3.4	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	東部下層	20%
395	須恵器	壺	-	(7.7)	-	長石	灰黄褐	普通	体部外面縦位の平行叩き、内面同心円状の当て具痕	西部下層	5%

第75号住居跡 (第87・88図)

位置 調査区北部北東寄りのH14a1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第121号住居跡を掘り込み、第74号住居、第395号土坑、第22号溝、第15号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 一辺約5.0mの方形で、主軸方向はN-31°-Wである。壁高は15~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は擾乱部を除いて巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで92cm、袖部幅88cmである。壁外への掘り込みは、第74号住居に掘り込まれているため確認できない。袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じり砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面よりわずかに低くなっており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がり、中央部に土製支脚が直立して据えられている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック多量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量

ピット 6か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは60~74cmである。P5は深さ56cmで、竈と対峙する位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ25cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南壁際の中央寄りに付設され、平面形は一辺約70cmの方形と推定される。深さは50cmを測り、壁は直立して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

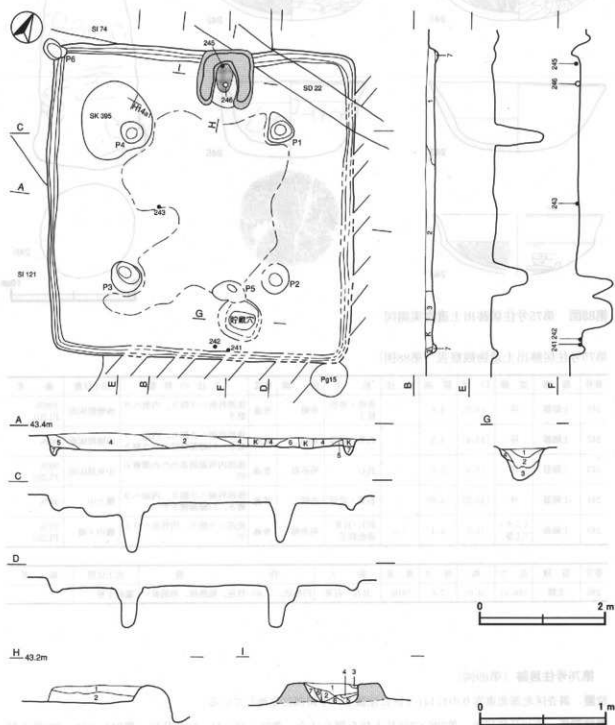
- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化物少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、ロームブロック・炭化物少量
- 4 褐色 ロームブロック多量

覆土 7層からなり、ロームブロックを含むブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 棕褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量
- 5 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化物粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

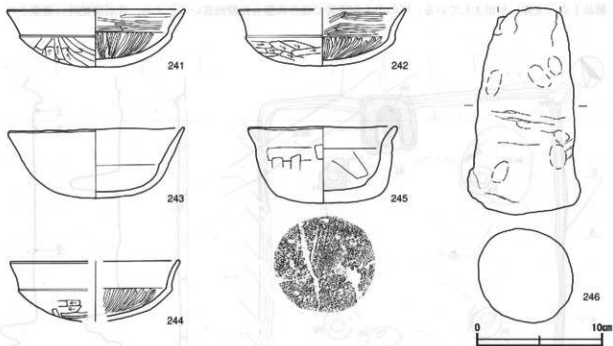
遺物出土状況 土師器片436点(坏125, 鉢18, 甕292, ミニチュア土器1), 須恵器片7点(坏2, 甕5), 土製品1点(支脚)が出土している。坏の出土が顕著で残存状態も比較的良好ことから、住居廃絶時に遺棄され



第87図 第75号住居跡実測図

たものと考えられる。241・242は南壁際床面，243は中央部床面，245・246は竈内下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は貯藏穴の位置が南壁際のやや中央寄りに位置しており，住居の形態的な特徴を顕著に残す好例な資料である。時期は出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第88図 第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
241	土師器	坏	14.2	4.6	-	雲母・赤色 粒子	赤褐	普通	体部外面へラ削り，内面へラ 磨き	南壁際床面	100% PL201
242	土師器	坏	[13.4]	4.5	-	石英・雲母	赤褐	普通	体部外面へラ削り，内面へラ 磨き，口縁部横位のへラ磨き	南壁際床面	80%
243	土師器	坏	13.8	5.6	-	長石	明赤褐	普通	体部内外面割落のための調整不 明	中央部床面	90% PL202
244	土師器	坏	[13.2]	(4.8)	-	石英・雲母	赤褐	普通	体部外面へラ削り，内面へラ 磨き，口縁部横ナデ	覆土中	40%
245	土師器	ミニチュ ア土器	11.7	6.1	7.5	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	底部へラ削り，内外面へラナ デ	竈内下層	95% PL202

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
246	支脚	(16.4)	(9.0)	7.6	(910)	長石・石英	円柱状，にびい橙色，被熱痕，指頭痕	竈内下層	

第76号住居跡 (第89図)

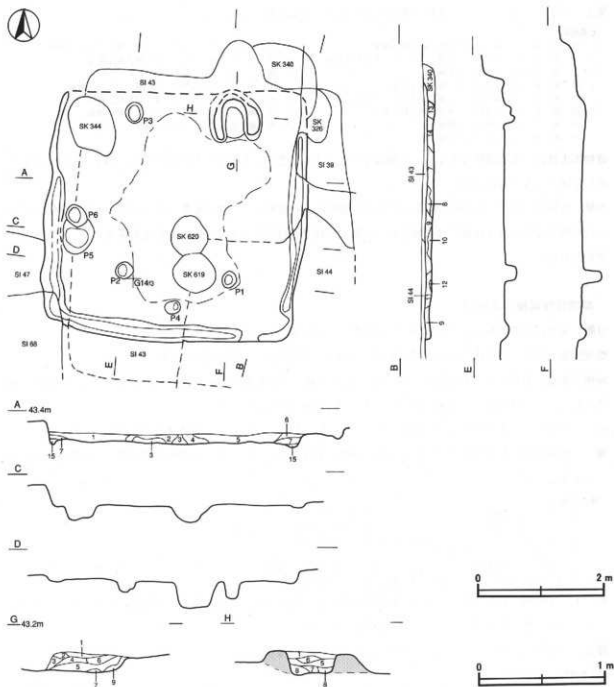
位置 調査区北部北東寄りのG14e3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第47号住居跡，第326・340号土坑を掘り込み，第39・43・44・68号住居，第344・619・620号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.2m、短軸4.0mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は30cmで、外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は北壁を除いて巡っていることから本来は全周していたものと思われる。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで70cm、袖幅82cmである。壁外への掘り込みはほとんどなく、袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じり砂質粘土を用いて構築されている。火床部は12cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。



第89図 第76号住居跡実測図

竪土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 8 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは16～29cmである。北東部に位置すると思われる主柱穴は検出されなかった。P4は深さ18cmで、南壁際の中心部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5・P6は深さ27cm・32cmで、性格は不明である。

覆土 15層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 11 褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 灰褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 | 12 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 14 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック微量 | 15 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土器器片25点(坏6、甕19)が出土しただけである。出土土器はいずれも細片で図示できたものはない。

所見 時期は、出土した土器器片の形状や重複関係から判断して7世紀前葉と考えられる。また、南へ約7.0mに位置する第64号住居跡とは主軸方向、規模、形状がほぼ同じであり、同一の集落を構成していた可能性が想定される。

第78号住居跡(第90図)

位置 調査区北部北東寄りのH14b4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第65号住居跡を掘り込み、第316・324・370号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁から、N-12°-Eを主軸とする長軸5.7m、短軸5.2mの方形と考えられる。確認された部分の壁高は7～14cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から北西部にかけてよく踏み固められている。壁溝は検出されなかった。

竈 北壁中央部に付設されたと思われるが、後世の耕作等を受けているため遺存状態が悪く、火床部と袖部の一部が確認された。

竪土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 4 濃い黄褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 5 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物微量

ピット 4か所。P1は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2～P4は深さは16～37cmで、性格は不明である。

覆土 18層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

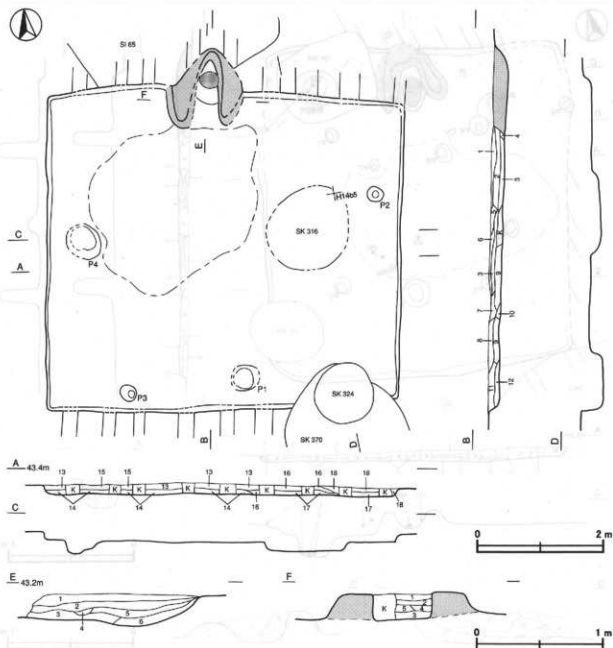
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|----------------------|
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ロームブロック少量・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 褐色 | ロームブロック中量・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック中量・炭化物微量 | 15 褐色 | ローム粒子多量・炭化粒子微量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック少量・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 16 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量・炭化粒子微量 | 17 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 10 黒褐色 | ロームブロック中量・炭化粒子微量 | 18 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片226点(坏19, 高坏2, 甕204, 甌1), 須恵器片4点(坏1, 甕3)が出土している。それらの大部分は細片で図示できない。また、破断面も摩滅していることから、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと思われる。

所見 時期は、出土した坏・甕片の形状や重複関係から6世紀後半と考えられる。



第90図 第78号住居跡実測図

第79号住居跡 (第91・92図)

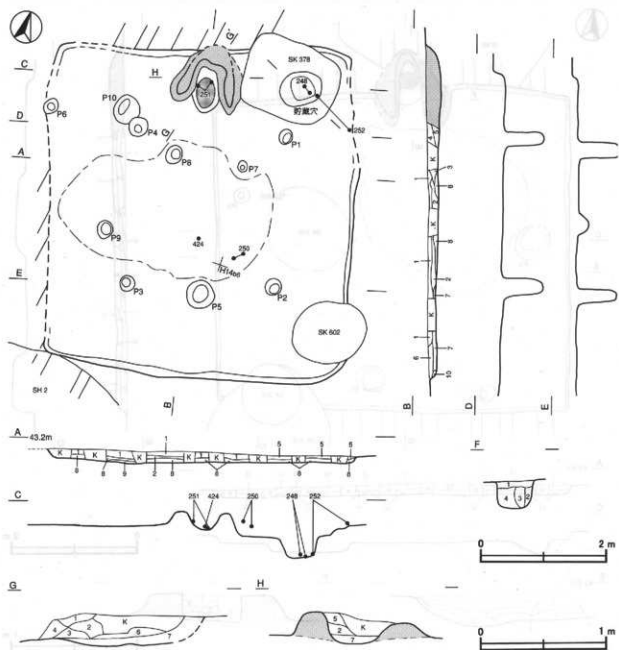
位置 調査区北部北東寄りのH14a5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第2号方形竈穴遺構を掘り込み、第378・602号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺約5.0mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。確認された壁高は6~19cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部に付設されており、規模は突口部から煙道部まで88cm、袖部幅112cmである。煙道部は擾乱を受けており、壁外への掘り込みは不明である。火床面は床面よりわずかに低くなっており、火熱を受けて赤変硬化している。



第91図 第79号住居跡実測図

礫土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・粘土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量
- 7 におい褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 10か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは62～65cmである。P5は深さ27cmで、竈と対峙する位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P10は深さ21～41cmで、性格は不明である。
貯蔵穴 上層を第378号土坑に掘り込まれているため、全体の形状は把握できないが、北東コーナー部に付設されている。平面形は長径70cm、短径54cmの長方形を呈し、深さは47cmであり、底面は平坦で壁は直立して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ロームブロック・炭化粒子中量

覆土 10層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 4 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 6 黒色 ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック中量
- 7 黒色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 8 黒褐色 ローム粒子中量
- 9 黒褐色 ロームブロック微量
- 10 褐色 ロームブロック少量

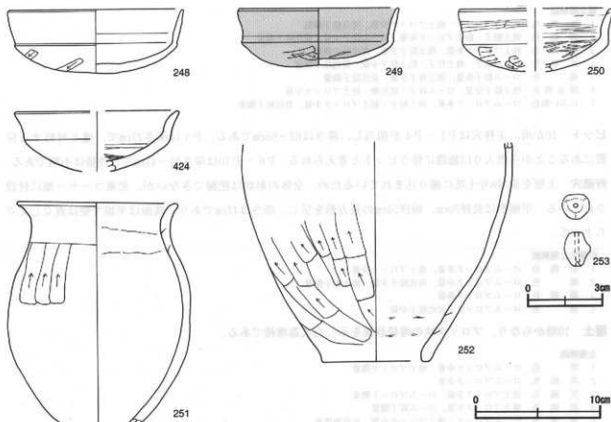
遺物出土状況 土師器片678点(坏148, 高坏2, 埴1, 甕525, 甌2), 須恵器片7点(坏5, 甕2), 土製品1点(土玉)が出土している。248・249・252は貯蔵穴, 250は中央部上層から出土している。251は、竈内から出土した破片が接合したもので、竈内で使用され、そのまま遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、貯蔵穴・竈内より出土した坏・甕の形状より6世紀前半と考えられる。

第79号住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
248	土師器	坏	13.8	5.0	-	長石	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	貯蔵穴底面	60%
249	土師器	坏	12.6	4.7	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	貯蔵穴覆土中	70% 赤彩
250	土師器	坏	[12.0]	(5.0)	-	石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き, 口縁部横位のヘラ磨き	中央部上層	30%
424	土師器	坏	[13.0]	(4.8)	-	長石・石英	におい橙	普通	体部外面ナデ, 内面ヘラ磨き	中央部床面	20%
251	土師器	甕	12.6	(17.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	竈内下層	80%
252	土師器	甌	-	(17.4)	8.4	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面下位ヘラ削り, 内面ナデ	貯蔵穴底面	40%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
253	土玉	1.3	1.1	0.15	1.22	土	ナデ, におい黄褐色, 片面穿孔	覆土中	



第92図 第79号住居跡出土遺物実測図

第82号住居跡 (第93図)

位置 調査区北部北東寄りのH14c5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第2号方形竪穴遺構を掘り込み、第90号住居、第622号土坑、第18号溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁と竈から、N-15°-Wを主軸とする一辺約3.0mの方形と推定される。確認された北壁の高さは15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

竈 攪乱を受けているため全体の形状は不明であるが、焚口部から煙道部まで120cm、袖部幅100cmで、北壁の中央部を壁外に50cmほど掘り込んで構築されている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 灰黄褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土ブロック微量 |
| 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量 | |
| 5 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | |

ピット 検出されなかった。

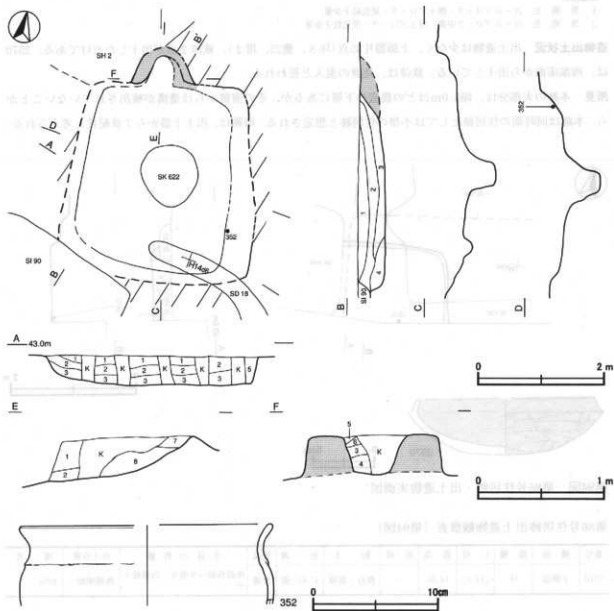
覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 極暗褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片279点(坏63, 高坏4, 甕212), 須恵器片11点(坏6, 甕5)が出土している。床面から出土したものはなく、大部分は破断面が摩滅し、住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられ

る。352は南東部中層から出土している。
 所見 本跡は竈の煙道部を壁外に大きく掘り込んで構築し、出土した破片がいずれも古墳時代後期の所産と考えられることから6～7世紀代と考えられる。



第93図 第82号住居跡・出土遺物実測図

第82号住居跡出土遺物観察表 (第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特型	出土位置	備考
352	土脚器	釜	[19.8]	(6.4)	—	灰石-石灰小礫	にぶい黄褐色	普通	内面ヘラナデ・口縁部横ナデ	南東部中層	5%

第86号住居跡 (第94図)

位置 調査区北部南端のH13i0区に位置し、平坦部に立地している。
 重複関係 北西部分で第128・133号住居に、北東部分で第649号土坑にそれぞれ掘り込まれている。
 規模と形状 南側部分は農道のため、南北軸1.2m、東西軸1.6mだけが確認され、その形状から、N-7°-

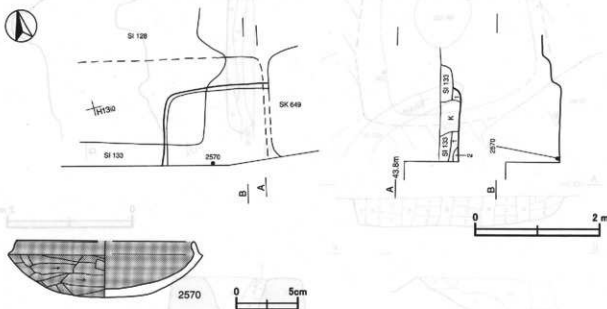
Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は北壁で16cmを測り、外傾して立ち上がっている。
 床 ほぼ平坦で、壁際を除いた床全体が硬化している。壁溝は認められなかった。
 覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片35点(坏8, 甕25, 塔2), 鉄滓2点が出土しただけである。2570は、西部床面から出土している。鉄滓は、後世の混入と思われる。

所見 本跡の大部分は、幅5.0mほどの農道の下層にあるが、その南側からは遺構が検出されていないことから、本跡は同時期の住居跡としては小型の住居跡と想定される。時期は、出土土器から7世紀代と考えられる。



第94図 第86号住居跡・出土遺物実測図

第86号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2570	土師器	坏	[14.0]	(4.5)	-	長石・雲母	ぶい橙	普通	体部外面へタ削り、内面横ナ	西部床面	40%

第87号住居跡 (第95図)

位置 調査区北部南東寄りのH14e1区に位置し、平坦部に立地している。
 重複関係 第10号溝に掘り込まれている。
 規模と形状 遺存するピットの位置から、N-15°-Wを主軸とする一辺約3.0mの方形と推定される。確認された壁高は16cmで、外傾して立ち上がっている。
 床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。
 竈 第10号溝跡に掘り込まれていると考えられ、遺存していない。
 ピット 3か所。P1～P3がいずれも主柱穴で、深さは36～50cmである。南西部に位置すると思われる主柱

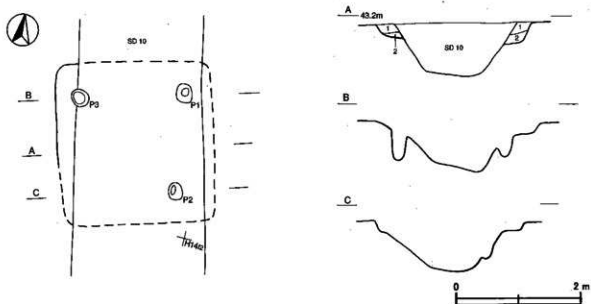
穴は検出されなかった。

覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片22点(坏11, 甕11), 須恵器片4点(甕)が出土しただけである。所見 本跡は第10号溝に掘り込まれているため出土遺物も少なく、住居全体の形状も把握できないが、出土した土師器片の形状から時期は古墳時代後期と考えられる。



第95図 第87号住居跡実測図

第89号住居跡 (第96図)

位置 調査区北部南東寄りのH14d5区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 一辺約3.0mのN-84°-Eを主軸とする方形である。壁高は20~35cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中心部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 大部分が後世の耕作等を受けており、火床部と袖部の一部が検出されただけである。

ピット 3か所。主柱穴はP1~P3が相当し、深さは20~45cmである。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されており、長径65cm, 短径54cmの楕円形で、深さは40cmを測る。底面は平坦であり、壁は直立して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物微量

覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

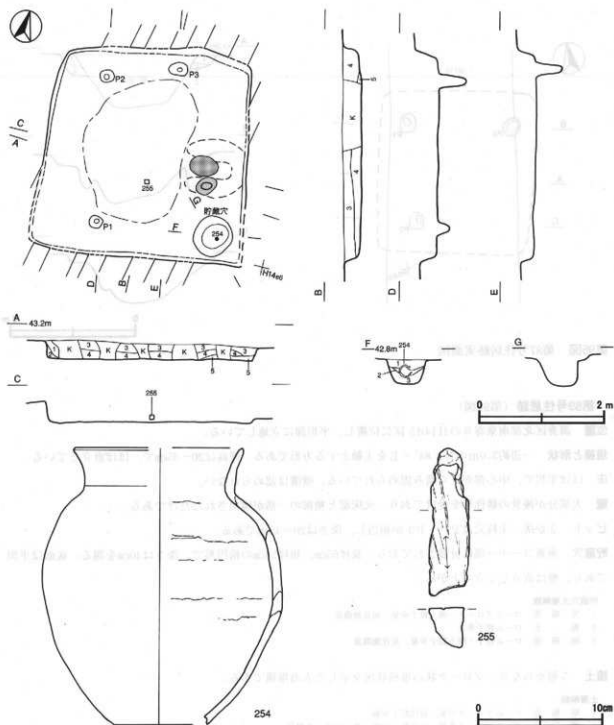
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量

- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
 5 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片177点(坏40, 寛136, 瓶1), 石器1点(砥石)が出土している。ほとんどが細片で、図示できたものは少ない。254は貯蔵穴中層, 255は中央部下層から出土している。254は底部が大きく穿孔されて、破断面が摩擦し、瓶に転用されたものと考えられ火熱を受けている。

所見 時期は、貯蔵穴から出土した瓶や土師器坏片の形状から6世紀前半と考えられる。



第96図 第89号住居跡・出土遺物実測図

第89号住居跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
254	土師器	甕	[13.2]	(22.0)	7.4	長石・石英・雲母	にぶい黒	普通	体部内・外面ナデ, 内面輪積み痕	貯藏穴中層	60% 飯へ転用

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
255	砥石	(11.7)	(3.1)	(3.6)	(117.4)	砂岩	砥面一面, その他は破断面	中央部下層	

第94号住居跡 (第97図)

位置 調査区北部南東寄りのH14g3区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第96号住居に掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で検出され, 壁の立ち上がりは確認されなかったため, 炉を中心とした硬化面の広がりやピットの位置から判断して, N-20°-Eを主軸とする一辺約3.0mの方形と推定される。

床 ほぼ平坦で, 炉を中心として中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

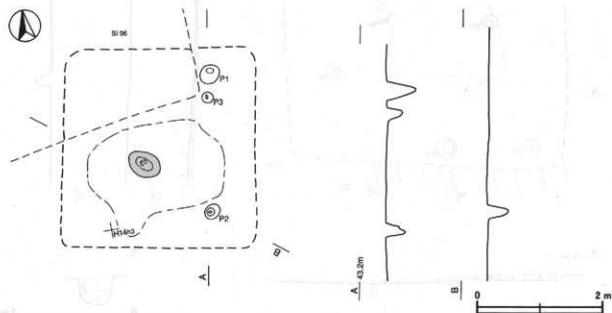
炉 ほぼ中央部に位置し, 長径50cm, 短径40cmの楕円形である。

ピット 3か所。主柱穴はP1・P2が相当し, 深さは48cm・34cmである。P3は深さ26cmで, 補助柱穴と考えられる。

覆土 検出されなかった。

遺物出土状況 出土土器は少なく, 土師器片1点(甕)が出土しただけである。

所見 時期は, 炉を有する住居形態から古墳時代中期以前と考えられる。



第97図 第94号住居跡実測図

第96号住居跡 (第98・99図)

位置 調査区北部南東寄りのH14f2区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第94号住居跡を掘り込んでいます。

規模と形状 遺存している竈と硬化面の広がりから、 $N-2^{\circ}-W$ を主軸とする一辺約4.5mの方形と推定される。北壁の高さは5cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

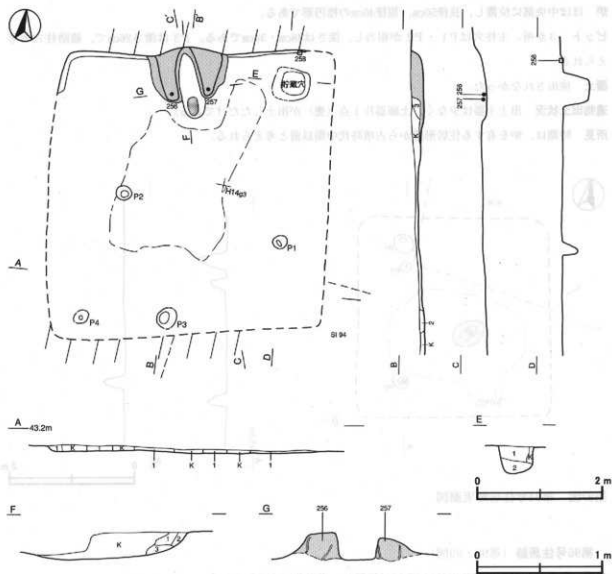
床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 北壁中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで115cm、袖部幅122cmである。壁外への掘り込みは16cmで、袖部は床面と同じ高さの地山面上にローム土混じり砂質粘土を用いて構築されている。火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。袖部には、土師器甕が構築材として使用されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・流土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・流土粒子少量、粘土ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、流土粒子微量

ピット 4か所。主柱穴はP1が相当し、深さは26cmである。P3・P4は深さ35cm前後で、壁際に位置するが、性格は不明である。また、P2は深さ59cmで、性格は不明である。



第98図 第96号住居跡実測図

貯蔵穴 北東コーナー部に付設され、平面形は径約65cmの方形を呈する。深さは45cmを測り、底面は平坦で、壁は直立して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

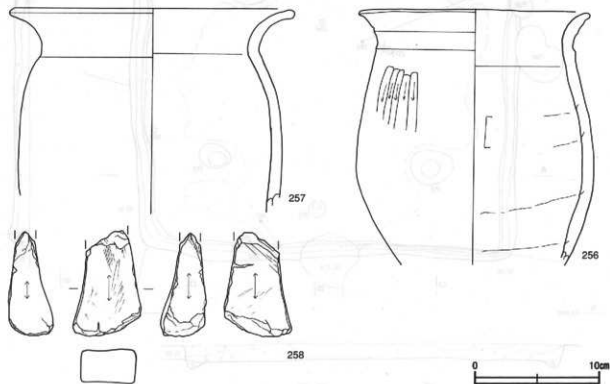
覆土 3層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片168点(坯15, 甕153), 須恵器片2点(甕), 石器1点(砥石)が出土している。出土土器はいずれも細片で床面から確認されたものは少ない。256・257は竈袖部の構築材として利用されたもので、そのまま遺棄されたものである。また、258は北壁際下層から出土している。

所見 本跡から出土した土師器甕は、竈袖部構築材として使用され、同様に第56号住居跡からも出土している。双方は同時期に集落を形成していた可能性があり、出土土器から時期は7世紀前半と考えられる。



第99図 第96号住居跡・出土遺物実測図

第96号住居跡出土遺物観察表(第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
256	土師器	甕	18.3	(20.3)	-	長石・石英・小礫	にぶい橙	普通	体部外面上位へツリ削り、内面へツリナデ	竈袖部内	40%
257	土師器	甕	22.8	(16.4)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ナデ	竈袖部内	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
258	砥石	(8.3)	(5.5)	(3.6)	(156.6)	凝灰岩	砥面四面, 上部欠損	北壁際下層	

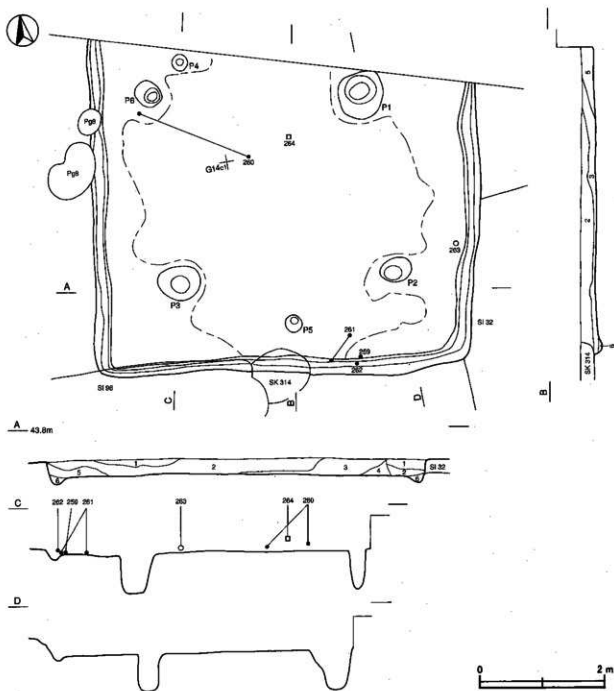
第97号住居跡 (第100・101図)

位置 調査区北部北寄りのG14c2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第32号住居跡を掘り込み、第98号住居、第314号土坑、第8号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、東西軸約6.0m、南北軸5.3mが確認されただけであり、南・西壁とピットの位置から、N-11°-Eを主軸とする方形と推定される。壁高は26~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと考えられる。



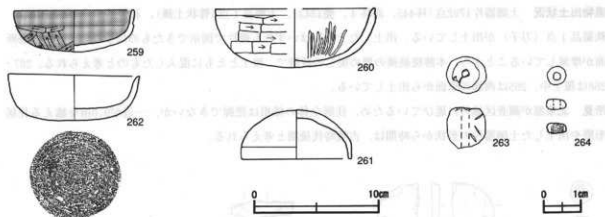
第100図 第97号住居跡実測図

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは53～64cmである。P5は深さ35cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ44cmで、性格は不明である。
 覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片1065点（坏353、高坏1、甕703、甌8）、須恵器片29点（坏13、甕10、蓋5、瓶1）、土製品1点（土玉）、石製品1点（白玉）が出土している。260は西部下層、259・261・262は南壁際床面から出土している。261は完形ではないものの猿投産と思われる、262はほぼ完形で、胎土から在地産と思われる。また、263・264はそれぞれ東壁際下層・中央部上層からの出土で、264は埋土とともに混入したものとされる。所見 本跡は北部が調査区域外に延びているため、住居全体の様相は把握できないが、出土した坏の形状が小型化されていることや、出土した土器などから、時期は7世紀中葉と考えられる。



第101図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
259	土師器	坏	9.6	3.3	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	南壁際床面	85% PL202
260	土師器	坏	[12.6]	4.6	-	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	西部下層	30%
262	須恵器	坏	10.4	3.6	4.5	長石・石英	灰	普通	体部ロクロ整形、底部回転へラ切り	南壁際床面	90% PL202
261	須恵器	甕	8.5	3.9	-	長石・石英	灰	普通	体部ロクロ整形、天井部回転へラ切り	南壁際床面	70% 猿投産 PL202

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
263	土玉	1.1	1.1	0.25	1.16	土	片面穿孔、にぶい褐色	東壁際下層	PL258

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
264	白玉	0.5	0.3	0.2	0.16	滑石	側面が直線的な円筒状、片面穿孔	中央部上層	PL265

第103号住居跡 (第102・103図)

位置 調査区北部北寄りのG13b9区に位置し、平坦部に立地している。
重複関係 第228号土坑を掘り込み、第101・102・104・106～109号住居、第211・220・225～227・467号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁とピットの位置から、N-3°-Wを主軸とする一辺約9.0mの方形と推定される。南壁の高さは24cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていたことから、全周していたものと考えられる。

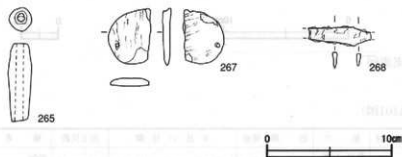
竈 大部分が調査区域外に位置すると考えられ、焚き口のみ確認された。

ピット 19か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは62～85cmである。P5・P6は深さ37cm・25cmで、竈と対峙に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8・P10・P11・P16・P18は深さ20～41cmで、主柱穴と直線的に配置されていることからの補助的な役割を果たした柱穴と考えられる。その他のピットの深さは17～25cmで、性格は不明である。

覆土 遺存状態が悪く、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片1792点(坏445, 高坏1343), 土製品1点(管状土錘), 石製品1点(双孔円板), 鉄製品1点(刀子)が出土している。出土した土器片はいずれも細片で図示できたものは少ない。また、破断面が摩滅していることから、本跡廃絶後の埋め戻しの段階で、埋土とともに混入したものと考えられる。267・268は覆土中、265は西部の床面から出土している。

所見 北東部が調査区域外に延びているため、住居全体の様相は把握できないが、一辺が9.0mを越える住居形態や出土した土師器片の形状から時期は、古墳時代後期と考えられる。



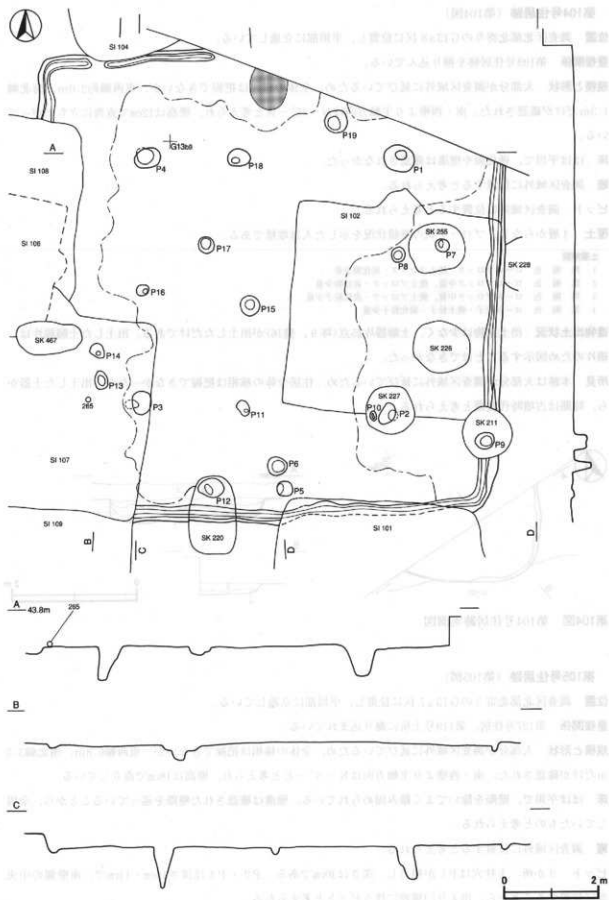
第102図 第103号住居跡出土遺物実測図

第103号住居跡出土遺物観察表 (第102図)

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特	微	出土位置	備考
265	管状土錘	6.3	1.8	0.6	17.7	土	ナデ, 明赤褐色		西部床面	PL259

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特	微	出土位置	備考
267	双孔円板	2.0	0.4	0.1	(1.72)	滑石	平坦部は縦・横方向の研磨, 片面穿孔		覆土中	PL264

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	微	出土位置	備考
268	刀子	(5.0)	1.5	0.3	(7.39)	鉄	刃先部・基部欠損		覆土中	



第103図 第103号住居跡実測図

第104号住居跡 (第104図)

位置 調査区北部北寄りのG13a8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、全体の様相は把握できないが、東西軸約2.0m、南北軸1.3mだけが確認された。南・西壁より主軸方向は $N-15^{\circ}-W$ と考えられ、壁高は12cmで直角に立ち上がっている。

床 ほほは平坦で、硬化面や壁溝は確認されなかった。

竈 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 調査区域外に位置すると考えられる。

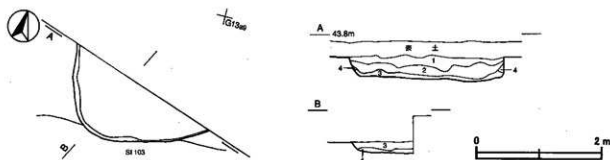
覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片25点(坏9, 甕16)が出土しただけである。出土した土師器片は、細片のため図示することはできなかった。

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため、住居全体の様相は把握できなかったが、出土した土器から、時期は古墳時代後期と考えられる。



第104図 第104号住居跡実測図

第105号住居跡 (第105図)

位置 調査区北部北寄りのG13a7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第127号住居、第119号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、全体の様相は把握できないが、東西軸6.8m、南北軸3.3mだけが確認された。南・西壁より主軸方向は $N-3^{\circ}-E$ と考えられ、壁高は18cmで直立している。

床 ほほは平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を過っていることから、全周していたものと考えられる。

竈 調査区域外に位置すると考えられる。

ピット 3か所。主柱穴はP1が相当し、深さは30cmである。P2・P3は深さ16cm・14cmで、南壁側の中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

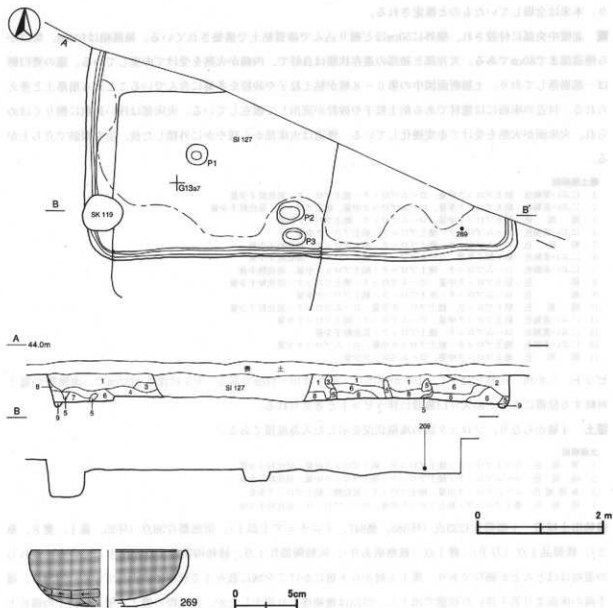
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物少量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 8 黒暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量

(図105) 第105号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片106点(坏103, 堿3)が出土している。これらの大部分は細片で、図示できたものは少ない。269は南東部下層から出土している。

所見 本跡は大部分が調査区域外に延びているため、住居全体の様相は把握できないが、出土した坏片の形状などから、時期は古墳時代後期の7世紀代と考えられる。



第105図 第105号住居跡・出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
269	土師器	環	[12.2]	4.5	-	石英・赤色 粒子	にぶい濁	普通	体部外面下位へう崩り、内面 ナデ	南東部下層	40%

第108号住居跡 (第106図)

位置 調査区北部北寄りのG13b7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103号住居跡を掘り込み、第106・107号住居と第212・218号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.8m、短軸4.0mの長方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は17~35cmであり、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝が北東コーナーと南東コーナーを除いて周回しており、本来は全周していたものと推定される。

竈 北壁中央部に付設され、壁外に50cmほど掘り込んで砂質粘土で構築されている。竈口幅は100cm、竈口から煙道部まで80cmである。天井部と袖部の遺存状態は良好で、内側が火熱を受けて赤変している。竈の竈口側は一部崩落しており、土層断面図中の第6~8層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでいることから崩落土と考えられる。付近の床面には竈材である粘土粒子や砂粒が流出して散在している。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに外傾した後、急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 にぶい黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 6 にぶい黄褐色 粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量
- 8 褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 10 暗褐色 粘土ブロック・焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 11 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 12 にぶい黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 13 にぶい赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック少量
- 14 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量

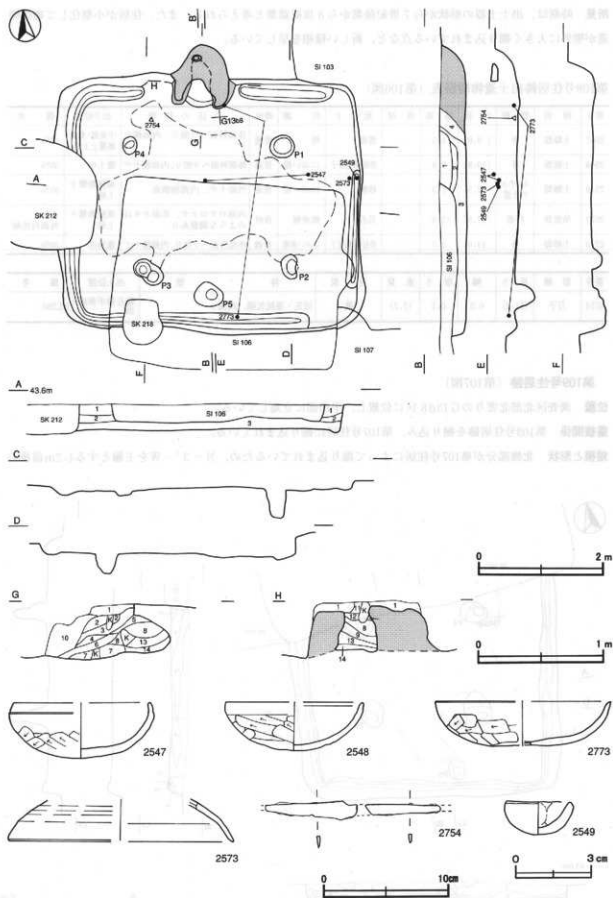
ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは10~44cmである。P5は深さが32cmで、南壁際の竈と対峙する位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片1233点 (坏385, 甕847, ミニチュア土器1), 須恵器片36点 (坏25, 蓋1, 甕8, 瓶2), 鉄製品1点 (刀子), 礫1点 (被熱痕あり), 灰釉陶器片1点, 緑釉陶器片1点が出土している。これらの遺物はほとんどが細片であり、覆土上層から下層にかけて全域に散在する状態で出土している。2754は、竈手前の床面より若干干いた状態で出土し、2773は竈袖部より出土したが、南壁際の覆土下層より出土の破片と同一個体である。なお、2549と2573は、覆土上層より出土しており、混入の可能性があるが、覆土中の灰釉陶器片と緑釉陶器片は、攪乱による混入である。



第106图 第108号住居跡・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器の形状から7世紀後葉から8世紀前葉と考えられる。また、住居が小型化して竈の煙道が壁外に大きく掘り込まれている点など、新しい様相を呈している。

第108号住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2547	土師器	坏	[9.9]	4.5	-	雲母	橙	普通	普通	体部外面へラ削り、内面横ナデ	中央部・北東部覆土上層	30%
2548	土師器	坏	[10.8]	3.9	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	普通	体部外面へラ削り、内面横ナデ	覆土中	35%
2549	土師器	ミニチュア土器	2.5	1.3	-	砂粒	にぶい橙	普通	普通	外面ナデ、内面指痕痕	東壁際覆土上層	95%
2573	須恵器	坏蓋	[17.8]	(3.4)	-	長石	暗赤褐	良好	良好	内面クロコナデ、外面カキ目のような調整あり。	東壁際覆土上層	5%
2773	土師器	坏	14.0	3.5	-	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	普通	体部外面へラ削り、内面横ナデ	竈基部	30%

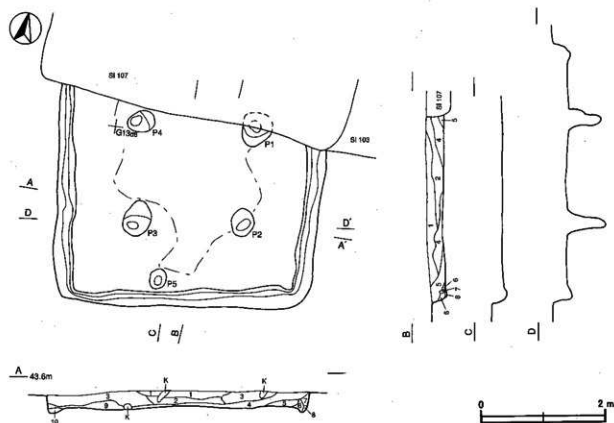
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2754	刀子	(11.2)	0.5	0.3	(7.7)	鉄	切先・茎尻欠損、両側カ	竈左袖手前床	PL280

第109号住居跡 (第107図)

位置 調査区北部北寄りのG13d8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第103号住居跡を掘り込み、第107号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北側部分が第107号住居によって掘り込まれているため、N-3°-Wを主軸とする4.2m前後の



第107図 第109号住居跡実測図

方形または長方形と推定される。壁高は25cmほどであり、外方向に開き気味に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、全周していたと推定される。

竈 第107号住居に掘り込まれているため遺存していないが、北壁側に位置していたと考えられる。

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4が相当し、深さは51～70cmである。P5の深さは22cmで、南壁際のほぼ中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり、ロームブロックや焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量
- 9 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片340点（坏83、甕257）、須恵器片7点（坏5、甕1、盤1）、礫3点が全域に散在した状態で出土している。これらの遺物は覆土上層から下層に出土し、いずれも細片である。須恵器片は覆土上層より出土しており、混入したものである。

所見 土器はいずれも細片のため属層時期を明確にしないが、重複関係および出土土器から、時期は7世紀代と考えられる。

第112号住居跡（第108図）

位置 調査区北部北寄りのG13e8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第280号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.7m、短軸2.2mの長方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は25cmほどであり、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から出入り口部にかけてよく踏み固められている。壁溝は、北壁際の一部で認められる。

竈 北壁の東寄りに付設され、壁外に10cmほど掘り込んで砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで76cm、袖部幅80cmである。火床部は、10cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部より急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 極暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。深さは25cmで、配置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

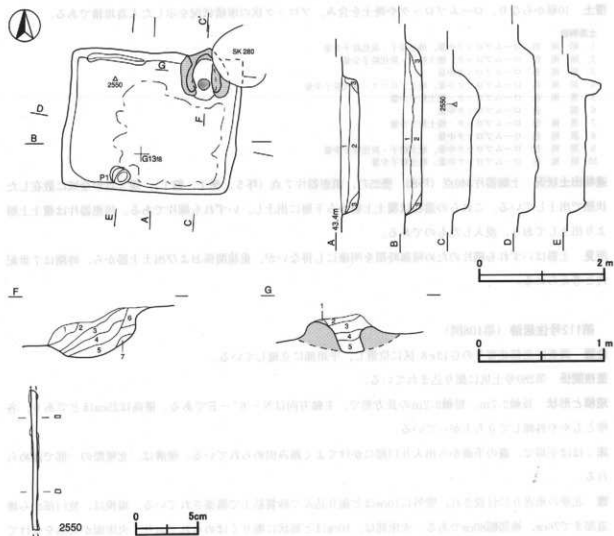
覆土 3層からなり、ロームブロックや焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片222点(坏45, 甕177), 須恵器片1点(甕), 鉄製品1点(鐵), 礫3点が出土している。これらの遺物は, 覆土中層から下層に出土し, 全域に散在している。2550の不明鉄製品は覆土中層から出土しており, 長さ11cmほどの棒状を呈している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀後半と考えられる。本跡も, 竈が壁中央より右に寄って付設されており, 当遺跡における住居形態の特徴の一つである。



第108図 第112号住居跡・出土遺物実測図

第112号住居跡出土遺物観察表(第108図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	備 考
2550	鐵	(11.2)	0.5	0.2~ 0.3	(7.7)	鐵	断面方形の棒状, 鉄鏝の基部	北西部覆土中層

第113号住居跡(第109・110図)

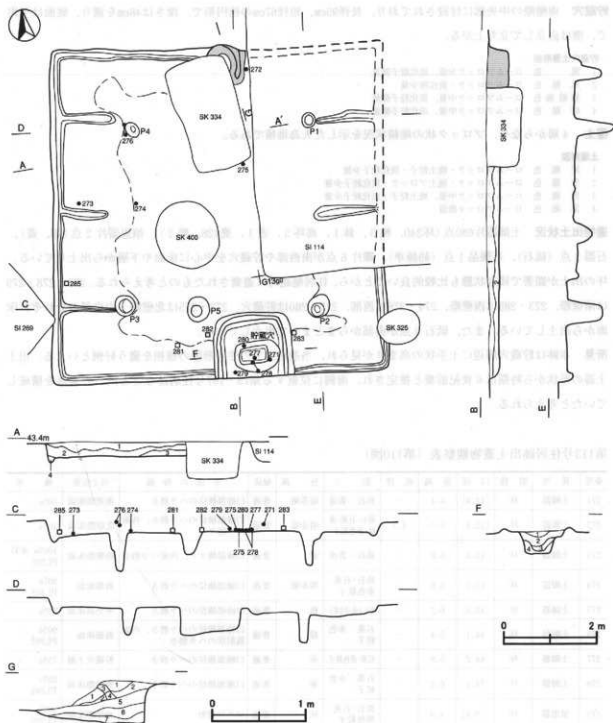
位置 調査区北部中央のG13f9区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第114・269号住居, 第325・334・400号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺約7.0mの方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は22~30cmで、ほぼ直立して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたものと思われる。また、東西壁寄りに間仕切り溝が認められる。

竈 第334号土坑に掘り込まれているため全体の形状は把握できないが、右袖部と煙道部の一部が検出されただけである。



第109図 第113号住居跡実測図

甕土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・粘土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 にぶい褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子中量
- 5 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 6 黒色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～80cmである。P5は深さ48cmで、甕と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南壁際の中央部に付設されており、長径95cm、短径67cmの楕円形で、深さは48cmを測り、底面は平坦で、壁は直立して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

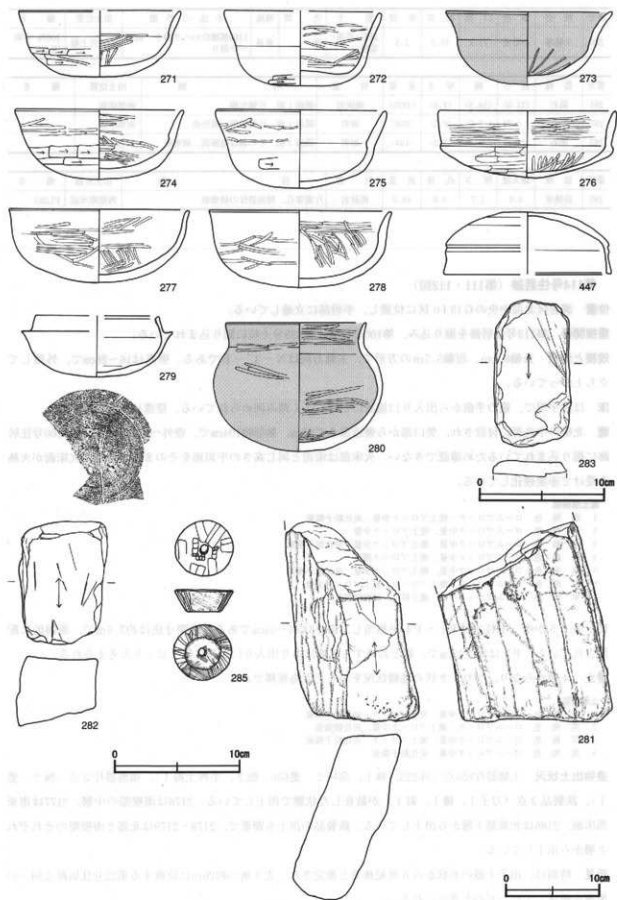
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片680点(坏240, 碗3, 鉢1, 高坏5, 壺1, 甕428, 甌2), 須恵器片2点(坏, 蓋), 石器3点(砥石), 石製品1点(紡錘車), 礫片6点が南西部や貯蔵穴を中心に床面や下層から出土している。坏の出土が顕著で残存状態も比較的良好ことから、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。271・278・279は南壁際, 273・285は西壁際, 274・276は西部, 277・280は貯蔵穴, 272・275は北壁際・中央部のそれぞれ床面から出土している。また、砥石3点が南部からまとも出土している。

所見 本跡は貯蔵穴周辺に土手状の高まりが見られ、当遺跡内での住居形態の様相を窺う好例といえる。出土土器の形状から時期は6世紀前葉と推定され、南側に位置する第75・167号住居跡などと同一の集落を構成していたと考えられる。

第113号住居跡出土遺物観察表 (第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
271	土師器	坏	[12.9]	5.4	-	長石・雲母	暗赤褐	普通	口縁部横位のヘラ磨き	南壁際床面	50%
272	土師器	坏	[12.4]	6.0	4.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横位のヘラ磨き、外面ヘラ削り	北壁際床面	40%
273	土師器	坏	13.3	5.8	-	長石・雲母	赤	普通	口縁部横ナデ、内面ヘラ磨き	西壁際床面	100% 赤形 PL202
274	土師器	坏	13.3	5.6	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横位のヘラ磨き	西部床面	90% PL202
275	土師器	坏	[13.5]	6.2	-	胎土赤褐色	橙	普通	口縁部横位のヘラ磨き	中央部床面	55%
276	土師器	坏	14.1	5.4	-	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横位のヘラ磨き、内面放射状のヘラ磨き	西部床面	90% PL202
277	土師器	坏	14.2	5.9	-	石英・赤色粒子	赤	普通	口縁部横位のヘラ磨き	貯蔵穴上層	75%
278	土師器	坏	14.4	6.2	-	石英・赤色粒子	赤	普通	口縁部横位のヘラ磨き	南壁際床面	95% PL202
279	須恵器	坏	[9.6]	4.9	-	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	ロクロ整形	南壁際床面	30% PL203
447	須恵器	蓋	[13.3]	4.9	-	長石	灰	普通	ロクロ整形、天井部研磨痕	覆土中	40% PL202



第110图 第113号住居跡出土遺物実測図

番号	器種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
280	土師器	小形甕	11.1	10.2	3.3	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部横位のへう磨き、底部へう磨り	貯蔵穴上層	100% 赤彩 PL203

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
281	砥石	(21.0)	(18.9)	(7.0)	(4970)	凝灰岩	砥面1面、片側欠損	南部床面	
282	砥石	(9.7)	(7.0)	(6.3)	(658)	砂岩	砥面1面、片側欠損、被熱痕	南部床面	
283	砥石	(11.7)	(6.1)	(1.2)	(134)	砂岩	砥面2面、その他は破断面、研磨痕	南部床面	

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
285	紡錘車	4.6	1.7	0.8	49.3	凝灰岩	片面穿孔、背面斜位の研磨痕	西壁際床面	PL263

第114号住居跡 (第111・112図)

位置 調査区北部中央のG13f0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第113号住居跡を掘り込み、第100号住居、第339号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.1m、短軸5.5mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は16~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められている。埃溝は周囲している。

竈 北壁の中央部に付設され、焚口部から煙道部まで86cm、袖部幅104cmで、壁外への掘り込みは第100号住居跡に掘り込まれているため確認できない。火床部は床面と同じ高さの平坦面をそのまま使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは44~54cmである。柱間寸法は約3.6mで、規則的に配置されている。P5は深さ42cmで、竈と対峙する位置にあり出入り口施設に伴うピットと考えられる。

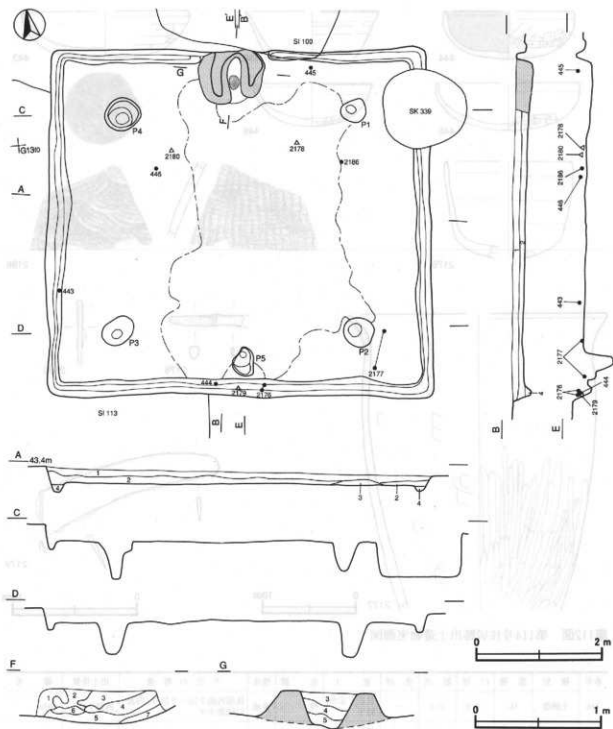
覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片859点(坏223, 鉢1, 高坏2, 甕630, 甌2, 手捏土器1), 須恵器片3点(碗2, 甕1), 鉄製品3点(刀子1, 鎌1, 釘1)が散在した状態で出土している。2176は南壁際の中層, 2177は南東部床面, 2186は北東部下層から出土している。鉄製品の出土も顕著で, 2178・2179は北部と南壁際のそれぞれ下層から出土している。

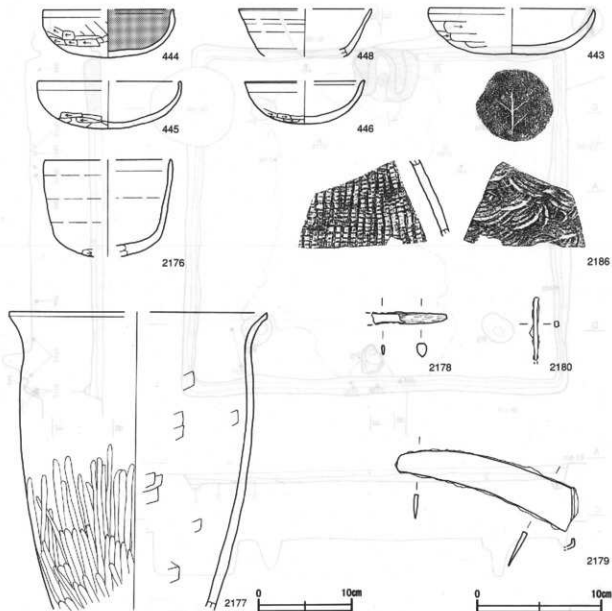
所見 時期は, 出土土器の形状から6世紀後半と推定され, 北々東へ約26mに位置する第22号住居跡と同一の集落を構成していたものと考えられる。



第111図 第114号住居跡実測図

第114号住居跡出土遺物観察表 (第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
443	土師器	坏	[13.3]	3.7	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り、内面割落の為調整不明	西壁際下層	25% 疑木炭灰
444	土師器	坏	(10.4)	3.8	-	長石・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面へラ削り、内面・口縁部ナデ	南壁際中層	50%
445	土師器	坏	[11.2]	3.8	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下位へラ削り、内面・口縁部ナデ	北部中層	30%



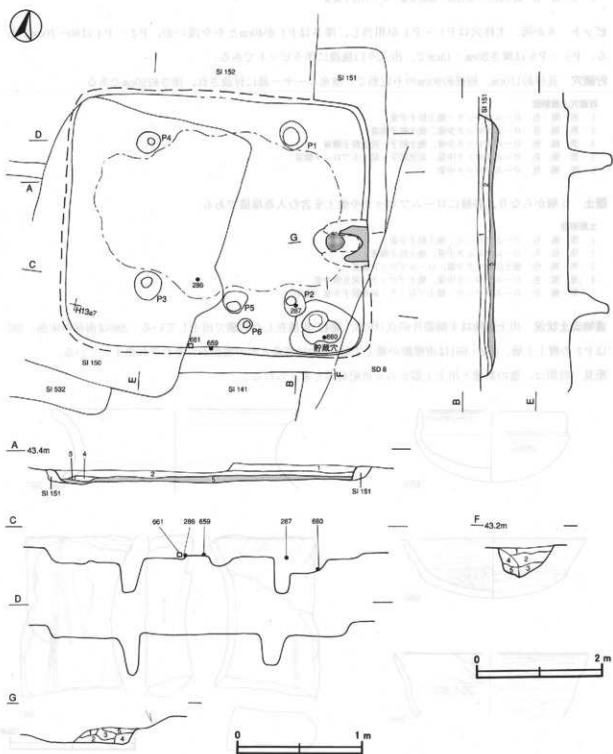
第112図 第114号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
446	土師器	坏	[9.6]	3.4	-	長石・赤色 粒子	橙	普通	体部外面下位へラ削り、内面・口縁部ナデ	西部下層	40%
448	土師器	碗	[10.6]	(3.8)	-	長石・赤色 粒子	灰	普通	ロクロ整形	覆上中	15%
2176	須恵器	椀	[10.7]	7.7	-	長石	灰	普通	ロクロナデ、底部多方向のへラ削り	南壁際中層	40%
2177	土師器	甕	[27.2]	(31.5)	-	石英・真母・ 赤色粒子	にょい橙	普通	体部外面へラ磨き、内面へラナデ	南東部床面	30%
2186	須恵器	甕	-	(6.1)	-	真母・黒色 粒子	灰白	普通	体部外面格子状の明き、内面同心円状の当て具痕	北東部下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2178	刀子	(6.1)	(1.0)	0.8	(4.2)	鉄	切先・茎尻欠損、茎部柄残存	北部下層	
2179	鎌	(14.1)	(3.3)	0.4	(75.8)	鉄	基部欠損、刃部は若干彎曲	南壁際下層	PL281
2180	釘か	(5.0)	0.4	0.5	(3.5)	鉄	臀部先端欠損、臀部は断面方形	北部中層	

第116号住居跡 (第113・114図)

位置 調査区北部のG13j7区に位置し、平坦部に立地している。
 重複関係 第141・151号住居跡を掘り込み、第150・152・532号住居、第8号溝にそれぞれ掘り込まれている。
 規模と形状 長軸約4.8m、短軸約4.2mの長方形で、主軸方向はN-76°-Eである。壁高は約20cmで、やや外傾して立ち上がっている。



第113図 第116号住居跡実測図

床 全面が貼床である。ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈 東壁のやや南寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約90cm、袖部幅は約75cm、壁外への掘り込みはない。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化物・砂粒少量、ローム粒子微量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さはP1が40cmとやや浅いが、P2～P4は60～70cmである。P5・P6は深さ20cm・13cmで、出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 長径約110cm、短径約90cmの不定形で、南東コーナー部に付設され、深さ約50cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

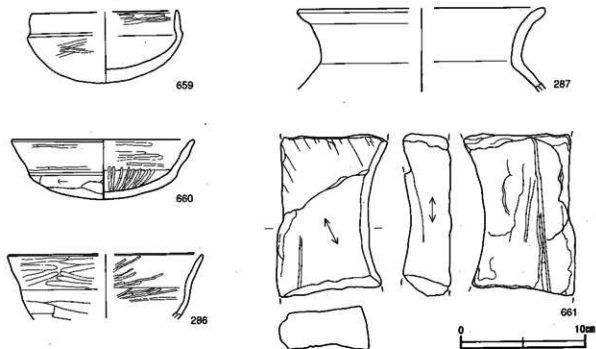
覆土 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量（貼床）

遺物出土状況 出土遺物は土師器片65点(坏23、甕42)が散在した状態で出土している。286は南部の床面、287はP2の覆土上層、659・661は南壁際の覆土下層、660は貯蔵穴内の底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、甕の形態と出土土器から6世紀前半と考えられる。



第114図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物観察表 (第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手技の特徴	出土位置	備考
286	土師器	杯	[15.3]	(5.2)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	内外面ヘラ磨き	南側床面	10%
659	土師器	杯	[11.5]	5.7	-	砂鉄・長石・石英	明赤褐色	普通	内面磨面荒れ、口辺部横ナデ	南壁際下層	45% 破断面確認
660	土師器	杯	14.4	4.7	-	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	貯蔵穴内下層	100% PL207
287	土師器	蓋	[19.3]	(6.7)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部横ナデ	P 2 内上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
661	砥石	(12.9)	(8.9)	(3.7)	(557)	凝灰岩	砥面二面、その軸は破断面	南壁際下層	

第117号住居跡 (第115図)

位置 調査区北部中央のG13h9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第119号住居、第341号土坑、第8・9号溝、第11号井口にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 遺存している竈・北東壁・ピットなどから、N-15°-Wを主軸とする一辺約5.6mの方形と推定される。確認された壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。第119号住居に掘り込まれているため、硬化面は北部のみ確認された。壁際は北壁際だけに検出された。

竈 北壁の中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで104cm、袖部幅122cmで、壁外への掘り込みは25cmである。火床部は8cmほど風状に掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	11	暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量			
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	12	暗赤褐色	炭化粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック少量
4	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	13	暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子少量
5	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量			
6	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	14	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
7	暗赤褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	15	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
8	暗赤褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量	16	にぶい黄褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック少量、炭化物微量
9	にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	17	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
10	にぶい黄褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量	18	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
			19	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さはP1・P4が85cmで、P2・P3が21cm・45cmとやや浅い。

貯蔵穴 南東コーナー寄りに付設されており、長径66cm、短径58cmの楕円形で、深さは43cmを測り、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

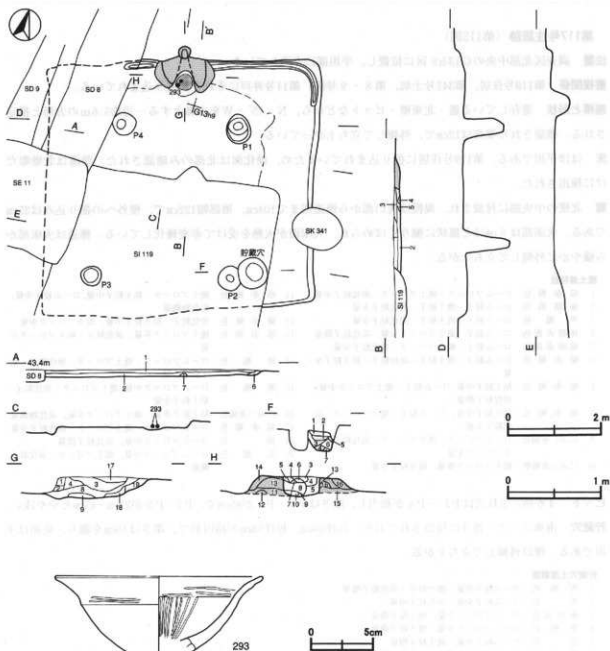
1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
6	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
7	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 暗褐色 粘土ブロック多量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量

遺物出土状況 土師器片255点(坏58, 高坏2, 甕195)が出土している。ほとんどが細片で図示できたものは少なく、破断面が磨滅しているため住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。293は竈内下層から伏せられた状態で出土しているが、火熱を受けた痕跡はない。



第115図 第117号住居跡・出土遺物実測図

所見 竈内下層から伏せられて出土した土師器の坏は火熱を受けておらず、住居廃絶時に意図的に遺棄されたものと考えられる。本跡の時期は、7世紀前葉に比定される第119号住居に掘り込まれていることや、出土した土器から6世紀中葉と考えられる。

第117号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
293	土師器	高坏	16.4	(6.1)	—	石英・赤色 粒子	赤	普通	口縁部内・外面境位のヘラ磨き	竈内下層	30%

第118号住居跡 (第116～119図)

位置 調査区北部中央のG13g8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第268号住居跡・第9号溝跡を掘り込み、第269号住居、第350号土坑、第8号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺3.7mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は36cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から東部にかけてよく踏み固められている。壁溝は北東コーナーを除いて巡っていることから、全周していたものと考えられる。

竈 北壁中央部に付設されており、規模は笑口部から煙道部まで約70cm、袖部幅約90cmである。壁外への掘り込みは約8cm、火床部は約24cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

煙道は火床部から緩やかに傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 にぶい褐色 粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土粒子少量
- 7 赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量

ピット 1か所。深さは65cmで、南壁際に位置するが性格は不明である。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

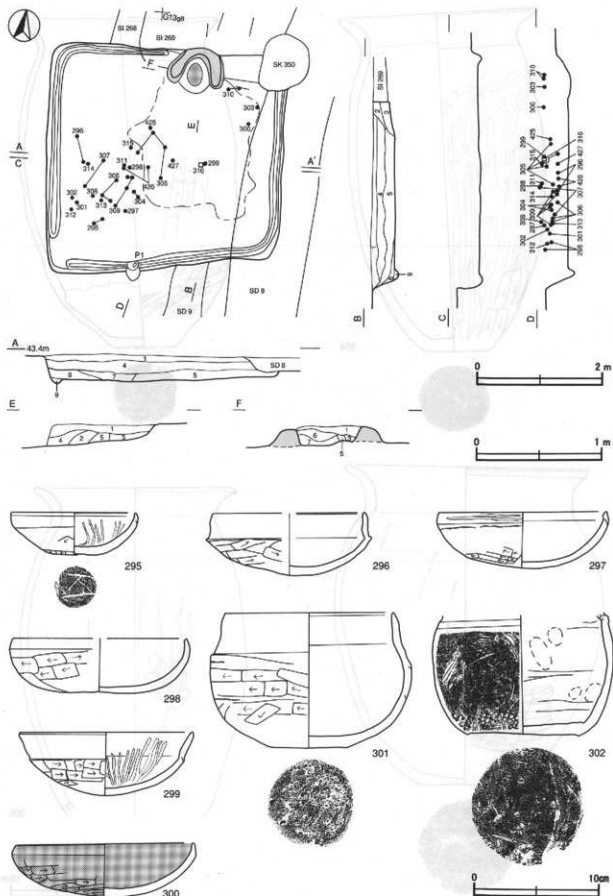
遺物出土状況 土師器片1157点(坏296, 高坏2, 壺2, 甕846, 瓶4, 手捏土器7), 須恵器片9点(坏1, 壺2, 甕6), 置竈2点, 石器1点(砥石), 礫片4点が出土している。出土遺物は南西部を中心に中層から上層にかけて出土し、いずれも完形または完形に近い状態で検出されていることから、本跡は住居廃絶後の埋め戻しの段階で一括投棄されたものと考えられる。また、手捏土器の出土も顕著で、西部から中央部の中層から上層にかけて出土している。

所見 本跡は竈の位置や硬化面の広がりから西部に空間を有しており、出土遺物は質量共に他の住居跡を優越している。これらは1軒の食膳を焼くには十分すぎる数であり、手掘土器の出土も顕著で、祭祀的行為後の投棄物の可能性も想定される。西側の空間の存在など当遺跡内での住居形態の特徴を顕著に残す好例な資料といえる。時期は出土土器から7世紀前後と考えられる。

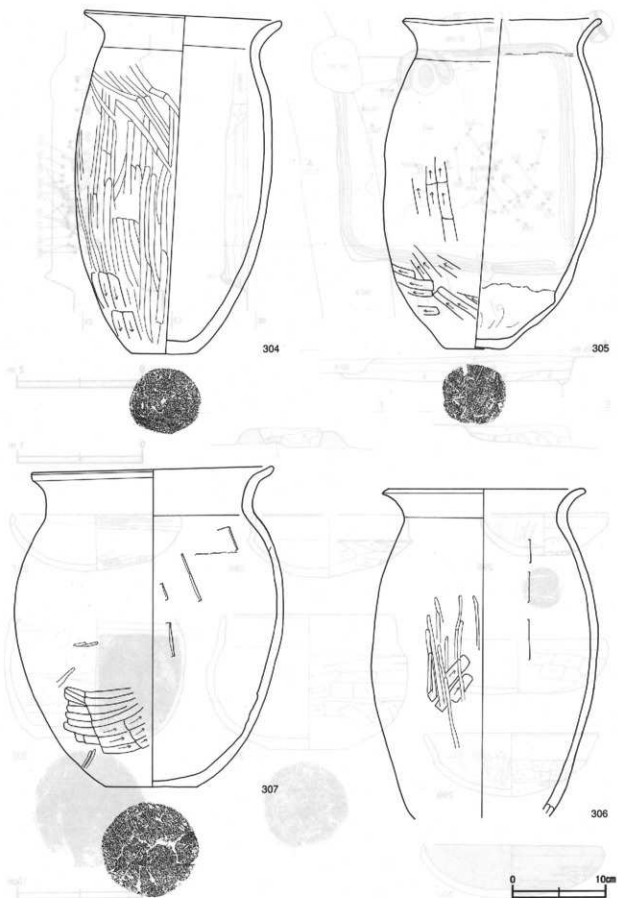
第118号住居跡出土遺物観察表 (第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
295	土師器	坏	9.9	3.5	3.0	石英	灰褐	普通	体部内面横ナゲ後ヘラ磨き、口縁部横ナゲ	南西部上層	80% 削書
296	土師器	坏	[12.0]	5.0	-	長石・石英	褐灰	普通	体部内面・口縁部横ナゲ	西部中層	60%
297	土師器	坏	13.3	4.7	-	長石・石英・小礫	橙	普通	口縁部ヘラ磨き	南西部上層	90% PL203
298	土師器	坏	[14.2]	4.3	-	石英	橙	普通	口縁部横ナゲ	西部上層	40%
299	土師器	坏	13.8	5.1	-	石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナゲ、内面放射状のヘラ磨き	中央部上層	95% PL203
300	土師器	坏	14.0	4.3	-	石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナゲ	東部上層	90% PL203
301	土師器	輪	13.4	11.0	6.2	長石・小礫	にぶい黄橙	普通	体部内面・口縁部ナゲ、底部ヘラ磨り	西壁際上層	95% PL203
302	須恵器	広口甕	-	(9.7)	8.8	長石	灰	普通	体部内面ナゲ、内面指頭痕、輪積み痕	西壁際上層	40%
303	土師器	小形甕	17.8	19.6	7.3	長石・小礫	にぶい橙	普通	口縁部横ナゲ、体部下位ヘラ磨り後ナゲ	東部上層	100% PL204
304	土師器	甕	20.7	35.8	6.8	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部内面・口縁部ナゲ、体部外面ヘラ磨り後ヘラ磨き	中央部上層	70% PL204
305	土師器	甕	[20.7]	33.2	6.7	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ナゲ	中央部中層	50% 内面煤付着
306	土師器	甕	21.6	(34.8)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ナゲ	西部上層	70%
307	土師器	甕	25.5	34.0	10.0	長石・赤鉄質	にぶい橙	普通	口縁部横ナゲ、底部木葉痕	西部上層	60%
308	土師器	甕	25.6	(20.7)	-	長石	にぶい黄橙	普通	口縁部ナゲ、体部外面ヘラ磨り後ヘラ磨き	西部上層	30%
309	土師器	甕	17.2	22.0	6.7	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ナゲ、底部穿孔	西部上層	85% 裏より底用 PL203
310	土師器	甕	23.3	27.4	8.8	長石・赤鉄質	にぶい褐	普通	口縁部横位のヘラ磨き	北東部上層	75%
311	土師器	甕	29.4	33.4	10.2	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナゲ、内面輪積み痕	西部上層	95% PL204
312	土師器	手掘土器	7.5	4.6	6.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナゲ、底部ナゲ	西壁際上層	75%
313	土師器	手掘土器	8.6	5.1	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナゲ、底部ナゲ	西部上層	95% PL203
314	土師器	手掘土器	9.3	2.7	8.6	石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内・外面ナゲ、底部ナゲ	西部上層	100%
315	土師器	手掘土器	8.8	2.9	7.7	雲母	赤褐	普通	体部内・外面ナゲ、底部木葉痕	西部上層	90% PL203
425	土師器	手掘土器	11.2	3.9	7.7	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内・外面ナゲ、底部木葉痕	中央部上層	90%
426	土師器	手掘土器	[9.2]	5.0	[5.2]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナゲ、外面指頭痕	中央部中層	50%
427	土師器	手掘土器	14.6	6.2	[6.9]	長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナゲ、輪積み痕、底部ナゲ	中央部中層	80%

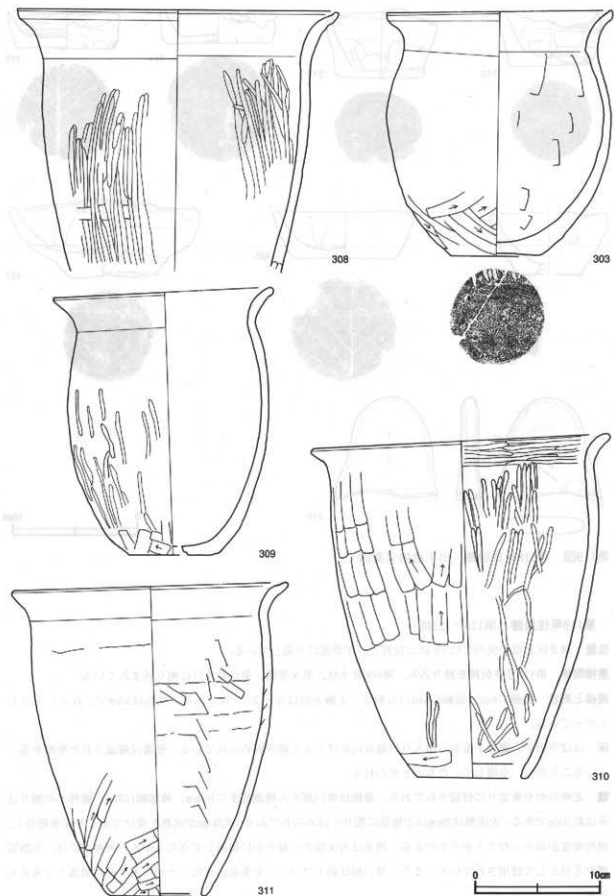
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
316	磁石	(8.2)	8.1	1.8	(127.3)	砂岩	断面2面、片側欠損	中央部上層	二次焼成



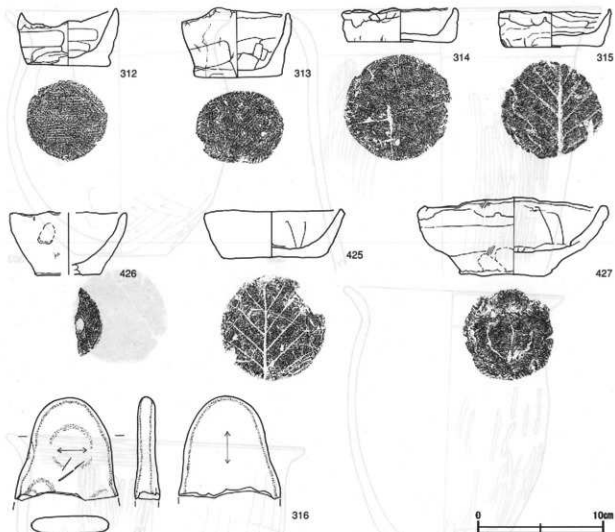
第116图 第118号住居跡・出土遺物実測図(1)



第117图 第118号住居跡出土遺物実測図(2)



第118图 第118号住居跡出土遺物実測図(3)



第118号住居跡・出土遺物実測図(4)

第119号住居跡 (第120～122区)

位置 調査区北部中央のG1319区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第117号住居跡を掘り込み、第606号土坑、第8号溝、第11号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.8m、短軸5.3mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は32cmで、直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈の手前から出入り口施設にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っていることから、全周していたと思われる。

竈 北壁のやや東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで108cm、袖幅107cm、壁外への掘り込みは約30cmである。火床部は28cmほど皿状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けてかなり赤変硬化し、使用頻度が高かったことがうかがえる。煙道は火床部から緩やかに傾斜して立ち上がる。両袖部には、土師器甕が芯材として使用されている。また、第13層は粘土ブロックを多量に含むことから天井部の崩落土と考えられる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 11 極暗赤褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 12 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 13 灰赤色 粘土ブロック多量, 焼土粒子中量
- 14 にぶい赤褐色 焼土粒子多量, 粘土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 15 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 16 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 17 暗褐色 粘土粒子多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 18 暗赤褐色 粘土粒子多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 19 暗赤褐色 粘土粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 20 にぶい褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック微量
- 21 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 22 暗褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 23 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 24 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 25 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック少量
- 26 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土ブロック微量

ピット 9か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは57～79cmである。P5は深さ40cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は深さ16～28cmであるが、性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。長径64cm, 短径49cmの楕円形で、深さは30cmあり、底面が皿状を呈している。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量

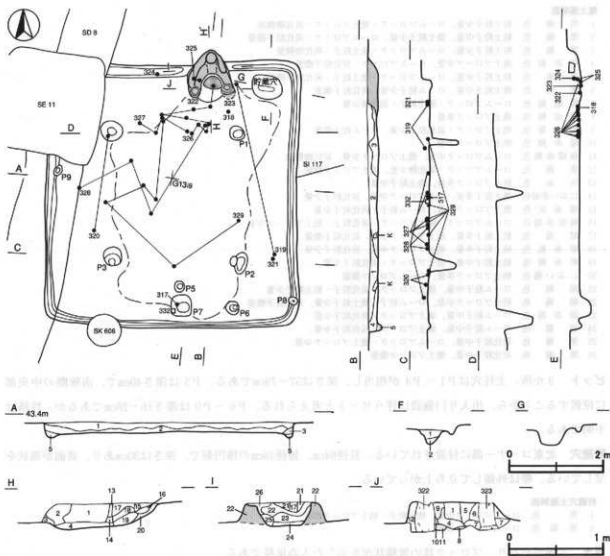
覆土 5層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片706点(坏182, 高坏3, 甕521), 須恵器片4点(甕), 土製品1点(土玉), 石器1点(砥石), 礫片1点が出土している。竈周辺や北部の床面を中心に坏・甕の出土が顕著で、いずれも完形に近い状態で検出され、住居焼絶時に遺棄されたと考えられる。317はP7覆土中, 318・319・324・326・327は北部下層または床面, 320・328は西部床面, 321は東部下層, 329は中央部床面からそれぞれ出土している。特に322・323・325は芯材として竈袖部内から出土している。

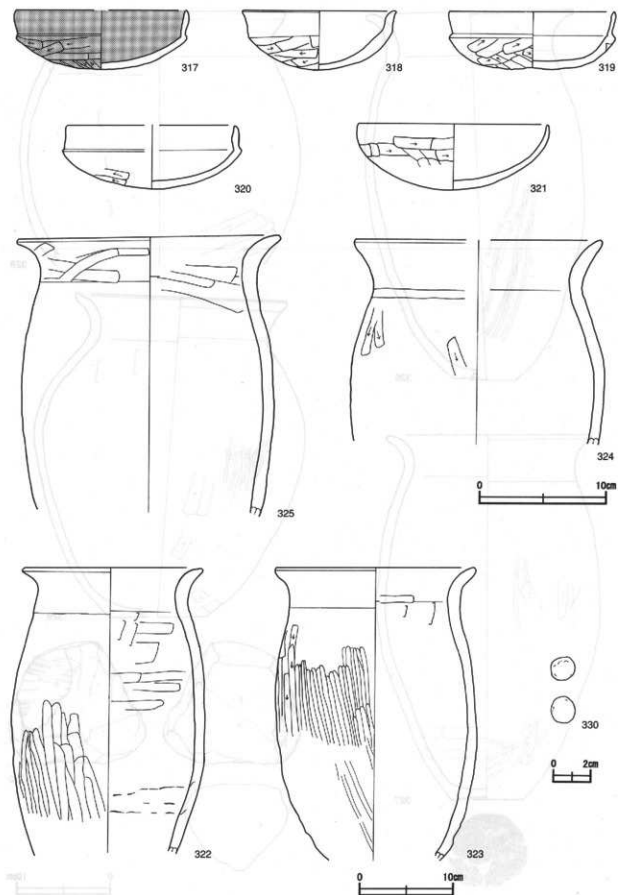
所見 土師器甕は、竈袖部芯材として使用され、構築材の数や位置も他住居と様相が異なり、竈の形體的な特徴を顕著に残す好例な資料といえる。時期は出土土器から7世紀前半と考えられる。



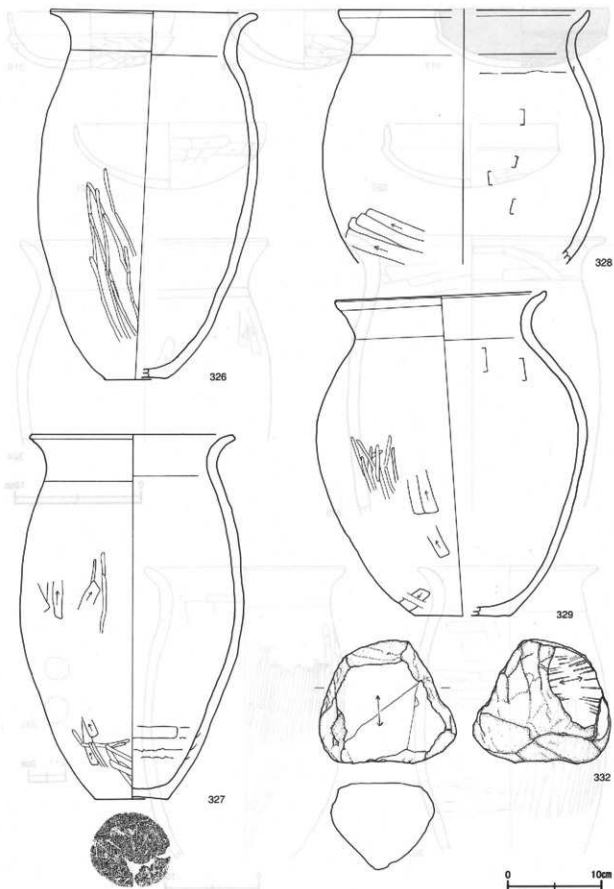
第120図 第119号住居跡実測図

第119号住居跡出土遺物観察表 (第121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
317	土師器	坏	[13.6]	4.7	-	石英・赤色 粒子	黒褐	普通	口縁部横ナデ	P7 覆土中	15%
318	土師器	坏	12.0	4.7	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	北部床面	100% PL205
319	土師器	坏	13.0	4.6	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、外面未穿孔の 穴有り	北部下層	30%
320	土師器	坏	[13.4]	5.1	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ナデ	西部床面	40%
321	土師器	坏	15.0	5.3	-	石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、外面へラ削り	東部下層	50%
322	土師器	甕	19.0	(30.2)	-	長石・石英・ 雲母	橙	二次 焼成	口縁部横ナデ、輪積み痕	覆右袖部内	90% PL204
323	土師器	甕	21.0	(30.8)	-	長石・石英・ 赤色粒子	灰褐	二次 焼成	口縁部横ナデ、へラ当て痕	覆右袖部内	80% PL204
324	土師器	甕	[19.8]	(16.1)	-	長石・石英・ 雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	北壁際中層	20%



第121图 第119号住居跡出土遺物実測図(1)



第122图 第119号住居跡出土物実測图(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
325	土師器	甕	20.6	(22.4)	-	長石・石英	明赤褐色	二次焼成	口縁部内・外面ヘラナデ	甕左袖部内	40%
326	土師器	甕	20.4	38.8	[6.6]	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ磨き	北部床面	80% FL205
327	土師器	甕	21.8	38.5	7.5	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、外面ヘラ削り後ヘラ磨き、底部木炭痕	北部床面	85%
328	土師器	甕	[26.6]	(26.9)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ、外面ヘラ削り後ナデ	西部床面	30%
329	土師器	甕	22.2	34.4	[10.1]	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、外面ヘラ削り後ヘラ磨き	中央部床面	85% FL205

番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質	特	微	出土位置	備考
330	土玉	1.5	1.3	-	2.3	土	ナデ、灰褐色、未穿孔		覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	微	出土位置	備考
332	瓦石	(13.2)	(14.5)	(9.2)	(1870)	砂岩	紙面2面、その他は縦断面		南壁際床面	

第123号住居跡 (第123・124図)

位置 調査区北部中央のH13b8区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 長軸5.0m、短軸4.8mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は16~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。また、南部・東・西壁際床面には焼土、北壁寄りには炭化材が出土している。

炉 2か所付設されている。炉1は中央部から北西寄りに付設された長径約70cm、短径約60cmの楕円形で、炉床は最大15cmほど皿状に掘りくぼめられている。炉2は中央部から西寄りに付設された長径約100cm、短径約50cmの楕円形で、炉床は6cmほど掘りくぼめられている。炉1は覆土上層が硬化していることから、炉1から炉2へと作り替えが行われたと考えられる。

炉1土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 赤褐色 焼土ブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック多量

炉2土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量

貯蔵穴 南西コーナーに付設され、一辺70cmの円形で、深さは58cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さはそれぞれ30~70cmである。

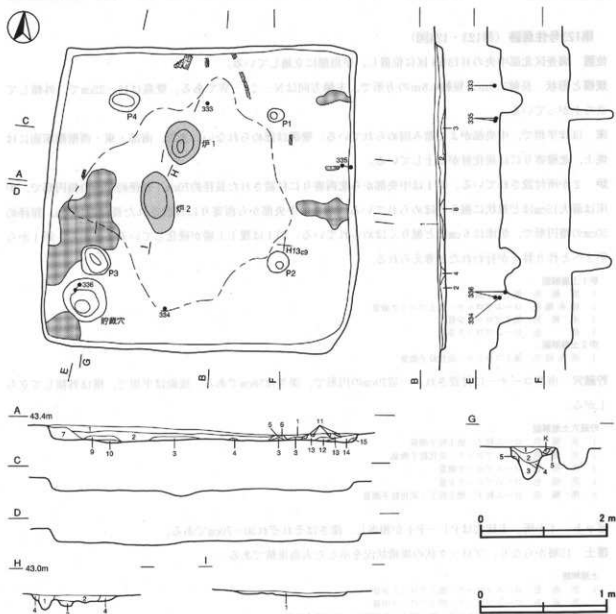
覆土 15層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

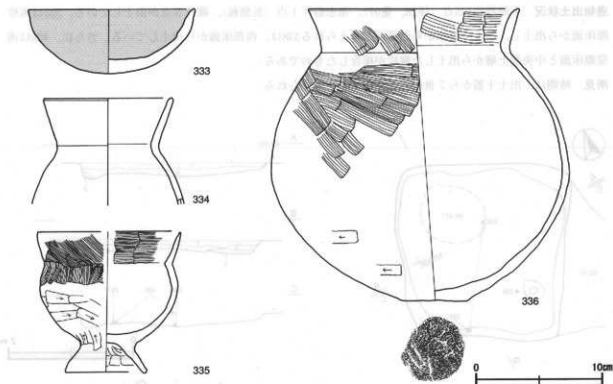
4	褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
5	黒褐色	焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
6	褐色	ロームブロック多量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
7	黒褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
8	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
9	暗褐色	焼土粒子少量, ロームブロック微量
10	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
11	明赤褐色	焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
12	暗赤褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量
13	暗赤褐色	炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子微量
14	暗赤褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
15	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片116点(坏33, 高坏6, 埴3, 台付甕1, 甕73), 須惠器片2点(甕), 礫片36点, 土製品2点(不明), 炭化材が出土している。334は南部床面, 335は東壁際の下層, 336は貯蔵穴の上層から出土している。333は北部中層からで, 破断面が摩滅していることから埋め戻される段階で混入したものと考えられる。



第123図 第123号住居跡実測図

所見 南部の床面から焼土が検出され、その上面から土器類が出土していることから、本跡は住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。また、本跡は炉の付設位置の変化なども住居の形態的な特徴を示す資料であり、時期は出土土器から4世紀中葉と考えられる。



第124図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物観察表 (第124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
333	土師器	坏	13.2	5.0	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部内・外面剥落のため調整不明	北部中層	50% 赤彩
334	土師器	罎	10.2	(8.4)	-	長石・石英	いぶ黄橙	普通	体部内・外面・口縁部ナマ	南部床面	30%
335	土師器	台付甕	[11.4]	11.0	6.4	長石・雲母	黒	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部ハケ目調整	東壁階下層	60% PL205
336	土師器	甕	16.6	23.3	5.2	長石・石英	いぶ黄橙	普通	口縁部ハケ目調整、底部ヘラ削り	貯蔵穴上層	50%

第124号住居跡 (第125図)

位置 調査区北部中央のH13d8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第627号土坑、第21号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺約3.0mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。確認された壁高は約26cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほは平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

ピット 1か所。深さは約24cmで、位置から柱穴と考えられるが、対応するピットは確認されていない。

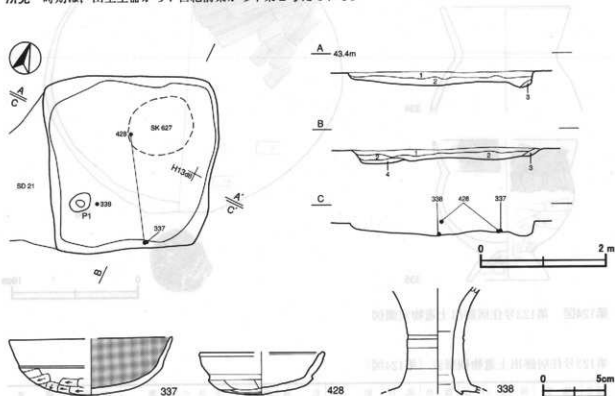
覆土 4層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片125点(坏28, 甕97), 須恵器片1点(長頸瓶), 礫片3点が出土している。337は南壁際床面から出土し、胎土や形状から湖西産と考えられる338は、西部床面から出土している。さらに、428は南壁際床面と中央部上層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉から中葉と考えられる。



第125図 第124号住居跡・出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
337	土師器	坏	[13.0]	4.5	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ	南壁際床面	60%
428	土師器	坏	[10.0]	3.4	-	長石・赤色粒子	にひ赤褐	普通	口縁部横ナデ	南壁際床面	70%
338	須恵器	長頸瓶	-	(8.5)	-	雲母	黄灰	普通	頸部ロクロナデ	西部床面	10% 湖西産

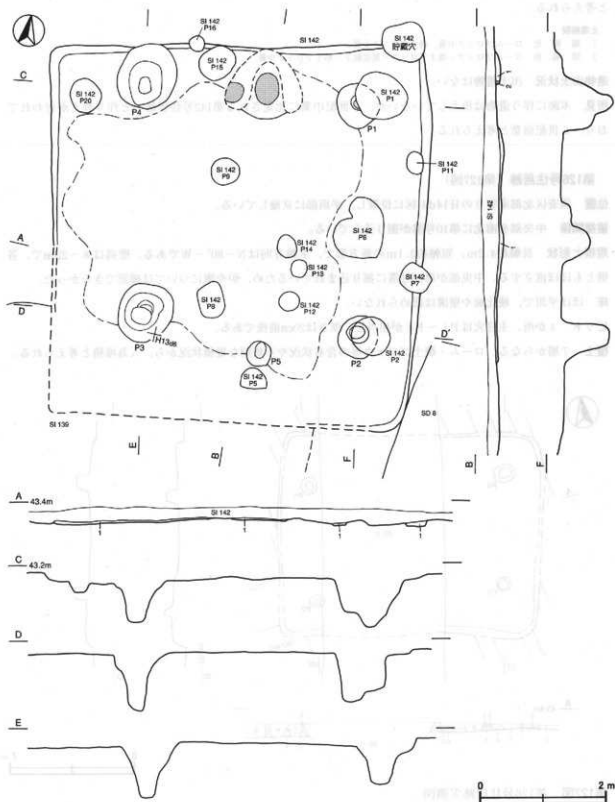
第125号住居跡 (第126図)

位置 調査区中央部のH13c6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第139号住居跡を掘り込み、第142号住居への作り替えが行われている。

規模と形状 第142号住居の床下から本跡の床面が確認されたため、壁の立ち上がりは不明である。一辺が約6.0mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は認められない。
 竈 北壁のほぼ中央部に付設されており、火床部と袖部の一部が遺存している。火床部は約10cmほど掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。



第126図 第125号住居跡実測図

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは60～70cmである。覆土の上層は叩き締められており、P3・P4は東側に新しい掘り方が認められた。P5は深さ約20cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなるが、ローム・焼土ブロック等の含有状況と硬化していることから、第142号住居跡の貼床と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化穀子・粘土ブロック少量

遺物出土状況 出土遺物はない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが、6世紀中葉に比定される第142号住居跡へと作り替えが行われており、6世紀前葉と考えられる。

第126号住居跡 (第127図)

位置 調査区北部東寄りのH14d1区に位置し、平坦部に立地している。

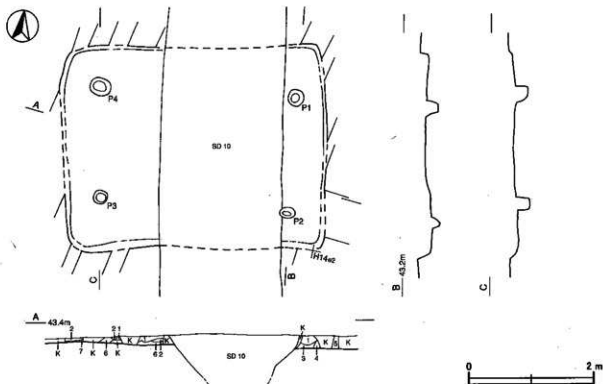
重複関係 中央部を南北に第10号溝が掘り込んでいる。

規模と形状 長軸約4.2m、短軸約3.1mの長方形で、主軸方向はN-80°-Wである。壁高は8～22cmで、各壁ともほぼ直立する。中央部が第10号溝に掘り込まれているため、炉や竈については確認できなかった。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは20cm前後である。

覆土 7層からなる。ローム・焼土ブロック等の含有状況や不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。



第127図 第126号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・炭化物少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片25点(坏9, 甕16), 須惠器片2点(甕), 弥生土器片3点(甕)が出土しただけである。それらの大部分は細片で、破断面が摩滅しており、本跡の廃絶後に混入したものと考えられる。

所見 時期は古墳時代後期以前と考えられる。

第129号住居跡(第128・129図)

位置 調査区北部南寄りのH13g8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 北西部で第132号住居跡を掘り込み、第128・130号住居、第298・538号土坑、第12号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺6.6m前後の方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は約15cmで、各壁ともほぼ直立する。東側に長さ約1m、深さ約10cmの溝が1.4mの間隔で3本、西側の中央部に1本認められ、間仕切り溝と考えられる。

床 ほぼ平坦で、竈の前面から出入り口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が周囲している。また、貯蔵穴を取り囲むように土手状の高まりが認められ、出入り口施設に伴うものと考えられる。

竈 北壁中央に付設され、煙道部まで砂質粘土で構築されている。規模は笑口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約100cmで、壁外への掘り込みはほとんどなく、煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・砂質粘土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 5 赤褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量、炭化材少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 8 極暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量

貯蔵穴 長径約85cm、短径約75cmの楕円形で、南壁際の中央部に付設され、深さ約45cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量

ピット 14か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは45cm前後であり、柱間寸法はいずれも3.0mで規則的に配されている。P5・P6は深さ35cm・15cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなる。ローム・焼土ブロック等の含有状況や不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

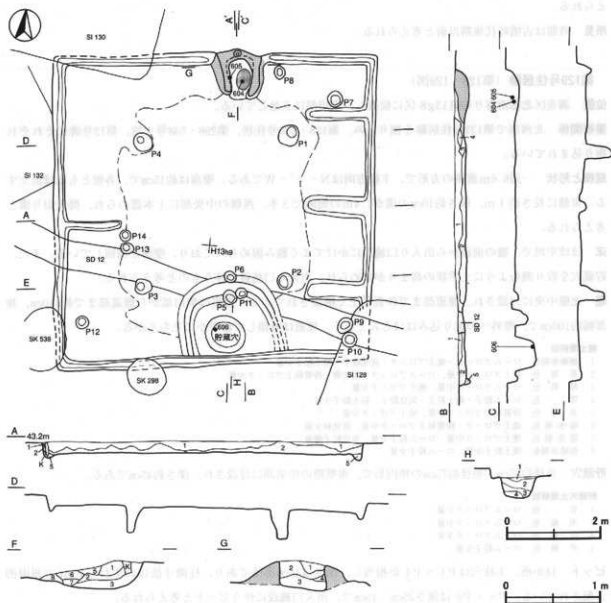
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化材少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量
- 4 赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、砂粒少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片188点(坏101, 高坏12, 埴1, 甕74), 須惠器片4点(坏1, 蓋1, 甕2)

が床面から散在した状態で出土している。特に竈及び貯藏穴の覆土中からの出土が顕著である。604・605はいずれも竈火床部下層, 606は貯藏穴の底面からそれぞれ出土しており, 住居廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。また, 601~603は, いずれも覆土中から出土している。

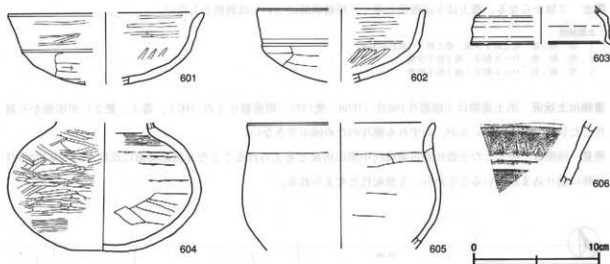
所見 時期は, 出土土器や遺構の形態から6世紀初頭と考えられ, 北西へ約16mの距離に位置する第143号住居跡とともに同一の集落を構成していたと想定される。また, この時期では比較的大形の住居跡であり, 間仕切り溝や土手状の高まりを持つ出入口施設と貯藏穴など, 形態的な特徴を顕著に示している。



第128図 第129号住居跡実測図

第129号住居跡出土遺物観察表 (第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
601	土器器	杯	[15.4]	(5.6)	-	白色粒子・赤色粒子	赤	良好	体部外面へラ削り, 内面へラ磨き	覆土中	30%



第129図 第129号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
602	土師器	坏	[13.0]	(5.8)	—	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	良好	体部外面へう削り、内面へう磨き	覆土中	30%
603	須恵器	壺	[11.0]	(2.9)	—	砂粒	褐灰	精緻	内外面ロクロナデ	覆土中	5%
604	土師器	埴	—	(10.2)	5.4	雲母・白色粒子	明赤褐	良好	外面へう磨き、内面へうナデ	竈火床部下層	40%
605	土師器	壺	[14.8]	(10.0)	—	石英・白色粒子	橙	良好	体部下端へう削り、口縁部横ナデ	竈火床部下層	40%
606	須恵器	壺	—	(4.7)	—	長石・石英	褐灰	良好	頸部ロクロナデ、樽前状工具による波状文	貯蔵穴底面	5%

第132号住居跡 (第130図)

位置 調査区北部南寄りのH13g7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第129・130・189・340号住居、第12号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 東西軸は約5.0mで、南西壁の立ち上がりは確認できないが、主柱穴と貯蔵穴の配置からN-22°-Wを主軸とする方形と推定される。現存部での壁の立ち上がりは5cmと低く、判然としない。

床 中央部から南西部は第340号住居に掘り込まれているために確認できないが、残存している部分の状況から、ほぼ平坦で、中央部が踏み固められていたものと推定される。壁溝は認められない。

炉 東側中央部に付設されており、平面形は長径約50cm、短径約30cmのほぼ楕円形を呈して、長径方向は住居の主軸方向とほぼ一致する。

貯蔵穴 南東コーナーに付設されており、コーナーの一部を第129号住居跡に掘り込まれている。平面形は底面の形状から一辺約1.0mの方形を呈していたものと推定され、深さは約50cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック多量

ピット 4か所。いずれも主柱穴に相当し、深さはP1・P2が約60cm、P3が約50cm、P4が約70cm前後である。柱穴の深さはやや不揃いであるが、柱間はいずれも約2.8mで方形に配置されている。

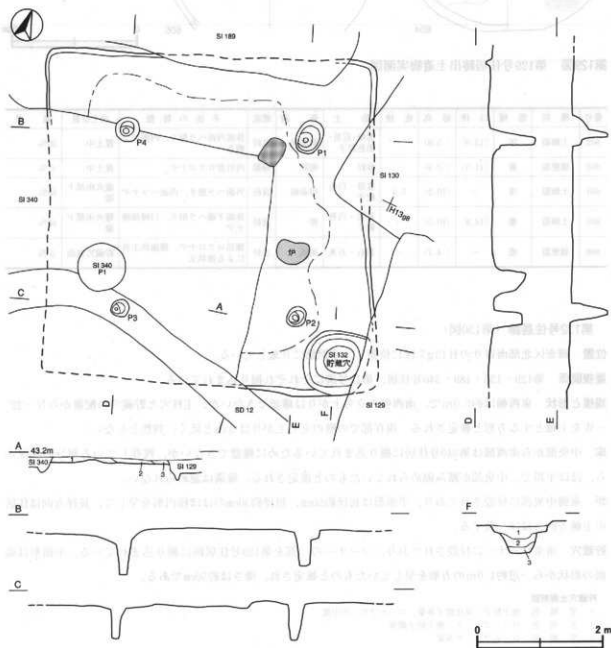
覆土 3層からなる。覆土は5cm前後と薄く、堆積状況については判然としない。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片196点(坏59, 甕137), 須恵器片4点(坏1, 壺1, 甕2)が床面から散在した状態で出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

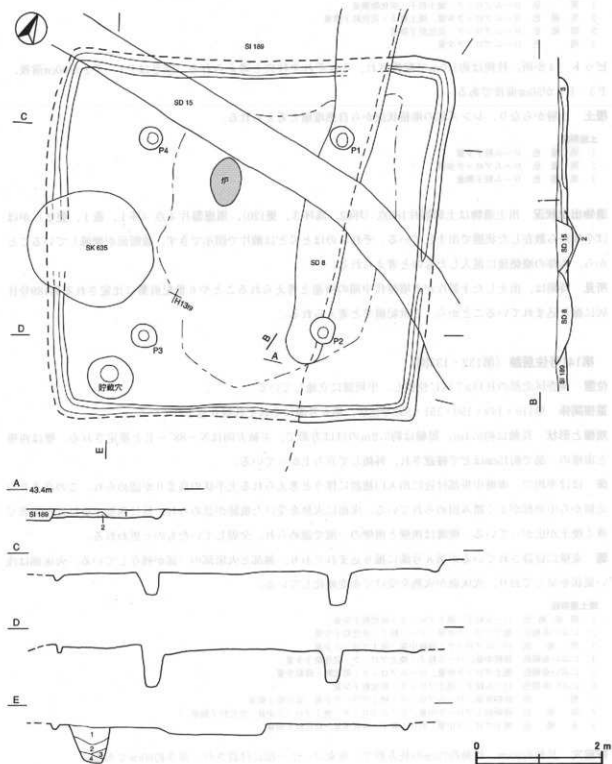
所見 時期は、出土した土器片が古墳時代中期の所産と考えられることや6世紀初頭に比定される第129号住居跡に掘り込まれていることから、5世紀代と考えられる。



第130図 第132号住居跡実測図

第138号住居跡 (第131図)

位置 調査区北部南寄りのH13e8区に位置し、平坦部に立地している。
重複関係 西側を第189号住居、第635号土坑、東側を第8号溝、北側を第15号溝にそれぞれ掘り込まれている。
規模と形状 西側は三分の二以上が第189号住居跡に掘り込まれているが、床面と壁溝が確認されている。長軸は約6.0m、短軸は約5.7mのほぼ方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁の立ち上がりは東側で約15cm



第131図 第138号住居跡実測図

で、ほぼ直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝は全周していたものと考えられる。

炉 中央部やや北寄りに位置し、平面形は長径約75cm、短径約50cmの楕円形を呈する。炉床面はほぼ床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

貯蔵穴 径約70cmの円形で、南コーナー部に付設され、深さ約60cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

ピット 4か所。柱間は約3.0mで配置され、それぞれ主柱穴と考えられる。深さはP1・P2が60cm前後、P3・P4が50cm前後である。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片185点（坏62、高坏3、甕120）、須恵器片4点（坏1、壺1、甕2）がほぼ全域から散在した状態で出土している。それらのほとんどは細片で図示できず、破断面が摩滅していることから、本跡の廃絶後に混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土した土器片が古墳時代中期の所産と考えられることや6世紀前葉に比定される第189号住居に掘り込まれていることから、5世紀前半と考えられる。

第141号住居跡（第132・133図）

位置 調査区北部のH13a7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第116・149・150・151・532号住居、第8号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸は約5.4m、短軸は約5.2mのほぼ方形で、主軸方向はN-88°-Eと推定される。壁は西壁と南壁の一部で約15cmほどで確認され、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南壁中央部付近に出入口施設に伴うと考えられる土手の高まりが認められ、この高まりの北側から中央部がよく踏み固められている。床面に火熱を受けた痕跡が認められ、特に西部中央付近が顕著で薄く焼土が広がっている。壁溝は西壁と南壁の一部で認められ、全周していたものと思われる。

竈 東壁に付設されているが第8号溝に掘り込まれており、袖部と火床部の一部が残存している。火床部は浅い皿状を呈しており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 濃い赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・砂粒中量、焼土ブロック少量
- 4 濃い赤褐色 砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 濃い赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・砂粒少量
- 6 濃い赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 褐色 砂粒多量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 8 暗褐色 砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 9 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量

貯蔵穴 長軸約90cm、短軸約75cmの長方形で、南東コーナー部に付設され、深さ約60cmである。

貯蔵穴土層解説

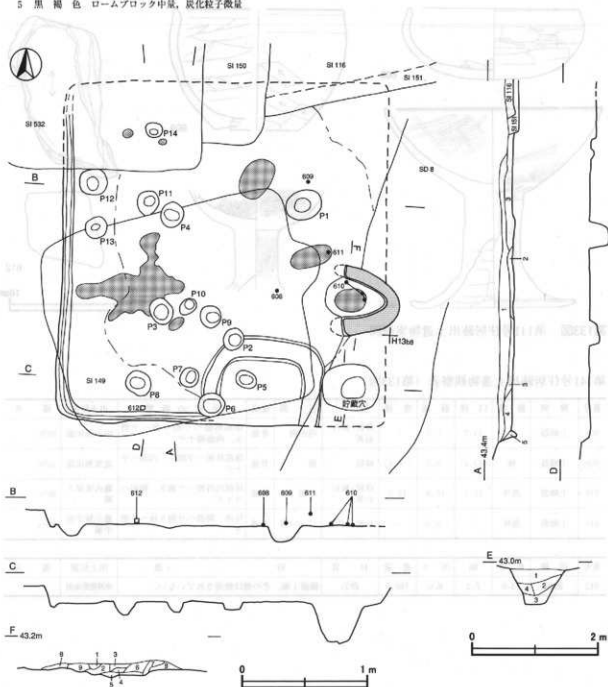
- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

ピット 14か所。P1・P4は深さ30cm前後で主柱穴と考えられる。P5は深さ10cmと浅いが入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

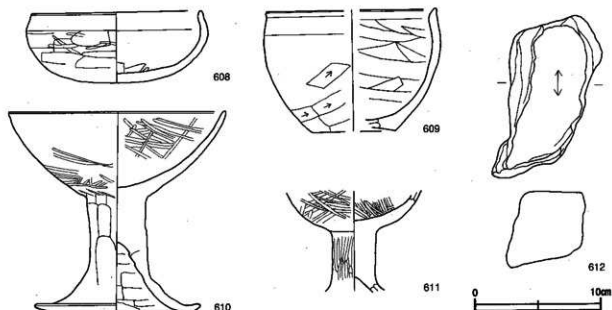
- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量



第132図 第141号住居跡実測図

遺物出土状況 出土遺物は土器器片231点（坏80，高坏9，甕142），須恵器片4点（坏3，蓋1）がほぼ全域から散在した状態で出土している。609は北東部の床面，612は南西壁際の床面からそれぞれ出土しており，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また，610は竈火床部の覆土下層から出土した破片が接合したもので，608は中央部の覆土下層，611は竈左袖前の焼土塊の上面から出土しており，608・611は住居廃絶に伴って投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は焼土の広がりから焼失住居と考えられ，土器の出土状況を土層断面に対応させると，覆土下層から出土した遺物は焼失前に遺棄され，覆土中層以上から出土した土器は焼失後に投棄されたものと考えられる。本跡の時期は，出土土器の形状と遺構の形態から6世紀前葉と考えられる。



第133図 第141号住居跡出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表（第133図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
608	土器	坏	13.4	5.6	-	砂粒・長石・石英	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面横ナデ	中央部床面	80%
609	土器	碗	[13.2]	9.6	[6.6]	砂粒	橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	北東部床面	40%
610	土器	高坏	17.1	15.8	13.0	砂粒・長石・石英	赤褐色	普通	坏部内外面ヘラ磨き，脚部ヘラナデ	竈火床部下層	80%
611	土器	高坏	-	(8.0)	-	砂粒・長石	ぶい橙	普通	坏部・脚部ヘラ削り後ヘラ磨き	竈左袖手前中層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
612	紙石	13.0	7.2	6.0	766.0	砂岩	紙面1面，その他は使用されていない。	南西壁際床面	

第142号住居跡 (第134~136図)

位置 調査区北部のH13c6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第125・139号住居跡を掘り込み、南東コーナー部を第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 一辺7.3m前後の方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高13~18cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、竈の前面から出入口施設にかけてよく踏み固められている。壁溝は、南東コーナー部が重複により確認できないが、全周していたものと思われる。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約150cm、両袖部幅約105cm、壁外への掘り込みは約80cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

袖部は土師器甕を芯材として、その周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化物・粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

貯蔵穴 長径約80cm、短径約60cmの不整楕円形で、北東コーナー部に付設され、深さは約80cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒少量、炭化粒子微量

ピット 19か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは50~60cm、柱間寸法はいずれも3.7mを測り、規則的に配されている。P5は深さ20cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。

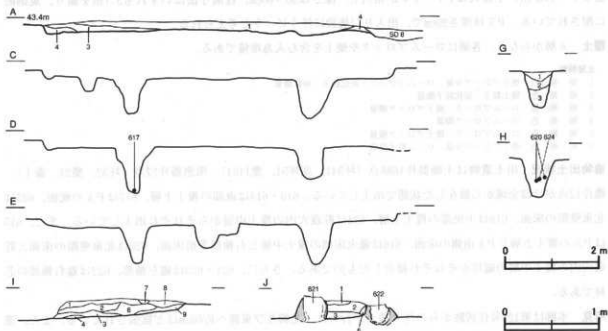
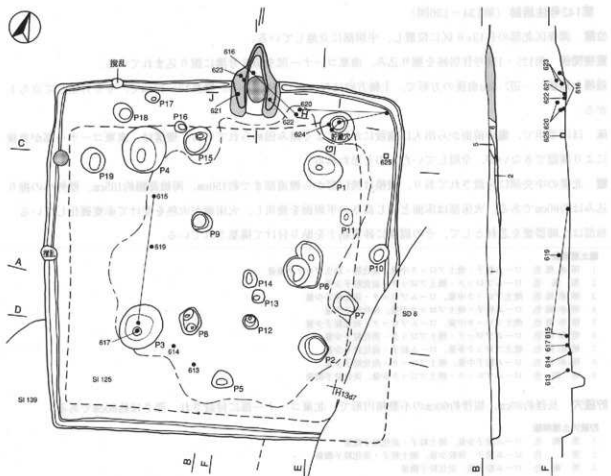
覆土 6層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

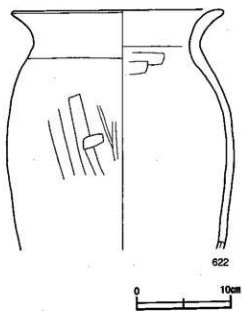
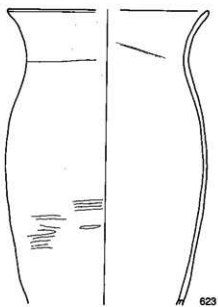
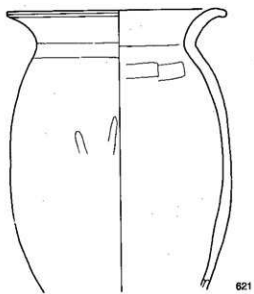
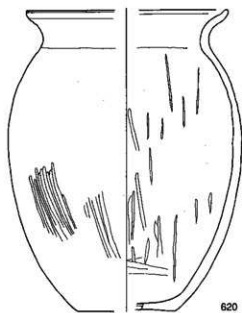
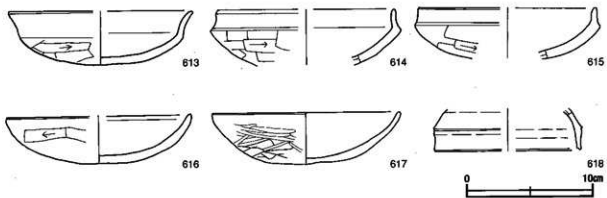
- 1 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片1886点(坏341, 高坏51, 甕1494), 須恵器片57点(坏32, 甕24, 蓋1), 礫片12点がほぼ全域から散在した状態で出土している。613・614は南部の覆土下層, 617はP3の底面, 625は北東壁際の床面, 619は中央部の覆土上層, 624は貯蔵穴内の覆土中層からそれぞれ出土している。また, 615はP3の覆土上層とP4南側の床面, 616は竈火床部の覆土中層と右袖部手前床面, 620は北東壁際の床面と貯蔵穴内の覆土中層の破片がそれぞれ接合したものである。さらに, 621・623は竈左袖部, 622は竈右袖部の芯材である。

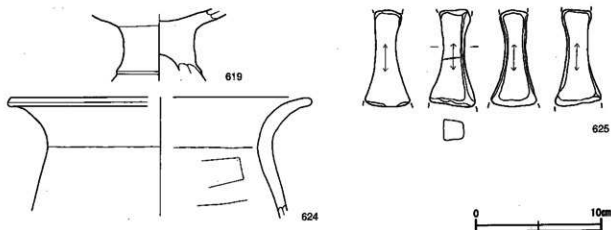
所見 本跡は第125号住居跡からの作り替えが行われ、北側及び東側へ約60cmほど拡張されている。また、遺物は多量に出土しているが、いずれも完存率が70%以下の破片で完形になるものがなく、それらのほとんどが廃絶時に遺棄されたものと考えられる。本跡の時期は、出土土器の形状から6世紀中葉と考えられる。



第134图 第142号住居跡実測图



第135圖 第142号住居跡出土遺物実測図(1)



第136図 第142号住居跡出土遺物実測図(2)

第142号住居跡出土遺物観察表 (第135・136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
613	土師器	坏	[14.5]	4.2	-	砂粒	明赤褐色	普通	体部外面へう削り, 内面横ナデ	南部下層	40%
614	土師器	坏	[14.0]	(4.4)	-	雲母・石英	黒	良好	体部外面へう削り, 内面横ナデ	南部下層	30%
615	土師器	坏	[14.0]	(4.0)	-	雲母・白色胎子	黒	良好	体部外面へう削り, 内面横ナデ	中央部床面	10%
616	土師器	坏	[14.5]	3.7	-	礫・長石・石英	褐色	普通	体部外面へう削り, 内面横ナデ	竈内下層	50%
617	土師器	坏	14.9	4.2	-	砂粒	にぶい褐色	普通	体部外面へう削り後へう磨き, 内面横ナデ	P3内底面	70%
618	須恵器	蓋	[11.6]	(3.3)	-	砂粒	褐灰色	普通	内外面クロコ整形後, ナデ	覆土中	5%
619	土師器	高坏	-	(5.3)	-	砂粒	褐色	普通	脚部横ナデ	中央部上層	20%
620	土師器	甕	[21.0]	31.6	[10.0]	砂粒・長石・石英	にぶい褐色	普通	体部内外面へう磨き, 口縁部横ナデ	貯蔵穴内中層	60%
621	土師器	甕	28.0	(29.5)	-	砂粒・長石・石英	褐色	普通	体部外面へう磨き, 口縁部横ナデ	竈左袖部	60%
622	土師器	甕	21.4	(25.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	体部内外面へう磨き, 口縁部横ナデ	竈右袖部	40%
623	土師器	甕	[20.8]	(30.9)	-	雲母・石英	褐色	普通	体部外面へう磨き, 内面へうナデ	竈左袖部	30%
624	土師器	甕	[23.6]	(9.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	良好	体部内面へう磨き, 口縁部横ナデ	貯蔵穴内中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
625	磁石	(7.6)	3.6	3.6	(76.5)	凝灰岩	底面4面, 中央部は薄くなっている。	北東壁面	

第143号住居跡 (第137~139図)

位置 調査区北部のH13d4区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 一辺4.5mの方形で, 主軸方向はN-8°-Wである。壁高15~20cmで, やや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 南壁際中央部付近に出入口施設に伴うと考えられる土手状の高まりが認められ, この高まりの北側から壁際を除いてよく踏み固められている。床面に火熱を受けた痕跡が認められる。壁溝は周回している。

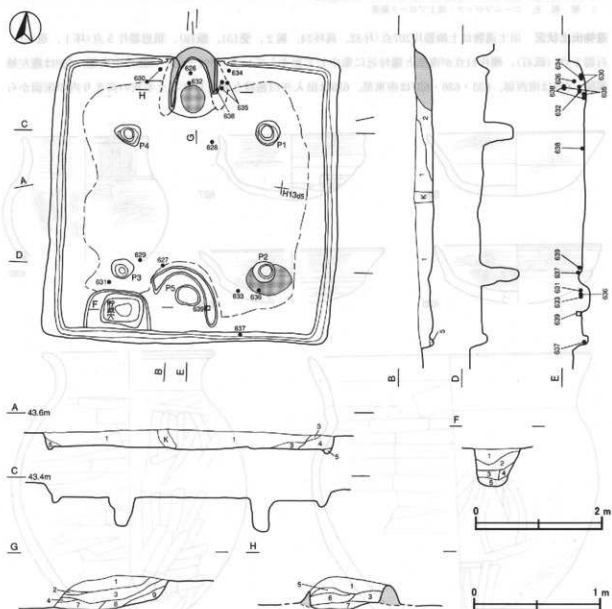
竈 北壁の中央部に付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで約110cm, 袖幅約70cm, 壁外への掘り込

みは15cmである。火床部は10cmほど掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

覆土层解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック多量、炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック少量
- 9 暗褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、床面より10cmほど一段低く掘り込まれた中に付設されている。規模は長軸約55cm、短軸約40cmのほぼ長方形で、深さ約60cmである。



第137図 第143号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック少量

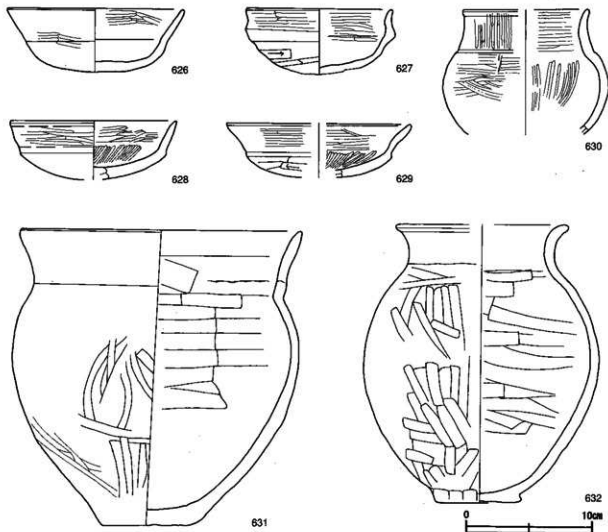
ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50cm前後で、柱間寸法はいずれも2.2mを測り、規則的に配されている。P5は深さ10cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

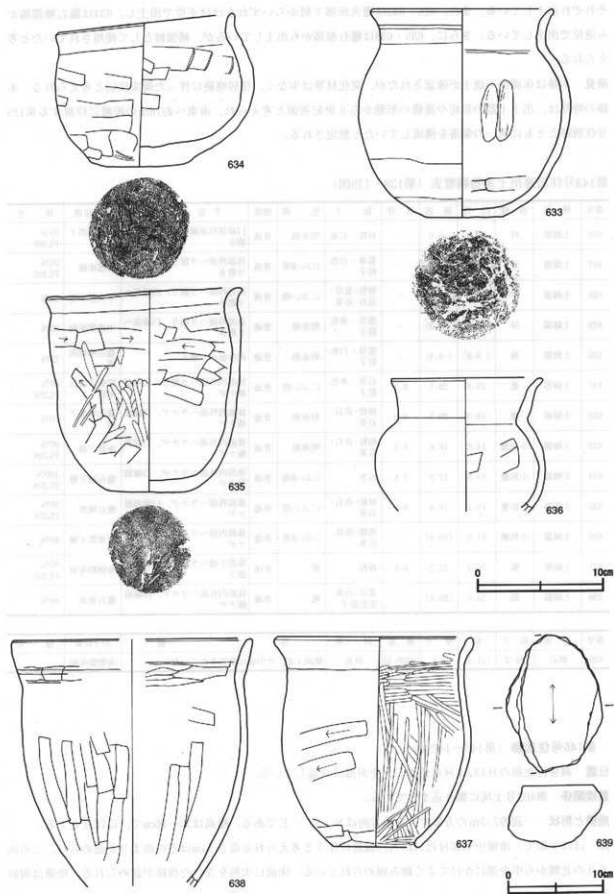
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 砂粒少量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック微量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片207点(坏32, 高坏24, 碗2, 甕131, 瓶18), 須恵器片5点(坏1, 瓶4), 石器1点(砥石), 礫片11点が南部と竈付近に集中して出土している。627・628・629は中央部, 630は竈左袖部脇, 631は南西部, 633・636・637は南東部, 639は出入り口施設と考えられる土手状の高まり内の床面から



第138図 第143号住居跡出土遺物実測図(1)



第139图 第143号住居跡出土物実測图(2)

それぞれ出土している。また、626・632は竈火床部下層からいずれもほぼ正位で出土し、634は竈右袖部脇から逆位で出土している。さらに、635・638は竈右袖部から出土しているが、補強材として使用されていたと考えられる。

所見 本跡は床面から焼土が確認されたが、炭化材等は少なく、住居廃絶に伴った焼失住居と考えられる。本跡の時期は、出土土器の形状や遺構の形態から6世紀初頭と考えられ、南東へ約16mの距離に位置する第129号住居跡とともに同一の集落を構成していたと想定される。

第143号住居跡出土遺物観察表 (第138・139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
626	土師器	坏	13.9	5.0	-	砂粒・石英	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ、内面ヘラ磨き	竈火床部下層	95% PL205
627	土師器	坏	11.4	5.2	-	雲母・白色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部ヘラ磨き	南部床面	95% PL205
628	土師器	坏	13.2	(4.6)	-	砂粒・雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部ヘラ磨き	中央部下層	50%
629	土師器	坏	[14.6]	(4.3)	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部ヘラ磨き	中央部床面	30%
630	土師器	碗	[9.8]	(9.4)	-	雲母・白色粒子	明赤褐	普通	内外面ヘラ磨き	竈左袖部床面	25%
631	土師器	甕	22.2	23.5	6.6	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	貯蔵穴付近床面	80% PL206
632	土師器	甕	[18.0]	29.3	9.0	砂粒・長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	竈火床部下層	70%
633	土師器	小形甕	14.6	16.6	6.4	砂粒・長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	南部下層	90% PL206
634	土師器	小形甕	13.8	12.2	7.6	石英	にぶい赤黄	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	竈右袖下層	100% PL206
635	土師器	小形甕	15.1	16.4	6.5	砂粒・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	竈右袖部	95% PL206
636	土師器	小形甕	11.8	(10.6)	-	角礫・雲母・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ、口縁部横ナデ	南東部下層	80%
637	土師器	甌	20.3	22.2	8.6	砂粒	黄	普通	体部下層ヘラ削り、内面ヘラ磨き	南壁断床面	90% PL205
638	土師器	甌	24.6	[20.6]	-	雲母・石英・赤色粒子	褐	普通	体部外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	竈右袖部	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
639	砥石	16.3	(11.2)	7.1	(1320.0)	砂岩	砥面1面、その他は使用されていない。	南壁断床面	

第146号住居跡 (第140～142図)

位置 調査区北部のH13a4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第402号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺約7.3mの方形で、主軸方向はN-65°-Eである。壁高は30～46cmで、ほぼ直立する。

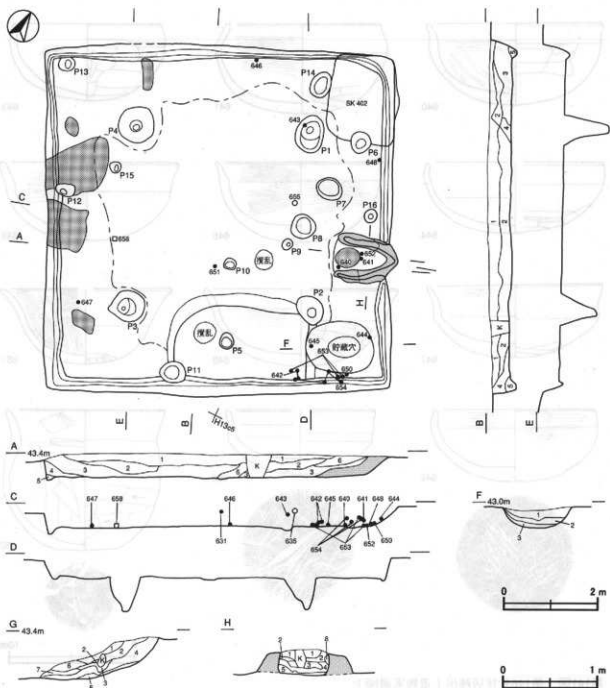
床 ほぼ平坦で、南壁中央部付近に出入口施設に伴うと考えられる高さ5cmほどの高まりが認められ、この高まりの北側から中央部にかけてよく踏み固められている。床面に火熱を受けた痕跡が認められる。壁溝は周回している。

竈 東壁の中央部南寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約135cm、袖部幅約105cm、壁外への

掘り込みは15cmである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第3層は砂質粘土を多量に含んでおり、天井部の崩落土と考えられる。火床面は床面とほぼ同じ高さの地山面をそのまま利用しており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がり部には、小形甕が逆位、さらにその上面に坏が伏せられた状態で出土している。どちらも火熱を受けていることから、支脚として使用されたものと推定される。

遺土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量



第140図 第146号住居跡実測図

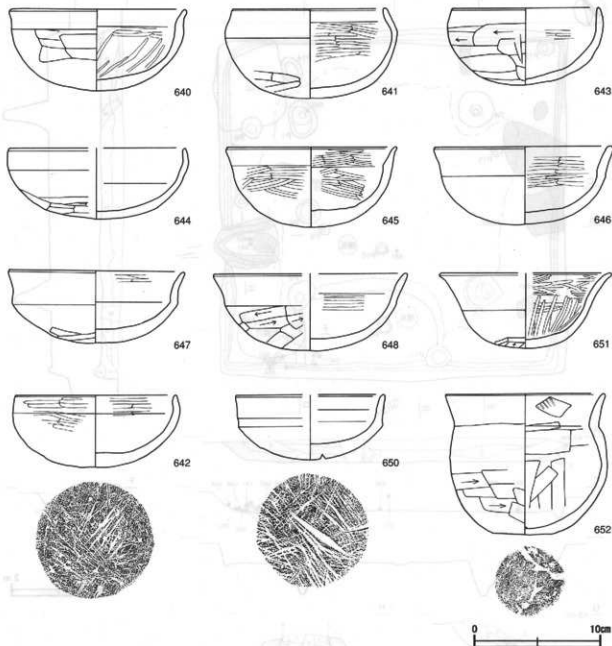
- 6 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 7 暗 赤 褐 色 焼土ブロック多量, ローム粒子・砂質粘土ブロック少量
- 8 暗 赤 褐 色 焼土ブロック多量, 砂質粘土ブロック少量

貯蔵穴 長径約140cm, 短径約110cmの楕円形で, 南東コーナー部に付設され, 深さは約40cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 褐 色 ロームブロック中量

ピット 16か所。主柱穴はP1～P4が相当し, 深さは65～90cmで, 柱間寸法は3.8m前後で, 定期的に配されている。



第141図 第146号住居跡出土遺物実測図(1)

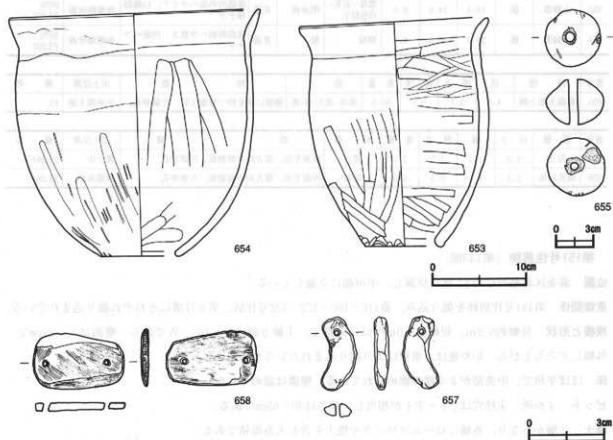
覆土 6層からなり、各層にローム・焼土ブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 | 暗褐色 | 砂粒少量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック微量 |
| 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 5 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 6 | 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |

遺物出土状況 出土遺物は土師器片1083点(坏381, 高坏2, 寛634, 瓶66), 須恵器片23点(坏13, 寛5, 瓶2, 高坏3), 石器1点(砥石), 礫片9点がほぼ全域から散在した状態で出土している。652は竈火床部の底面から逆位で、その上面に641が伏せられた状態で出土している。また、642・646~648・650・653・654はいずれも壁際の床面, 640は竈火床部の覆土下層, 643は北東部の覆土上層, 644・645は貯蔵穴内の覆土上層, 657は覆土中, 658は西部の床面からそれぞれ出土している。さらに、642・650は底面にV字状の研磨痕が多数認められ、砥石として転用されたと考えられる。

所見 本跡は覆土中に多くの焼土ブロックを含有し、床面にも火熱を受けた痕跡が認められることから焼失住居と考えられ、床面から出土した遺物は焼失前に遺棄され、覆土下層から上層にかけて出土した遺物は本跡が埋め戻される段階で投棄されたと考えられる。本跡の時期は、出土土器の形状と遺構の形態から5世紀末から6世紀初めと考えられ、東へ約4.0mの距離に位置する第141号住居跡とともに同一の集落を構成していたことが想定される。



第142図 第146号住居跡出土遺物実測図(2)

第146号住居跡出土遺物観察表 (第141・142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
640	土師器	環	13.8	6.6	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラナデ、内面ヘラ 磨き	竈火床部下 層	100% PL206
641	土師器	環	12.1	7.1	-	砂粒・長石・ 石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後、内面ヘ ラ磨き	竈火床部中 層	100% PL206
642	土師器	環	12.8	5.8	-	雲母・石英	赤	普通	体部・口縁部内外面ヘラ磨き	南壁跡床面	95% FL206
643	土師器	環	11.6	6.2	-	石英・赤色 粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ 磨き	北東部中層	80%
644	土師器	環	[13.8]	5.5	-	雲母・石英	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部横 ナデ	貯蔵穴上層	35%
645	土師器	環	13.5	6.3	-	砂粒・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部内外面ヘラ磨き、口縁部 横ナデ	貯蔵穴内上 層	100% PL206
646	土師器	環	14.1	6.2	-	砂粒・赤色 粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き、口縁部横 ナデ	北壁跡床面	95% PL206
647	土師器	環	13.8	5.7	-	石英・赤色 粒子	橙	普通	体部外面ヘラナデ	西壁跡床面	100% PL207
648	土師器	環	[15.2]	6.2	-	雲母・赤色 粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ 磨き	東壁跡床面	65%
650	土師器	環	[11.8]	5.2	-	砂粒・長石・ 石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ	南壁跡床面	55%
651	土師器	環	[13.4]	6.0	-	砂粒・長石・石 英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面放射 状のヘラ磨き	中央部上層	50%
652	土師器	小形壺	12.5	11.5	5.3	砂粒・長石・ 石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ ナデ	竈火床部底 面	100% PL206
653	土師器	瓶	19.4	24.0	8.0	雲母・石英・ 白色粒子	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部 横ナデ	南壁跡床面	90% PL207
654	土師器	瓶	26.3	25.8	8.3	砂粒	橙	普通	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラ ナデ	南壁跡床面	95% PL207

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
655	算盤玉形土師	4.4	3.7	0.7	60.9	雲母・長石・石英	側面に横を持つ算盤玉状、片側穿孔。	中央部上層	FL

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
657	勾玉	2.8	1.4	1.5	2.9	滑石	両面平坦、横方向の研磨痕、片側穿孔	覆土中	PL264
658	双孔円板	2.1	3.5	0.3	3.9	滑石	両面平坦、横方向の研磨痕、片側穿孔	西部床面	FL264

第151号住居跡 (第143図)

位置 調査区北部のG13j7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第141号住居跡を掘り込み、第116・150・152・532号住居、第8号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸約5.2m、短軸約5.0mのほぼ方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は5~22cmで、

外傾して立ち上がる。炬や竈は、重複により掘り込まれたため認められない。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

ピット 4か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~65cmである。

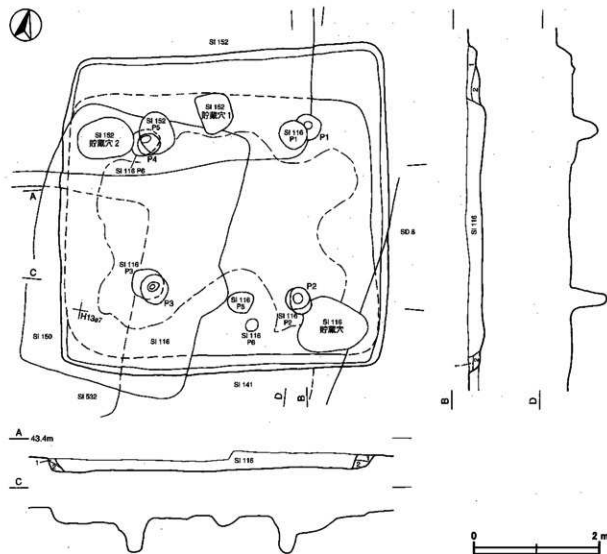
覆土 2層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 出土遺物はない。

所見 本跡は5世紀後葉に比定される第141号住居跡を掘り込み、6世紀前葉に比定される第116号住居に掘り込まれていることから、時期は5世紀末頃と考えられる。



第143図 第151号住居跡実測図

第152号住居跡 (第144・145図)

位置 調査区北部のG13i6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第116・151号住居跡を掘り込み、第150号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約5.8m、短軸約5.4mのほぼ方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は12~20cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は周囲している。

竈 北壁の中央部東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約115cm、袖部幅約120cm、壁外への掘り込みは約10cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土ブロック微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量

貯蔵穴 貯蔵穴1は南東部に付設され、長軸約60cm、短軸約50cmのほぼ隅丸長方形で、深さ約50cmである。また、貯蔵穴2は南壁際中央やや西寄りに付設され、長径約90cm、短径約60cmの楕円形で、深さ約40cmである。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

ピット 12か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは60～100cmとばらつきが見られるが、柱間寸法はいずれも2.8mを測り、規則的に配されている。P5は深さ約15cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。また、P6は深さ約30cmで、形状と配置から補助柱穴と考えられる。その他のピットの性格については、不明である。

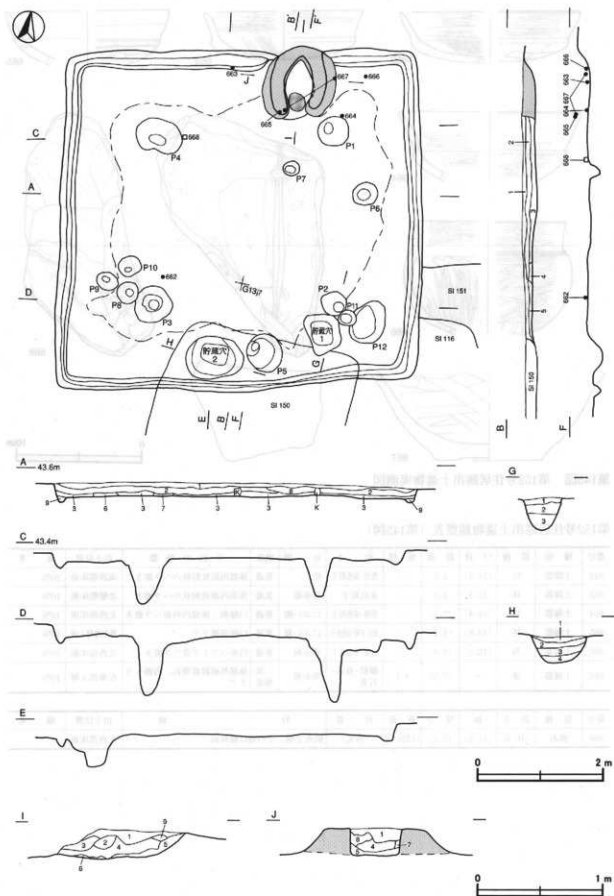
覆土 9層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

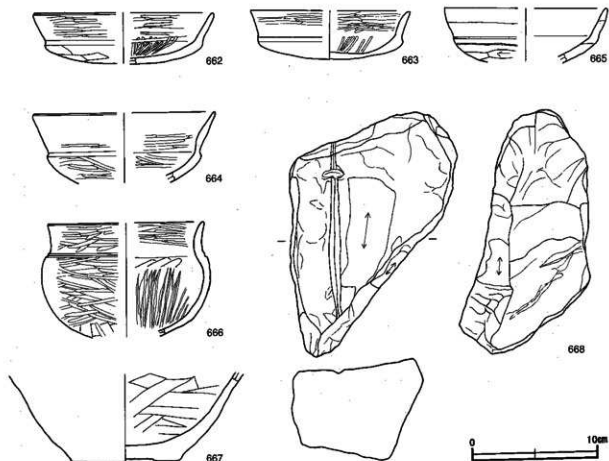
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量
- 4 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量
- 7 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量
- 8 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 9 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片358点(坏I52、高坏1、甕203、瓶1、輪1)、須恵器片7点(坏2、甕3、高壺1、甕1)、石器1点(砥石)、礫片8点がほぼ全城から散在した状態で出土している。662は南西部の床面、663は北壁際中央部の覆土下層、664・666は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。また、665は竈袖部の覆土上層から出土している。さらに、667は竈右袖部付近の覆土下層と竈左袖部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。出土土器はいずれも完存率が50%以下で、廃絶と同時に遺棄または投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、6世紀前葉に比定される第116号住居跡を掘り込んでいることと出土土器の形状から、6世紀中葉と考えられる。



第144图 第152号住居跡实测图



第145図 第152号住居跡出土遺物実測図

第152号住居跡出土遺物観察表 (第145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
662	土師器	坏	[14.2]	4.0	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	南西部床面	20%
663	土師器	坏	[13.4]	6.0	-	赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	北西部床面	10%
664	土師器	坏	[14.4]	(5.5)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	北西部床面	10%
665	土師器	坏	[12.8]	(4.2)	-	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ	庭左上部	50%
666	土師器	碗	[12.2]	(9.0)	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	内面ヘラナデ後ヘラ磨き	北西部床面	30%
667	土師器	甕	-	(7.0)	8.7	砂粒・長石・石英	明赤褐	二次焼成	体部外面器面荒れ、内面ヘラナデ	左縁部上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
668	磁石	(16.3)	(11.2)	(7.1)	(320.0)	砂岩	紙面2面、その他は破断面。	北西部床面	

第155号住居跡 (第146図)

位置 調査区北部中央のG13j5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第250・266・267・288号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.6m、短軸3.5mで、N-72°-Eを主軸とする方形である。壁高は8cmほどであり、壁は外傾して立ち上がる様子が若干認められる程度である。

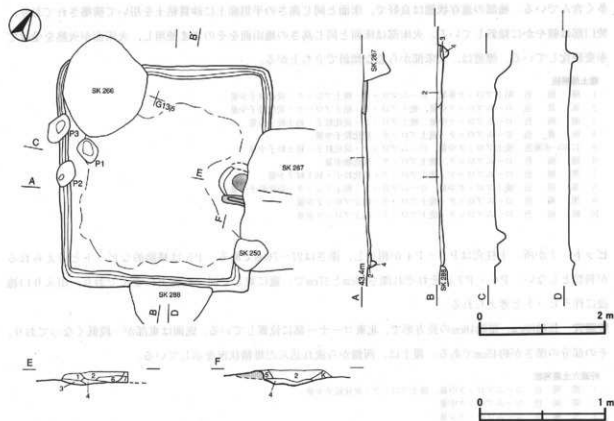
床 ほぼ平坦で、壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っており、全周していたものと考えられる。

竈 東壁のほぼ中央部に付設されている。第267号土坑に掘り込まれているため、天井部や袖部はほとんど遺存しておらず、壁外への掘り込みは不明である。わずかに右袖部が確認できるだけで、左袖部の痕跡から袖部幅はおおよそ65cmほどと推定される。火床部は浅く掘りくぼめられて、火床面がやや赤変している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 ぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量

ピット 3か所。P1は深さが16cmで、竈に対峙する西壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと思われる。P2・P3は深さがそれぞれ41cm・35cmで、西壁際に60cmほどの距離を置いて位置しており、出入り口施設との関連が想定される。



第146図 第155号住居跡実測図

覆土 4層からなり、ロームブロックを含み不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片67点(坏39, 壺27, 埴1), 須恵器片1点(甕)が, 覆土下層から出土している。これらは, いずれも細片である。

所見 本跡からは, 遺物が細片しか出土していないため時期の判断が困難であるが, 出土土器の形状から5世紀後葉と考えられる。また, 本跡は竪穴部に主柱穴をもたない小形の住居跡である。

第156号住居跡 (第147図)

位置 調査区北部の中央であるG13h2区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第162号住居跡を掘り込み, 第158A・158B・160・224・225号住居跡, 第420号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-7°-Wを主軸とする長軸4.5m, 短軸4.4mのほぼ方形である。壁高は最も残りの良い部分で30cmほどであり, やや外傾しながら立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いた中央部がよく踏み固められている。壁溝は西壁際と北壁際の一部, 南壁際から東壁際にかけて確認されており, 全周していたものと考えられる。

竈 北壁のほぼ中央部に付設され, 突出口から煙道部まで96cm, 袖部幅100cmである。壁外への掘り込みは15cmほどで, 天井部は崩落しており, 土層断面図中の第1~3層が天井部の崩落土に相当し, 粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部の遺存状態は良好で, 床面と同じ高さの平坦面に砂質粘土を用いて構築されており, 突出口は緩やかに傾斜している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し, 火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は, 火床部から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

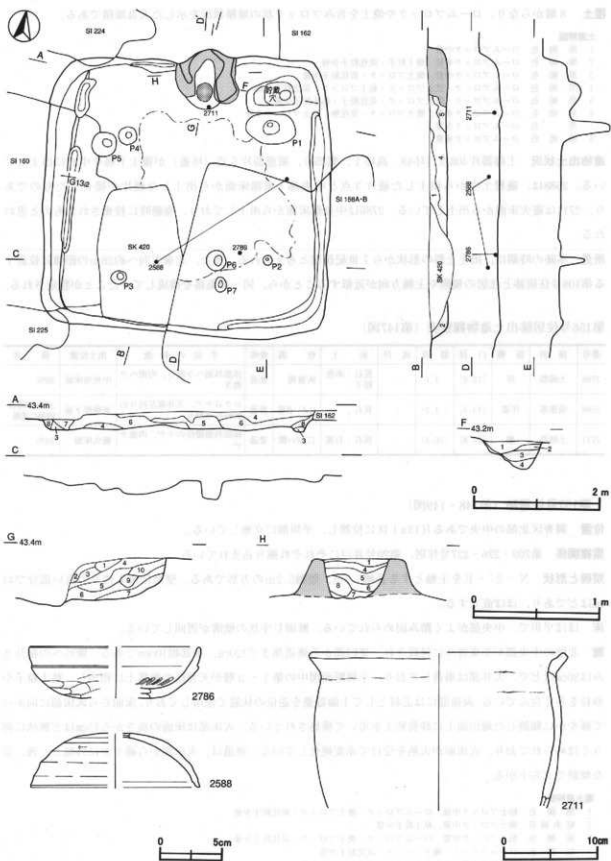
- 1 暗褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 灰黄色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 灰黄色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 に近い赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 8 黒褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 10 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは27~76cmである。P5は補助的なピットと考えられるが判然としない。P6・P7はそれぞれ深さ28cmと27cmで, 竈に対して同一直線上に並んでおり, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 長軸88cm, 短軸48cmの長方形で, 北東コーナー部に位置している。底面は東部が一段低くなっており, その部分の深さが約45cmである。覆土は, 西側から流れ込んだ堆積状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量



第147图 第156号住居跡・出土遺物実測図

覆土 8層からなり、ロームブロックや焼土を含みブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 8 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片408点(坏48, 高坏1, 甕359), 須恵器片5点(坏蓋)が覆土下層を中心に出土している。2588は、竈覆土中から出土した破片3点と中央部・東部床面から出土した破片が接合したものであり、2711は竈火床面から出土している。2786は中央部床面から出土しており、廃絶時に投棄されたものと思われる。

所見 本跡の時期は、出土土器の形状から7世紀後葉と考えられる。また、北東方向へ約28mの距離に位置する第108号住居跡と住居の規模や主軸方向が近似することから、同一の集落を構成していたことが想定される。

第156号住居跡出土遺物観察表(第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2786	土師器	坏	[13.4]	4.1	-	長石・赤色 粘土	灰黄褐色	普通	体部外面へう張り、内面へう 磨き	中央部床面	20%
2588	須恵器	坏蓋	[13.4]	(4.3)	-	長石	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ、天井部左回りの 回転へう張り	東壁階下層	30% 13層部 内面に沈線
2711	土師器	甕	[26.8]	(15.4)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	体部外面縦位のナデ、内面ナ デ	竈火床面	10%

第157号住居跡(第148・149図)

位置 調査区北部の中央であるH13a1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第209・226・227号住居、第20号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 N-2°-Eを主軸とする長軸5.6m、短軸5.2mの方形である。壁高は最も残りの良い部分で44cmほどであり、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。断面U字状の壁溝が周囲している。

竈 北壁の中央部やや東寄りに付設され、焚口部から煙道部まで120cm、袖部幅100cmである。壁外への掘り込みは30cmほどで、天井部は崩落しており、土層断面図中の第1～3層が天井部の崩落土に相当し、粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。両袖部には芯材として土師器甕を逆位の状態で使用しており、床面から火床部に向かって緩やかに傾斜した地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面の高さから15cmほど置状に掘りくぼめられており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から緩やかに外傾した後、急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量
- 3 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量
- 7 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所。配置と形状からP1～P4が主柱穴に相当し、深さは30～70cmである。P1は他の主柱穴と

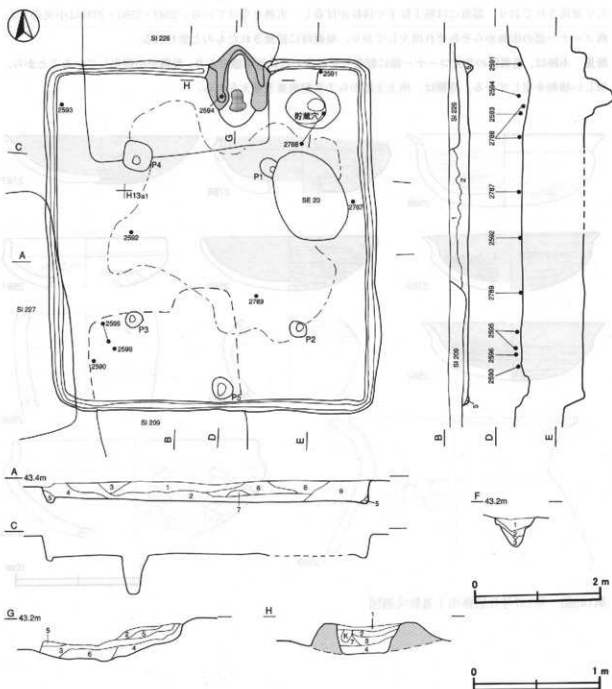
比較するとやや西寄りに位置し、深さも浅めであることから、柱を抜き取る際に掘り込まれたものと想定される。P5は深さが10cmで竈と対峙する南壁際に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 長径88cm、短径64cmの楕円形で、竈の東側に位置している。南北双方の立ち上がりの上に段を有しており、深さは約45cmである。覆土は、西側から流れ込んだ堆積状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

覆土 9層からなり、ロームブロックや焼土を含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



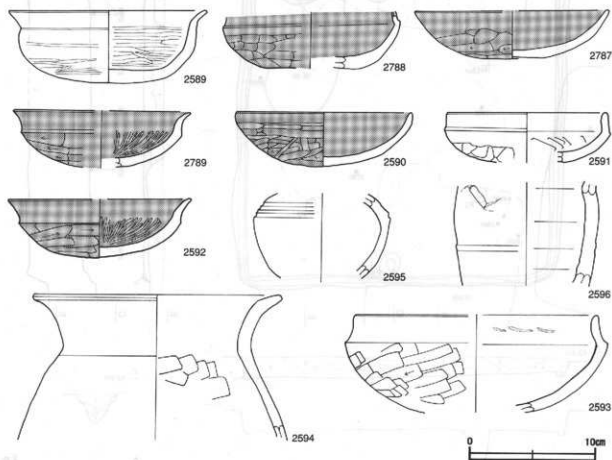
第148図 第157号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック中層, 焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片1328点(坏256, 高坏4, 甕1068), 須恵器片16点(坏10, 甕2, 瓶3, 捏鉢ヵ1)がほぼ全域から散在した状態で出土している。2589は, ほぼ完形に近い状態で竈覆土中から出土しており, 火熱を受けて器壁が剥落していることから支脚として使用されていた可能性が考えられる。2594は竈袖部の芯材として使用されており, 器面には粘土粒子や砂粒が付着し, 火熱を受けている。2592・2593・2789は中央部と北西コーナー部の床面からそれぞれ出土しており, 廃絶時に投棄されたものと思われる。

所見 本跡は, 竈東側の北東コーナー部に貯蔵穴を付設した住居形態であり, 規模が小型化していることから, 新しい様相を呈している。時期は, 出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第149図 第157号住居跡出土遺物実測図

第157号住居跡出土遺物観察表 (第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2589	土師器	坏	15.5	5.7	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラナデ後ヘラ磨き	竈裏土中	90% PL207
2590	土師器	坏	13.8	4.3	-	雲母	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ナデ	南西コーナ 一部下層	80% PL207
2591	土師器	坏	12.5	(3.9)	-	雲母・長石・ 石英	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	竈裏下層	50%
2592	土師器	坏	[14.4]	4.6	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	中央部床面	60%
2593	土師器	坏	[19.0]	(7.7)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	北西コーナ 一部床面	30% PL208
2787	土師器	坏	[15.4]	3.7	5.0	雲母・赤色 粒子	にぶい赤 褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	東壁部下層	75%
2788	土師器	坏	-	(4.7)	7.0	長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	北西コーナ 一部下層	30%
2789	土師器	坏	[14.0]	(4.4)	-	砂粒	褐灰	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	中央部床面	40%
2594	土師器	甕	19.4	(11.5)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	内面ヘラナデ	竈左縁部	30%
2595	須恵器	鉢	-	(6.6)	-	砂粒	灰	普通	体部内外面クロコナデ	竈コト割埋	5%
2596	須恵器	捩鉢カ	-	(8.2)	-	砂粒	灰	普通	体部内外面クロコナデ、遠か し孔ヘラ切り	南西コーナ 一寄り下層	5% 外面自然蝕

第161号住居跡 (第150図)

位置 調査区北部のG13h3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第162号住居跡を掘り込み、第158A号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約3.7m、短軸約2.8mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高12~22cmで、ほぼ直立する。

床 ほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

竈 北壁の中央部に付設されており、天井部や袖部はほとんど遺存しておらず、壁外へは40cmほど掘り込まれているだけである。焼土や粘土はほとんど確認されず、また、火熱を受けた痕跡も認められなかった。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

ピット 8か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは10~20cmとやや浅いが、規則的に配されている。P5は深さ20cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

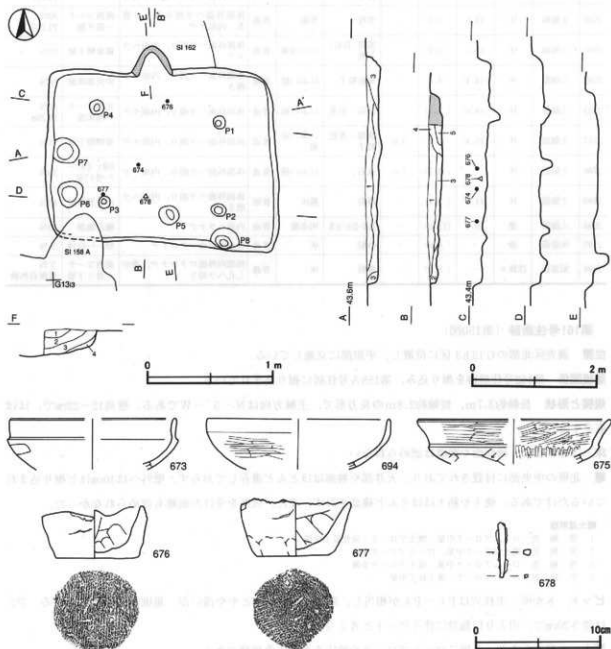
覆土 5層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片244点(坏106, 甕133, 高坏3, 手捏土器2), 須恵器片2点(甕), 鉄製品1点(鏃), 礫片7点がほぼ全域から散在した状態で出土している。673・675は覆土中から出土している。また、674は中央部, 676は北部, 677は南西部, 678は南部のいずれも覆土上層から出土している。これらの出土遺物のほとんどは、廃絶後の埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は竈の遺存状況や床面に硬化した部分が認められないことなどから、使用期間は短いものと推定される。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第150図 第161号住居跡・出土遺物実測図

第161号住居跡出土遺物観察表 (第150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
673	土師器	坏	[13.0]	(4.0)	-	長石・石英	黒	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
674	土師器	坏	[14.4]	(4.0)	-	雲母・非色粒子	黒	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き	中央部上層	20%
675	土師器	坏	[15.3]	(3.5)	-	石英・白色粒子	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き、口縁部内外面ヘラ磨き	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
676	土師器	手捏土器	8.0	6.2	6.6	長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面指頭痕	壺手前上層	80% PL207
677	土師器	手捏土器	8.2	4.3	6.0	雲母・長石	明赤褐	普通	体部内外面ナマ、指頭痕	南西部上層	90% PL207

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
678	鐵	(4.4)	0.4	0.6	(4.2)	鉄	基部		南西部上層	

第162号住居跡 (第151図)

位置 調査区北部中央のG13h3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第156・158A・161号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁から、N-2°-Wを主軸とする一辺約3.8mの方形と推定される。確認された壁高は10cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 はほぼ平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

ピット 1か所。深さは58cmで、壁際から検出されているが、性格は不明である。

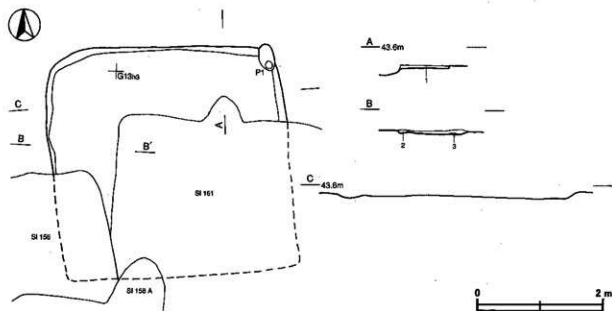
覆土 3層が確認されただけであり、堆積状況は判然としない。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は少なく、土師器片16点(坏2、壺14)が出土しただけである。出土した土師器片は、細片のため図示することはできなかった。

所見 本跡は南側部分が第161号住居との重複により、住居全体の形状は確認できなかった。6世紀後半と比定される第161号住居に掘り込まれていることや、土師器片の形状から、時期は古墳時代で6世紀後半以前と考えられる。



第151図 第162号住居跡実測図

第167号住居跡（第152～156図）

位置 調査区北部のG13h6区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 一辺4.3m前後の方形で、主軸方向はN-94°-Wである。壁高21～25cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、炉付近から出入口施設にかけてよく踏み固められており、壁溝が周回している。北西コーナー部にわずかなくほみが確認されている。

炉 北側中央部に付設されており、平面形は長径約60cm、短径約50cmの楕円形を呈している。

竈 西壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約100cm、袖部幅約90cm、壁外への掘り込みは約10cmである。火床部は床面から20cmほど掘りくぼめており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

袖部は土師器壳を芯材とし、その周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子・砂粒微量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子少量
- 5 に近い赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは40～50cm、柱間寸法はいずれも2.2mを測り、規則的に配されている。P5は深さ40cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部と南西コーナー部の2か所に付設されている。貯蔵穴1は北東コーナー部に付設され、長軸約80cm、短軸約60cmの隅丸長方形で、深さ約30cmである。また、貯蔵穴2は南西コーナー部に付設され、一辺が約70cmの隅丸方形で、深さ約50cmである。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

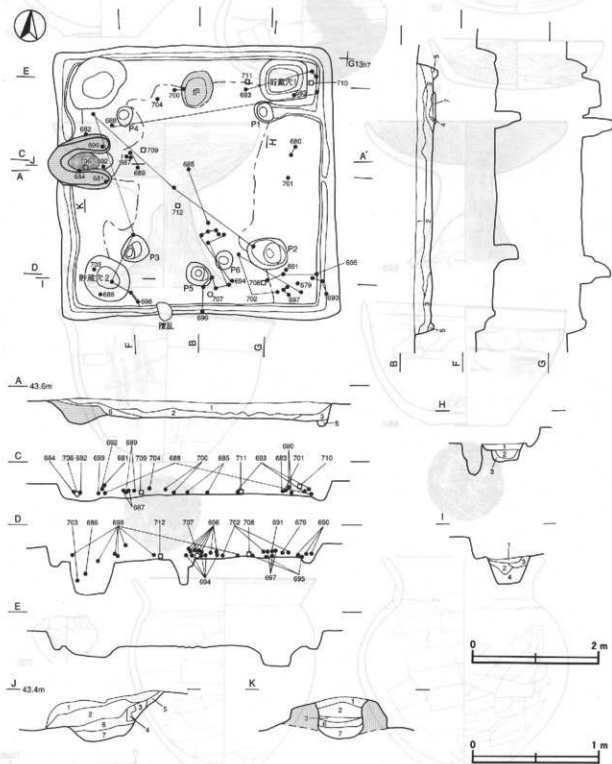
覆土 7層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

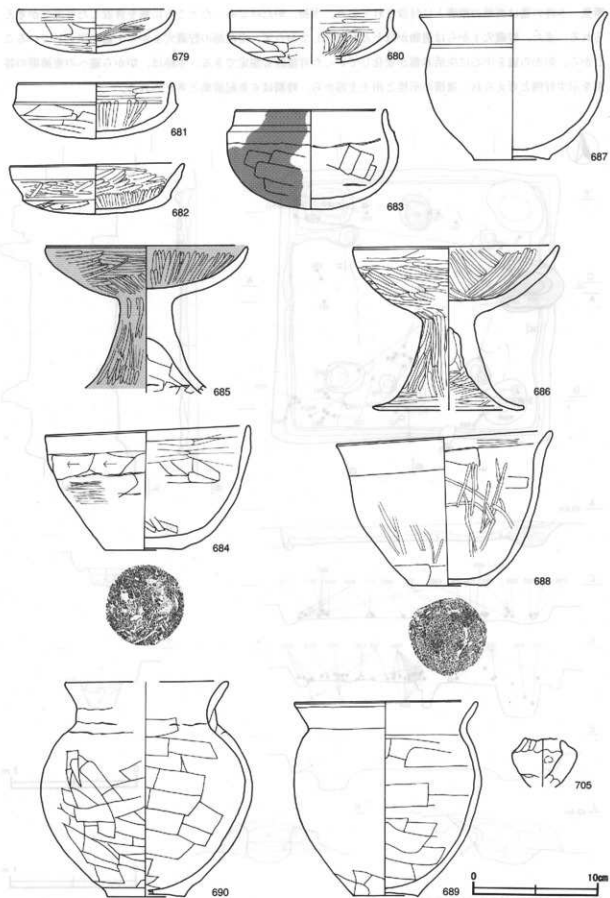
- 1 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量、炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物・砂質粘土ブロック少量
- 7 赤褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片1555点（坏210、高台付坏19、甕1217、瓶109）、須恵器片1点（甕）、手捏土器片3点、土製品5点（支脚）、焼成粘土塊10点、礫片3点がほぼ全域から散在した状態で出土している。682は竈石袖部から出土しており、袖部の芯材として二次利用されている。また、684・692は竈内覆土中層から出土している。さらに686・703は貯蔵穴2の覆土中層から出土しており、貯蔵穴1から遺物はほとんど出土していない。その他の出土土器の多くは、広範囲に散在した複数の破片が接合したものであり、焼絶と同時に投棄されたものと考えられる。

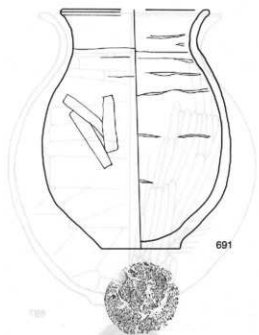
所見 本跡の竈は西壁の壁溝上に付設されており、当初、炉だけであったところに竈を併設した可能性が考えられる。また、貯蔵穴1からは遺物がほとんど出土しておらず、南西部の貯蔵穴2から土器が出土していることから、炉から竈を中心に生活基盤が変化していった可能性も想定できる。本跡は、炉から竈への変換期の特徴を示す好例と考えられ、遺構の形態と出土土器から、時期は6世紀前葉と考えられる。



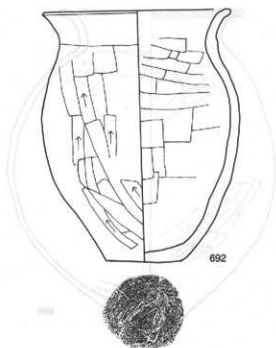
第152図 第167号住居跡実測図



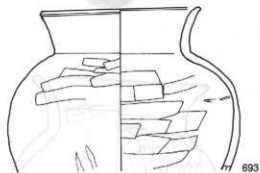
第153图 第167号住居跡出土遺物実測図(1)



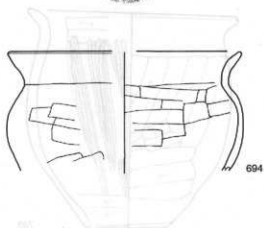
691



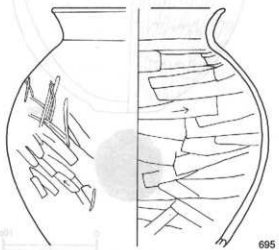
692



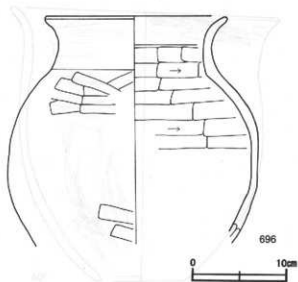
693



694



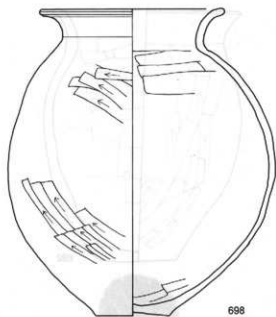
695



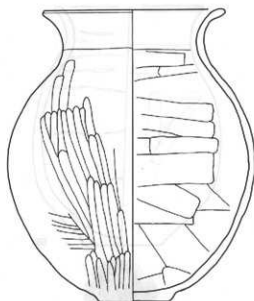
696

0 10cm

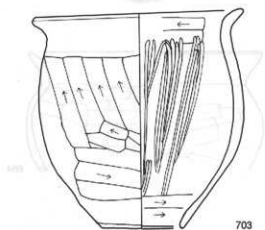
第154图 第167号住居跡出土遺物実測図(2)



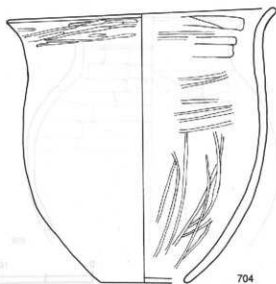
698



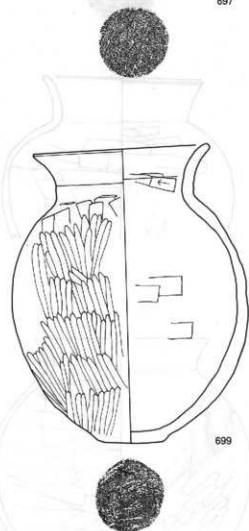
697



703



704

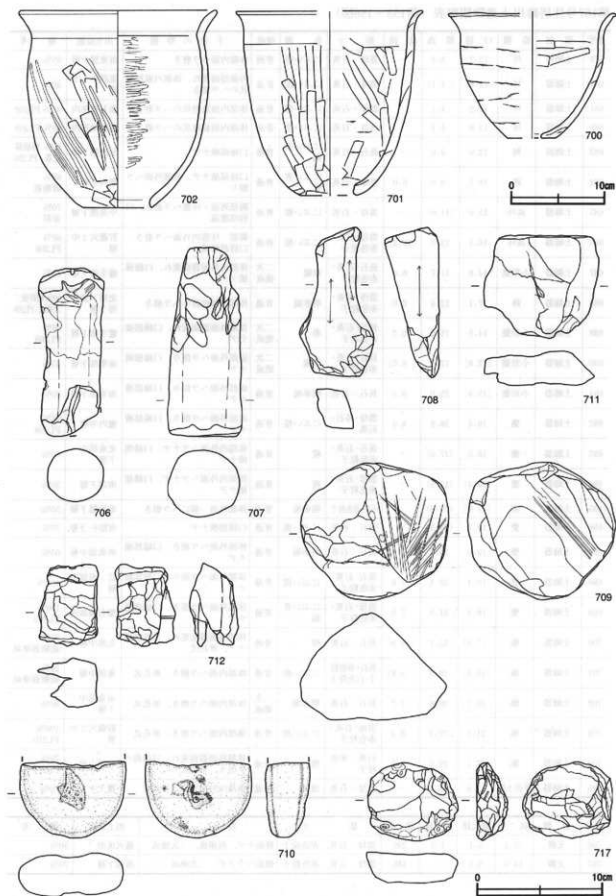


699

0

10cm

第155图 第167号住居跡出土遺物実測图(3)



第156图 第167号住居跡出土遺物実測図(4)

第167号住居跡出土遺物観察表 (第153~156図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
679	土師器	坏	12.2	3.4	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南東部中層	65%
680	土師器	坏	[12.8]	(4.1)	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	外面磨面荒れ、体部内面放射状のヘラ磨き	東部中・下層	30%
681	土師器	坏	12.2	4.4	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	竈左袖部内	95% PL208
682	土師器	坏	13.8	4.1	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	竈右袖部内	95% PL208
683	土師器	椀	12.0	8.0	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ	北東部下層	95% 外蓋篋付着 PL206
684	土師器	鉢	16.1	9.9	6.0	雲母・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ、底部外面ヘラ削り	竈内下層	60% 擦痕
685	土師器	高坏	15.9	(11.6)	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	肩部外面・坏部ヘラ磨き、口唇部摩滅	中央部下層	70% 赤彩
686	土師器	高坏	16.4	13.0	[12.2]	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	肩部・坏部内外面ヘラ磨き、口唇部摩滅	貯蔵穴2中層	80% PL208
687	土師器	小形甕	14.8	11.7	6.0	長石・石英・赤色粒子	赤褐	二次焼成	体部外面磨面荒れ、口縁部横ナデ	竈手前下層	95%
688	土師器	鉢	17.1	12.4	6.0	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内外面粗いヘラ磨き	北東・北西部下層	90% 磨面後二次焼成 PL208
689	土師器	小形甕	14.5	15.4	5.2	長石・石英・赤色粒子	赤	二次焼成	体部外面磨面荒れ、口縁部横ナデ	竈手前下層	95% PL208
690	土師器	小形甕	[12.8]	17.0	[6.0]	長石・石英・赤色粒子	赤褐	二次焼成	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ	南東部下層	65%
691	土師器	小形甕	[15.4]	25.0	8.4	長石・石英	明赤褐	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ	南東部下層	70%
692	土師器	甕	19.4	26.8	8.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ	竈内中层	95% PL208
693	土師器	甕	16.5	(17.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	北東部中・下層	60%
694	土師器	甕	[24.4]	(12.5)	-	雲母・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	南部下層	30%
695	土師器	甕	[17.8]	(24.6)	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面一部にヘラ磨き	南東部下層	50%
696	土師器	甕	19.7	(24.3)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	南部中・下層	70%
697	土師器	甕	19.0	30.7	7.3	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	南東部中層	65%
698	土師器	甕	19.4	32.4	7.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ	北・南部中層	100%
699	土師器	甕	18.3	31.9	7.0	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	竈右袖部内	100% PL209
700	土師器	甕	[17.3]	13.1	[4.9]	長石・石英	橙	普通	体部外面磨面荒れ、口縁部横ナデ、単孔式	北部中層	25% 破断面摩滅
701	土師器	甕	[19.2]	19.3	[5.8]	長石・赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き、単孔式	東部中層	20% 破断面摩滅
702	土師器	甕	20.3	20.6	7.2	長石・石英	明赤褐	二次焼成	体部内面ヘラ磨き、単孔式	南東部中・下層	80%
703	土師器	甕	21.6	22.9	8.4	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き、単孔式	貯蔵穴2中層	100% PL210
704	土師器	甕	27.7	29.0	8.8	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面磨面荒れ、口縁部ヘラ磨き、単孔式	北部中層	70% PL210
705	土師器	千粒土器	2.9	(3.7)	-	雲母・石英	浅黄	普通	体部内外面ナデ、指頭痕	覆土中	70%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
706	支脚	13.3	5.1	4.3	299	雲母・石英・赤色粒子	側面ナデ、指頭痕、二次焼成	竈火床内	90%
707	支脚	14.9	5.9	-	448	雲母・石英・赤色粒子	側面ヘラナデ、二次焼成	南部下層	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
708	磁石	(11.8)	(5.9)	(4.3)	(205)	凝灰岩	砥面2面, その他は破断面	南東部下層	
709	磁石	(10.9)	(11.8)	(8.5)	(1220)	砂岩	砥面2面, V字状の研磨痕, その他は破断面	覆土前下層	
710	凹石	(5.9)	8.5	3.5	(218.0)	砂岩	両面に凹面, 破断面が摩滅	北東部中層	
711	礫片	8.2	9.2	2.7	(272.0)	滑石	石製模造品の母岩*	北東部下層	
712	礫片	6.5	4.6	3.8	101.4	滑石	接合資料, 石製模造品の母岩*	中央部下層	
717	礫片	6.1	7.1	2.5	132.0	滑石	接合資料, 石製模造品の母岩*	覆土中	

第168号住居跡 (第157~160図)

位置 調査区北部のG13e4区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第170・172号住居, 第237号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺が4.8m前後の方形で, 主軸方向はN-2°-Wである。壁高約45cmで, やや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で, 竈の前面から出入口施設にかけてよく踏み固められている。また, 南西コーナー部から南壁に沿って幅0.6~1.0m, 長さ約3.0mにわたって高さ10cmの高まりが見られる。壁溝はほぼ周回している。

竈 北壁の中央部に付設されており, 規模は焚口部から煙道部まで約90cm, 袖部幅約100cm, 壁外への掘り込みは約15cmである。火床面は床面と同じ高さの平坦面を使用し, 火熱を受けて赤変硬化している。土層断面図中, 6層は砂質粘土を多量に含んでおり, 天井部の崩落土と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
- 5 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 砂質粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量, ロームブロック少量

貯蔵穴 長軸約90cm, 短軸約60cmの長方形で, 南東コーナー部に付設され, 深さ約40cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス少量

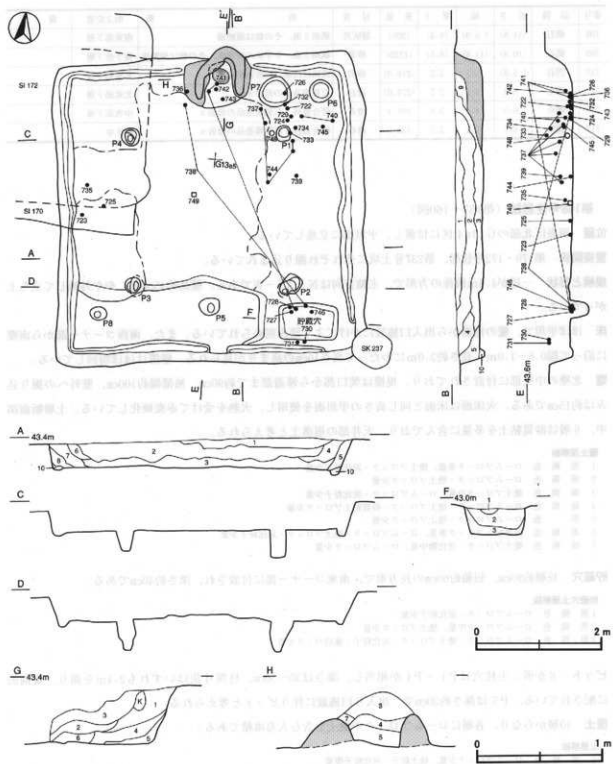
ピット 8か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さは30~50cm, 柱間寸法はいずれも2.4mを測り, 規則的に配されている。P5は深さ約30cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり, 各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化物・黒色土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物・黒色土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 9 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 10 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土遺物は土器器片1187点(坏262, 高台付坏1, 高坏8, 甕851, 甎65), 須恵器片4点(高台付坏2, 甕1, 蓋1), 礫片3点が, 特に北西部と南西部に集中して出土している。723・725は西部, 749は



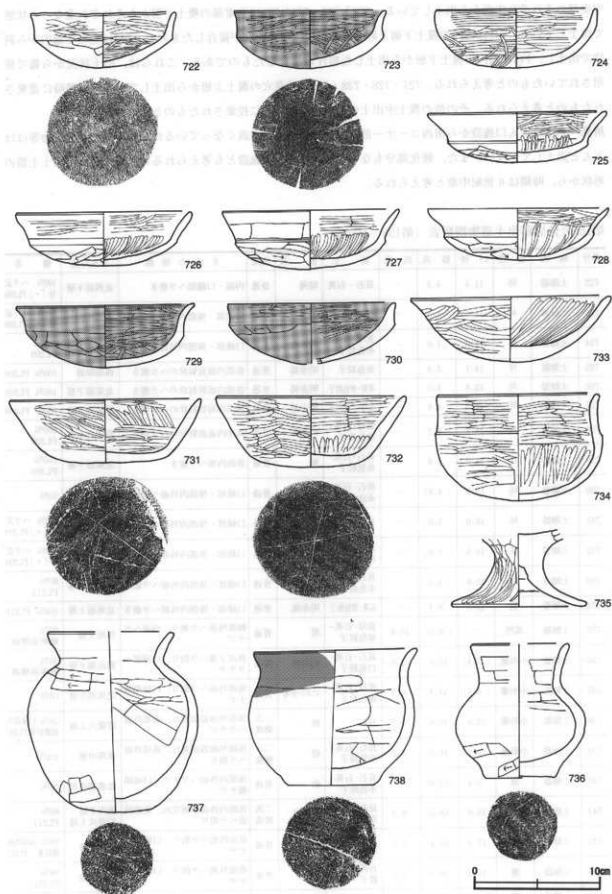
第157图 第168号住居跡実測图

中央部のそれぞれ床面から出土している。722と732、724と729は北東部の覆土下層からそれぞれ重なった状態で出土している。741は竈内の覆土下層と貯蔵穴の覆土上層の破片が接合したもので、742は完形で竈内から斜位で出土し、743は竈内の覆土下層から出土した破片が接合したものである。これらは、出土状況から竈で使用されていたものと考えられる。727・728・738・746は貯蔵穴の覆土上層から出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。その他の覆土中出土の遺物は、廃絶後に投棄されたものと考えられる。

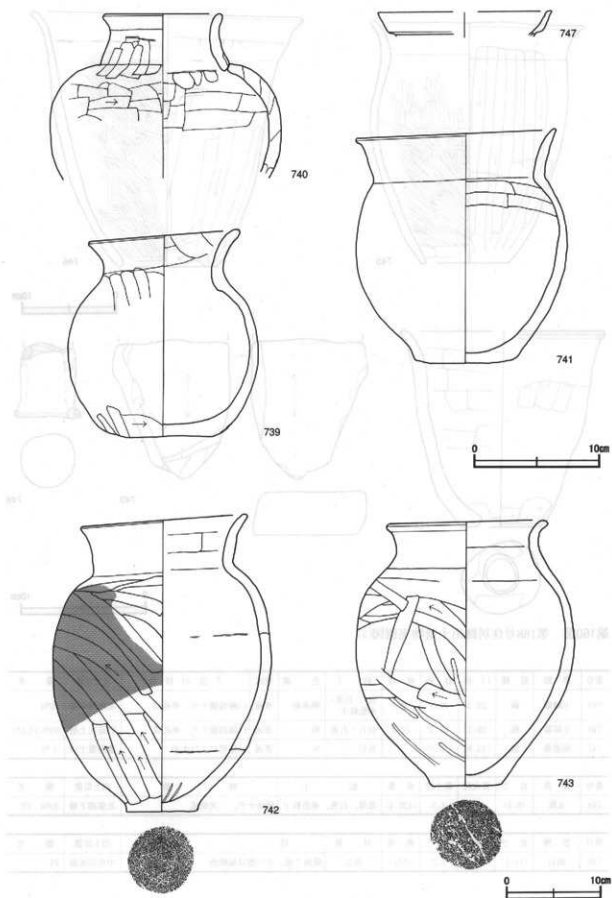
所見 本跡は出入口施設から南西コーナー部にかけて棚状に一段高くなっているが、その部分から遺物等はほとんど出土していない。また、硬化部分もないが、一種の棚状施設とも考えられる。遺構の形態と出土土器の形状から、時期は6世紀中葉と考えられる。

第168号住居跡出土遺物観察表 (第158～160図)

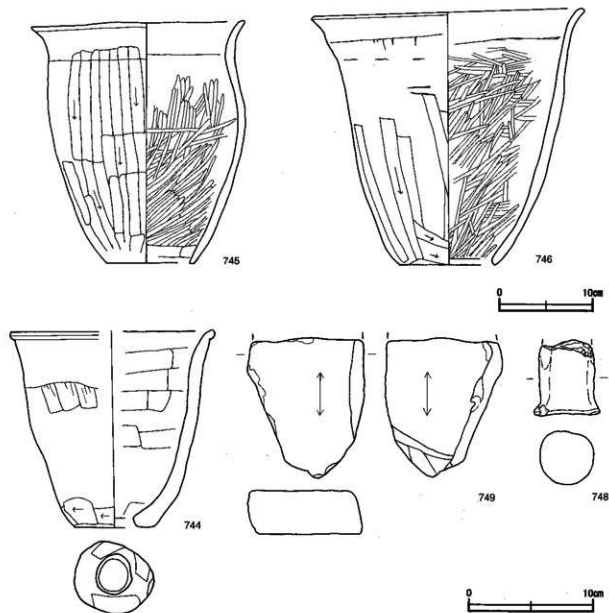
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
722	土師器	坏	11.4	4.3	-	長石・石英	暗褐	普通	内面・口縁部ヘラ磨き	北西部下層	100% ヘラ記号「+」PL209
723	土師器	坏	12.0	4.5	-	長石・石英	黒	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	西部床面	100% ヘラ記号「+」PL209
724	土師器	坏	12.6	4.6	-	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	北東部下層	100% PL209
725	土師器	坏	14.1	3.9	-	赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	西部床面	100% PL209
726	土師器	坏	13.8	4.3	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	北東部下層	100% PL209
727	土師器	坏	14.0	4.6	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	貯蔵穴上層	100% PL209
728	土師器	坏	14.3	4.2	-	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面放射状のヘラ磨き	貯蔵穴上層	100% PL209
729	土師器	坏	14.0	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	体部内面ヘラ磨き	北東部下層	100% PL209
730	土師器	坏	13.3	(4.8)	-	長石・石英・赤色粒子	黒	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	南東部上層	50%
731	土師器	坏	15.0	5.0	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	南東部上層	100% ヘラ記号「x」PL209
732	土師器	坏	14.8	5.6	-	長石・石英・赤色粒子	明褐	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	北東部下層	100% ヘラ記号「x」PL209
733	土師器	坏	15.8	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	北東部上層	80% PL211
734	土師器	碗	12.8	8.4	-	石英・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	北東部上層	100% PL211
735	土師器	高坏	-	(6.0)	10.8	雲母・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナゲ	西部下層	60% 破断面確認
736	土師器	小形壺	[7.4]	10.6	5.6	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	体部下層ヘラ削り、口縁部ヘラナゲ	壁下下層	50% 破断面確認
737	土師器	小形壺	[9.6]	14.4	6.3	雲母・石英・赤色粒子	にぶ赤褐	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナゲ	北東部中層	60%
738	土師器	小形壺	12.8	10.6	7.2	長石	橙	二次焼成	体部外面器面磨かれ、底部外面ヘラナゲ	貯蔵穴上層	100% 口縁部外面磨き付着 PL212
739	土師器	小形壺	11.8	16.5	8.2	長石・石英・赤色粒子	橙	二次焼成	体部外面器面磨かれ、底部外面ヘラ削り	東部中層	100%
740	土師器	壺	9.4	(13.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナゲ、口縁部横ナゲ	北東部中層	20%
741	土師器	壺	15.8	18.5	8.3	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	二次焼成	体部内外面器面磨かれ、底部外面ヘラ削り	竈内下層	80% PL211
742	土師器	壺	17.3	31.4	7.5	雲母・石英・赤色粒子	橙	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナゲ	竈内下層	100% 体部外面磨き付着 PL211
743	土師器	壺	16.4	28.0	7.4	石英・赤色粒子	橙	普通	底部外面ヘラ削り、口縁部横ナゲ	竈内下層	98% PL211
744	土師器	瓶	[15.8]	15.6	6.4	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナゲ、穿孔式	中央部下層	70% PL211



第158图 第168号住居跡出土遺物実測図(1)



第159図 第168号住居跡出土遺物実測図(2)



第160図 第168号住居跡出土遺物実測図(3)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
745	土師器	甔	22.3	25.5	9.1	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ，單孔式	北東部中層	75%
746	土師器	甔	28.5	27.5	10.2	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ，單孔式	貯蔵火上層	95% PL210
747	須恵器	甔	[13.8]	(2.0)	-	長石	灰	普通	口縁部口クロナデ	甔内覆土中	5%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
748	支脚	(6.1)	5.2	4.3	(132.4)	雲母，石英，赤色粒子	両面ナデ，二次焼成	北東部下層	30% PL

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
749	砥石	(11.1)	9.4	3.5	(551)	砂岩	砥面2面，その他は破断面	中央部床面	PL

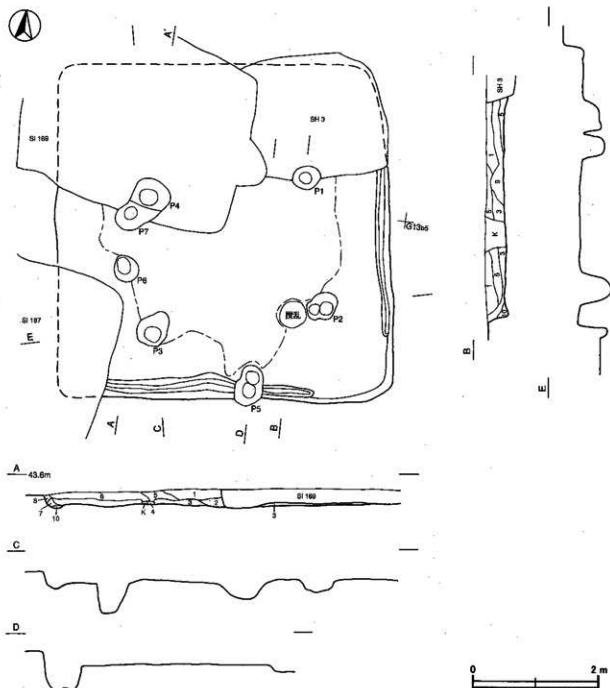
第181号住居跡 (第161図)

位置 調査区北部のG13b4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第169・187号住居、第3号方形竪穴遺構にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 北部が重複により掘り込まれているため東西軸は約5.3mで、南北軸は3.4mが確認されただけであり、平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向は、東西壁の指す方向から判断してN-10°-Wと推定される。壁高17~30cmで、やや外傾して立ち上がる。また、竈・竈は確認できなかった。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は南東コーナー部を除き、全周していたものと考えられる。



第161図 第181号住居跡実測図

ピット 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは30～50cmである。P5は深さ40cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 6 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量
- 9 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片288点(坏47, 甕240, 瓶1), 須恵器片3点(坏), 土製品4点(不明), 礫片1点がほぼ全域から散在した状態で出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 重複により炉・竈が確認できず、また、出土土器も細片のため判断材料に乏しいが、土師器坏片・土師器甕片・須恵器坏片から、時期は7世紀代に位置づけられる。

第182号住居跡(第162・163図)

位置 調査区北部のG13d2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第183号住居、第275・278号土坑、第5号掘立柱建物にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺5.0m前後の方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高10～22cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、西北部を除いてよく踏み固められている。壁溝は西壁と、南北壁のそれぞれ西半分、さらに東壁の一部で確認された。

竈 北壁の中央部東寄りに付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは約10cmである。火床面は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火熱を受けて赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック・黒色土ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは30～50cm、柱間寸法はいずれも2.2mを測り、規則的に配されている。P5は深さ約15cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ約10cmで皿状を呈しているが、性格については不明である。

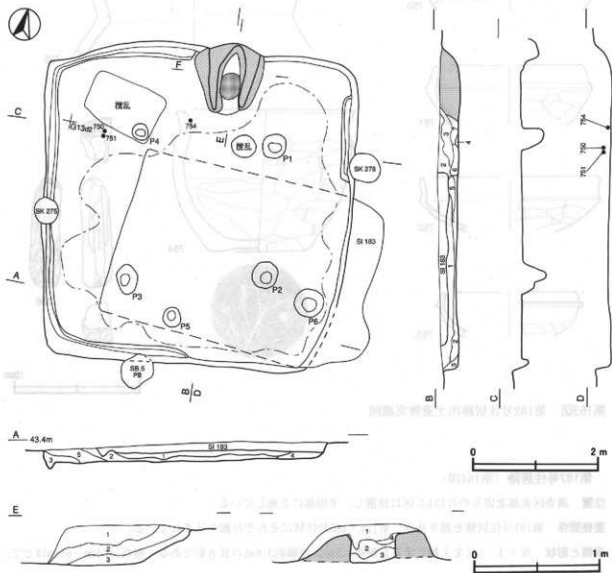
覆土 7層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 砂質粘土ブロック多量、ロームブロック少量
- 7 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片300点(坏95, 甕204, 瓶1), 須恵器片6点(坏3, 甕3), 土製品6点(不明), 石器1点(砥石), 礫片7点がほぼ全域から散在した状態で出土している。754は竈手前の床面からほぼ完形で出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、750・751は西北部の覆土中層、752・753・755・756は覆土中から出土しており、いずれも廃絶後に投棄されたものである。

所見 時期は、遺構の形態と出土土器から、6世紀中葉と考えられる。

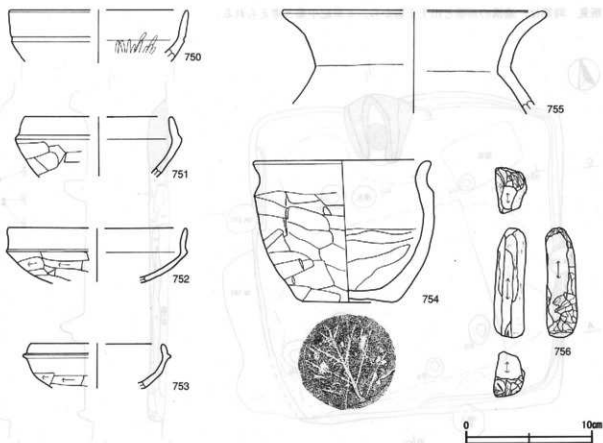


第162図 第182号住居跡実測図

第182号住居跡出土遺物観察表 (第163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
750	土脚器	坏	[14.0]	(4.1)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	内面へラ磨き、口縁部横ナデ	北西部中層	10%
751	土脚器	坏	[11.4]	(4.7)	-	雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部横ナデ	北西部中層	5% 口縁部摩滅
752	土脚器	坏	[14.0]	(4.3)	-	雲母・石英	橙	普通	器面荒れ、口縁部横ナデ	覆土中	10%
753	須恵器	坏	[10.4]	(3.6)	-	石英・白色粒子	灰	普通	体部外面へラ削り	覆土中	5%
754	土脚器	小形甕	13.8	11.2	8.0	石英・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部横ナデ、底部本葉状	竈手前床面	100% PL212
755	土脚器	甕	[20.6]	(8.1)	-	角礫・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
756	磁石	(8.7)	(2.5)	(3.6)	(95.5)	凝灰岩	紙面4面、その他は破断面	覆土中	



第163図 第182号住居跡出土遺物実測図

第187号住居跡 (第164図)

位置 調査区北部北寄りのG13b3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第181号住居跡を掘り込み、第174・185号住居にそれぞれ掘り込まれている。

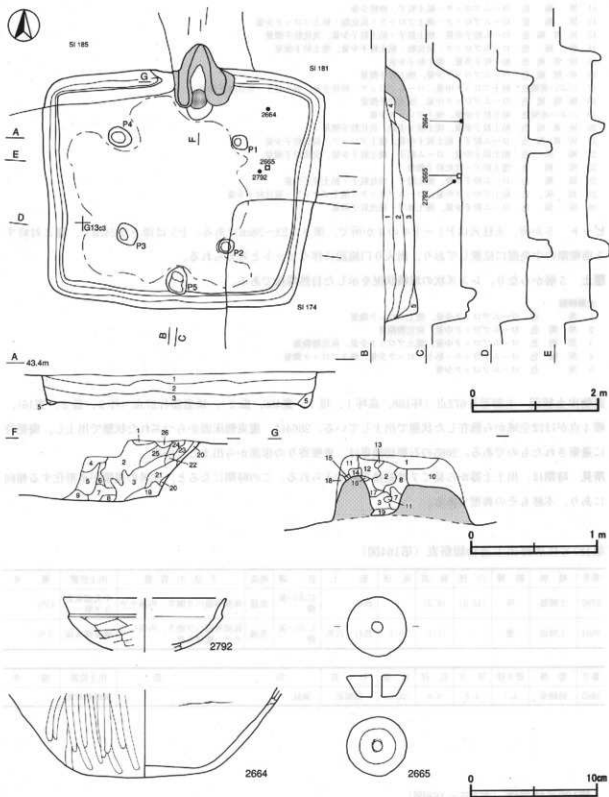
規模と形状 N-4°-Eを主軸とする長軸約4.5m、短軸約3.8mの長方形である。壁高は54cm~65cmほどで、各壁ともほぼ直立する。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。断面U字状の壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで120cm、袖部幅92cm、壁外への掘り込みは40cmほどである。天井部は崩落しており、土層断面図中の第3・6・7・8層が相当し、粘土粒子や砂粒を多量に含み、付近の床面には竈構築材の流出が見られる。袖部は、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されており、火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床部から緩やかに傾斜した後、外傾しながら立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量
- 3 灰褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック少量
- 5 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 6 灰褐色 粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子少量
- 7 明褐色 焼土ブロック・粘土粒子多量
- 8 明褐色 焼土ブロック・砂粒中量、炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒中量、炭化物・ローム粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量



第164图 第187号住居跡・出土遺物実測図

11	黒褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
12	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量
13	灰黄褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
14	暗褐色	ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量、焼土粒子微量
15	灰黄褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量
16	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
17	にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
18	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
19	にぶい赤褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック少量
20	灰黄褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
21	灰黄褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
22	褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
23	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
24	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
25	褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
26	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4の4か所、深さは23～38cmである。P5は深さが24cmで、竈と対峙する南壁際の中央部に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1	黒色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
2	黒褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
3	黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
4	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
5	黒色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片672点（坏188、高坏1、埴1、甕480、甔2）、須恵器片27点（坏9、蓋2、甕16）、礫4点がほぼ全域から散在した状態で出土している。2664は、竈東側床面からつぶれた状態で出土し、焼絶時に運棄されたものである。2665の石製紡錘車は、東壁寄りの床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から見て7世紀後半と考えられる。この時期になると、住居の規模が小形化する傾向にあり、本跡もその典型である。

第187号住居跡出土遺物観察表（第164図）

番号	種類	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2792	土師器	坏	[13.0]	(4.2)	-	長石	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	中央部東寄り下層	15%	
2664	土師器	甕	-	(7.1)	9.4	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り、内面へラナデ、軽積み風	竈東側床面	5%	

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2665	紡錘車	4.7	1.8	0.8	(53.3)	粘板岩	無紋	東壁際床面	

第189号住居跡（第165～168図）

位置 調査区北部のH13e6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第132・138・139号住居跡を掘り込み、第134・135号住居、第635号土坑、第8・15号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺9.4m前後の方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は10cm前後のため立ち上がりは判然としない。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は東壁が重複により確認できないが、全周していたものと考えられる。西側に長さ約2.4m、深さ約10cmの溝が2.2mの間隔で2本認められ、間仕切り溝と考えられる。また、北壁西寄りに長さ約70cm、深さ約10cmの溝が35cmの間隔で2本認められる。

竈 北壁の中央部に付設されており、竈2から竈1へと作り替えが行われている。竈1の規模は突口部から煙道部まで約110cm、袖部幅約100cm、壁外への掘り込みは約35cmである。火床面は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火熱を受けて赤変硬化している。右袖部は竈2の左袖部の一部を芯材にして作り替えている。また、竈2の規模は突口部から煙道部まで約80cm、袖部幅約80cm、壁外への掘り込みは約30cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈1土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量
- 4 暗 褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量
- 5 にぶい黄褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、砂粒微量
- 6 にぶい黄褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量
- 7 暗 赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒中量、ローム粒子微量
- 8 暗 赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒少量、ローム粒子微量
- 9 暗 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子微量
- 10 暗 赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 11 暗 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 12 黒 褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 13 極暗 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 14 暗 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 15 暗 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量

竈2土層解説

- 16 暗 赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 17 暗 赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 18 黒 褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 19 暗 褐色 砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 20 黒 褐色 焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 21 黒 褐色 砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 22 黒 褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 23 暗 褐色 砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
- 24 黒 褐色 焼土ブロック・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 25 黒 褐色 砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～60cm、柱間寸法はいずれも4.5mを測り、規則的に配されている。P5・P6はいずれも深さ30cmで、竈と対峙する位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東部の竈右袖部脇に付設されており、貯蔵穴2から貯蔵穴1へと作り替えが行われている。貯蔵穴1は長軸約80cm、短軸約70cmの長方形で、深さ約50cmである。また、貯蔵穴2は、長軸約90cm、短軸約80cmの隅丸長方形で、深さ約25cmである。

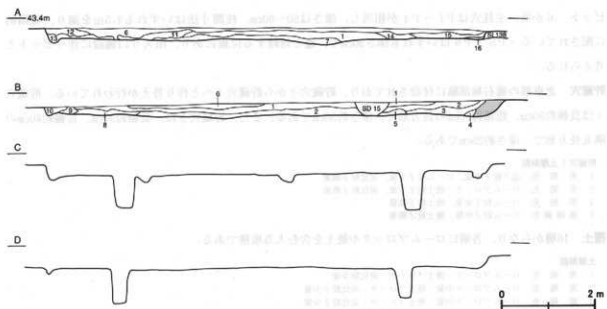
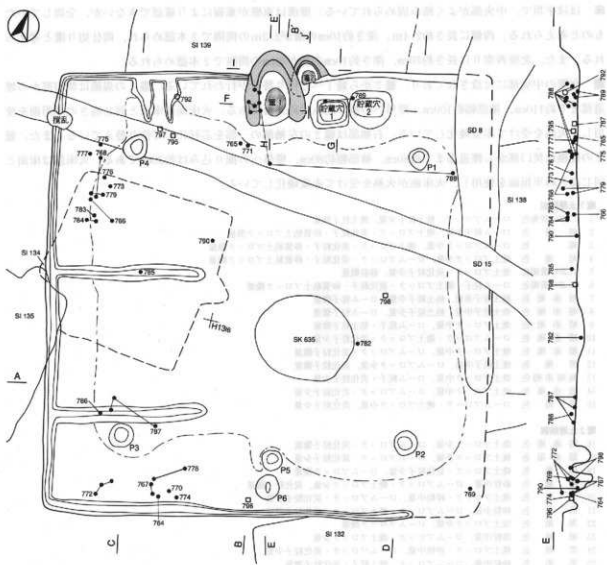
貯蔵穴1土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 極暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

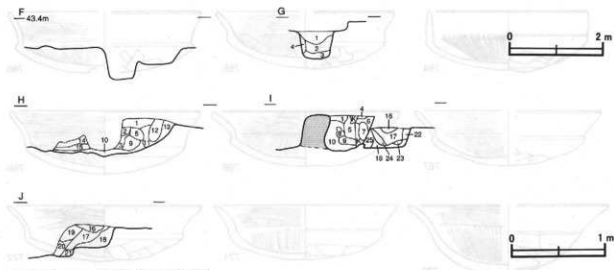
覆土 16層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗 褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 黒 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量



第165图 第189号住居跡実測图(1)



第166図 第189号住居跡実測図(2)

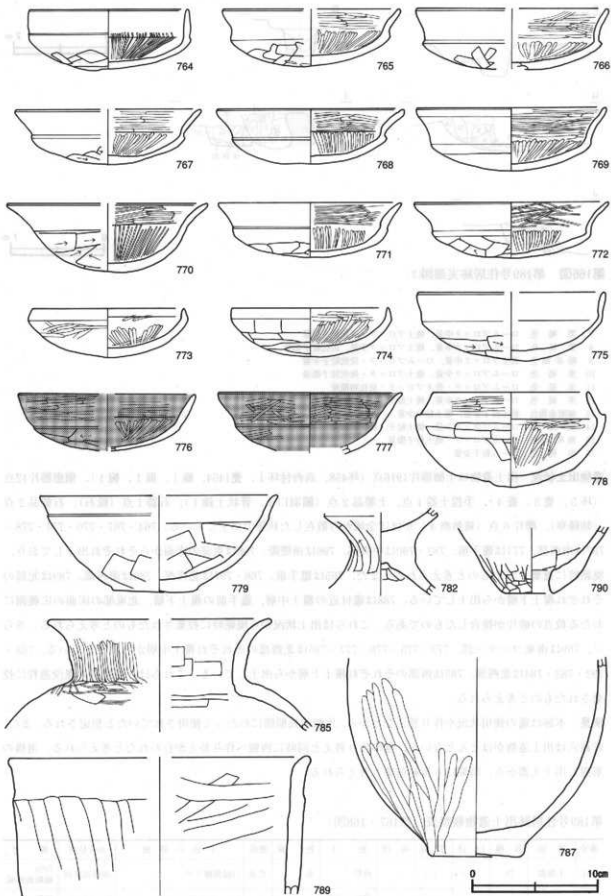
- 7 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 12 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 13 極暗赤褐色 粘土粒子多量、焼土粒子少量
- 14 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 15 極暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 16 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片1916点(坏458, 高台付坏1, 甕1454, 瓶1, 皿1, 椀1), 須恵器片12点(坏5, 甕3, 蓋4), 手捏土器1点, 土製品2点(輪羽口1, 管状土錘1), 石器1点(砥石), 石製品2点(紡錘車), 礫片6点(被熱痕4)がほぼ全域から散在した状態で出土している。764・767・770・774・778・787は南西部, 771は竈手前, 782・790は中央部, 796は南壁際, 798は東部の床面からそれぞれ出土しており, 廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 765は竈手前, 766・797は北西部, 786は南西部, 789は北部のそれぞれ覆土下層から出土している。788は竈付近の覆土中層, 竈手前の覆土下層, 北東部の床面の広範囲にわたる数点の破片が接合したものである。これらは出土状況から廃絶時に投棄されたものと考えられる。さらに, 769は南東コーナー部, 773・775・776・777・795は北西部のそれぞれ覆土中層から出土している。768・792・783・784は北西部, 785は西部のそれぞれ覆土上層から出土している。これらは, 廃絶後の埋没過程に投棄されたものと考えられる。

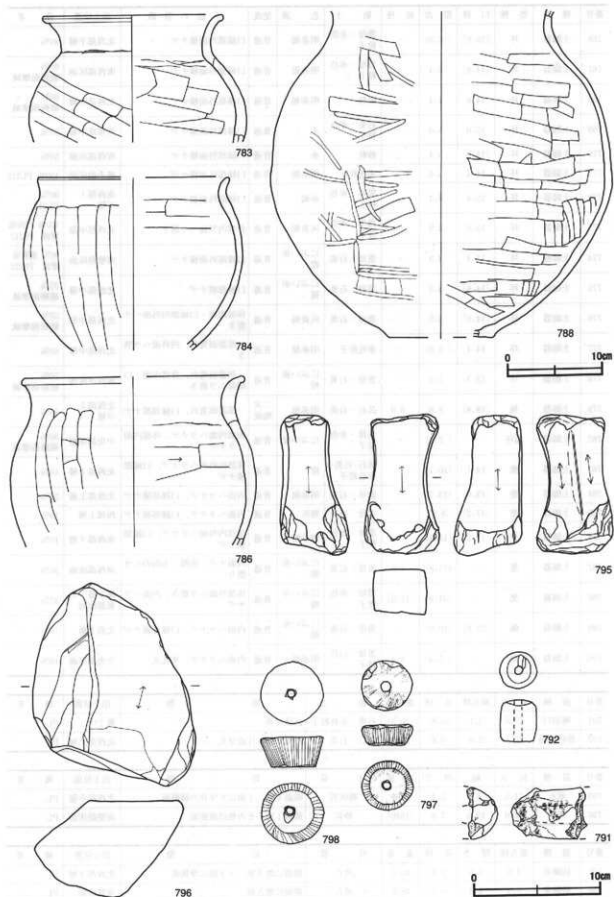
所見 本跡は竈の使用状況や作り替えなどから, 比較的長期間にわたって使用されていたと想定される。また, 貯蔵穴は出土遺物がほとんどないが, 竈の作り替えと同時に西側へ作り替えが行われたと考えられる。遺構の形態と出土土器から, 時期は6世紀前半と考えられる。

第189号住居跡出土遺物観察表 (第167・168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
764	土師器	坏	12.4	4.3	-	砂粒	赤	普通	口縁部横ナデ	南西部床面	70% 破断面準純
765	土師器	坏	[14.0]	4.5	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	竈手前下層	70% 破断面準純



第167图 第189号住居跡出土遺物実測図(1)



第168图 第189号住居跡出土物実測图(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
766	土師器	坏	[15.0]	(4.8)	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	北西部下層	40%
767	土師器	坏	[14.6]	4.4	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	南西部床面	65% 破断面摩滅
768	土師器	坏	14.8	4.4	-	砂粒	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	北西部上層	80% 破断面摩滅
769	土師器	坏	15.0	5.0	-	石英・赤色 粒子	赤	普通	口縁部外面横ナデ	南東部中層	55%
770	土師器	坏	[15.8]	5.4	-	砂粒	赤	普通	口縁部外面横ナデ	南西部床面	50%
771	土師器	坏	14.4	4.4	-	赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	甕手前床面	100% PL212
772	土師器	坏	15.4	4.4	-	雲母・赤色 粒子	赤褐	普通	口縁部外面横ナデ	南西部上・ 下層	90% PL212
773	土師器	坏	12.0	3.9	-	雲母・赤色 粒子	灰黄褐	普通	体部内外面ヘラ磨き	北西部中層	100% 口唇部 摩滅 PL212
774	土師器	坏	12.4	3.9	-	雲母・石英	にぶい黄 橙	普通	口縁部外面横ナデ	南壁摩滅面	90% 破断面 摩滅 PL212
775	土師器	坏	[14.6]	5.5	-	雲母・石英	にぶい赤 褐	普通	口縁部横ナデ	北西部中層	35% 破断面摩滅
776	土師器	坏	[14.0]	4.5	-	雲母・石英	灰黄褐	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ 磨き	北西部中層	50% 破断面摩滅
777	土師器	坏	14.4	(4.8)	-	赤色粒子	明赤褐	普通	一部器面磨き、内外面ヘラ磨 き	北西部中層	60%
778	土師器	坏	12.3	7.5	-	雲母・石英	にぶい黄 橙	普通	一部器面磨き、体部内面・口 縁部ヘラ磨き	南西部床面	70% 破断面摩滅
779	土師器	碗	[18.8]	7.8	6.9	長石・石英	明赤褐	二次 焼成	一部器面磨き、口縁部横ナデ	北西部上・ 中層	40%
782	土師器	高坏	-	(7.0)	-	雲母・赤色 粒子	にぶい橙	普通	器部内面ヘラナデ、坏部内面 ヘラナデ	中央部床面	30% 破断面摩滅
783	土師器	壺	14.1	(10.1)	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部 横ナデ	北西部上層	40%
784	土師器	壺	[15.0]	(13.7)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	内面ヘラナデ、口縁部横ナデ	北西部上層	20%
785	土師器	壺	[17.2]	(8.9)	-	雲母・石英	灰黄褐	普通	内面ヘラナデ、口縁部横ナデ	西部上層	10%
786	土師器	壺	[17.2]	(13.4)	-	雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部 横ナデ	南西部下層	10%
787	土師器	壺	-	(15.8)	7.0	雲母・石英	にぶい赤 褐	普通	内面ナデ、底部一方のヘラ 削り	南西部床面	35%
788	土師器	壺	-	(34.9)	[11.0]	雲母・赤色 粒子	にぶい赤 褐	普通	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラ ナデ	甕上層・北 東部床面	35%
789	土師器	瓶	[23.6]	(10.9)	-	雲母・石英	にぶい赤 褐	普通	内面ヘラナデ、口縁部横ナデ	北部下層	10%
790	土師器	瓶	-	(5.3)	3.4	雲母・白色 粒子	明赤褐	普通	内面ヘラナデ、穿孔式	中央部床面	10%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
791	鑿羽門	(5.9)	(4.1)	(0.8)	(40.3)	石英・赤色粒子	滑体付着	覆土中	PL
792	管状土師	3.3	2.9	0.6	26.5	長石・石英	外面ナデ、片面穿孔	北西部上層	PL

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
795	砥石	11.0	6.0	5.4	469	凝灰岩	紙面4面、1面にV字状の研磨痕	北西部中層	PL
796	砥石	16.0	13.0	7.6	(1540)	砂岩	紙面1面、その他は破断面	南壁摩滅面	PL

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
797	紡錘車	4.0	1.6	0.8	40.0	滑石	側面に磨き痕。上下面に摩擦痕	北西部下層	PL
798	紡錘車	5.0	2.3	0.7	76.8	滑石	側面に磨き痕	東部床面	PL

第193号住居跡 (第169図)

位置 調査区北部のF13j5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第196・206・530号住居、第124号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は北側が調査区域外のために約3.5m、東西軸は重複により約3.0mだけが確認できただけで、平面形については不明である。壁高は約10cmと低い。また、炬や竈についても確認できない。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝は認められない。

ピット 3か所。P1は深さ約110cmで、形状から主柱穴と考えられる。P2は深さ約35cmで、性格については不明である。

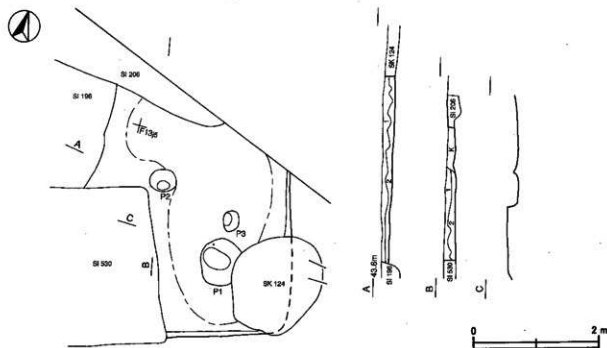
覆土 2層からなり、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片39点(坏4, 甕35)、礫片12点がほぼ全域から散在した状態で出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 本跡は西側部分が住居跡の重複により掘り込まれており、また、北側部分が調査区域外であるため、平面形は確認できないが、P1の形状及び深さから大形住居跡の可能性が想定できる。時期は、5世紀末から6世紀初め頃に比定される第196号住居跡に掘り込まれていることと、土師器の坏片や甕片の形状から、5世紀後葉と考えられる。



第169図 第193号住居跡実測図

第196号住居跡（第170～172図）

位置 調査区北部のF13j4区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第206・530号住居，第9号方形竪穴遺構，第5号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 北東部は調査区域外のため確認できないが，西壁の各コーナー部と主軸方向が認められ，一辺が5.0m前後の方形と推定される。主軸方向はN-86°-Eである。壁高は30～40cmで，やや外傾して立ち上がる。床 はほぼ平坦で，南壁のやや西寄り付近に出入口施設に伴う弧状の高まりが認められ，この高まりの北側から中央部がよく踏み固められている。壁溝は一部が重複と調査区域外のために確認できないが，全周していたものと思われる。

竈 東壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約100cm，袖部幅約90cm，壁外への掘り込みは約10cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 色 ロームブロック中量，焼土粒子微量
- 2 黒褐色 色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量
- 4 灰褐色 色 粘土粒子多量，焼土ブロック少量，炭化物微量
- 5 褐色 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 6 黒色 炭化物中量，ロームブロック少量
- 7 褐色 色 ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量

ピット 6か所。P1・P2は深さ45cm前後で，規模や形状から主柱穴と考えられるが，対応する柱穴は確認されていない。P3は深さ約25cmで，補助柱穴と考えられる。P5は深さ約15cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は長径約60cm，短径約40cmの不定形，深さ約20cmで，上層から遺物が出土していることから貯蔵穴と考えられる。

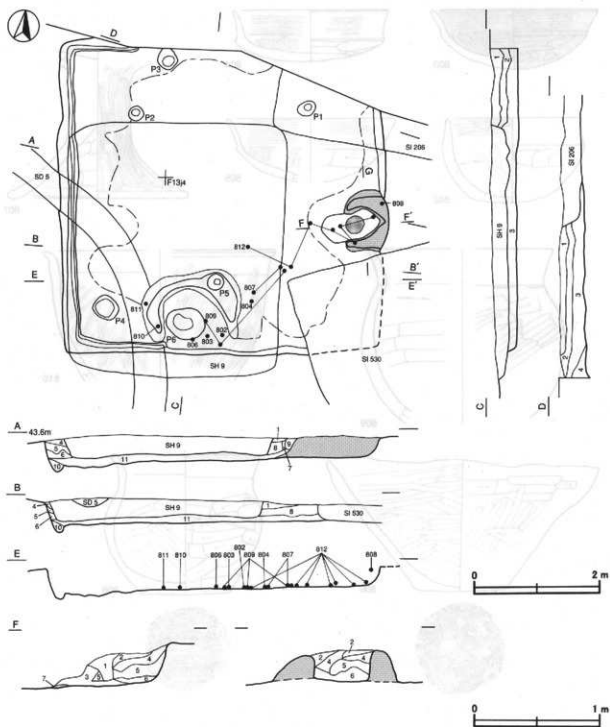
覆土 11層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

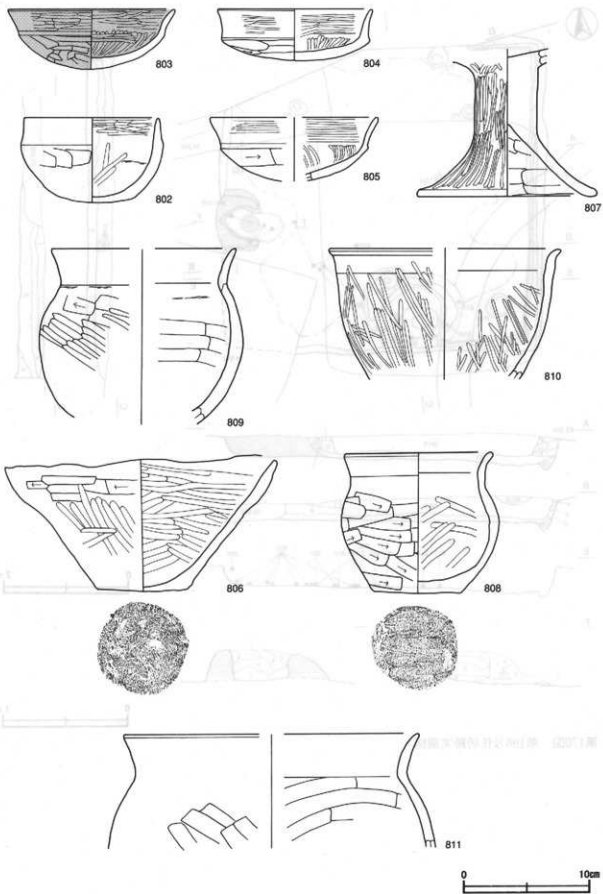
- 1 黒褐色 色 ロームブロック・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 色 ロームブロック少量
- 4 黒色 色 ロームブロック中量，炭化粒子少量
- 5 黒色 色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 色 ローム粒子多量，炭化粒子微量
- 7 黒褐色 色 粘土ブロック多量，ロームブロック中量
- 8 暗褐色 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
- 9 暗褐色 色 ロームブロック中量，焼土ブロック微量
- 10 黒褐色 色 ローム粒子中量
- 11 暗褐色 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土遺物は土器器片579点（坏96，高台付坏10，甕431，瓶17，高坏9，鉢16），須恵器片30点（坏27，高台付坏2，甕1），灰胎陶器片1点（不明）が南部から散在した状態で出土している。802～804・806・810・811は，いずれも出入口施設付近の床面から出土している。808は竈内から出土し，812は竈手前の床面と竈火床面から出土した破片が接合したものである。807・809は，南部の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

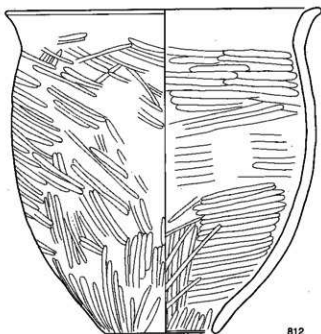
所見 時期は，竈の形態と出土土器から5世紀末から6世紀初め頃と考えられ，西南西約38mに位置する第281号住居跡と同一の集落を構成していたことが想定される。



第170图 第196号住居踏实测图



第171图 第196号住居跡出土遺物実測図(1)



812



第172図 第196号住居跡出土遺物実測図(2)

第196号住居跡出土遺物観察表 (第171・172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
802	土師器	坏	10.8	6.7	-	雲母・長石・石英	赤褐色	普通	体部・口縁部内面ヘラ磨き、口縁部外面ナデ	南部床面	100%
803	土師器	坏	13.2	4.8	-	雲母・赤色粒子	赤	普通	内面・口縁部内外面ヘラ磨き	南部床面	100% 赤彩
804	土師器	坏	12.2	4.1	-	石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	内面・口縁部内外面ヘラ磨き	南部床面	70%
805	土師器	坏	[13.2]	(5.1)	-	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部内面・口縁部内外面ヘラ磨き	覆土中	40%
806	土師器	鉢	21.5	10.3	7.2	長石・石英	明赤褐色	普通	底部外面ヘラ割り後ナデ、内外面ヘラ磨き	南部床面	80% PL213
807	土師器	高坏	7.5	(11.7)	[14.4]	雲母・長石・石英	橙	普通	胴部外面・坏部内面ヘラ磨き	南部床面	60%
808	土師器	小形甕	11.6	11.2	6.8	長石・石英	にぶい赤褐色	二次焼成	底部外面ヘラ割り後ナデ、口縁部横ナデ	覆土軸部内	100%
809	土師器	小形甕	[14.6]	(13.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	二次焼成	体部内面ヘラナデ	南部床面	70%
810	土師器	鉢	[18.4]	(10.4)	-	長石・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部内外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	南部床面	30%
811	土師器	甕	[23.4]	(9.0)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	体部内外面ヘラナデ、口縁部横ナデ	南部床面	10%
812	土師器	甕	24.8	25.8	8.9	長石・石英	明赤褐色	普通	体部内外面ヘラ磨き、口縁部横ナデ	覆土床面・甕手前床面	80% PL212

第200号住居跡（第173～175図）

位置 調査区北部のG13a1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第184・201・262号住居、第139号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸約6.7m、短軸約6.2mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。上層はほぼ全域にわたって攪乱を受けており、壁高は10cmほど確認できただけである。

床 ほぼ平坦で、竈の前面から出入口施設にかけてよく踏み固められている。壁溝は重複により北西部で確認できないが、全周していたものと思われる。

竈 北壁の中央部に付設されており、規模は焚口部から煙道部まで約140cm、袖部幅約110cm、壁外への掘り込みは約20cmである。火床部は床面から10cmほど掘りくぼめており、火床面が火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 5 にぶい褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量
- 8 灰褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 9 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
- 10 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

貯蔵穴 長軸は第139号土坑に掘り込まれているため、約60cmが確認でき、短軸は約45cmで、長方形を呈していたものと推定される。南壁際の中央部に付設され、深さ約30cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

ピット 10か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは50～70cm、柱間寸法は3.6m前後で、規則的に配されている。また、P5・P6は深さ30cm・20cmで、出入口施設に伴うピットであり、P7～P9は深さ15～30cmで、補助的な柱穴と考えられる。さらにP10は深さ15cmで、性格については不明である。

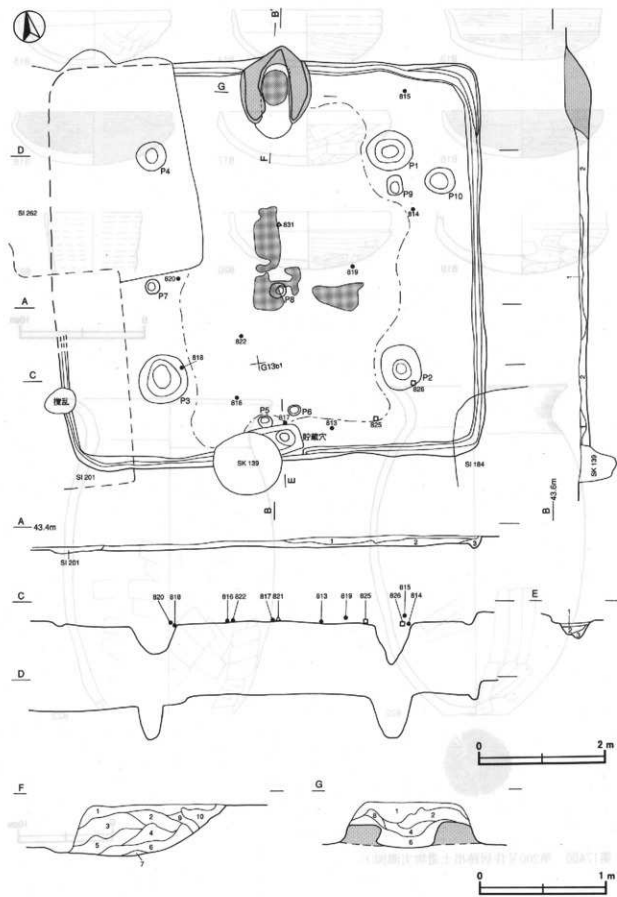
覆土 3層からなり、各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

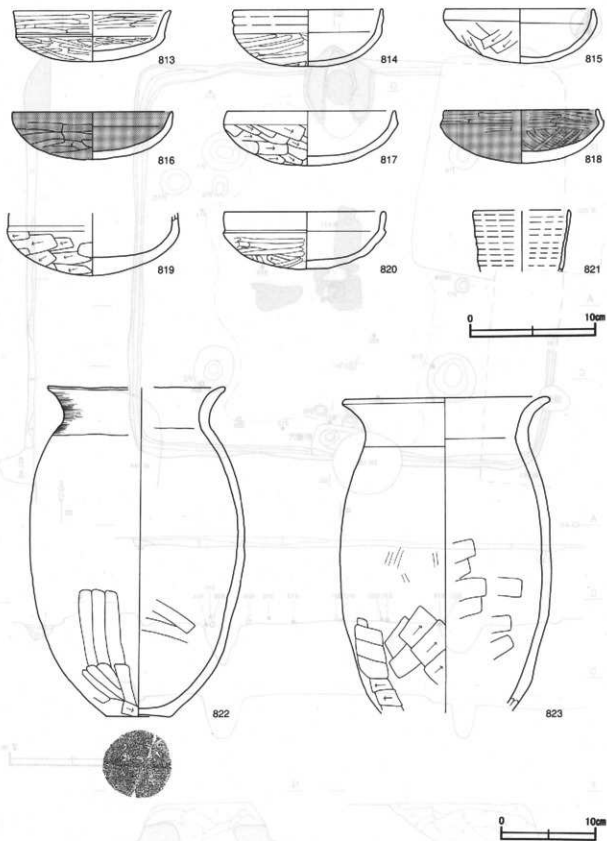
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物は土器器片765点（坏219、高坏5、甕541）、須恵器片14点（坏9、甕4、壺1）、石器2点（砥石2）、鉄製品5点（鎌4、刀子1）、礫片32点（被熱痕1）がほぼ全域から散在した状態で出土している。813・816・817・825は南部、826は南東部、818は南西部、822・831は中央部の床面、823は竈内の覆土中からそれぞれ出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、814は東部、815は北東部、819・820は中央部のそれぞれ覆土下層から出土しており、廃絶後の埋没過程で投棄されたものと考えられる。

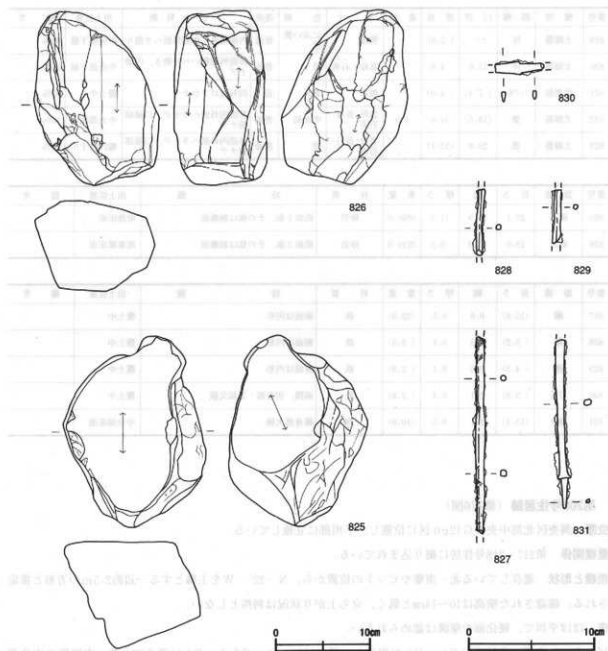
所見 本跡は中央部に火熱を受けた痕跡が認められ、覆土中にも焼土ブロックが各層で確認できる。しかし、柱材等の炭化材が認められないことから、上屋を取り壊して柱材等を抜き取った後に焼却された可能性が想定できる。また、本跡からは砥石や火熱を受けた礫片、鉄製品等が多く出土しており、周囲に工房跡がある可能性も想定される。遺構の形態と出土土器から、時期は6世紀後葉と考えられる。



第173图 第200号住居跡実測图



第174图 第200号住居跡出土遺物実測图(1)



第175図 第200号住居跡出土遺物実測図(2)

第200号住居跡出土遺物観察表 (第174・175図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
813	土師器	坏	12.5	4.0	-	雲母・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	体部・口縁部内外面ヘラ磨き	南部床面	100% PL213
814	土師器	坏	11.8	4.5	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	東部下層	80% PL213
815	土師器	坏	11.8	4.3	-	長石・石英	にぶい黄橙	二次焼成	器面荒れ、口縁部横ナデ	北東部下層	80% PL213
816	土師器	坏	12.7	3.7	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	南部床面	70% PL213
817	土師器	坏	13.2	4.3	-	雲母・石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	南部床面	100% PL213
818	土師器	坏	12.2	4.2	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部外面荒れ、口縁部ヘラ磨き	西部部床面	80%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
819	土師器	坏	-	(5.0)	-	雲母	にぶい黄澄	普通	内面荒れ、体部外面へラ削り	中央部下層	60%
820	土師器	坏	12.6	4.6	-	雲母・石英	黒	普通	体部外面粗いへラ磨き、内面ナデ	中央部下層	50%
821	須恵器	コップ形	[7.4]	(4.9)	-	緻密	黄灰	良	内外面クロコナデ	覆土中	20%
822	土師器	壺	[18.6]	34.6	4.9	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内外面へラナデ、口縁部横ナデ	中央部床面	90%
823	土師器	壺	20.8	(33.1)	-	雲母・長石・石英	澄	普通	体部内外面へラナデ、口縁部横ナデ	覆内覆土中	60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
825	砥石	20.1	15.9	11.2	3660.0	砂岩	砥面2面、その他は割縁面	南部床面	
826	砥石	19.0	13.0	9.5	3210.0	砂岩	砥面3面、その他は割縁面	南東部床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
827	鐵	(15.8)	0.8	0.5	(22.3)	鉄	断面は円形	覆土中	
828	鐵	(5.2)	0.5	0.4	(3.5)	鉄	断面は円形	覆土中	
829	鐵	(4.3)	0.6	0.4	(2.8)	鉄	断面は円形	覆土中	
830	刀子	(3.9)	1.1	0.4	(2.8)	鉄	両面、切先部・基部欠損	覆土中	
831	鐵	(13.4)	1.1	0.5	(10.8)	鉄	鎌身部欠損	中央部床面	

第208号住居跡(第176図)

位置 調査区北部中央のG12e0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第217・218号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している北・南壁やピットの位置から、N-22°-Wを主軸とする一辺約2.5mの方形と推定される。確認された壁高は10~14cmと低く、立ち上がり状況は判然としない。

床 ほは平坦で、硬化面や壁溝は認められない。

ピット 4か所。主柱穴はP1~P3が相当し、深さは24~50cmである。P4は深さ32cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

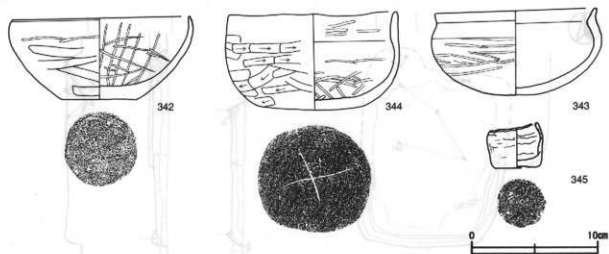
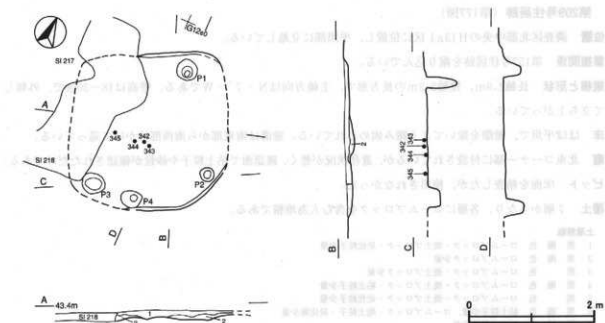
覆土 2層のみ確認された。残存部が少なく、堆積状況は判然としない。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片45点(坏10, 碗2, 甕33), ミニチュア土器1点が出土している。342・343・344・345はそれぞれ中央部の下層から正位に並んで出土しており、344は底部外面には「×」と宛書されている。

所見 重複により炉・竈が確認できず、また、覆土も薄く壁の立ち上がりも確認できないため、住居全体の様相は確認できないが、時期は、出土土器の形状から5世紀中葉と考えられる。



第176図 第208号住居跡・出土遺物実測図

第208号住居跡出土遺物観察表 (第176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	断面	土色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
342	土師器	環	14.2	6.7	6.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、底部へラ削り	中央部下層	90% PL213	
343	土師器	碗	12.8	6.9	-	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部ハケ目調整後ナデ	中央部下層	95% PL213	
344	土師器	碗	13.2	7.7	8.3	石英・赤色	赤	普通	口縁部外面横ナデ、内面へラ削き	中央部下層	95% 底部 雲母 [×] PL213	
345	土師器	ミニチュア土器	3.7	3.6	3.8	雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ、内面輪積み痕	中央部下層	100% PL213	

第209号住居跡 (第177図)

位置 調査区北部中央のH13a1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第157号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.8m、短軸2.3mの長方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は18~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は南東部から南西部にかけて巡っている。

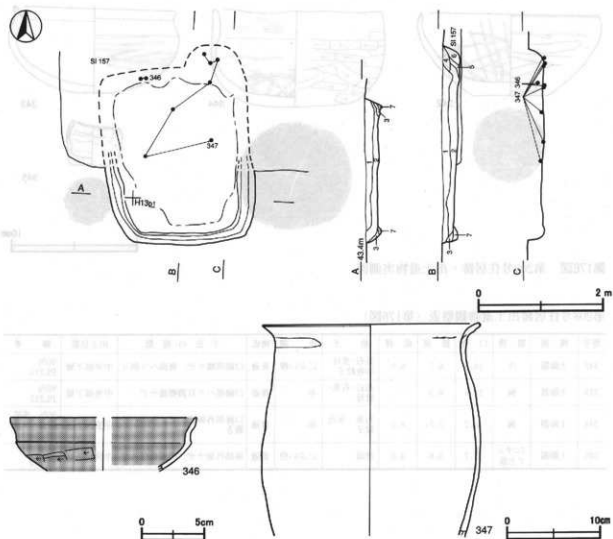
竈 北東コーナー部に付設されているが、遺存状況が悪く、確認面で粘土粒子や砂粒が確認されただけである。

ピット 床面を精査したが、検出されなかった。

覆土 7層からなり、各層にロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量



第177図 第209号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片289点(坏59, 高坏1, 甕229), 須恵器片10点(坏7, 甕2, 長頸瓶1), 礫片1点が出土している。346は北西壁際の床面から出土しており, 内外面に黒色処理が施されている。347は中央部と北東部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡は北東コーナー部に竈が構築され, 住居内の竈位置の特徴を顕著に残す好例な資料である。時期は出土土器の形状から7世紀後葉と考えられる。

第209号住居跡出土遺物観察表 (第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
346	土師器	坏	[14.8]	(4.2)	-	石英	灰褐	普通	体部内面・口縁部横ナデ	北壁際下層	20%
347	土師器	甕	22.9	(22.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内面・口縁部ナデ	中央部床面	30%

第227号住居跡 (第178図)

位置 調査区北部のH12a0区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第157号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺4.0m前後の方形で, 主軸方向はN-22°-Wである。壁高は5cm前後と低く, 壁溝は東壁が重複のために確認できないが, 全周していたものと考えられる。

竈 北壁の中央部西寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで約100cm, 袖部幅約100cm, 壁外への掘り込みは約30cmである。火床面は床面から深さ約20cmほど皿状に掘りくぼめ, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道は緩やかに傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・砂質粘土ブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し, 深さはいずれも30cm前後, 柱間寸法は南北が約1.8m, 東西が約2.2mで, 規則的に配されている。P5は深さ約30cmで, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

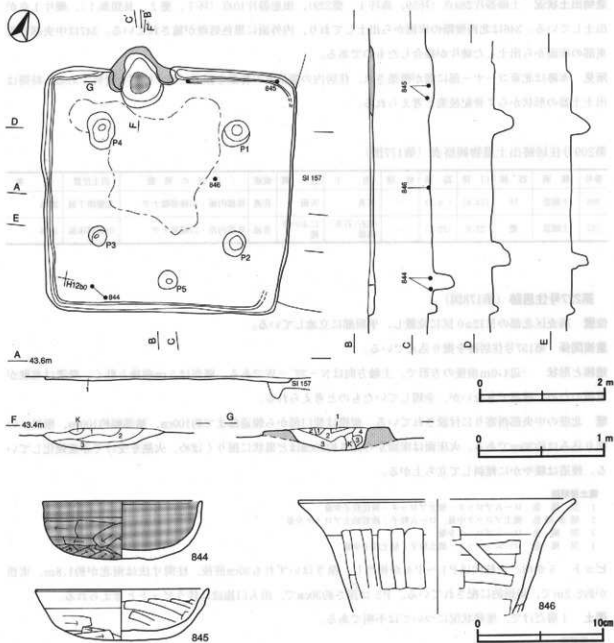
覆土 1層だけで, 堆積状況については不明である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量

遺物出土状況 出土遺物は土師器片113点(坏36, 甕69, 瓶8.), 須恵器片1点(坏), 礫片4点がほぼ全域から散在した状態で出土している。844は南西部の覆土下層, 845は北壁際東寄りの覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。また, 846は東部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器の形状と7世紀前葉に比定される第157号住居跡を掘り込んでいることから7世紀後葉と考えられる。



第178図 第227号住居跡・出土遺物実測図

第227号住居跡出土遺物観察表 (第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
844	土師器	坏	12.5	4.7	-	雲母・赤色 粒子	褐灰	普通	体部内面ナデ、口縁部横ナデ	南西部下層	80% PL214
845	土師器	坏	13.5	4.0	-	雲母・赤色 粒子	にぶい黄	普通	口縁部横ナデ	北壁際下層	95% PL214
846	土師器	甌	[22.0]	(9.2)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	東部床面	10%